
ツクラレタ聖女

jade

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツクラレタ聖女

【NZコード】

N5718M

【作者名】

jade

【あらすじ】

300年前、1人の少女は己の命をかけて魔王を封印する。彼女は後に伝説の聖女として多くの人に讃えられた。　そして時は流れ現代。とある場所で唐突に目覚めた少女アリア。「…どうして生きてるんだ?」時の流れに戸惑いながらも、アリアは新しい人生を歩む決意をする。正体を隠し、勧められるままに魔法学園に入学した彼女が見つけた、驚くべき真実と己の生きる理由とは…?

序章「終わりの日」

月の綺麗な夜だった。

戦場には血と肉の焼ける匂いが蔓延し、もはや人か魔のどちらかわからない肉の塊があたり一面に広がっている。かぎなれた臭いではあるものの、気温の高さと怪我の具合もあって、ひどく気分が悪い。

自身の体からは血と汗が混じったものが噴き出し、この命がそう長くはもたないことがいやおうなしにわかる。

そして、そんな自分の後ろには総大将として本国の王子……次期国王がいる。

あの子の未来のためにも、彼だけはなんとしても守らねばならない。

だが

(このままでは負ける……)

油断していたわけではないが、想像以上の力だった。さすがは魔王の名を冠するだけはある、といったところか……各国の精銳を集めた連合軍もほぼ壊滅し、残された者は絶望の田でこちらを見ている。

そんな窮地にありながらもひどく冷静に状況を分析している自分に、ふと自嘲する。

いつからこんな風になつたのだろうか。

思えばひどい人生だつた。

5年前……ほとんど全てを失つたあの日から、己の人生は常に死と隣り合わせであつた。

王と宰相、そしてただ一人の家族と忌まわしき胸の呪印。枷をはめられ命じられるままに多くの命を絶ち、その血を浴びてきた自分は、はたからみたらどんなに滑稽だつただろうか。

(しかも利用されるだけ利用され、最後は戦場で散るか……)

……本当に、滑稽だ。

「『主人様……どうしましょう』

愚かな思考にふける自分に、金色に輝く毛と透き通るような空の瞳を持つ幼い狼が、泣きそうになりながら話しかけてくる。

思えば、この獣も物好きなやつだ。

たつた一回魔物から助けてやつただけで、こんな戦場までついてくるなんて……

迷子の聖獣だと思い仮契約を結んで天界に還してやろうとすれば、『恩を返すまで、なにがあつても』主人様についていきます!』と言つて拒否する。

いつぞやのドラゴンの子供のよひこひつと親元に帰ればいいものを……こんな危ないとこここまでついてきて。

でも今は感謝しよう。この幼獣が見つけてくれた方法があるから、私はまだ希望を持つことができる。

せいぜい、華々しく散つてやううではないか。

「キラ。お前、私が死んだ後は仮契約の相手をみつけて早く天界に帰るんだぞ」

そう言えば、「『主人様あ』となぜかひどく複雑な表情で自分を見上げてくる。

……まあいい、あとは後ろの人か。

この人には5年前から本当に世話になった。共に訓練をし、ともに戦場に立ち、身分の差を超えた信頼を築けた……と思う。少なくともこの人だけは私を“人間”として見てくれた。

(だからこそ私は)

「アスト王子……妹を、マリアを頼みます」

自分は最後の最後まで何を言つてるのやらい……なんだか情けなくなつてくる。

最後くらいもう少し色氣のある言葉は吐けないものだろうか。

……でもいい。

未来のない自分にはこれがお似合いだ。

(…………さようなら初恋の人)

想いを振り切り、死体だらけの戦場を駆け抜けた。ただ一人の敵に

向かつて。

「アリア！ 待て！ 君は……っ……さな……！」

後ろでアスト王子がなにか必死に叫んでいるのが聞こえるが、もはや時間がない。

流れゆく血が地面にどんどんその跡を残していく。

それはまるで己の残された時間を刻む砂時計のようだった。

ここにやらなければ人間に未来はないだろ？

負ければ人は家畜のように支配され、いつか食糧として魔物に“喰われる”餌になり下がる。

もつとも、それに関してはなんの感慨も浮かばないが……

私にとって世界の命運なんてものははどうでもいい。

ただ一人、たつた一人。自分が不幸にした少女に、せめてもの償いができるというのなら、この命いくらでもくれてやろう。

互いの顔が見えるところまで来たところで一度立ち止まる。そして覚悟を決めて、また一步死出の旅路への道を踏み出す……今この空間を支配している災厄のもとへ。旅の供のもとへ。

「魔王ジヴァ……ともに、地獄に墮ちてもらおうか」

嫌だといつてもつきあつてもいい。

いくら私でも死ぬときまで一人は嫌だ。

この時少女の顔を見ることができたのは魔王ただ一人であったが、もし普段の彼女の顔を知るものがいたらひどく驚愕していたことだろつ。

それは5年間、彼女が一度も見せることのない表情だった。

それはこの世で最も美しいと言つても過言ではない……まるで女神のような慈愛に満ちた微笑みだった。

白銀の髪をなびかせ、その目にアメジストの輝きを宿す類まれなる美少女は、まるで月の女神が地上に舞い降りてきただよ……とももここにが血の蔓延る戦場とは思えないような錯覚を相手に覚えさせる。

それは魔王ですら魅了するほど

「……地獄に墮ちるのは貴様だけだ」

一拍間を置いて、極上の笑みを浮かべた美男が応える。

残虐非道で冷酷無慈悲、圧倒的な力を持つて魔の頂点に立つてきた灰銀髪の男は、よくできた彫像のように冷ややかで、近寄りがたい美貌の持ち主であった。

そしてその瞳は 魔物は瞳の色が赤ければ赤いほど、濃ければ濃いほど強い力を持つといわれているが、魔王の瞳はまるで最高級のピジョンブラッドのように禍々しく、そして美しい紅だった。

(冥土の土産としては上々かな……)

そんなとつとめもないことを考えながらアリアは疾走する。

そして、次の瞬間大きな衝撃波が戦場を駆け抜けた。

少し離れた所で見守る者たちは最初、それが膨大な魔力の衝突によりおこつたものだと理解できなかつた。それほどの規模であつた。

しかしぬく目に入つてくる光景がそれを裏付ける。

そこには美しき男女がまるで舞を踊るように戦う姿があつた。恋い焦がれる男女の戯れように余人の入り込む余地のない……神話で語られる神々の戦争のように圧倒的で、それでいてどこか美しい戦いの光景がそこにはあつた。

その中心地にいる二人は、周囲の反応など気にすることもなく切れ間なく互いを攻撃し続けていた。

それは当初互角の戦いをしているように見えたが、時間が経つにつれて次第にその天秤は形勢を傾けていく。

灰銀の魔王がまだどこか余裕のあるような笑みを浮かべる一方、白銀の少女は苦い顔をしながら少しづつ押されていくのが見て取れる。

アリアは汗を流しながら苦笑した。

（人離れした魔力をもち“化け物”と呼ばれた私でも、多くの生物を“喰つて”力を増してきた魔王には一歩及ばないか……）

もとよりここに来るまで血を流しすぎた。

紙一重で攻撃を回避しながらなんとか魔王に近づく隙を窺つが、なかなか見つけられそうにない。

（近づくことをできれば………）

既に戦いが始まつてから数刻が過ぎ、体力が限界に近付いてきている。今決着をつけなければ、自分に勝ち目はないだろう。

「……一か八かの賭けに出るしかない、か」

そのように考へ、踏み込もうとした瞬間。不意に背後から強い魔力を感じた。

闇を縫うような赤い残像はそのまま自分を通り越し、魔王の足元に直撃する。

粉塵が舞い、お互いの姿を隠した。

味方の援護だらうか……なんにせよありがたい。

この隙に一気に勝負をしかける。

(イリヤー)

粉塵の先から唐突に現れた少女に魔王は驚愕の表情を浮かべる。

アリアはそれに会心の笑みで応えながら、血に濡れた両手で魔王を捕らえた。

そして、切り札として取つておいた古代魔術　自身の血と肉に魔力で刻んであつた術式を解放する。

【ギルム メシュ リ ハルフェン ルア セント オルシス（我、この血と肉を代償に、ここに封印をなさん）--】

殺すことはできなくても……己の命をかけば永遠の封印をかけることはできる。

古代ヴィシア式魔術。

その中でも命を代償にする禁呪を使えば、たとえ魔王といえども枷は解けないはずだ。

自分が偶然助けたキラが、古代遺跡で偶然この禁呪を見つけた時は

運命を感じた。

ああ、これが私の未来か、と。

周囲に光が溢れ、封印が成功したことを感じる。

……とても安らかだった。

死とはもつと苦しいものだと思っていたが……胸のあたりを中心に真綿のような魔力に包まれていることを感じた。

そっと、瞼を閉じる。

(自分の役目はここで終わりだ)

ここまで長かった。でも、ようやくすべての重荷から解放される。

(これで……やつと)

(……やつと……死ねる)

ぼやける意識の中、最後に見たのは天上に浮かぶ美しい満月と……今まで見たことないような赤紫の、でもどこかなつかしい瞳だった。

そして巨大な光の球が夜の戦場を照らした後、残されたのは大きなクレーターだけだった。

そこには魔王も少女の姿もなく、しばらくして残された者たちは奇跡が起こったことを悟る。

皆が歓声でわく中……ただ一人、総大将と呼ばれたハインレンス王国第一王子アストレイは、この世で一番愛しい少女を失つたことに、静かに涙した。

ハインレンス王国歴148年夏。後に”救世の日”として語り継がれるその日。

一人の少女が表舞台から姿を消し、同時に伝説の聖女が誕生した。

…………そして舞台は300年後に移る。

序章「終わった日」（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
勢いで書いてしまった感じなので、なんだかいろいろ不安です。
誤字・脱字等ありましたら、ご指摘のほうよろしくお願いします。

0章「伝説の聖女」

『ハイインレンスの聖女』

彼の者の美貌 天地に比類なき

瞳に宿す紫は宝石のことく

風に揺れる白銀は月光のよう

けがれなき真珠の肌は何人にもおかしがたく

ただその清らかさを象徴せん

傍らには猛々しき金色の狼をはべらせ

救世の道をいざ歩まん

ああ、我らが愛しき神の娘アリア

月光の聖女

黎明の戦女神

紫銀の救世主

彼の者その命をもつて魔王を打ち滅ぼし

我らの命を救いたまん

我らその犠牲を忘れることなかれ...

王国歴149年 ディナミス・ゼン・バッハン著

1章 第1話「始まりの日」

「ひっ……いやだ、来ないで……助けてお父さん、お母さん……」

妹の声がする。

「この化け物！！
あんたのせいで村の人間は……私の兄さんは死んだんだ！！」

ああ、これは隣村のおばさんの声だ。

「ほう……これが噂の『テルニアの魔女』か。魔女の割には見目麗しいのお。喜べ、我が今日からお前の主人だ」

新しいおもちゃを手に入れた、子どものような国王の声。

「逆らえ……妹がどうなるかわかつてゐるな？」

極悪宰相の声……………虫唾が走る。

アリア…………すまない

アスト王子。

「……………」

うるさいな、今度は誰だ？

でもこの声、どこかで聞き覚えがあるよつた……

(まだ眠い……)

まるで眠りの魔法をかけられた後のよつに身体がだるく、意識がはつきりしない。しかし、耳元でギヤーギヤー騒ぐ声を無視することもできず、ゆっくりと重い瞼を開ける。

目を開けて一番に入ってきたのは蒼だった。

それは冬の晴れた日の、蒼天の色。

「『主人様！』 よかつた、本当に目が覚めたんですね！！ 僕もう、夢かと……」

涙交じりの声を耳にいれながら、何度も瞬きを繰り返す。するとよつやくぼやけていた視界がはつきりしてきた。それと同時に頭も回転を始める。

仰向けに寝ている自分、周りが少し暗い。

(…………)

長年の習慣から瞬時に魔物の気配を探り、とりあえずは安全な場所であることを確認する。

しかし、それ以外にも何か重大なことを忘れているような気がする……が、それがなにか思い出せない。

……いや、まずは目の前にいる不審人物が先か。

そう思い、寝ている自分に覆いかぶさるよつにして、至近距離で顔

を覗き込んでいる少年に意識を向ける。

数秒見つめあつた後、そのままの姿勢で口を開く。

「…………誰だ？」

年頃の娘としてこの「反応はどうなんだろうと自分でも思つが、まあ今更だろう。

そんな私のそつけない言葉を聞くと、目の前にいる人物は少し怒つたように頬を膨らませ言い返してきた。

「僕を忘れたんですか！？　ずっと待つてたのに！－『主人様の魔力の気配が大きくなつたのを感じて、急いで戻ってきたのに～！』

！」

そう言つてポコポコたたいてくる。

だがそんなことを言われても、自分の記憶が正しければ、この少年とは今日が初対面のはずだ。

蒼色の瞳に漆黒の髪を持つ……おそらく10歳前後の少年。アーモンド形の大きな目は涙でキラキラと輝き、その筋の人間にはたまらないほどいじらしい表情をしていた。……あいにく、自分にそんな趣味はないが。

漆黒の髪は濡れたように輝いている。少し癖つ毛ぎみなのが逆に愛嬌を誘う。

ともかく、将来は確實に女泣かせの美しい青年になることが約束されたような美少年だつた。

ひとつ気になることがあるとすれば、身なりのいいその服にあまり見慣れない装飾が施されていることくらいか。

しかし

(やつぱり見覚えがない)

そう考えチラつと少年の方を見て答えを促すが、少年はムスッとして顔を横にむけた。

……どうやら私が思いだすまで自分の正体を言いつもりはないようだ。
なんて面倒な。

(いや、だが、この面倒な感じ……どいか既視感があるよつな
?)

そう言えばこの少年は私のことを“この主人様”と呼ばなかつただろうか?

そもそも自分のような人間を“この主人様”と呼ぶ奇特な者は、この世に一人しかいない。

「まさか…………キラ、か?」

かなり疑い深い目つきでそう聞くと、少年は喜んだようにがばつと抱きついてきた。

「そうです!! キラです!! この姿でもわかってくれるなんて、
やつぱり愛の力ですね!!」

そう言つて涙を流しながら私の胸に顔を押し付けてくる。
……ああ、この面倒くささは間違いなくキラだ。

一気に脱力する。と、同時に新たな疑問がわってきた。

「なぜ人化できるんだ？ しかもその髪の色はどうした？」

聖獣は生まれてからある程度の年月がたたなければ、人化することはできない。

種族差や個体差によつてその時期は様々だが、少なくとも幼獣であるはずのキラは人化できるわけがないのだ。

それに髪の色についても……キラは光の属性の聖獣だから、毛は金色のはず。

よっぽどのことがない限り黒に変わることはない。

（まったくわけがわからない……いつたいどつなってるんだ？）

そしてふと自分の着てる服、血まみれの軍服を見た。瞬間、一気にその情景がよみがえつてくる。

戦場、赤い血、死体、封印、魔王

（魔王の封印！ どうして忘れていたんだ！？）

「封印は、魔王はどうなった！？ どうして私は生きているんだ！？」

早口で最重要疑問を尋ねると、少年……もとにキラはどうか困つたような、なにから話せばいいかわからないような顔をしながら答えた。

「封印は成功しましたよ。地上に魔王の気配はありませんから、まだ封印されているか、もしくは既に消滅したんだと思います」

そう言われたものの、一応自分でも確認してみる。

目を閉じて集中する……たしかにあの強大で異質な魔王の気配はどこにも感じられない。

(そう、なのか……ならよかつた)

万が一にも失敗して、あの子に危害が加わるのだけは避けたかった。あの子は、妹は私が生きる理由なのだから。

そうして息をはいて安心していると、かつて狼だった少年は何かを言いたげに、でもどこか言いにくそうな表情で、モジモジしながら上目づかいで私を窺っていた。

……人間バージョンでも一瞬で理解できてしまつほど、それはわりやすかつた。

(これは、あれだ……菓子の盗み食いがばれそうになつたのを、必死で隠そうとしていた時と同じ反応だ)

……だが、魔王の脅威は去つたのだ。
どうせそれ以上に重要なことなんてないし、それに今ならどんな失敗も広い心で許してやれる自信がある。

「キラ、怒らないから言つていいらん。なんか伝えたいことがあるんだろ?」

私がそう言つと、キラは心底ホッとしたように笑い……そして、じつぶちまけてきた。

「『主人様、落ち着いて聞いてくださいね。のですね……実は今

年は王国歴 448 年で、ご主人様が眠りについた日から……封印をおこなつた日から、ちょうど 300 年が過ぎてるんですよ」

「…………は？」

第2話「忠狼」

正直信じられなかつた。

キラがいつには、封印をおこなつたあの後、私と魔王はある場から姿を消したらしい。

その時、他の人間たちは私と魔王が相討ちで死んだと思つたらしいが、キラだけはあの封印のことを……その記述を知つていた。

実はあの禁呪には、かなり低い……それこそ広大な砂漠から砂粒一つ見つけるくらいの確率で、術者が生きのこることもある、という嘘くさい記述があつたのだ。

もちろん、可能性はなきに等しいらしいので、私は死ぬつもりでやつたのだが。

そんな眉唾物の記述を信じたキラは、『もしかしたら……』と一縷の願いをこめて、各地を回りながら私の気配を探していたのだとう。

そして数年が過ぎたころ、この洞窟の近くで微弱な、ほんとに見つかったのが奇跡といえるほど弱い私の気配を感じ、その奥で封印魔法に包まれて眠っている私を見つけた……らしい。

なんだか奇跡のような話ではあるが……まあ、キラの稀にみる幸運体質を考えると、ある程度納得もできる。

最初は封印を解こうとして（その時、魔王まで目覚める可能性については考えてなかつたらしい。後で説教だ）いろいろ試してみたが

うまくいかず、『じうなつたら田観めるまで』ことん待つてやるつ！』といつことで今に至るらしい。

「封印を解きたかったなら、他の人間を連れてきて協力させれば良かったんじゃないか？」

と訊くと、キラいわく

？今の私はちょっと有名？な存在らしく、生きることを教えたら悪い人がわんさか来る……かもしない。

？禁呪を使った影響か、封印はかなり強固で、それを解ける力量をもつた魔法使いは今まで生まれてこなかつた……気がする。

？そもそも人間は信用できない（そういうえば王宮での私の扱いを見て、人間不信になつたんだつけ）。

というなんとも微妙な理由から、他の誰にも知らせたつた一人で300年近く私を守つてくれたらしい。もつとも何から守つていたのかはよくわからないが。

そうして眠る私のそばで長い時を過ごし、時々人間の街におりて情報収集をしながらのんびりと力を溜めていたのことだ。

そう、髪が黒くなつたのは、この洞窟に多くいる闇の精靈から魔力を吸収していたためらしい。

聖獸や神族（人化ができるようになるとこう呼ばれる）は自然界にある魔力を少しづつ取り入れて力を増す。

聖獸は普段はここ、地界とは異なる次元にある天界（地界よりマナが多くあり、聖獸や神族、高位精靈がいる空間）で暮らしているのだが、召喚で呼ばれたり、はぐれや迷子になると地界に来たりする。その天界は、根源属性である火・水・風・土・光・闇のマナのある

エリアが6つにくつきりと分かれており、基本そこに住む者は生涯生まれた属性のエリアから出ることはない。

だからふつうは自分の生まれもつた属性で一生を過ごすのだが……

しかしキラは長い間この洞窟で闇のマナを取り入れたことによって、生まれたもつた属性である光から、闇の属性へ乗り換えるという前代未聞のことをなしのけた。

おそらくまだ適応力のある幼獣だったからこそできた荒技だろう。

ちなみに聖獣や神族といった聖なるものは、瞳が青ければ青いほど、そしてその色が濃ければ濃いほど力が強いといわれている。魔族とは違い、自然のマナを取り入れて力を増すので、基本的には歳をとればとるほど力は大きくなるのだ。

そう考えるとキラの瞳が、以前の水色から濃い蒼へと変化しているのもうなずける。

その後、いまだ半信半疑の私の要望で、一度獣型になつてもらつた。それはもう見事な漆黒の、以前より一回りくらい大きい狼だった。

（あのときは私の膝下くらいの……それこそ犬ほどの大きさだったのに）

今では自分の腰に届くかというほどの立派な狼だ。それこそ自分がのつても大丈夫そうなほどの。

しかし、よつくわしく観察しようとした矢先、人型に戻ってしまった。

その理由を尋ねてみると、「だってこのほうが」主人様に抱きつきやすいから「だそだ。

変わったのは外見だけで、中身のほうはまったく変わっていないらしい。

それにもしても

「私が死んだら、仮契約の相手を見つけて天界に帰れといったる。それに神族になつたのなら自力で帰ることも可能だつたはずだ」

そう、天界からこちらの地界に来る場合は、基本的に魔法使いによる召喚が必要とされている。

だが逆にあちら（天界）に帰るだけなら……神族くらいの力があれば単独で帰還できるはずだ。

だからこそ、はぐれや迷子　召喚中に主が突然死んだり、次元の狭間に迷いこんで（幼獣が多い）地界に来てしまい、天界に帰れなくなるのは聖獣だけなのだとわれている。

迷子（この場合はぐれか？）神族なんて聞いたこともない。

なにより、いつ目覚めるかもわからない主を300年近くも待つているなんてとんだ忠犬、いや忠狼だ。

たつた一回助けてもらった人間相手に普通そこまでするものか？

「だつてご主人様は現に生きてたし……」このマナは天界並みに濃いから十分力はたまるし……それに天界に帰つても僕には家族も友達もないもん。僕にとつてご主人様といった1年間は本当に楽しかつたんです」

キラがショボンとしながら言つ。

それは初耳だつた。

てつきり心配する親がいると思つていたから、早めに連絡をねばと仮契約を勧めていたのだが。

もしかして、ずっと契約を拒んで自分のもとにいたのは寂しかったから、なのだろうか？

……そう思つといこの甘えたがりな狼が可愛く思えてくるから不思議なものだった。

なにより自分を待つて300年も共にしてくれた存在を、どうして拒絶できようか。

軽く苦笑しながら、黒く変わったその髪をくしゃりと撫でる。

「キラ……待つていてくれてありがとう。またお前と会えてうれしいよ」

そうして心からの言葉を送ると、キラは多くの感情が入り混じった複雑な表情を浮かべたあと……また勢いよく抱きついてきた。

第3話「現実」

「もし、ビウしたものか」

キラからこれまでの経緯について説明を受けたものの、やはりまだに信じられない気持ちが大きい。

……どうか実感がわかない。

自分にとつてはつい先ほどのことのよつなあの出来事から、300年も経つているなんて。

その気持ちを悟ったのだろうか、キラが唐突に「街に行きましょう！ ちょっと待っててください！」と言つて洞窟から飛び出していく。

そしてじぱりくして戻ってきたキラの手には、血を拭つためのタオルと黒いワンピース、あとはなぜかお金が握られていた。

確かに今のような血まみれの格好で街へ行つたら、騒ぎになるかもしないが……

「……いつたこどりから調達してきたんだ？ まさか盗
「拾いました！」

中身は変わつていないと思つていたが、ビウやはり認識を改めなければならぬようだ。

確実に以前よりしたたかになつてゐる。

こつ之間にこんなこと覚えたんだか。

まあなんにせよありがたいし、今は文句を言えるような状況でもないかと思い、礼を言つて受け取る。

(しかし、後でもう一度しつ……教育しなおさなければ)

そう決意しキラの方を見ると……目があつた瞬間、ものすごい速さで外に逃げられた。

黒のワンピースはシンプルで好みだったが、ここ15年間のほとんどを軍服で過ごしてきたため、スカートは少し恥ずかしい。

最後にスカートをはいた記憶といえば……魔王討伐の遠征に向かう前日、健闘を祈る名目で行われた城のパーティーに無理やり出席させられた時以来だ。

あのドレスは苦痛だった。出席者たち（特に男）からはまるで珍獣でも見るような眼を向けられた。

ジロジロジロジロ。

“化け物”がドレスを着るのがそんなに珍しかったのか……嫌な記憶を思い出してしまい嘆息する。

でも

(あの時のアスト王子はかっこよかつた。……そういえば、あのパーティーの時に『魔王討伐が終わったら、伝えたいことがある』と言つていたが)

もしキラの話が本当なら、それはもう永遠に聞くことはできないだろ。

アスト王女は微笑む。

そしてなにより、自分の生きる理由であった少女も……

そこまで考えたところで一度思考の糸を断ち切る。頭を振つて、素早くワンピースを着用し、外で待つキラのもとへと足を進める。

話が本当なら、今そのことを考えても時間の無駄だ。

(まずは現状を確認しないと……)

そして洞窟から出て、キラの先導で一番近い街へと向かうことにした。

私のいた洞窟は山(バルモア山)といふところの麓の滅多に人の来ないところにあった。

ちなみに、キラが目くらましの魔法をかけていたこともあいまつて、誰かに見つかることは一度もなかつたらしい。ほんとに何から私を守っていたんだ?

(いたな邊鄙な場所にいたとは……)

キラはよく私を見つけられたものだ。
その執念には感服する。

あの戦場からは馬で12日ほどどの距離にあるらしい。
どうしてこんなところで300年も寝ていたのだろうか……まったく

くもつて謎だ。

ぴったり300年というのもなんだかひつかかる。

まあ、あの古代ヴィシア式魔術はいまだ解説されていないところも多い。

もしかしたらもとから封印後、術者はどこかに飛ばされ、300年の眠りにつく仕組みだったのかもしれない。

そう考えると命が助かる可能性があるというのも、寝ている間になんらかの外的要因によって死ぬことがほとんどだからこそあつた記述だと推測できるが……

(まあ、これ以上考えても仕方ないだろう。……とりあえず街見学だ)

街道を目指して森を抜ける道中、キラから基本的な地理の説明を受けることになった。

「ここはハインレンス王国ディレイド公爵領のほぼ中央部に位置します。ちなみにこれから向かうのはポーラといつ商業が盛んな街ですよ～」

「ディレイド公爵領……ようによつてあの極悪宰相のとこか」

なんだかそれだけで気分が滅入つてくる。

どうせなら寝ている間に没落してしまえばよかつたものを……今代の人には関係ないことかもしれないが、やはり自分の貴族嫌いはなかなか治せるものではないのだ。

しかしポーラといつ街は聞いたことがない。

それについて尋ねてみると、今から約220年ほど前にできた街、らしい。

……なんだか時間の感覚がおかしくなってきた気がする。

現実逃避をするように周囲の光景に目を向けると、何本かの木でピンクの花が色づいているのに気付いた。

「コスラの花……今は春なんだな

自分にとって昨日のことのよつに感じじる戦いは、夏の暑い日のものだった。

これで少なくとも季節が一巡するくらいにこなは寝ていたことが証明されたわけだ。

春になると咲くコスラの花。

妹が好きだった薄紅色の可憐な花。

(本当に、もういないのか……)

そんな風に感慨にふけりながら歩いていると、ついに森の終着点が見えてきた。あとは街道沿いに歩いていけば20分ほどで街に着くらしい。

そうじてこや森を出ようとした時、ふと思いついたほつがこいかもしれまう。

「あー！　その髪の色は魔法で変えておいたほつがこいかもしれません」

あたりまえのようにその理由を尋ねてみると、またモジモジしながら

う上田づかいで見てきた。

……どうにも嫌な予感しかしない。

一時の心の平穏をとるか、それとも

悩んだ末に結局黙つて髪色を変えることにした。

できる」となら今日だけはこれ以上心乱されず、穏やかに過ごした
いからだ。

……もつとも、数刻後すぐにその期待は裏切られることになる。

とつあえず髪色を変えることは決定したが……

「むむ、何色にするか……」

そう独り言をつぶやく。

すると横から元気よく「黒……」といつ意見が寄せられた。

特に反対する理由もないのに、魔法を使い髪を黒色にコーティングする。

瞳の色を変えるのはなかなか難しく（やるうと思えばできるが）魔力もかかるのだが、髪色程度ならば片手間で変えられる。

（どうか、違和感があるような……？）

髪色のことではない。

魔法を使ったときに、いつもとは少し違った感じがしたのだ。

しかし首をひねって考えてみるも、その違和感の正体がわからない。

「わ～い。」主人様とおそろいだ～

だが、飛び跳ねる紅顔の美少年を見ていると、なんだかそんな瑣末なことを考えているのが馬鹿らしく思えてきた。
どうせそのうちわかるだろう。

そのキラは私の周りをクルクル回りながら、上機嫌で二いつ尋ねてくる。

「うふふ、僕たち姉弟に見えますかね～？」

(キラが弟?)

少し考えて、問われた質問とは全く異なる回答をする。

「面倒くさそう

そうして、なぜかブンスカ怒る少年の声を背に、街への一歩を踏み出した。

第4話「回顧」

思えば、私は12歳の時まで生まれ故郷である辺境のテルニア村から出たことがなかつた。

その後の5年間に至つては、王宮と戦場の往復だけ。しかも、移動の際も外の景色は一切見ることが許されない隔離ぶりだつた。

唯一の例外は、あの魔王討伐の時だけだろう。

華々しいパレードで大々的に王都から見送られたのを覚えている。その時は不審に思いながらも、どこかこそばゆい気持ちで出陣したものだつたが……

(冷静に考えれば理由は簡単、か)

国内で魔物を狩つていた時、自分の存在は完璧に秘匿されていた。
目立つた戦績をあげて、その功績と名声をもつて地位を得ないようにならなければ、飼い殺しにするために……

そういえば、ハインレンス軍騎兵隊は当時”太陽の矛”とか呼ばれる諸国最強部隊だと言われていた。
だからこそ魔王討伐の遠征軍においても中心的な役割を担つたのだが……

ただ最初それを聞いた時は、笑つてしまつた。

もちろん皮肉で、だ。

なぜならその”最強部隊”の戦果のほとんどが、小娘一人の手によるものだったから。

それを世間が知つたらどうなるんだろう、と考えるとおかしくて仕方なかつた。

(私の知つてる”最強部隊”が戦場でやつていたことといえば、せいぜい周辺の人払いと情報操作くらいだ)

そして実際最強には程遠い部隊だつたことが、あの時証明された。

あの血まみれの戦場において……各國の精銳を集めた連合軍の中で、真っ先に瓦解したのが”太陽の矛”であった。

開戦は曇過ぎのことだったが、皮肉なことにも名前通り太陽がおちて月が昇り始める頃には壊滅していた。

まあ、それもあたり前である。実戦経験の少ない者ばかりだつたのだから。

そう考えると、逆に魔王討伐の時だけ自分の存在をひけらかしたのは、各國が集まる連合軍の中で自国民である私に戦果をあげさせ、その後の外交交渉で優位に立つためだつたのだろう。

ならあのパーティーは国内外の有力者に対する顔見せということになる。

世間一般ではなんの戦歴もないとされている小娘を無理やり総副大将に押し込めたのも、その後の外交に繋げるための布石だつたのだ。

そういえば遠征出発前の1週間でしたといえば、パーティーに
でるための礼儀作法の練習だけだった。
どこの世界に戦を前にそんなことをする人間がいるだろうか。

今思えば、国にとつてはあの時から既に戦いは始まっていたのだ
らう。ウチの場合は確實にあの極悪宰相の入れ知恵だろうが……

(まつたく……ここまでもくると、いつそのこと感心する)

(…………本当に“よく”利用してくれたものだ)

なんだかずいぶん話がずれた気がするが……ともかくそんな経緯
で、私は田舎である故郷と、たつた一度見た記憶のあいまいな王都
の街（しかもパレードで人がいっぱいだったので街の景色はほとん
ど覚えてない）しか街を知らないのだ。

だから田の前に広がる街並みが、300年前と比べてどうといふ
比較はできないのだが。

「…………大きい」

そんなひどく幼稚な感想しか言えない自分に少し悲しくなる。
しかし（ある意味）箱庭の中で育った無知な自分には、これが限
界だった。

「やうでしょ、やうでしょ」

なぜか自慢気に胸を張るキラが気になるが……まあ、いいに連れ
てきてくれたことは事実だし、何か言つのはやめておいた。

その代わりに、もうひとつ氣になつていてことを説いてみる。

「そういえば、言葉の方はどうなつているんだ？ 今でも通じるのか？」

「大丈夫ですよ。ハインレンスはこの300年、他国から侵略されることもなく独自の文明を築いてきました。多少言い回しが変わり、新しい言葉が生まれたことはありますが、基本的なところは変わつていません。今話している言葉は、現代人にはちょっと古風に聞こえるかもしだせますが、ちゃんと通じますよ」

「なら、安心だな。……行くか」

憂いも消えたといひで、もう一度その巨大な町の門を仰ぎ見る。

(300年越しの初めての街見学、か)

……少しだけ、ワクワクする。

第5話 「初めての街」

初めてまともに見る街は、自分にとってまるで異世界のようだ
つた。

人が、物があふれている。

街を縦断する大きな通りには露店が所狭しと並び、客寄せの元気な声があちらこちらから聞こえる。

(人が生き生きとしていて、活気がある。……これが普通なのか?)

そうだとしたら、魑魅魍魎の巣である王宮と殺伐とした戦場しか知らないなかつた自分の世界の、なんて狭かつたことか。

王都でのパレードでは、たしかにすさまじい歓声を送られ、『すばらしい活気だ』という感想を持つた。

もつともあの時は、民もみな戦を前に一時的に興奮して（新兵によくある）いるのが原因なのだと思っていたのだが……

なんにせよ普段からいじつな風にいじめやかなのは驚いた。王都はもつとすじこのだらうか？

そんなことを考えながら、おのぼりさんよろしくキョロキョロしながら大通りの混雑した道を進む。

そしてしばらく道を歩いていると、不意に横あいから元気な若い男の声が聞こえた。

「そこのかわいいお嬢さん！　ちょっと見ていいかないか！」

(……………もしかして私のことか?)

“かわいい”などという形容詞は、12才以降一度も言われたことがないで正直かなり戸惑つ。

あたりを見回してみると、やはり自分の他に“お嬢さん”と呼ばれそうな年代の女性はない。

「そりそり相だよ! どうだこの指輪! ? お嬢さんのようなかわいい子にこそ似合ひよーー! 」

顔を向けると、首やら腕にじゅらじゅらしたものを身につけた青年がにこりと笑いながら話しかけてきた。

(装飾品を販売している露店、か。でも指輪は……)

「……指輪なら持つてくるから大丈夫だ」

生まれてからずっと、自分の装飾品など持つたことがなかった。そんな私を憐れに思つたのか、アスト王子があの戦いの前に指輪をくれたのだ。

翠色の アスト王子の瞳の色と同じガラス玉は、中に見たことのない紋章が刻まれていてとてもきれいだった。

最初は『いろんなものもらえない』と断つたのだが、『安物だから気にしないで。それに……これは君のために用意したんだよ』と言われては受け取らざるをえなかつた。

今となつては“形見”といえるようなものかもしれない。

「おつと、じりや失礼。なんならじりかのネックレスはどりだい！？ お嬢さんのようなかわいい娘なら特別にこのペアスもサービスしちゃうよー！」

そんな自分の郷愁をぶち壊すように、青年は何かを語ったように一ヤーハヤした表情を浮かべながら違う商品を勧めてくる。
じつこうのを商魂たくましいところのだろうか。

そもそも自分は買い物という行為をしたことがなく、お世辞も言われ慣れていない。
なにがいいのかといひと、つまりいつときじりかにじりか対処すればいいのか全くわからないのだ。

とりあえず人間ではないものの、自分よりはこの手のことに詳しそうな奴に助けを求めてみる。

「キラ、じりかじりかわざじりかわざ……て、あれ？」

振り向いて後ろを見るが、そこに少年の姿はなかった。

周辺にも、いない。そういえばわざあたりを見回した時もいた
かった。
……じりやじりかげられたみたいだ。

(ふむ……迷子か。困ったな)

そして眉をハの字にしていると、青年が心配そうに、でもどいかつれしそうに声をかけてきた。

「お嬢さんもしかして迷つてるのかい？」

これには、驚いた。

たしかに自分は（道に）迷っているといえるが。

(なぜ)この青年はそれを知っている? もしや……何かの魔法か?

そう思い興味深い目で青年を見ると、彼はいきなり立ち上がり……満面の笑みを浮かべながら私の手をつかんでなにかを言つてきた。

1

「 そうか、 そんなに迷つて いるなら タダで あげてもいいよ！ なあに、 たとえ 彼氏が いっても 俺は 気にしない！ だから これ あげるかわ りに こ のあと デ 」

一
あ
あ
あ
あ

1

したあああああ

! ! !

青年の言葉を遮り、絶叫しながら一いつ瞬間に爆走してくるのは、間違いなくキラだ。

その美少年は、自分たちのつながれている手を見るとさらにスピードをあげて、悪鬼のような形相でそこに突っ込んできた。

ぶつかる直前、青年が慌てて手を離す。

「危ないな」と私が文句を言おうとしたその時、キラは青年を射殺しそうな目でキッと睨んだ。

そして、天地に轟くような大声で「うるせんだの！」

「僕の！」主人様に手をだすな……このブ男……！」

「…………」

瞬間、あたりはそれまでの喧騒が嘘のよつてシーンと静まりかえ
る。

……理不尽なこの手の悪口も、絶世の美少年から言われるとや
はりダメージが大きくなるらしい。

憐れにも、青年は固まつたまま何も言い返すことができなかつた。

第6話「衝撃」

今、私はキラと手をつないで街を歩いている。

あの”ブ男”発言のあと、その手をとつて逃げるよつて場を後にしたのだ。

あの青年には悪いことをした……せめて心の傷が残らないことを祈る。

キラはまだあの男にいろいろ言いたかつたらしいが、あれ以上の暴言は彼の将来にかかるかもしれない。

そう考へると、やはり自分の行動は正しかつたと思つ。

が、そのかわり、今は私のよつてのベクトルが向いていのつだが。

先ほどから、ぶつぶつと不満を口にしてくる少年に向ける。

「……もつ、ちゃんと聞いてるんですか！？ よつやく見つけたと思つたら、変な男にひつかつて……もつと氣をつけてくださいよね！—」

保護者のような説教に少し辟易するが、はぐれたのは自分が悪い……『氣』があるので、ここは素直に謝つておく。

「ああ、すまない。以後氣をつけよつ。だがこつじて手をつないでいれば、とつあえず迷子になることはないだらうへ。」

やつと、キラは呆れたよつた顔になつた。

「……ほんとにわかつてゐるのかなあ。もうここ歳なんですか、いい加減自覚してくださいよ?」

確かに迷子になつていよいよ的な歳ではないが、自分は自覚が必要なほどひどい迷子体質ではないはずだ。

(今回はちょっとケースが特異だつただけで……)

それに

「いい歳つて……一応私はこれでもまだ17歳だぞ。……まさか、317歳といつ意味で言つてゐるのではないだろうな?」

しかしそう考えるのなら、同じく30年以上も(しかも意識のある状態で)生きてきたにも関わらず、いまだ子供のような言動&見た目10才ほどのキャラにそのことを指摘されるのはしゃくといつものだ。

そう反論すると、キリはなぜか怒つたように、そして何かを諭すように言つて返してきた。

「もう、やつちじやなくして……はあ。いいですか? 男はみんな狼なんですよ!?」

…………まつたくもつて意味がわからぬ。

そもそも

「狼なのはお前だろ!?」

一人の会話は、どうまでも交わることがなかつた。

「ひらやひら不毛な会話をしてこむ」と口氣付いたら少し少年は、「まあ、僕が氣をつけねばいつか」と呟き、ふと視線を違うほうに向けた。

おやらく自分の好物の匂いがしたのだひら。ここへくらは狼だ。元気な声で話題を変え、少し離れたところにある店を指さした。

「」主様ーおなか空きませんか？　あー、あんなとこに食堂がありますよー。」

やつわざといじこ口調で言われて、そういうえば自分が（寝ていた間は別にして）長い間食事をとっていないかったことを思い出す。

（あの戦場で、なにか食べる余裕なんてなかつたしな）

特に拒む理由もない。

「やうだな……久しぶりに、まともな食事でもとつに行くか

「はい、お待ち! バナ肉のステーキとホットケーキとルクの実のジースツつだねー」

元気のいいおばちゃんが注文した品を持つてくる。

私の対面に座つてこむキリは、すでにそのおばちゃんが持つてこ

るホットケーキにくべきつけだ。

神族にとつては魔力^{マナ}が食糧のよつなものだから、本来口から食べ物を摂取する必要がない。

それでも、彼らにとつて人間の食べ物は嗜好品のよつなもので、中には好んでそれを食べる者もいるのだ。

ちなみに、キラは甘いものが大好物だった。もつとも見た目は獸だったから、健康に悪いと思つてあまり食べさせなかつたのだが。

そんなことを考えながらふとキラを見ると……

大好物であるホットケーキに手をつけず、非常にそわそわしながら期待と懇願が混じつたよつなまなざしで自分を見つめてくる。

(? ?ああ、そういえば)

「よし」

自分の声を聞くと同時に、キラは猛然とホットケーキをがつつき始めた。

その光景を見ていると、(キラが人型をとつてゐるせいか)どこか罪悪感のような、物哀しいような想いが芽生えてくる。

しかし

(.....いやこうといふのは変わつていしないんだな)

つこ苦笑してしまひ。

子狼だったじるのしつけの成果は、いまだ健在だった。

「それにしてもお嬢ちやん綺麗な皿をしごてるねえ。加えてすうじい別嬪さんだし」

食後、ルクの実のジューースを飲んでまつたりしていぬと、暇なかさりのおばちゃんが話しかけてきた。

「……あつがむいわこまか」

今まで容姿のことで褒められたことなどほとんどない（貴族のお世辞はスル）から、なんだか恥ずかしい。

「ああ、もしこれで髪が銀色だつたら、それこそ聖女様の生まれ変わりなんぢやないかと騒がれるだらう」

おばちゃんがつゝとりしたよつた声で言つてきた。

（銀色……の髪？）

いや、それより

「聖女様つて……誰、ですか？」

すれど、おばちゃんは信じられないものを睨みつけた。いついらを凝視してきた。

(……なんだか、嫌な予感がする)

キラのほうを見るとなぜか視線をそらされて……ああ、またモジモジしている。

とりあえずジュースを飲んで心を落ち着けよう。

そして、おばちゃんは…………今度は「ひかりが驚くようなことを言つてのけたのだ。

「なあに言つてるんだい！ そりやあ、聖女様つていつたら一人しかいないだろ？！？ 聖女アリア様だよ！？」

その日、アリアは生まれて初めて飲み物を噴いた。

第7話 “聖女様”の伝説

「ほんとに知らないのかい！？ ある日流星の「」と現れたことから、『人々の危機に神が地上に使わされた娘』といわれたお方を！？ 300年前魔王の手から全世界を救つた聖女アリア様といえば、今時3歳児でも知ってるよ！？」

おばちゃんが、信じられないものを見るよつた目を向けてくる。私も、できれば信じたくなかつた。

それにも……口元を拭きながら対面にいる少年に問う。

「キラフ……“少し”有名、だつたか？」

「…………」

漆黒の髪からルクの実のジュースを滴らせた少年は、バツのわるい顔をしながら……賢明にも無言をつらぬいた。

（髪の色を変えたほうが多いと助言したのは、このためか……）

とりあえずやつをおばちゃんが言つたように、『聖女様の生まれ変わり』などといわれる自分を想像してみる……鳥肌がたつた。

本当に変えておいてよかつた。

それにも、本日2度目の衝撃だ。

300年後の世界というだけでも驚愕だったのに、今度は”聖女

”。
” そろそろ心が折れそうである。

そんな自分たちのまわりに流れる微妙な空気を知つてか知らずか、おばちゃんはダメ押しともいえる言葉を重ねてきた。

「ああ、あんた運がいいよ！ そういえば今日は吟遊詩人が来てる日だつたわ。今日のは聖女様の詩を詠うはずだから、ちゃんと聴いていきなさい！…」

この食堂には見世物をするスペースもあるらしく、じばらくするところ（なんともタイミングのいいことに）派手な格好をした男がハープを持って現れた。

……正直、聴きたくない。

しかしおばちゃんが睨みを利かせているため、逃げることもできない。

魔物相手には“無敗”を誇る自分でも、このおばちゃんの強引なおせっかいには勝てなかつた。

そして憂鬱な自分の感情とは裏腹に、吟遊詩人は高らかに”それ”を詠つた。

「彼の者の美貌 天地に比類なき
瞳に宿す紫は宝石のごとく
風に揺れる白銀は月光のよう
けがれなき真珠の肌は何人にもおかしがたく
ただその清らかさを象徴せん

傍らには猛々しき金色の狼をはべらせ
救世の道をいざ歩まん

ああ、我らが愛しき神の娘アリア

月光の聖女

黎明の戦女神

紫銀の救世主

彼の者その命をもつて魔王を打ち滅ぼし
我らの命を救いたまん
我らその犠牲を忘れることがなかれ」

詩がおわり、拍手とともにおひねりが投げられる。
そんな中、私はただ一人、微動だにせず、無我の境地に入ろうとして……失敗した。

どうしよう……さつきまで耳に入った“音”を何一つ理解しなくなかった。

「いい詩だろう？ 聖女様を讃える詩は多くあるけど、これが一番有名さ。なんたってこの詩をつくったバッハノ伯爵は、実際聖女様に拝謁できた数少ない人だつたって言つからねえ」

そう、聞いてもいないのに親切に教えてくれるおばちゃんの解説を聞き、ようやく思考を取り戻し始める。

（バッハノ伯爵…………あの変態か！…）

今、自分の目の前にいたら、確実に殴っていたであろう人物のことを思い出す。

やつは……例のパーティーで極悪宰相に紹介された貴族のうちの

一人だつた。

やたらじつこかつたからよく覚えている。

(そういえば、『私、詩をつくるのが得意なんですよ。今度あなた
の美しさを讃える詩をつくりても?』とかきそつたらじく言つてい
たが……)

まさか本当にへりくるとは。あの時キッパリと断つておけばよかつ
た。

もつとも宰相が紹介してきたことを考えれば、これも最初から例
の“計画”のうちだつたのだろうが……

そんな複雑な自分の胸中を知つてか知らずか、既に開き直つてい
るキラが無邪気に詩の感想を尋ねてくる。

ちなみに、おばちゃんは満足したのか仕事に戻つていつたようだ。
「あはは、おもしろい詩でしたねえ。」主人様はどう思いましたか
? ?

ほんとにおもしろうに笑う様子に、一瞬殺意を覚える。

……とりあえず、八つ当たりが必要だらつ。

「猛々しき金色の狼、……猛々しき、……猛々、しき?」

そして胡乱な目でキラを見てやる。

「何度も言わないでください!? しかも最初に突つ込むのがその
部分ですか!?」

(そんなことを言われても……現実逃避もしたくなるだらう)

もはや完全に別人を讚えているとしか思えないあの詩に、一体どんな感想を持てというのだろうか。いくら魔王を倒した英雄として持ち上げるにしても……

「はあー…………普通、ここまでやるか？」

ため息しかでてこない。

神の娘、聖女、女神に救世主……知らない間にずいぶんと二つ名が増えたものだ。

だが、いつからいつと並べては、逆にありがたみにかけるような氣もする。

ほんとに詩作が得意だったのかと疑いたくなるものだ。

……もしかしたらセンスのないあの貴族連中が、寄つてたかつてあれこれ詰め込んだ合作なのかもしれない。だとすれば納得の出来だ。

それにもしても

「ずいぶんと出世したものだな」

つい皮肉氣に笑つてしまふ。

“化け物”やら“悪魔”やら呼ばれていた自分が、今では”神の娘”で”聖女様”だ。

……はたして神などこれっぽっちも信じていないただの人間が、

聖女になどなれるのか、甚だ疑問だが。

5年前……いや305年前のあの日から、私は神に祈ることをやめた。

敬虔な信者であつた両親を死なせた神を恨み、なによりその原因をつくつた自分の運命を呪い……神を憎んだ。

そんな自分が神の娘だと?

救世主だと?

(反吐が出る。お前らのために……世のため人のために魔王を封印したわけではないのに)

(私は、ただ一人のために……)

そのままつい哀愁にくれてしまいそうになる思考を、なんとか押しつぶめる。

負のスパイラルから脱出するためにも、他のことを考えないと。

……そういえば、最後の一文。

「『我らが犠牲を忘れることなかれ』、だつたか……」

死んだ自分を抱きあげるだけなら、この一文は不要だろ?。

なにより疑問だったのが

(こんな殊勝なことをいつやつらだつたか?)

このふざけた詩をつくつた連中。あの性悪どもの中に、最後の文

を書くよつな殊勝な心を持つ者はいない……はずだ。

……だが、彼らの顔を思いだすだけで気分が悪くなつたので、結局すぐにその思考も放棄してしまつた。

第8話「一人の迷子」

どうやら例の“聖女様”シリーズには肖像や彫像もあるらしい。もつともそちらは（も？）本来の私とはすいぶん違うらしいが……

といつよつ、いろんな顔の聖女様像があるといえば正しいのか。

（ああいつのをつくることは、長期間モデルになる必要があると聞いたことがあるしな）

たとえあのパーティーにその筋の職人がいたとしても、さすがに一度見かけただけで本人そつくりに作品をつくることはできなかつたのだらう。

なにはともあれ、それだけが救いだつた。

指名手配犯のように容姿まで知れ渡つていたら、おそらく自分は日の目を挿めないことになつていただろう。

そしてなにより……これ以上“聖女”関係でなにかあつたら、自分は間違ひなく憤死する。

白光を帯びて輝く月が、ポーラの街並みを照らす。

（なんだかどつと疲れた……もつ休みたい）

さすがに、今日はもうこれ以上の心労に耐えられそうにない。

そんな理由から食堂を出て、今はキラと一緒に宿屋を探している。

時刻は夜も更けたところで、遅くまで露店を営んでいた人も既に家路についていることだろう。

「あつ！ あそこなんてどうですか！？」

見た感じ、そこそこ上等そうな宿だ。自分のお金じゃないのが唯一苦しいが……ともかく今は一刻もはやく外界との接触を絶ちたかったので、そこに泊ることを即決した。

そして、宿に入ろうとした、その時。

「…………！」

急に後ろを振り返る私に、キラが怪訝な表情をする。

「ご主人様？ いきなりどうしたんですか？」

(…………氣のせいいか？)

だが、一応確認の意味も込めて、キラに今の違和感を伝えてみる。

「いや、何かに見られていたような気がして。一瞬だけだから、確証はないが……」

自慢ではないが、戦場を渡り歩いていたせいか魔族などの悪意ある気配には人一倍敏感なほうだ。

街に入つてからやけに多くの人々の視線を感じてきたが……やは

り今のは違つ氣がする。

しかし

「む～、僕は特になにも感じませんでしたけど？」

自分には劣るもの、普通の神族並みに感覚は鋭いキラが答える。

「……なら、氣のせいか」

もう何も感じない。

やはりただの勘違いだったのだ。少し疲れているのかもしねない。

これまでずっと極限状態の中で生活してきたのだ。少し神経が過敏になつていたに違いない。

そもそも、――――――――の時代に自分を知る者なんているわけがないのだ。

そう考へ俯いていると、なにを勘違いしたのかキラが意氣込んでいつ語ってきた。

「大丈夫です！――なにかあっても僕が守ります！――」主人様にちょっかい出すやつは、僕がけちょんけちょんにしてやります！――

そんな……300年前よりちょっと頼もしくなった相棒の声を聞いて、なんだかひどく安心する自分がいた。

宿に入り、とつあえず一泊することを決めて受付を（ほととぎす）ラガ（）する。

そして鍵をもらつて2階の一一番奥の部屋に入ると、よしやく安堵の息をはいた。

夜も遅かつたせいか、あいにく一人部屋しか空いてなかつたが……キラなら同じベッドで寝た所でたいして問題もあるまい。

上質なベッドに腰掛け今日一日を振り返る。

解かれた封印、姿の変わつたキラ、コスラの木、ポーラの街並み、そして……聖女の話。

「……なあキラ、今日街を歩いて確信したよ。あの日から、ほんとに300年が経っているんだな」

さつきまでの街の光景を思い出す。

手を掴まれた時に気付いたのだが……あの露天商の青年の服は、自分の知つている貴族の服のよつに、生地がきめ細やかで上質なものだった。

（300年。それだけあれば庶民の生活水準も向上するか……）

今着ている服も、そしておそらく通りを歩く人々の服も同程度の品質だらう。

見慣れない装飾も……今はこれが主流なのだとわかつた。

食事に関しても、いくつか知らない調味料が使われているようだつた。

さすがに今日は見ることができなかつたので、自分の専門である魔法については比較ができなかつたが……

それでも、大通りを歩くうちに田にしたいくつかの武器や防具は、やはり自分の知つてゐるものとは変わつていた。

それら全てが……あの時から長い時間が経つてゐることを証明をするには、充分な証拠だつた。

(300年……300年……なら、生きてゐるはずがない)

ベッドに仰向けに倒れこみ、白い天井を見上げる。心は疲れて早くこの思考を断ち切りたいのに、300年も寝ていかせいか……身体は眠くなつてはくれない。

そして、一度回りだした思考も止まつてはくれなかつた。

魔王を命がけで封印した理由。自分の生きる理由であつた少女のことを思い出す。

…………たつた一人の、私の妹。私の罪の証。

(それが……もういない?)

自嘲する。そして……絶望した。

「……なあキラ。私は、これからどうすればいいんだ?」

自分でもわかるくらい、ずいぶんと情けない声が口からでた。
もう自覚しながらも……止められそうになかった。

だつて

(あの子がいない、それはつまり)

「生きる理由がなくなっちゃったよ……」

ずっとあの子のためだけに生きてきた。

周りに押しつぶされないようじき野のよつた口調で話し、どんなに
切迫した状況でも冷静に判断をしてきた。

血反吐を吐きながらも死ねずにいた。

だからこそ……最後のあの時、魔王と対峙しながらよつやく訪れる「」の死の予感に歓喜した。

そしてその望みどおり、最高の死に場所で最高の死に方ができた
と思つた。

それなのに

「……迷子になっちゃつた」

時においていかれた。

本当に迷子のよつ……今の自分は、寄るすべを失つて途方にくれ
た子供と同じだ。

静寂が部屋を包む。

しばらくすると、キラが珍しく真面目な口調で語りはじめた。

「ご主人様……ご主人様が迷子になつた時は、僕が必ず迎えにいきます」

そうして、ベッドに寝転がる自分に近づいてくる。

「僕がついてます。ご主人様が死ぬ時までずっと、ずっとおそばにいます」

自分の横にすり寄り、幼子をあやすように口を抱きしめてきた。

あつたかい……まるで真綿に包まれているようだった。

「だから、だから生きてください。もう僕を、置いていかないでください」

その声色からは、切実さが滲み出ていた。

そして、その声に導かれるようにひとつつの事実が脳内へとやってきた。

(…………ああ、そういえばこいつも迷子だったな)

偶然助けた迷子の聖獣。

300年間自分を待つてくれた存在。

(そうか、私たちは似たもの同士か…)

迷子が2人。

そう……時に置いて行かれても、自分には待つてくれる人がいた。

(私は、一人ではなかつたのだな)

もしあの偶然の出会いが、神の采配によるものだつたとしたら……
今だけは感謝してやつてもいい。

そしてなにより、今、田の前にいる存在に心からの感謝を。

「キラ……お前に出会えてよかつたよ。ありがとう」

迷子同士、これから手をつないで共に歩もう。

もう一度とはぐれることのないよう。

キラが身じろぎして……その後何かを呑ぐが、薄れる意識の中で
はなんといったのか聞き取ることはできなかつた。

でも

(ああ、このぬくもりの中でなら安心して……)

そうして“明日”が“今日”へとかわった頃、聖女と讃えられた少女は、300年ぶりの眠りについた。
朝日とともに田代覚めるであつて、確かな眠りに。

第9話「監視の影」

時刻は遡つて、アリアが目覚めたその日の未明。

ポーラの街の影で、一人の青年が誰かと連絡をとつていた。

『そちらも目覚めていたか？』

相手の男が口火を切る。

「ええ、予定通りに……」

『そりゃ、計画は順調だな。じつはひつにあのシヴァを喰つてやつたぞ』

「おめでとうございます」

『封印のおかげだな。さすがにあれで弱つていなければ、いくら300年で力を増した私でも魔王を喰うことはできなかつたろう。まったく、あの小娘も役に立つたものだ……ああ、気配もかなり微弱だつたから、おそらくよほど敏感な者でなければあの魔王が目覚めていたことには気付かなかつたはずだ』

「…………」

(ついに念願かなつて魔王を喰らえたからか……いつもより饒舌だ
な)

無言を貫く青年は、ひとり胸中でつぶやく。

『といひで、監視に気付かれてはいないだらうな?』

「…………今のといひは」

『…………本当だらうな? 今後はさうに注意しろ。絶対に晒されるなよ』

「了解しました」

『シヴァの力…… わすがに最強と呼ばれただけはある。吸収した力を身体に定着させるのにおそらく1年ほどかかるだらう。…………これから私は眠りにつく。その間気付かれることなく監視を続ける』

「はい」

そして『最後に』と、赤金色の目をした……300年前は珊瑚色の目を持っていた魔王の元側近はいつ警告する。

『カオス、あの小娘を死なせるなよ。あれも私の大事な餌となつてもうつのだからな』

「かしこまりました……ベリアル様」

カオスと呼ばれた青年は青紫の双眸を怪しく輝かせながら、己の主に恭順の礼をとつた。

第9話「監視の影」（後書き）

「Jリームで読んでいただきありがとうございました。Jリームで第一章はおわりです。

ついでに連続投稿もいつたん終了（汗）

できるだけ早く続きを書きたいと思いますが…

さて次はいよいよ学園編がスタート。

よつやく他の主要人物と魔法が活躍できる舞台がやつてきます。
よろしければ気長にお付き合ってください。ではでは。

2章 第1話「出陰」

視界に映る光景は、まるで地獄のようだった。

ついやきほどまであった、自分たちの暮らしていたはずの家が、街が……原形を留めていないほど、破壊されている。いまだ火の手があがっている家と……何かの焼ける匂いが、鼻をつく。

(なにが……おじったの?)

最後の記憶は……ああ、村を魔族が襲つて、両親が自分と妹を納屋に隠したんだ。でも結局見つかって、抵抗したけど、殴られて……それから……

(どうしたんだっけ?)

誰かその疑問に答えてくれる人はいないかと、あたりを見回し……そして、自分のかわいい妹がひどい怪我を負つて座り込んでいるのを見つかる。

「マコア! ? どうしたの、そのけ 」

しかし近づいてみると……仲の良かつたはずの妹は、涙を流しながら、必死に口からりあるとある。

そして

「ひつ……いやだ、来ないで……助けてお父さん、お母さん……」

(ねえ、どうしてそんな田をするの？まるで……まるで”化け物”を見るような田を)

「…………」

一気に覚醒する。

「…………は？」

そうだ。昨日300年の眠りから覚めて……自分は……

苦い笑いがこぼれる。視界に映る白い天井がどこか恵々しい。

(やうやく、うまくはいかないもの、か)

たとえ300年の時が過ぎていても、いまだ自分の心は過去に囚われている。

心底に潜む深遠の闇は一朝一夕で振り切れるものではない。

(昨日は穏やかに眠れたと思ったのに)

その原因？ といつていい少年を探す。

いた。ギリギリベッドの上に載つてゐるが、いつ床に落ちても仕方ないほど危ういバランスで……実に幸せそうに眠つてゐる。なぜか安心した。

身体は昨日覚めた時と同じく、少しだるかった。

きっとまだ300年の眠りの後遺症が残っているのだろう。

だがそれでも、カーテンの隙間から」ぼれる300年ぶりの朝日はひどくやわらかく…自分をやさしく出迎えてくれているように感じた。

これが私の新しい世界だ。

(今日からまた……生きていくんだ)

その最初の1日。まずは、その決意をくれた相手を起こすことから始めようか。

少し寝過したらしく、アリアたちが階下に降りるときには、太陽はすでに万人にその光を浴びせるほど高くあがっていた。

幸いなことにこの宿は一階が食堂と兼任で、そこで遅めの朝食をとることにする。

(さすが高い宿だけはある)

柔らかいパンとあたたかいコーンスープ、そして名前の知らない卵料理（おそらく300年間で新しく生まれた料理だが）を前に少し感心してしまひ。

それを食しながらキラとこれからのこと話をす……前に、まずは最優先でしなければいけないことがある。

「キラ、人型時は“よし”ではなく“いただきます”で食事をとるんだぞ」

「はーい」

自分が新しい人生を始めたついでに、今日からキラのしつけ、もとい教育も始めることにした。

そして相変わらずがつがつ食事をとるキラを見ながら（これもおい教育が必要だ）、昨日から思っていたことを口にだす。

「キラ、お前どこに行きたい所はないか？」

キラはパンくず（もちろん菓子パンの）をほっぺにつけながら、不思議そうにこちらを見てくる。

「ほへ？ ……僕が決めていいんですか？」

「ああ、だつてお前ずっと私のそばを離れられなかつたんだろう？ 300年も待たせたんだからな、せめて行き先はお前が決めてくれ。私は特に行きたいところもないしな」

すると今度はちょっと迷つたような顔をした後、それをふつくるように言った。

「……じゃあ、僕、王都に行ってみたいですねーー！」

（王都か……うん）

王都なら大きい都市だし、なんらかの働き口も見つかるだろ？

(さすがに、これ以上他人のお金で生きていくのは忍びないしな……)

最悪自分には魔法もあるし……まあ、なんとかなるだろ？

それに王都ならここから飛行魔法で3時間といったところだ。た
いした手間ではない。

「よし、じゃあ朝食を食べ終えたら王都へ向かおう」

街を出て人気のない方向へと歩く。

少なくとも300年前の時点では、飛行魔法は使い手の限られる
高位魔法であった、と聞いている。

今がどうなっているかは知らないが、とりあえず用心に越したこ
とはないだろう。

一度行つた場所ならいけることから、転移魔法という手も考えた
が……なにせ300年前の記憶だ。

下手な場所にでたらとしかえしがつかないことになるので今回は
やめておこう。

(新しい人生は、なるべく目立たないように生きていきたいからな

余計なトラブルなどはじめんだった。また利用されるなんてもつ
てのほかだ。

そんなことを考えながらのんびりと歩いていると……少し先に、
懐かしくも恋々しい気配を感じた。

「魔物、か……」

正直昔とは事情が違うのだから、無理に倒す必要はない。

ないのだが

(さすがに目の前で死なれたら寝覚めが悪い)

道の先で、自分と同じくらいの歳の青年が、イノシシのような魔獸に囮まれているのが見えた。

長年の習慣から、ほぼ無意識のうちに魔獸の瞳の色を確認する。

(……薄い紅色。雑魚か)

魔物は、他の生物を“喰う”ことによって、その体内の魔力を自分が吸収し、力を増す。瞳の色を見れば大体の強さがわかるのだ。

青年は……どうやら剣で応戦しているようだが、やはり多勢に無勢である。

「……仕方ない。加勢するか」

どうせ通り道だし、自分のためでもある。

そう言い訳しながら、すぐる様な動作で魔物の一団に向かつて火球を放つた。

それは吸いつくように魔獸の一匹に直撃し、すぐにイノシシの丸焼き（黒こげだが）ができる。

近くにいた魔物が唐突に燃やされ、青年が驚いたようにこちらを見てきた。

(またあの違和感が……)

髪色を変えた時と同じ感じがする。

が、今は戦闘中なのでひとまずその思考を閉ざすことにした。
なにしろ、新たな敵を見つけた魔物が、今までに「ちから」と大挙してきているのだ。

(高位魔法で一気に片付けよう)

そう思つて、魔法を発動させようとすると、

「…………なつー？」

なにもでなかつた。
なにかが足りないような……そんな、初めての感覚がした。

(どういふことだー？　いや、それよりも……まづいーー！)

気がつけば田の前に敵が迫つていた。
イノシシらしく猪突猛進の勢いだ……いや、そんなことを考えて
いる場合ではない。

(回避…… できない！)

だが、ぶつかる、と思った瞬間自分の背後から魔力を感じた。
黒い影が地面を走り、自分を通り越して今までに襲いかかろうと
していた敵を切り裂く。

「今……は」

まさか、と思いながら、後ろを振り返る。

「大丈夫ですか、ご主人様！？」

人差し指を魔物に向けたキラがそう言つた。
珍しく、忌々しいものでも見るようになり、好戦的に魔物を睨みつけている。

だがそれよりも

（なんだか時の流れを感じるな。あのへっぽこだったキラが、今はこんな魔法を使えるなんて）

つい感慨にふける。

魔法の照明ひとつ出せなかつたあのころのキラが懐かしい。
それでいて魔王との戦いにまで付いてくるのだから、もはや無謀としかいいようがなかつたのだが……

「キラ……お前、ほんとに300年生きてきたんだな」

しみじみという私にキラは、「今さら！？」といしながら、次々と黒い影で魔物を撃退していった。

どうやら自分の出る幕はないようだ。

いや、舞台にあがれない理由は……自分にこそある。

ようやく、違和感の正体がわかつたのだ。

少し冷静になつて気付いた……魔力切れである。

今まで自分には縁のない感覚だつたから、最初はわからなかつたが。

「これも、封印の影響か……？」

だとしたら自分には死活問題である。
思い返してみると、今日は昨日より魔力量が増えていた、気がする。

(少しづつ回復するようではあるが……さて、困ったな)

これでは飛行魔法も、ましてや転位魔法も使えやしない。

(まともに使えるとしたら……)

ふと青年の方を見ると、どうやら2匹の魔獣に挟まれてなかなか危ない状態のようだ。

あまり気は進まないが……しかたない。

【頼む】

そう言つて、さきほど私の放つた火球に引き寄せられて集まつた、火の精靈に“お願い”する。

すると淡いぼわぼわした地界の精靈は、どこかうれしそうにそれに応え、青年の背後にいる魔獣を燃やし尽くした。

自分の後ろにいた魔物が突然燃えだしたことにより、また青年が驚いている。

しかし、今度はすぐに氣を取り直して、正面にいる魔物に斬りかかつていつた。

(……ふむ、どうやら問題ないようだ)

「一つの意味で確認した。

「ありがとう、助かったよ。……今度礼をする」

そう火の精靈に言つて、解散させる。

いつもなら力を借りる対価として自分の魔力を『貯めているのだが
……今はそれができないことが心苦しい。』

しかし精靈は『気にしないで』とこうよつて、自分の周りを一回
りして帰つて行つた。

それを申し訳なくなりながら見送つてみると、ビルやアーヴィングが終
わつたようだ。

「じ、主人様、僕の活躍見ててくれましたー?」

キラが『褒めて、褒めて』とでもいうよつて、嬉しそうな顔で駆
け寄ってきた。

それに苦笑し、子狼の頃にやつていたよつてそのモ、改めその髪
をくしゃくしゃになでてやる。

「ああ、強くなつたな。助けてくれてありがとう、キラ」

実は最初のやつ以外ほとんど見てなかつたのだが……それでもキ
ラは満足そうに手を細めている。

だがそのあとすぐには、少し警戒するよつて後ろを振り向いた。

自分にはさつきから見えていたのだが、……やせせびの青年がこちらの方に向かつて歩いて歩いている。

(面倒い)と云なればいいが……)

そう願いながら、少し緊張する。

今まで同年代の人間とともに話す機会などほとんどなかつたのだ。

まして、今や時代も違つ。

(現代の若者とちやんと余話ができるのか……不安だ)

老人のような思考をしてこるので氣づいて、微妙な敗北感を味わう。

(考えていてもじょうがない。……まあ、なるみになるか)

そして不安と……少しの期待を胸に寄せて、アリアは己の運命を変える人との出合ふを果たすのだった。

2章 第1話「出会い」（後書き）

てなわけで2章の始まり始まり～。

1章は勢いがのつて1日で書けちゃったんですけど…やはり見切り発車だつてせいかここから難産しそうです（汗）週1～2話のペースで更新できたらいいなあ。では今後ともよろしくお願ひします。

第2話「ライル」

その青年は、さきほどまで命のやりとりをしていたとは思えないほどさわやかな笑みで、右手をあげながら話しかけてきた。

「よお、助かったよ！ 普段はこんなところに魔獣なんてでないのに、今田に限って急に出てきて……あ、俺はライル！ あんたは？」

栗色の髪に若草色の瞳を持つた人物は、人懐っこそうな顔をしながら2人の前まで来た。キラの頭の上からその顔を見つめる。

精悍な顔つきながら、どこか少年っぽさを残したその相貌は“綺麗”といつよりは“格好いい”という表現のほうが似合うだろう。

(名前にについては“あれ”があるからあまり口に出したくはないのだが……偽名で呼ばれるのも、な)

この時代で唯一自分という“個”を認識できる記号なのだ。なにより両親がつけてくれた、自分にただ一つ残されたものを偽る気にはなれなかつた。

「……アリアだ。こつちはキラ」

少し逡巡しながらも結局、自分を守るよつて立ちふさがつているキラと一緒に名乗る。

それにして、なにやらキラの雰囲気がいつもよつとびとびしい……人間不信が発動したのかどうつか？

そんなキラの態度を全く気にせず……いや、気付いてないのかも
しないが、変わらない態度で青年は応じる。

「へえ、聖女と同じ名前なのか……あなたも大変だなあ

(もー)

そう言つて苦笑する青年に少し疑問を感じるも、とりあえずこれ以上前のことで突っ込まれたくないので、結局何も言わなかつた。

「おひと、やうだ

やつして黙つていると、不意に青年はなにかを思い出したように言つて、口笛を吹いた。
すると……森の中から足に傷を負つた栗毛色の馬が、ひょいひょいしながらこちらに歩いてくる。

(よく訓練されている)

感心すると同時に、最後の戦いで自分を乗せてくれた同じ栗毛を持つ馬のことを思ふ出す。

途中ではぐれてしまつたが、あの馬は無事だつたろうか……短い付き合いながら賢い子だったのはよくわかつたし、あまり心配はないが。

そんな、ついに300年も前の、今更考えてもどうしようもないことを考えてしまつ己が少し嫌になる。

(まあ、こまはまだ仕方ないか)

ちなみに青年はといえば……馬の方にかけよつて心配やつこそその傷を確認してくるところだつた。

「怪我させてしまふんなリース。すぐに治してやるからな」

せつ言ひて栗毛の馬にむかへ、両手をあわせて口を開じる。

【神の慈悲をじて請わん 祈りに応えて 彼の者に癒しを『えた
まえ】

すると、どこからともなく白色の光が現れ、馬の怪我を癒していくではないか。

(これは……魔法、か?)

なにやら自分の知つてゐるとははずいぶん違つた。

だがそれより気になつたのが

「お前、魔法が使えるのにどうして剣で応戦してたんだ?」

「そりや詠唱なんてしてる暇がなかつたからなー。あんたみたいに詠唱破棄なんて高度な技、俺みたいな普通の魔法使いじゃ無理だよ」

「や、そつか……」

(今は詠唱を行うのが普通なのか?)

詠唱などよっぽど大規模な魔法を行使する時しか使わない。30年前とて、自分がわきぼじ出した火球程度なら誰でも詠唱なしで行使できたはずだ。

(……もしかして、300前より魔法は退化している?)

だがこの青年の言葉だけではまだ確信が持てない。
ここで結論を出すのは早計だろう。

さまざまな憶測が宙に浮かんではすぐに消えていく。なんとももどかしい感じだった。

おそらく自分がそんなことを考えているだろ?とは全く思つてい
ない青年は、なおも話を続ける。

「しかも最後に敵を燃やしたあれ、精霊の力だろう? 僕も火の属性を持つてるからなんとなくわかつたよ。詠唱破棄のうえに精霊の力まで借りれるなんて、あんたすげえ魔法使いなんだな!」

これにもなんだかひつかかるものを感じたが、下手に突っ込もう
ものなら今度はこちらの藪を突かれかねない。ここは話をあわせた
ほうが無難だろう。

苦くなりそうな顔をなんとか無表情の仮面で取り繕つて、冷静に
答える。

「……いや、それほどでもない」

「まあ、そんなに謙遜するなよ。これでもほんとに感謝してるんだ
ぜ。ところであんたらどうに向かおうとしてたんだ? この方向だ

と……もしかして王都か？「

「やうだが」

特に嘘をつく理由もないのに素直に答える。すると、それを聞いた青年は、どこかうれしさついで提案を持ちかけてきた。

「ならちゅうどいこ！……俺も王都に行くところだったんだ！ 助けてくれたお礼もしたいし、よければ王都まで一緒に行かないか？」

(……ふむ、どうするか)

少し迷う。

おそらく普段なら断つているところだが……今は状況が状況だ。

「あー。ちょっと待ってくれ、今連れと相談するから

そういう言い、いまだ青年を睨みつけているキラの首根っこを掴んで、相談どころの緊急会議をする。

そして青年と少し距離を置いたところでキラと向き合つた。

……本題に入る前にひとつ確認しなければならないことがある。

「おいキラ、あの男が言っていたのはどうことだ？ 今の魔法はみな詠唱が必要なのかな？」

「え？ う、うん？ 僕、人間のことはよくわかりません～」

なぜかわざとらしく答えるキラに疑惑が生じる。……田が泳いで

いる。

「……お前、私が眠つてゐる間『情報収集をしていた』、とか言ってなかつたか？」

するとキラは……お得意のモジモジを発動した。
今までは後回しにしてきたが、もはやこれまでの経験で後回しにするところくなことにならないのはわかっている。

「キラ……お前、いつaina・ん・の情報収集をしていたんだ？」

少しどすをきかせて尋ねてみる。

「……えっと……新作のお、おかし……と、か？」

田をせわしなく動かし、しまいにはつくり笑いを浮かべて、かわいらしく首をかしげるキラ。
その頭を……鷺掴みにする。

「お・ま・え・は」

とんだ失敗だ。

自分はその点においては結構キラをあてにしていたのに。
どうやらこいつの知識はお菓子関連とその延長線上のものに限ら
れていますらしい。

そういうえばこいつ、“聖女”的にについては知つていたのに“
聖女の詩”については知らなかつた。

……おそらく本当に基礎的な知識しか知らないということだ。いや、それすらも危うい。

(しかし……これでは迷子が2人どころではない。世間知らずの馬鹿2人だ)

昨日一日でひとまず心の整理ができる、新しい人生を受け入れるところができた。

だからこそ王都に着くまで、ここで生活していくための基本的な知識をキラから教えてもらおうと思つていたのに……

その計画は丸潰れである。

ついキラの頭を掴む手に力が入つてしまつのも、仕方のないことだろう。

背後から、なにやらその様子を見ていたらしい青年の「お、おい、虐待はよくないぞ!」という声が聞こえる。

それに、「違う。これは教育的指導だ」と答えるながら、ようやく本題を思い出した。

「まあいい……さて、どうする? あの男とともに王都に行くか? どちらにしろ魔力切れで飛行魔法は使えないし、道すがら私たちの足りない情報(と云う名の常識)を得るためにも、私はその方がいいと思うんだが?」

「ほ、僕は反対です!」

やけに焦つたようにキラが主張する。

「ほ、その理由は?」

「え……えと……か、勘です!! 僕の勘がそう告げています!!

あ、あこつちと悪い男ですよー。」

どもりながら答えるキラの“それ”を聞いて安心した。
これならばまず間違いない。

「よし、じゃあ彼と王都まで行くか

「なんでえー?」

キラが裏切られたような顔をして、大きな目を精いっぱい開きながらこちらを見てくる。

「だつてお前の勘はまずあたらないだろ?」

キラの勘はあたらない。それはもう確実にあたらない。
つまりキラの勘が彼を“悪い男”と告げているのなら、現実はその逆だとこいつだ。

自分の失言が主の意見を後押ししたことに気付いたキラが、頭を抱えて唸っている。

それを後日に青年の方を向いて了承の意を告げる。

「わかった、王都まで同行しよう!」

それを聞いた青年。いや、ライルだったか……は、それはそれは嬉しそうに目を輝かせながら答える。

「そうじゃなくっちゃー！ 王都までよろしくな。アリア、キラー！」

そうして3人と1匹（あるいは2人と2匹）は王都までの道のり

を共にすることを決めたのだった。

第3話「事情」

「そういうや紹介し忘れていたな。ここには俺の愛馬のリースヘン。
美人だろ？？」

そう言つて見事なたてがみを撫でるその様は、まさしく親ばかの
ようであった。

しかしそれと同時に、同じ栗色の毛を持つたものが並ぶその姿に
は、たしかに種族を超えた親愛があるよう感じとれた。
リースヘンという馬のほうも『もつと黙つて』とこりこり、
うれしそうにライルの顔に頬ずりしている。

「ああ、なかなかの器量の持ち主だと見受けられる」

「へへ、ありがとう。……しかし、困ったな。キラは小さいけ
れど、さすがに3人乗りはキツイだろうし。でも徒歩じゃ途中で野
宿することになつちまつしなあ」

「どうやらそこいらへんのことを考えてなかつたらしく。

(私も人のことは言えないが、あまり後先考えない性格なのか……
?)

でもそれについてはいい考えがあるので、心配する必要はない。

「ああ、それなー」
「僕は小さくない！ 子ども扱いするなー！」

提案しようとした矢先、キラが私の言葉を遮って、ライルにかみ

ついた。

なぜだかこの青年のことがお気に入らないらしい。

「ああ、悪かったよ。たしかにあんなすうじい魔法使えるんだもんな。ほれ、お詫びの印にこれやるから、せつ怒んなよ」

ライルは苦笑しながらさう言ひ、ポケットから飴玉を2個とりだしてキラの口に放り込む。

(まわしく手ども扱いしてくるようだが)

しかしキラはそれに気付いてないのか……あっけなくその誘惑におちた。

「あはは、リストみてえ！」

飴玉で両頬を膨らますキラを見て、ライルが爆笑する。

それを見た私も嘆息する。

飴玉2個であっけなく陥落するキラに、保護者として一抹の不安を覚える。

(まさか菓子をくれる人になら誰にでもついて行くんじゃないだろうな)

幸せそうな顔をしているキラを横目に恐ろしい想像をする……どうやら新たな教育が必要なようだ。

「で、話に戻つていいか？ サツキの話だが、問題ない。こちらこも足はある

「ん？ そうなのか？ 見たところ馬は連れていないようだけど…」

不思議そうな顔をしたライルがあたりをキョロキョロと見回す。

「そりや馬じゃないからな。……キラ」

「いまだ幸せそうな顔でにんまり頬をおさえている自分の相棒に声をかける。

「え？」

そして、次に発せられる自分の言葉にその顔が凍りついた。

「獣型になれ」

「う、うえええええ…！」主人様……まさか！？

「そのままかだ。別に、いいだろ？！」

そう言いながら先ほどキラの頭を鷲掴みにした方の手をにぎりにぎをする。

それを恐ろしそうに見たキラは、「あううう、今回だけですよ」と言って、嫌々そうにしながらも漆黒の狼の姿になった。

そこにいたつて、一連の出来事を見ていたライルも驚いたようこそ声をあげる。

「うお！ キラお前、神族だつたのか！？ しかも“ご主人様”つてことは……もしかしてアリアの使い魔か！？」

ちなみに馬のリースヘンも主人と同じく、突然現れた肉食動物に驚いているようだ。

「使い魔？ 契約のことか？」

また聞き慣れない単語だ。でもビジセ王都までの付き合いだと思い、今度は遠慮なく訊く。

「そうそれ。姉弟だと思ったら主と使い魔だったなんてなあ。そういわれてみればキラの瞳は蒼か……てことはあれか？ アリアは火と闇の2つの属性を持っているのか？」

(2つ、の属性？ ……話についていけない)

属性を持つているとはどういうことだろうか。

聖獣や神族じやあるまいし、人間に属性を持つも持たないもないはずだが……

疑問に感じたが、ここであまり無知をさらすのもどうかと思い、焦りながらもなんとかごまかすように違つことを答える。

「いや、正式に契約を結んでいるわけではないのだが……」

そう自分で言つて思い出す。

(そりいえばまだキラと契約を交わしてなかつたな)

以前は天界に還されるのが嫌で契約を拒んでいたはずだが……今

せどりなのだらうか。あとできこてみよ。

「やうなのか？まあ、確かに使い魔は常に地界に顕現してゐるものじゃないって聞くしな。……にしても神族を供にしているなんて、アリアはよっぽど優秀な魔法使いなんだな！ いつたいどこの学園で学んだんだ？」

「学園？いやどこにも入つてないが……」

「へー、じゃあ誰か高名な魔法士に師事したとかか？」

「い、いや、やうござうわけでもない」

(まさしく、だんだん会話が苦じくなつてきた)

「じゃあどうやって魔法を修得したんだ？そもそも出身はどこのなんだ？」

次々と繰り出される質問に冷や汗が流れる。

ライルの顔が少しひぶかしげなものに変わるのが、なんとなくわかつた。

(しまつた。こんなに早く誰かと身の上話をすることは思つていなかつたから、そこあたりの“設定”をなにも考えていなかつた)

軽い気持ちで同行を許可したこと少し後悔する。

そもそも嘘をつくのもそこまで得意なほうではないのだ。こんな時とつさに嘘八丁並べるようなスキルは、少なくとも今の自分にはない。

ぐるぐる考えどう答えようかと悩んでいるまにこの時、神族らしく天からの助けの声が入った。

「『主人様は独学で魔法を修得した天才なんですよ…でも、ずっと森の中で住んでいたから世間の事にはすこし疎いんですね…』

「そうだったのか…たしかに最初の火の魔法も今まで見たことが感じだつたしなー。じゃあ、どうして王都に？」

「そ、それは…ある日『主人様の魔法が暴発して住んでいた家が黒こげになっちゃつたんです！おかげで今は一文無しです…！』

(キラ……いくらなんでもそれは)

「苦しいのではないだろうか…いや、それ以上にかなり恥ずかしい。

なんだか冷や汗をかきすぎて肌寒くなつてきた。

「どうか、それは災難だつたな。なら王都には出稼ぎに行くのか？」

(信じた!?)

ずいぶんあっけなく信じたその様子に驚愕する。

実はこの青年も少し普通の人とはずれた感覚を持っているのかもしれない。

(いや、今はずいぶんと平和らしいし…そのせいいか?)

自分のいたころは、一人で街の外に出るなど魔物に殺してくれといつてゐようなものだつた。

とにかくこれ幸いと自分も会話に加わる。

「これ以上キラに任せていたらどんなもない人物像ができるがつてしまつ。それだけは阻止せねば。」

「ああ、そななんだ。独学ながら魔法は使えるし、それで生計を立てようと思つてゐる。だが、なにせさつきキラが言つたようにずつと世間と隔絶したところで暮らしてきたからな。一般常識が足りないんだ。よければ道すがらそのへんのことを私に教えてくれないだろうか?」

そう言つてキラの背に乗る。ふわふわした毛が気持ちよく、優しくなでてやる。

この点はキラに感謝せねばならないだらつ。これなら多少常識知らずでも、不自然にはならないはずだ。

自分のその姿を見てライルも愛馬に騎乗する。リースヘンはまだキラの存在に怖々としているようだが、主になだめられてなんとか慣れたようだつた。

「ああ、そういうことならまかせとけ! 王都の一般常識からおすすめテースポットまで、なんでも教えてやるよ!」

そう言つてこちらに笑いかけてくる。別にテースポットはいらないのだが……

「僕のこ主人様を口説くな!..」

キラが昨日もしたようにキツとライルを睨みつけてゐる。

……しかし今日は、次の一言であっけなくその溜飲を下げる。

「まあまあ、落ち着けよ。王都に着いたらお菓子貰つてやるからね」

「ほんとうー? ジョーブラーンー?」

「のあまりの変わり身の早さに、さすがに物哀しくなる。

(私は菓子以下か……)

ジョーブライルは完全にキラの操作方法を理解したようだった。

第4話「勧誘」

キラの背に乗り、王都への道すがらいろいろなことを聞いた。人々の生活や王都の名物、ここ最近流行っているものいるものなど……ライルは実に話し上手だった。

その会間に自分が気になっていたことについても、さりげなく訊いてみる。

「なあライル、先ほど私の属性について尋ねていたが、……その、」

しかしそこからビビう聞いたものか……しばし悩む。

「ん? ……ああ、もしかして他の魔法使いに会うのも初めてなのか? ジャあ自分以外の属性を持つ人間も珍しいだろ」

幸いなことにもつまいこと勘違いしてくれたらしく、ライルは勝手にしゃべってくれた。

「ちなみに俺は火と風の属性を持つてるんだぜ」

「……へえ、そうなのか」

(人によつて使える魔法の属性が違う、のか…?)

300年前は、得意不得意はあつたものの、ほとんどの魔法使いが全属性の魔法を使えた。もちろんアリアもそうだ。むしろ苦手な属性などひとつもない。

やはり魔法については300年前より衰えていると考えていの
だろうか？

「そういうやつも聞いたけど、アリアは結局なんの属性なんだ？火が使えるのはわかってるけどさ。キラもいるし……闇の属性も持ってるのか？」

(しかも契約は自分の属性の相手としか結べない」とになっている?)

どんどん己の常識が崩れていく。
6大精霊と契約している自分は、この時代ではかなり異端な存在
だろつ。

「の時おそらくキラがその胸中を知つていれば、『いや、300年前でも十分異常でしたよ』と指摘していただろうが、幸か不幸かそのことに気付かなかつた。

(ライルも2つの属性を持つていると言っていたし、別に不自然ではないよな？)

「まあ、そんなところだ」

「じゃあ俺と一緒に2つの属性を使えるんだなー。それだけで一般の魔法使いとは差がつけられるぜー！」

『よかつたな』とでも言ひたげなライルの姿に、また思考が回転を始める。

(……普通は1つしか属性を持つてない……と)

そう心のメモ帳に書きつける。

なんだか今日だけでノートがいっぱいになりそうだ。

さすがに（自称）魔法使いを名乗っているだけに、魔法についてはあまり大っぴらに聞けない。

そのせいから危ない橋を命綱なしで渡っている気分だ。

だが、そのリスク分の価値はある。

特にこれからは、この魔法を使って生計を立てていくのだから。なにを聞いておいても損はないだろ？

「あつ、そうだ！ 大事なこと言いつの忘れてた！」

だがそんな自分の決意とは裏腹に、ライルはとんでもないことを暴露した。

「アリアは職業として魔法を使う“魔法士”になるんだろう？ でも魔法士になるには免許が必要なんだよな。知ってたか？」

「…………めんきょ？」

そんな話はもうろん聞いてない。

「あー、やっぱり知らなかつたのか。普段の家事程度に魔法使うなら必要ないんだけど、魔法で生計を立てようとする人は“協会”でライセンスを取得しなきゃならないんだよ」

(“協会”？ なんだそれは……いやそれより)

「そ、そのライセンスを取得するにまじめあればいいんだ？」

「2つ方法があるんだけどな。1つは協会に所属する魔法士に推薦状を書いてもらひて試験を受けること。もう一つは、協会が認定する“学園”を卒業すること、だ」

「…………」

どう考へても、自分には無理だ。

“学園”なんものは知らないし、推薦状についても……こんな身元不明の怪しい人間に書いてくれるような醉狂な者は、まずいないだろ？

「まあ、森で暮らして独学で魔法を学んだアリアにはキツイ話だよな。でも“もぐり”でやるとすぐに協会の審問官がすっ飛んでくるからな。やめておいたほうがいいぞ」

なぜかしたり顔で説明していくライルに恨みがましい視線を送る。

(そんなことを言われても……こつたいてじりじりとこいつのだ)

せつかく始まった新しい人生計画は、初っ端から暗礁に乗り上げてしまつた。

自分には魔法以外能などないのに、それすらも取り上げてしまわれてはお先真つ暗である。

そしてズーンというような効果音が似合ひそつなほど落ち込む自分に、ライルはどこかうれしそうに提案してきた。

「で、だ。ここで俺から提案があるんだけど…アリア、うちの学園に来ないか？」

「……ライルの、学園？」

ライルは両手を大きくあげて主張する。

「そう、ハインレンス王立魔法学園！ 大陸屈指の名門校だぜ。でも魔力さえあれば庶民でもはいれるし、実力があれば編入もできる。アリアならきっと大丈夫さ！ それに魔法が暴発したってことは、まだコントロールが未熟だつてことだろ？ 一度しつかり学んだほうがいいと思うんだ」

（たしかに現代の魔法について興味はあるが……）

自分の魔法は現代では異端のようだ。

この時代で生きていいく以上あまりそれを使つべきではないだろう。

だが、たとえ学びたいとは思つても、いまだ不安は拭えない。なにせ自分には先立つものがなにもないのだから。

「しかし……入学できるようなお金はないぞ。それに、私には身元を保証してくれる者もいないし……」

「それについては心配いらない。なんせ庶民でも入れる学園だから、入学金は安いし、奨学金制度も充実してる。なに、命の恩人なんだから入学金くらい俺が出すよ。ついでに身元保証もな！」

そう朗らかに答えるライルに多少の疑念をもつてしまつるのは、仕方のない話だつ。

なぜなら

(「ずいぶん話がつまらないか?」)

いくら命の恩人とはいえ、入学金を払ってくれる上に、身元保証もしてくれる……考えてみれば、それができる家とこいつのは自然と限られてくる。

(もしかしてライルは……)

そこまで考えて頭をふる。

たとえそうだとしても、ここまでいろいろ親切に話してくれた相手に対し、その理由だけを持つて態度を変えるのは失礼な話だろ。自分の好き嫌いはどうしようもないが、ライルに対する誠意を見せたい……そう思つた。

ただどうしても「れだけは聞いておきたかった。

「なあ、どうしてそこまで親切にしてくれるんだ?」

「そりや自分の命を救つてくれた人だし、精いっぱいの恩返しをしたいと思うのは当然だろ? それに……なにより俺はアリアのこと、気に入つたしな」

前半はさも当たり前のことを言つたり、そして後半はどこか照れくさそうにライルは答える。

その様子を瞬きもせずに観察したアリアは、安心したように息を吐いた。

(よかつた……嘘を言つてゐるよつではない。信じてみなさいだ)

今までの経験上、人の嘘や悪意は目を見ればなんとなくわかった。ライルのまっすぐな瞳は、とても嘘を言っているような感じではなかつた。

むしろそんな相手を疑つた自分が恥ずかしくなるくらいだ。

「なあキラ、どうしようか？」

最終確認として「口の下にいる相棒に聞いかける。

「僕は」主人様と一緒に、別にどうでもいいですよ

すぐにそう答えてくれるキラに、言葉にはできない思いがこみあげる。

「ライル」

その問いかけも予想していたのだろう。ライルは先回りして自分の疑問に答えてくれた。

「ああ大丈夫だ。すでに使い魔を連れてきている生徒もいるしな。により上級クラスになつたら全員使い魔召喚の授業を受けることになつてゐるから、キラが一緒でも全然問題ないよ」

それを聞いて安心した。

「そつか……じゃあ、さつきの話お願いしていいか？」

「おう、まかせろ！」

「ちからも間髪いれずに答えてくれる。

基本的に人に頼るのは良しとしない自分だが、今回は命を助けた貸しがあるので、ありがたくこの好意を頂戴することにした。

それにしても

(どうやら自分にもキラの幸運体质が移ったようだ)

いきなりこんな人間と会えるなんて、僕以外の何物でもない。もしかして、300年前では不幸続きだったから、今生では幸運続きになるのか…そんな馬鹿なことを考えてしまった。いいこと尽くしだ。

「まったく……人生捨てたものではないな」

まさしく300年前、人生を投げ捨てた自分にそう言ってやりたい。

(それに学園か。どんなところなんだろう?)

そういうものの存在だけは知っていたが、自分には一生縁のないものだと思っていた。

まだ見ぬ学び舎に想いを馳せる。

(“ともだち”……できるかな)

今度は年相応の思考をしているのだが、残念ながら本人にその自覚はなかつた。

それまでのものはまた違う、新たな期待に胸を躍らせながら、アリアは王都への道を進む。

第5話「王都」

自分はおぼろげながら300年前の王都を知ってるし、ポーラの街も見てきたことから今度は比較ができるはず、なのだが……

「…………大きい」

結局またでてきたのは、そんな残念な感想だった。自分の語彙力のなさに絶望する。

「そうだらう、そうだらう」

そしてどこかで聞いたような会話を、今度はライルと繰り返す。やはりどこか自慢げに胸を張っているのが気になるが、その気持ちもわからなくはない。

王都は、本当に大きかった。

ポーラの街の10倍はあるうかといつ広大な面積を要する土地には、これまた大小様々な家屋が並んでいる。色彩豊かな衣装を身にまとった人々は談笑しながらあたりをいきかい、大道芸人は道で各自自慢の芸を披露してそれに花を添える。

（ポーラの街も活氣があるとは思つたが、これは……）

その比ではない。おぼろげな記憶ながら、300年前よりもはるかに発展しているのがよくわかつた。時刻は既に夕方を過ぎようかといったところなのに、いまだ人の流れは絶えることがない。

背後を険しい山脈に守られたハイインレンス王国王都ヴィシアンテ。

古代ヴィシア王国をその名の由来としたいまや大陸屈指の大団の首都は、その名に恥じないたたずまいだった。王城を最奥にして、道を放射線状に広げるその都は、歴史と伝統のかげを残しながらも新しい文化とうまく融合している。混沌ではなく調和、まさしくその見本になるにふさわしい景観だった。

目を細めて、遠目に見える王城を観察する。
自分が唯一よく知っているその建物も、以前とは様相を異にしていた。

（石造りの頑丈そうな建物だから、300年の歳月でも大丈夫だと思っていたが……）

本城の方は随分と外觀が変わっているようだ。
なんといっても真っ白…前は灰色だったそれは、今やいやいやらしくらいの純白だった。微妙に悪趣味な気がする。

しかも

（あの忌々しい塔は健在か……）

王城の敷地の端につくられた高い塔。
あれだけ残つているとは一体なんの皮肉だろつか。

「ほら、いつまでボーとしてんだ？ キラなんてもう先にいつちまつたぞ」

ライルが思考に沈む自分を引き上げる。ついでに飛ばしてきたから、てっきり隣でバテてるかと思つたが……

今日中に着くためにはまだけつこう飛ばしてきたから、てっきり隣でバテてるかと思つたが……

姿が見えない。

今日中に着くためにはまだけつこう飛ばしてきたから、てっきり隣でバテてるかと思つたが……

ライルの後に従い、門を抜けて少しすると……なにやらショーウィンドーに顔をひつひつと店内を凝視してくるキラを見つけた。

「うわあ～これが王都にしか売つてないと言われている“聖女の祝福”かあ」「福

うつとうつするような声。その視線の先には、色とりどりのお菓子が並んでいる。

「あー、こっちはあの有名な“アリアの涙”！ これ一度食べてみたかったんだよなあ」

ヨダレを垂らし興奮した面持ちで語るその様は、まさしく狂喜という言葉がふさわしい。もし獣型だったら、きっとその尻尾ははしきれんばかりに動いていたことだらう。

中には店員が迷惑そうな顔をしているのは……おそらく氣のせいではない。

だが迷惑を受けているのはむしろこちらの方だ。

（なぜ人の名前を使って勝手に菓子をつくつくるんだ）

こんな生活に密着したところでも自分の名前が浸透（しかもかなり恥ずかしい形で）しているなんて……これからも一生こんな気持ちを味わわなければならぬのだらうか。

にしても

（まさか王都に行きたいと言つてたのは……）

キラの顔を見て……やはり考へるのをやめた。むなしく思ふ。

それにどこでも好きなところと書いたのは自分だ。

わざとお菓子女房のキャラばかりと戯謔していたのだつ。そつ思ひにした。

「あっ、あの約束覚えてるよねー? ちやんと買つてくれれるよねー?」

三

こちらに気付いたキラがライルに詰め寄る。

「はいはい、覚えてるよ。ほら、どれが食べたいんだ？」

「えっと……じゃ、じゃあ、JRとかでばっかりでしょ。」

そう言つた自分にキラが泣きそつた目で抗議してくる。

「くつ……だと、ほれ選びな」

ライルはそんな自分たちの様子を微笑ましそうに見て、キラの肩を慰めるようになだいた。

「『主人様のいじわる！ む、じゃあ今日は“女神の慈愛”とアリア様ラブラブセットで！』

(……そのチョイスは私へのあてつけか)

そう思わずにはいられなかつた。

しかもしの店は“それ系”的な前のものしか売っていないのか……
…嫌過ぎる。

お菓子を買ってほくほくのキラと、それを楽しそうに見ているライルを先頭に大通りを歩く。今はライルの家に向かっている途中だ。今田はそこに泊る予定である。

最初は『そこまで面倒をかけるわけには……』と断ったのだが、『だつて一文無しなんだろう? それに俺の恩返し計画は始まったばかりなんだぞ!』とわけのわからないことを言われて押し切られた。

(せういえば一文無しつゝになつてゐるんだつた……)

実はまだキラが持つてきたお金が少しだけ残つているのだが、どちらにせよもう一泊は難しいので、お言葉に甘えることにした。ライルに出来えた自分たちは本当に幸運だ。

「おい! 汚い手で触んじゃねーよ! —

キラ同様ほくほくして歩く自分の耳に、不意にそんな怒声が入ってきた。

声のした方に視線を送ると、路地裏近くでボロ布を纏つた老人と青年が言い争つている。……いや、なにか違う。

「お恵みを……お願いします。もう口もなにも食べてないんです」

「そんなこと知るかよ! 放せ! —

そう言つて青年は、老人の腹を思いつきり蹴つた。

体重の軽い老人はバウンドするように壁に激突し、そこで腹を抱えてうずくまる。その間に青年はその場を去り、立ち止まっていた周りの人間も興味が失せたように元の喧騒の中へと戻る……。そう、まるでいつものことのようだ。

「……ライル。あれは？」

「あー、なんていうか、都會にはこういう人がけっこいいんだよ。國もどうにかしようとはしてるんだが……」

苦々しい顔をしたライルが、どこか悔しそうに説明する。

「こういう人、とは？」

「いろんな事情があるが……要するにお金がなかつたり、住む場所がなかつたりする人は路地裏で生活しているんだ。いわゆる浮浪者つてやつだ」

「浮浪者？ だがそういう人間は……その、奴隸になるのではないのか？」

己の胸に手をあて、少し躊躇しながら尋ねてみる。

少なくとも自分のいた時代はそうであつたはずだ。お金がなく生活が苦しい者は、権力者や富裕層の奴隸となり、自由の代りに毎日の暮らしを保証された、はずである。

「奴隸？ 一体いつの時代の話をしてんだ。奴隸制度なんてもう何百年も昔に廃止されたろ？」

「そう、なのか？」

「はあ、ほんとに知らなかつたんだな。まあ森育ちじや仕方ないか……にしても知識が古すぎないか？」

ライルが呆れたように見ていたが、それは気にとめず、未だ苦しむ老人をじつと見つめる。

（そうか。奴隸は、もういないのか……）

そんなことを思いながら黙つて老人に近付き、その腹に手をあて簡単な治癒魔法をかける。ここに来るまでの間、また少し魔力が回復したからこれくらいのことはできた。

急に痛みがなくなり、それどころか疲労感までなくなつた老人はひどく驚愕しているようだ。

「あ、あの……？」

そうして困惑っている老人の手に残りのお金が入つていた袋をそつと握らせ、ライルたちのところへと戻つた。

「アリア……その、俺が言えることじやないとは思うんだが、あまりそういうことはしない方がいい。一度やれば、それこそ際限なく搾り取られるぞ」

気まずそうにライルが言つ。

何かをあげたことは知られたようだが、何をあげたかまでは知られてないようだ。

「わかっている……今回だけだ」

自分でも正直どうしてこんな行動にでたのかはよくわからなかつた。

以前なら決してしなかつただろう。なにせ自分のことだけで精一杯だつたから。

だがなんとなく思うところがあつたのも事実だ。

奴隸制度はなくなつた。それ自体は良いことなのかも知れない。だが、その結果貧富の差が拡大した。

（いや貧富ビリーハーとこつよつは、持つ者と持たざる者の関係がか……）

300年前は例え老人の奴隸でも、あんな扱いを受けることはなかつたのだ。

魔物による度重なる襲撃で人はどんどん死んでいった。だから奴隸は労働力として重宝されていたし、そもそも人間同士で傷つけあう暇などなかつた。

不自由だがまず飢えることはなかつた奴隸と、自由ではあるが今日食べるものにも困る浮浪者。

じぢらが幸せなのだろうか……胸に手をあてて考える。

結局答えはでなかつた。

第5話「H都」（後書き）

暗い！！

といふか全然話が進みませんね（笑）
ちょっとまとまった時間もできたので、いらっしゃへんでもまた連続投稿
したいと思つてます。

たぶん3時間に1話くらいのペースで出しますので、よければご覧
ください。

第6話「貴族」

「…………」

「い、いや、いきなりそつだつて言つたら嫌われるかと思つてさー！貴族を嫌う人も多いし、アリアには……まず自分自身を見てもらいたかったんだ！」

平民の家とはあきらかに違う、おそらく貴族街と言われる中でも一層立派な屋敷の前に自分たちはいた。

ライルは慌てているが、大体予想はしていたのだ。

一方でキラは気付いていなかつたのか、若干警戒の眼差しで尋ねる。

「なんで貴族のお坊ちゃんが、従者もつけずにあんな感じにいたんですか？」

かなり無愛想ではあるが、これでもまだいいほつだ。

キラはある意味自分以上の貴族嫌いで、以前は貴族に会えばその存在をきれいに無視していた。

……お菓子を買つてもうつた恩があるからだひつ。

だがライルの方はキラの態度がいきなり変わつたことに、少し焦つたようだ。

「だ、だつて、従者つけて狭い馬車で長時間過ごすなんて……暇す

『あらんだ。まあ、立ち話もなんだしどうあえず入ってくれよ』

愛馬を門番に預けてライルは自らその立派な門戸を開く。その後に続々、いまだ渋るキャラとともにその立派な玄関をくぐる。ここまで来て帰るのはなんだし、もとより貴族だったからといって今更どうこうするつもりもなかった。ライルが『自分を見てほしい』と言つたように、私もライル自身を見ようと決めたのだ。

そして、決意を固めたその日に最初に飛び込んできたのは

「げつ」

「どつしたんだ？　ああ、あの肖像画か？　まあ、有名だもんなー」

すげえ見覚えのある顔を背景に、ライルは苦笑しながら言へ。

「あらためて皿山紹介するよ。俺はライラック・コア・ティレイド。一応ティレイド公爵家の長男をしている」

「…………」

(…………あの極悪宰相の、子孫？　ライルが…………あの？)

視線を向けるとくつりと笑う青年。

それと彼の後ろに描かれている自分の殺したい人間トップ一である男の顔を見比べる。

……一体何の冗談だ。隣でキラも口をあんぐり開けて驚いている。

(しかし、なんというか……奇跡としかいよいよがないな)

一体なにがどうなればあの性悪の子孫がこんな人間になれるのだろうか。

いや、もしかしたら300年のうちに血が薄まつたのかもしれない。

そういうえばあの魔王とアスト王族も親子だったのだし、ありえないことではないだろ？

しかし

(世間はなんと狭いといつか)

とりあえず眠つてゐる間に没落していくくて良かつたとは思つ。でなければライルに会つことはできなかつたのだから。

……たしかに驚きはしたが、やはりこれまでの彼の人柄を見れば、あの極悪人の子孫だからという理由だけで嫌いになることはできなかつた。

「でもいくら聖女を見出した有名人だからって、なにもこんなでかと肖像画飾ることはないよなあ。…それにここだけの話だけど、

俺この人の顔あんまり好きじゃないんだよ。なんか性格悪いひじゅね?」

「同感だ」

間髪入れず同意する。

それについては、まつたくもつて同感だった。ライルとは気が合いそうである。

「そつか! アリアもそつ思うんだな。よかつたー、家族はだれも同意してくれなくてさあ。『この罰あたりめー』って怒られるんだよ」

(いや、ライルは天国か……)

確かになんらかの罰(といつ名の報復)はありそつな気がする。だが、どうせ相手は死人だ。そんなものは地獄に行つてから考えればいい。

自分は行けそういうにない。行くにはあまりにも……殺しきぎた。そんな馬鹿なことを考えてしまつ自分に辟易してしまつ。

「それに俺聖女についてもあんまり信じてないんだよなあ。あ、気悪くしたひじりめん」

「いや、気にしなくていい。といひでひづいてひづつみつんだ?」

これはぜひともうかがいたい。田覚めてから初めての聖女否定論だ。

「いや、なんていうかさ……あの伝承、あんまりにも都合がよすぎ
るつていうか。それに、俺の幼馴染で聖女に過度の妄想抱いてるや
つがいてさあ。そいつの話を聞いてたら『そりやないだろ』って
気持ちになっちゃったんだよ」

「ふむ、そうか」

その気持ちはずせひ大事にして欲しいところである。それにしても
ほんとにライルとは気が合ってやつだ。

「坊ちゃん、お帰りなさいませ。こちらの方々は？」

ライルが同士を得てうれしそうにしていると、いかにも執事、と
いった風な初老の男性が丁寧な口調で尋ねてきた。

「ああ、道中魔物に襲われていたところを助けてくれた命の恩人だ。
手厚くもてなしてくれ」

「なんと… お怪我はありませんでしたか！？ だからあれほど従
者をつけてくださいと常日頃から申しておりますのに……！」

心配そうな顔をした初老の男性は、今度はこちらを向いて深々と
腰を折る。

「お一方とも、坊ちゃんを助けて頂き本当にありがとうございます。」
私当家の執事を務めております、ベン・ハミルトンと申します。本
日は使用人一同、感謝を込めて誠心誠意おもてなしをさせていただき
ます」

白髪をきれいにセツトし、ビシッヒースーツを着こなした老執事は、懇切丁寧にそう述べた。

「あ、ああ、」*アリヤ*もしくは頼む。私はアリア、*アリヤ*もしくはキラだ」

今までこんな風に人に接せられたことなどない。ついつい恐縮してしまう。

その後、なんとも豪華な夕食を御馳走になった。いまだかつて食べたことのない高級食材が出てきて、心底驚いたものだ。

こんなに緊張した食事も、初めてだった。

そして、食事をしながら思つたことは、この屋敷で働いている者はメイドから下男までみな、本当に親切で生き生きとしていることだ。

仕える人間と同じく性根の良い人間が集まっているのだろう。王宮のプライドばかり高い侍女とは大違ひだった。

(……しかし、少し警戒心が足りないんじゃないかな?)

そこあたりも主に似てしまつたのか。

いくら命の恩人として紹介されたからといって、どこの馬の骨ともわからぬ人間をここまで丁寧にもてなすなんて……正直もう少し危機感を持つた方がいいと思つ。

という助言を先ほどの執事にしたところ『我々は坊ちゃんの目を

信じてますから。それに、危険人物は自分からそんなことは言いませんよ』と笑われてしまった。

……たしかにその通りだった。

食事を終えて、湯浴みも済ませ（メイドが手伝おうとしてきたが、謹んでお断りした）、やっと本日の寝床に案内される。

さすがは公爵家といったところか。これまたなんとも広くて豪華な部屋だった。

だが、これでも王都にあるのは別邸で、本邸は昨日までいた領地のほうにあるらしい。

そこではライルの両親や弟妹たちが暮らしており、本当はもっと早くこちりに戻つてくる予定だったが、引きとめられてしまい今に至るそうだ。

趣味のいい調度品に触れながら、わきほど聞いた明日の予定を反芻する。

ライルは明日から学校がある（といつが新学期は既に始まっている）らしく、そこへ自分も一緒に連れて行つてくれるらしい。

入学試験の時期はとっくに過ぎているので、自分は編入試験を受けることになった。

ライルは『まあ、詠唱破棄とか精靈魔法とか使えるなら楽勝だろ！』と言つてくれたが、やはり魔力がまだあまり回復していない。そこだけが心配だ。

(……そつだ、今訊くか)

学校といえば、一つ思い出したことがあった。

「キラ」

「はあい、なんですか～？」

天蓋つきのふかふかベッドで遊んでいるキラに話かける。
夕食で例のお菓子を食べたせいか、それともどんなに寝相が悪く
ても落ちることはずなさそうな広大なベッドのせいか……ひどく
ご満悦の様子だ。

ちなみにライルには『部屋分けたほうがいいんじゃないかな?』と言
われたが、『いつも一緒に寝ていたし、もう一つ部屋を用意させる
のも悪い』といって遠慮した。

別に嘘は言つてない。

300年そばで寝てたのは事実だ。

それより

「契約のことなん・・・

「嫌です！・・・」

まだ最後まで言つてないのにキラが拒否する。

「いや、別に天界に還そとこうわけではなく、その……本契約を

結ばないか？」

「それも嫌ですー。」

「…………えーと、なんでだ？」

（というかそこまで全力で拒否されると、さすがに傷つくのだが）

本契約は仮契約のような一時的なつきあいではない。それこそどちらかが死ぬまで、一生もののつながりができる。

だが一生とは言つても、そもそも聖獣や神族にとって、人の一生など微々たるものだ。

彼らの寿命は何千年ともいわれており、その長い生の中で退屈しぶぎに人間と契約を交わすものも多い。

契約を交わすと、聖獣や神族は主に従うことになるが、代わりに主から魔力をもらうことができるようになる。

（300年ずっと待つていてくれたキラに自分が返せるものといつたら、これくらいしか思いつかなかつたのだが）

「だつてご主人様はすぐ無理するじゃないですか！ 僕はご主人様をないがしろにするような命令なんて絶対聞きたくありません！」

確かに本契約では、聖獣や神族は主と主従契約を結び、基本的にその命令に絶対的に支配される。

つまり主のどんな命令にも逆らうこととはできなくなるのだ。

「それに契約を結んだら、ずっとそばにいることはできませんし…」

…

これも一理ある。契約を結んだ相手は、主の魔力をもつて地界に顯現するから、魔力が尽きれば強制的に天界に送還されることになる。

以前はともかく、今の自分では長い間キラを留めておくことはできないだろう。

「だが……それではお前がつらくないか？」

聖獣や神族は本来天界の豊富なマナを吸収して生きる生物なのだ。彼らが召喚に応じるのは、一時のこととはいえ人間から魔力をもらう方がはるかに効率がいいから、という理由もある。

つまりなにが言いたいのかといふと、普段の地界のマナは彼らにとって物足りないのだ。神族クラスにもなるとなおさらだろう。

ちなみに魔力とマナは基本的に同じものを指すが、生物に宿る場合は魔力、自然界にある場合はマナ、と呼び分けられることがある。

「大丈夫です！ 300年間、あの洞窟で純度の高い闇のマナを吸収してきましたから、魔力の問題はありません。それに本来のご主人様の魔力はとてもなく大きくて、いつも身体からはみだしているんですよ。それを吸収すれば特に契約をする必要はないんです。ご主人様の魔力が完全に回復するまでだつたら、今まで溜めてきた分で大丈夫だし……何より回復するまでそばでご主人様を守る人がいないと駄目でしょう？」

セコイまで言われてしまつては、一いちも無理に契約を持ちかける
気にはなれない。

(まあ、せばこして貰えるんだつたらいいか)

「わかつたよ。お前がそれでいいなら、もう私からも何も言わない。
さあ、明日も早こしそろそろ寝るか」

別に無理に契約で結び付ける必要などないのだ。

したくなつたらあつちの方から言つてくるだらつて、今はこの状
態でお互い満足してこることにうれしいんだ。

なによつキラがそうしたといつていつのなひ、そのとおりにしてや
うと誓つたのだ。

それが……自分を孤独という闇から救つてくれたキラへの、せめ
てもの恩返しだと思つてゐる。

せうしてビックリホッとしているキラの横に寝転がる。

明日からのことを少し考えようと思つたのだが、移動で疲れてい
たこともあったのだるつ……そのままぐぐりこへくことができ
た。

そして、悪夢を見ることがなかつた。

第7話「編入試験」

夢も見ないほど深い眠りにつき目覚めたその日は、まさしく新しい人生の門出にふさわしい日だった。

(今日は朝から調子がいいな)

どうやら身体も回復してたらしく、だるさもほとんどなくなつた。

外を見ると……今日も快晴のようだ。小鳥の楽しそうな歌声が聞こえる、なんとも良い朝である。

ただ、相変わらずキラの寝相だけは悪かつたが。

この広いベッドで一体どういう寝方をすれば、あんな端っこまで転がることができのか。

朝から豪勢な食事をとつたあと、使用人全員で「いつてらつしゃいませ」とお辞儀をされて送りだされた。その間を歩くのは……なかなか勇気が必要だった。

ちなみに、「いつもこんなことをしているのか?」とライルに訊くと、「今日は特別。アリアたちがいるし、それに俺、普段は寮の方に泊つてるから」とかえってきた。

学園には遠方から来る人もいるため、格安の寮が完備されているらしい。

別にライルの場合、無理にそこに住む必要もないのだが、「その方

「なんかおもしろそうだろ。それに親友も寮に住んでるからな」とのことだ。

今日からは自分もその寮でお世話になる……予定である。

格安の上に、奨学金制度もあるため無一文の自分でもなんとかなるらしいが、そのためにはまず編入試験に受からなければならない。ちなみに優秀な成績で編入すれば、授業料半額などの特典がつく、特待生制度もあるらしい。

(気合を入れていかなければ)

そうして、今は黒いロープを身にまといたライルとともに、学園への道に向かっている途中だ。

なにやらクラスによつて着る色が違つらしく、その真新しい黒のロープは、上級クラスの証らしい。ライルは（失礼だが）意外と優秀なのだろう。

(できることがならライルと同じクラスに入りたいな……)

やはりその方が自分もいろいろと安心できる。

昨日からのつきあいだが、ライルとはずいぶん気が合つて……なにより一緒にいて楽だ。

森の設定はともかくとしても、自分が世間に疎いという事情も知つてゐるし、世話好きのいいやつだと思つ。

そんなことを考えてみると、噂をすれば……といふのは少し意味

が違つたが、ちよつといいタイミングでライルが声を発した。

「そーいやアリアって家名なんなんだ？ 紹介状書くとき必要になんだけど」

「家名、は……ない」

正確に言えば、昔はあつたが今は無い。

その昔の家名を復活させるつもりもない。

自分に……両親や妹と同じ家名を名乗る資格はないと思つてゐる。

「へ？ そんなことつてあるのか……えと、失礼かもしないけど両親は？」

「両親もいない。孤児だった私を森に住んでいた老人が拾つたんだ。その老人もすぐに死んだがな」

これは教訓を踏まえて昨日のうちに作つておいた“設定”だつた。

「そ、そつか悪いこときこたな……」

若草色の瞳を伏せて、申し訳なさそうにしてくるライルの様子に、少々良心が痛む。

しかし、まさか真実はもつと悲惨だとは思つまい。

もちろんそんなことは知る由もないライルは、仕切りなおすように明るい口調で提案してきた。

「じゃあ俺がつけてやるよ！ なにがいいかなー…うん、“セレ

ステイ”なんてどうだ？

「まあ、別にいいが……ちなみに“セレスティ”ってどうこいつ意味だ？」

なにやら勝手に話が進んでしまったが、別に不満があるわけではない。これから家名が必要になるなら、つけてしまつた方がいいだらう。もとより自分にはよくわからないものだして。ただ、その意味だけは気になつた。

「異国の言葉で“可憐な人”って意味さ。アリアにぴったりだろ」

「ハハ、口説くなーー！」

またもやキラが抗議する。

なにもそこまで過剰反応することではないことだが……

そして、結局昨日と同じパターンが繰り返されることがなつた。

「はいはー、後でお菓子いっぷこ買つてやるからなー

「ほんとうー？ 今度は端から端までいいーー？」

「ハハ、甘やかすなーー。」

ギヤーギヤー騒ぎながら歩く3人は、周りの人々が微笑ましそうにその様子を見ていることに気付かなかつた。

ライルの屋敷から40分ほど歩いたところに“それ”はあつた。

“学園”。正式名称ハインレンス王立魔法学園は、思つていた以上の大規模だつた。

それこそ王城と同じくらいの広大な面積の敷地には、大小さまざまの建物……授業棟だけではなく、研究棟や訓練場、食堂から寮までありとあらゆるものがあつた。

今現在おおよそ600人の生徒と、100人以上の教職員および研究者を抱えるこの学園は、その270年以上の長い歴史と、輩出される魔法士が総じて優秀なことから大陸でも非常に高い評価を得ている……らしい。

その上、一定以上の魔力さえあれば身分に関係なくだれでも入学することができるため、最低入学条件の12歳以上を満たした老若男女が身分に閑わらず机を並べて勉強する……というなんとも珍しい光景が見れる学園としても有名だそうだ。

一応6年制のようで、クラスはそれぞれレベルによつて2年ごとに区切られた下級、中級、上級が存在する。

始めはみな下級から始めるのだが、そのクラスが終了した時点で一応卒業することが可能である。

これは才能や体内魔力量に応じてどのクラスまでいけるかが決まるという意味で、具体例をあげるなら

【1、2年下級クラス】……基礎魔法とコントロールの方法を学ぶクラス。あまり魔力のない庶民や商人の多くはここらへんで卒業し、その魔法レベルもせいぜい生活に役立てる程度。青いロープを着ている。

【3、4年中級クラス】……基礎魔法以外の中級魔法と、それぞれの特性にあつた魔法を見つけて学ぶクラス。傭兵・騎士・魔具士など魔法を補助で使う職業を目指す者、もしくはある程度の魔力量しか持たない者はここで卒業する。赤いロープを着ている。

【5、6年上級クラス】……上級魔法と、自分の特性にあつた魔法などを専門的に学ぶクラス。才能を持つ者、将来専門的に魔法を扱う者、研究したりする者が集まる。ちなみに貴族が多かつたりする。黒いロープを着ている。

この体制を維持している以上、当然だが上のクラスになるほど人数は少なくなり、約600人いる生徒は下から6：3：1程度の割合になるらしい。

と、こんなところだ。

もつとも全て、今見ているパンフレットとライルによる補足で知った内容だが。

『そもそも基礎魔法ってなんだ?』などといつ、よくわからないところがあるものの、これで大体の概要はつかめた。

そんなことをしているうちに、いつのまにか試験会場に着いたら

しい。

昨日から連絡は云々ていたらしく、ライルが受付らしき人物に紹介状を見せた後、すぐに試験が始められるようだった。

「じゃあアリア頑張れよ。お前ならきっと中級以上にいけるはずだ！」
学園で待ってるからな！」

そう言い残しライルは自分の受ける上級クラスの学科へと行つてしまつた。

少し不安になるものの、そんな自分を見かねたキラが声をかけてくれる。

「『主人様、頑張りましょうね！』

「ああ、そうだな」

（そうだ、これから的人生がかかつているのだからな……全力を尽くそう）

そうして決意を固めていると、人の良さそうな中年の男性と、眼鏡をかけた若い女性の2人組がやつてきた。

2人とも白いローブを着ている。おそらくこれが教員の証なのだろう。

「アリア・セレスティさんですね。今回の試験の担当官を務めるティーン・カイルスです」

「同じくエリザ・リーン・バーステンよ」

「アリアです。 イヤホンをはずす。 今日せよひくお願いします」

「はい、 イヤホンをぬぐくお願ひします」

「もつ使い魔…… それも神族の使い魔がいるなんてす」といわね

眼鏡の女性が感心したようにキラを見る。

一瞬なんでわかったのだろうと思つたが、 彼女が左手に持つていて書類で納得した。

おそれくライルが紹介状の中で書いたんだろ。

こちらもいちいち危ない説明をする手間が省けて助かる。

「ふふ、 これは期待できそうですね。 ではまず始めて体内魔力量を調べますね。 ついて来てください」

そして男性の先導で、 なにやら机の上に見たこともない装置が置かれた部屋に案内された。

手のひらの印がかかれている台と、 そこから線のようなものでつながれた… なにやら数字のようなものがみえる、 装置である。

「なんですか、 これ？」

「おや、 じ存じないですか？ イヤホン手のマークがあるでしょ。 そこに手を置けば、 機械があなたの体内にある魔力の量を自動で計測してくれるのですよ。 ちなみに今日はまだ魔法は使用していません

んね？

「え、ええ、まあ……」

（おもしろい装置だが……これはまずい）

300年間の技術進歩に感心すると同時に、危機感が込み上げてくる。

封印のせいで今の自分の魔力量は今かなり低いはずである。300年前の話ではあるが、“化け物”と呼ばれるほどあったそれは、果たして今現在どれほど残っているのか、そしてそれは合格基準に達するのか……正直ものすごく不安である。

「はー、ではここ手を置いて3分ほどジッとしててくださいね」

しかし無情にも時は待ってはくれない。諦めて手を置く。

（もじこれで駄目だつたら……）

数週間もしくは数カ月後、魔力が完全に回復してからもう一度受けさせてはくれないだろうか。

……いや、それ以前にそれまで私は生きているのだらうか。

「はー、計測終了ですね。…………っえ？」

死刑判決を待つような気持ちであれこれ考えていると、3分といふは異常に長く感じられた。隣でキラも固睡をのんびり見守っている。

3分が経つて、装置を見た眼鏡の女性が驚いたような声をあげる。

(……やつぱり駄目だつたか)

「これからどうすればいいのだろうか。
いや、それよりも、このままではせっかくここまでしてくれたラ
イルに申し訳が立たない。
なんとかしなければ……」

「あのー、できれば後でもいい

「すこーしーーー！」

「……せ二？」

同じように装置を見た男性も感心したよ。」
「ふやく。

「今まで長いこと人の魔力量を見てきましたが、ここまで多い人はなかなかいませんでしたよ。宫廷魔術士並みですね」

「……………そ、つい、ですか」

「よかつたですね、ご主人様！！」

キラがうれしくて仕方ないといった表情でこちらを見上げてきた。

(喜びべきこと、だよな?)

あの心配はなんだつたのだろう。なぜか損をした気分になつた。

だが、逆にこれでよかつたとも思つ。じつやう自分の“化け物”ぶりはこの時代でも通用するようだ。

(満杯の時に測らなくてよかつた……)

心から思つた。

第8話「実技」

「えーと、紹介状によると既にいくつかの魔法が使えるようですね」

「あ、しかも属性も2つあるんだ、優秀ねえ」

カイルスという中年男性のあとに、バーステンという眼鏡の女性が最初よりいくぶんかフレンドリーに話してきた。

「あの……他には何が書かれているんですか？」

思わずそう尋ねてしまったのは、ライルがどこまで自分の情報を教えているのか気になつたからだつた。

たしかに紹介状のおかげで説明の手間が省けるのはうれしいが、詠唱破棄や精霊魔法についてまで書かれているのは、少々困る。

自分はあくまで平凡かつ平和に学園生活を送りたいと思つてゐるのだ。
だから、あまり（現代の基準で）突飛なことができるといふことは知られたくなかつた。

「あとは……ああ、『ずっと森で暮らしていくで知識が偏つているから、その点は便宜をはかつてほしい』だそうです」

それを聞いて安心した。

しかも、なんとも気がきくといつか。まったく、ライルには頭がない。

ホツとしたように胸をなでおろす自分の様子に、試験官は多少疑問を感じたようだが、結局突っ込まれることはなかつた。

「よろしいですか？ では次は実技の方に入らせていただきます。訓練場に案内しますので、ついてきてください」

そう言われて彼について行つた先は……一見ただの原っぱのようだが、四方をなにかの魔法、おそらく結界で囲まれた空間であった。

ここに試験を行つりしいが、そこにはすでに先客がいた。それも30人ほど。

「ああ、今は上級クラス6年生の授業中ですね。端のほうを使わせていただきましょうか」

どうやら魔法の訓練中らしい。3人ほどの教員が見守る中、数十人の生徒が各自好きなように魔法を放つっていた。

(上級クラスという割に若い世代が多いようだが……)

みんな自分と同じくらいか、少し上程度である。

上級クラスには貴族が多いと聞いたが、それと関係あるのだろうか？ あちらもこちらの方に興味津津らしく、その多く（特に男子）が手を止めてこちらを見ている。

ちなみにライルは上級クラスの5年といつてることもあり、その中にはいなかつた。

(やつてへいな)

「多少やつにくことは思つたが…まあ、彼らのことは道端の雑草だとも思つてちよつだい」

何気にひどいことを眼鏡の女性が言つが、そのおかげで少し緊張が解けた。

それにキラが彼らの視線を遮るようにその間に立ってくれたので、どこか安心する。
なにやら彼らの顔が引きつっているような気がするが……いつたいキラはどんな顔をしているんだ？

「ではあの的に向かつて、なんでもいいので魔法を放つてください。ああ、回復魔法や補助魔法が得意でしたらそちらでもかまいませんが」

「いえ、攻撃魔法が一番得意です」

これは事実だった。

なにせ一人で魔物の殲滅をしてきたものだから、誰かの怪我を治すことなんて滅多になかった。

自分は、あらゆる攻撃魔法をあたり一面にぶつ放す……いわば超攻撃型の戦いしかしてこなかつたのだ。

まあ、それはともかく
(さて、どうするか……)

視線の先、10メートルほど之間をあけたところには、木ででき
た的がある。
気をつけなければいけないことがいくつかあった。

一つ、属性は火か闇を使うこと。
一つ、詠唱をすること。

一つ、あまりおかしなことはしない。しかし合格はすること。

最初については、特に問題はない。とりあえず、目に見てわかり
やすい火の属性を使うつもりだ。ちなみに精霊に力を借りるつもり
もない。やはり試験なのだから自分の力を見せなければいけない：
…と思つたからだ。

次の詠唱については、現代の詠唱なんぞわかるわけがないので、
自分が魔法のコントロールを学ぶために最初の時だけ使用していた
ものを使うしかない。まあ、聞き覚えがないといわれたら、森でう
んぬんの話をしてしまかせばいい。

最後は……正直なにがおかしく、なにがおかしくないのかが全く
わからないので対処の仕様がない気がする。しかし、今の自分の魔
力は一応（富廷魔術士ほどではあるが）人並みらしいので、少しく
らい頑張ったところで問題はないだろう。それに加減をしそぎて試
験に落ちることになれば目もあてられない。

いまだ生徒たちとにらめっこを続けていたるキラに視線をうつす。

…それに、キラと自分の人生がかかっているのだ。

(よし、本気でやるか)

そう決めたアリアは集中を開始する。

唐突に膨れ上がった強い魔力の気配にその場にいた者は、はじかれたように一斉にその方向を向く。

【火薬・凝縮・目標・前方】

そう淡々と言つた彼女の右手には、子どもの頭程度の大きさの火の球ができあがっていた。

生徒、教員、試験官、そこにいた全員がその魔力の気配に戦慄する。

『あれをくらつたら確実に死ぬ』といふことが、本能でわかつたからだ。

そして……とてつもない密度と熱量を保つ”それ”は、次の一言で放された。

【発射】

ものすごいスピードで的に向かつた火球は、一瞬で目標を焼失させそのままの勢いで訓練場の四方を囲つていた結界に衝突した。

バリイインというガラスの割れたような音があたりに響き渡る。

今までどんなことがあっても破られることのなかつた、この学校一番の使い手が張った結界が……たつた一発の魔法で破壊された瞬間だつた。

「…………」

静寂に包まれる訓練場。

誰もなにも言わないことに不安を覚えたアリアは、助けを求めるよう相棒の方を見た。

額に手をあて、「あーあ」という風に天を仰ぐキラ。

「（主人様）……多分やりすぎです」

「…………」

周りをみると……誰もが目と口を全力で開いてこちらを凝視している。

（……失敗、したかもしない）

平凡を貫きたいといつせんやかな願いは、結果とともにこもろくも破壊されたようだった。

第9話「大騒ぎ」

「あのー……」

いまだ意識を飛ばしている試験官2人組を振り向く。
しかし、そこまで言つたはいいが、一体どう切り出せばいいのだ
ら?『
『結界を壊してすみませんでした』それとも、『ちょっと加減を間
違えてしまいました』か?

そうして悩んでもると、試験官の男性が茫然とした様子でつぶやいた。

「こ、古代魔法……」

「こだいまほう?」

「こだい……古代、の魔法。

古代といえば、古代ヴィシア式魔術のことかと思つが……先ほど
自分が使つたのは、あくまで普通の魔法のはずだ。

(わけがわからん)

「あ、あ、あなたそれをどこで獲得したのー?」

眼鏡の女性が口をフナワナさせながら尋ねてくる。

「も、森で独学で、ですか?」

「信じられない！ 古代魔法は威力はすごいけど、コントロールが難しい上に魔力消費量が甚大で、ほとんど使い手がないのよ！ それこそ世界でも数人よ！」

「そう、ですか……」

コントロールが難しいもなにも、コントロールをつけるための詠唱をわざわざしたのに、それでもまだ難しいというのか。

しかし、魔力消費量が大きいというのは少し納得だ。
だからすぐに魔力切れになるのか……あくまで現代の基準の話だらうが。

(いや、そもそも古代魔法とはなんなのだ？)

その疑問に答えるように、キラがそつと耳打ちしてきた。

「『主人様、もしかして300年前は普通に使っていた魔法のこと』を、今では“古代魔法”と呼ぶんじゃないですか？」

「……ああ、なるほど。偉いぞキラ」

つまりはそういうことなのだろう。

(……全く時の流れとは無縁だな)

キラの頭を撫でながらそんな現実逃避をしていると、一人の男性がものすごい勢いでこちらに駆けてきた。

白いローブを着ているから、おそらくオカルトの上級クラスの担任の一人なのだろうが……まだ若いその人は、自分の前まで来ると、そのままの勢いでガシッと肩を掴んできた。

地味に痛いのだが……その目がまるで獲物を狙う野生の獣のように戸惑って、結局なにも言えない。

「おらがその気迫に圧倒されてしまうことに気が付いていないのだろう……その人は興奮した面持ちで捲し立ててきた。

「君、今の古代魔法だよね！？　どうやって習得したの！？　習得した時の文献は！？」

「え？　えー、ふ、文献は……住んでいた家が火事になり、その時全て焼失してしまった、です」

勢いに押されておかしな敬語になってしまったが、男性教諭はそれにも気付かず「ああああー！」と黙つて頭を抱えてしまった。

その絶望したような顔を見ていると、多少申し訳なく思えてくる。しかしながら文献？　現代ではそんなに貴重なものなのだろうか。

「あー、すいませんね。彼は古代魔法を研究していました。ほら、クルト君しつかりましたまえ」

ようやく復活したらしい試験官の中年男性がクルドと呼んだ青年の肩をたたいた。

「私は少し学園長に相談してくるよ。バーステン君、後のことば任せたよ」

そう言つて校舎の方へ小走りで駆けて行つた。あの歳で走るのはきついだろうに。

……とこりうか、彼は学園長と言わなかつたか？

（話が大きくなつてゐる）

なんだか嫌な予感がした。

隣のキラは……すでになにかをあきらめた表情をしている。

一方男性試験官の後ろ姿見送つていた若い男性教諭は、ふと何かに気付いたように顎に手をかけた。

「……いや、待てよ。たとえ文献がなくとも、今こゝに生きた知識の持ち主が——」

「さう言つてこゝからをギャロット見てくる。……正直かなり怖い。

「エリザ。状況から察するに、彼女は編入試験を受けに来たんだよな？」

「ええ、そうよ」

それを聞くと同時に、彼はまたすこい勢いで駆けだした。先ほど

の男性試験官が向かつた方向に。

「カイルス先生！ 待つてください僕も行きます！ 必ずやか
を僕のク…スに！」

最後のあたりはよく聞こえなかつたが、どう考へても不吉な想像
しかできない。

(あの人クラ爽にだけは入りたくない)

「え、えーと……じゃあ、気を取り直して、最後の試験に行きまし
ょうか！」

眼鏡の女性試験官が明るい口調で話すものも、もはや自分の心は
晴れ間の見えない曇天の空のよつだつた。

「はあ……最後はなんですか？」

できればこれ以上の心労は避けたいところだ。

「最後は筆記よ。まあ一般常識と基礎的な魔法知識とかだから安心
して」

「…………」

全く安心できなかつた。

最後の最後で超弩級の難関が来た。しかも今の自分に一番足りな

いものだ。

(……おわった)

死刑台に赴くような気持ちでアリアは女性試験官の後をついていく。

だから気が付くことはなかつた。

周りの学生たちがずっと彼女を見つめていたことを……

そしてアリアの姿が見えなくなると同時に、彼らがものすごい勢いで先ほどの感想を語り合つていたことを……

さりには、様々な尾ひれのついた彼女の噂が、すぐに学園中に広まつたことを……

第10話「緊急会議」（前書き）

人の良さをうな試験官の視点です（笑）

第10話「緊急会議」

その日、ハインレンス王立魔法学園のとある一室は、喧騒に包まれていた。

噂を聞きつけ、急遽駆け付けた教師や研究者たちが見守る中、会議室の中央では既に熱い議論を交わされていた。

「だ・か・ら！　うちのクラスに来てもらえればいいんですよ……」

その中でも一層暑苦しく熱弁しているのは、先ほどアリアに詰め寄った男、ジョシュア・クルトだった。

「君のところは上級クラスの6年だろ？　そこへ編入するなんて前代未聞だぞ！？…………ていうかお前ただ研究したいだけだろ！？」

「そうだそうだ！　むしろ研究するならぜひともうちの研究室に来てもらいたい！」

研究者の一人がそう言い、それに同意するように周りのグループが頷いた。

なにせ世界に数人しかいないと言われている古代魔法の使い手が現れたのである。

コントロールが難しく、消費魔力も膨大なため今現在この学園で使える者はいない。その上、文献もほとんどが失われている貴重な魔法だ。

研究者たちが目の色を変えるのも仕方ないだろ？

しかし

(「ここまで大」とになるとは……)

先ほどまで自分が編入試験を担当していた少女のことを思い出す。

最初見た時はその美貌に、その後は魔力量に、極めつけは先ほどの魔法に驚かせられた。

お世辞にも強いとは言えない自分の心臓には、今日一寸で大変負担がかかったものだ。

(……いや、一番大変なのは彼女のほうか)

この光景を見ていると、そう思わずにはいられない。

目の前ではいい年をした大人が……特に血気盛んな研究者たちと教師陣を筆頭に彼女の争奪合戦を繰り広げている。

「むしろ彼女の才能は生徒たちにいい影響を与えるはずだ！」

「古代魔法が使えるレベルなんだぞ！ 今更何を学ぶことがある！」
「だが編入試験を受けに来ている人間に研究対象になつてくれとう方がおかしいだろう！」

「研究対象とは失礼な！ 少し実験に協力してほしいだけだ！」

「同じことだろうが！ これだから冷血漢の研究者は！」

「なんだと、教えることしかできない能なしが……！」

ああでもない、こうでもないと交わされる議論……といつも罵り合いは、一向に収まる気配が感じられなかつた。

どうにかしたいとは思つが、元来争いを好まない自分にはこの間に入つていくような氣概もない。

「皆さん、 静粛に」

そこでついに学園長の鶴の一聲が入る。

学園長——ナ・シンク・ヒーストン。

齡70を超えたながら未だ衰えぬその魔法の腕を持つて、この名門学園の頂点に立つ人物である。その実力は折り紙つきで、昔は国一の宫廷魔術士であったと聞く。

ちなみに件の少女が壊した結界を張ったのも彼女だった。

熱くなっていた両陣営は、その優しい茶色の瞳に鎮められ、恥じたように下を向いた。

「落ち付きなさい、同じ学園に所属する仲間でしょう。さて、彼女の処遇をどうするかについてですが……新しくきた人もいるようですし、まずは皆に正確な情報を提示する必要があるでしょう。カイルス?」

自分の名前が呼ばれ、すぐに何を求められているのかわかった。その場で起立して、ここまでの彼女の情報を伝える。

「はい、名前はアリア・セレステイ。魔力量は……7200」

そこまで言った時点でもたざわめきが広がる。

今現在この学園でその値より大きい数字を持っているのは、目の前にいる学園長と他数人といったところだ。

生徒の中では今5年生に在籍しているこの国の第一王子に続く、2番目の魔力量の持ち主である。

この学園の入学条件として掲げられている魔力量は120以上。上級クラスの平均がおよそ3000程度なのだから、すごい数字だということがわかる。

それこそ宫廷魔法士になれるレベルだ。さすが古代魔法が使えるだけはある、といったところか。

ざわめきが小さくなつたのを見計らつて、報告を続ける。

「また、既に神族の使い魔を連れています。属性は火と闇で、火の方は実技の時に確認しました」

「……しかし、その実技で使つたのは本当に古代魔法だったのかのお？」

自分の正面に座っているこの学園の古株、精霊魔法のエキスパートでもあるパウル老が疑問を投げかけてくる。

ちなみに彼はその小柄な体と水の精霊に好かれる穏やかな性格から、生徒たちから“爺先生”と呼ばれ、慕われている。

「はい、間違いないですよ。詠唱に単語を使つていましたからね。なにより、学園長の張つた結界を壊せるほどの威力をだすのは、古代魔法以外では難しいでしょう」

自分たちの使う魔法は、基本的に文章・詩の形をとつていて。文の中には祈りや願い、もしくは想像の媒介をするものなど、魔法の発動しやすい要素が組み込まれており、今はそれを使うのが一般的である。

そしてそれは、この数百年で魔力量が著しく減つたとされている人々のために、多くの魔法使いたちが研究と実験を繰り返し、工夫

した成果でもあった。

一方で、区切られた単語だけを使う古代魔法というのは、その分を補う想像力や技術力、何より膨大な魔力が必要になつてくる。そのかわりに言葉に込められた純粹な“意思”というのは、簡潔にまとめられた単語のほうが強く、より強力な効果を發揮するといわれているのだ。

なにより、彼女は魔法を出すまでにたつた5つの単語しか使わなかつた……しかも後半の【目標・前方・発射】の3つは魔法の指向性に関するものだったから、実質的には最初の【火炎・凝縮】の2単語で魔法を発動したことになる。

（たしかにすごい才能だよな……）

またざわめきが起きそつな中、今度はそれを遮るよつて「コンコン」というノック音が会議室に響いた。

「失礼します」

なんともいいタイミングで、もう一人の試験官エリザ・リーン・バーステンが入室してきたのだ。

彼女はまだ若いながら優秀な教師見習いで、今日も自分の下で見聞を積んでいた将来の有望株である。

「おお、バーステン君。戻ったか……それで、筆記の方はどうだつた？」

彼女は最初、会議室にいる人の多さに驚いていたようだが、すぐに気を取り直してその眼鏡をクイッと持ち上げた。

「ええ、すうかつたですよ」

「ほひ、やはりそちらも優秀なのか……これはもう免許を『えて、いち早く社会に貢献してもらつた方がいいのではないか?』

今度は、神聖魔法の権威であるグナイド教諭がそう進言する。こちらは神聖魔法の使い手にしては少し性格がキツイことから“怒れる神父”というなんとも不名誉な二つ名を持っていることで有名である。

彼の言葉に同意して数人が頷くが……次に発せられる言葉に大きく期待を裏切られることになった。

「いえ、そちらの意味のすういではないんですよ。ほひ、これ見てください」

そう言って彼女が掲げた紙に……正確にはその右上に書かれた数字に、その場の全員が注目する。

「…………3点?」

「ええ、3点です。本人は、かなり真面目に解いていたようですが……終わった後は魂が飛んでいました」

「…………」

なんともいえない空気が会議室に流れる。

10歳児でも30点はとれるテストで3点。

まさかの結果に、さきほどまで言い争っていた研究者と教師陣がそろって顔を見合させる。

もしこの場に本人がいたら『勝手に見せるな！』と抗議していたことだろうが……あいにくそんなことを気にする人間はここにはいなかつた。

「……そういうえば、森でずっと暮らしていたから知識が偏っている、と紹介状に書かれていましたね」

あの『便宜をはかつてほしい』といつ意味がようやくわかつた気がする。

(それにして予想の斜め上をいく結果だが)

「はい、唯一正解した問題は、古代のことに関するマニアックなものでして……まず普通の人には解けません。その一方で、普通の人なら簡単に解けるような一般常識問題などは全滅しています。」

「……おもしろい子ですね」

隣に座る同僚のフィリス先生がつぶやく。自分も同感だった。

「しかも聞くところによると、我々が使うよつな一般的な魔法は、現時点で一切使えないらしいですよ。それを学ぶためにここへ来たとか」

それを聞いた一同は沈黙する。……おそらく考えてることはずだらう。

学園長があたりを見回したあと、確認を求めるように述べた。

「では、やはり彼女は学園に編入をせん、とにかくでいいですか？」

「というより、現時点ではそれしか道はない。

いくら古代魔法が使えるとはいっても、ここまで知識のない人間に魔法士の免許を与えるのはあまりにも危険すぎる。

彼女が将来なにを目指すにしても、まずは学園で普通の知識と一般的な魔法を習つたほうがいいだらう。

「ですが、そうなると今度はどのクラスに編入をせんかが問題になりますね」

「では、ぜひともうちのクラスに！」

『しめたー』と思つたのか、クルト君が勢いづいてそう進言してきた。

他の教員は出遅れたためか、悔しそうな表情をしてくる。

しかし……それを聞いた学園長は、どこか諭すよつこ、まだ若い教師にこう質問した。

「クルト。彼女はなんのためにこの学園に来たのだと思います？」

「なんのためと詰つとそれは……」

「そり、学ぶためですよ。そしてここはそのための機関です。彼女の学問を、学ぶ意欲を阻害するような要素があつてはいけません。

研究は自重するよ！」

その言葉を聞いた研究者グループが抗議の声をあげようとしたが、有無を言わせないその双眸を前に結局何も言えないようだった。クルト君も思ひどりがあつたりしく、何も言へ返すことはなかつた。

「ところで、カイルス。先ほど紹介状と書つたけど、誰からの紹介なのかしら？」

「はい、上級クラス5年のライラック・ゴア・ディレイドからです」「ほお、あのディレイド公爵家の嫡男からか……」いや下手な扱いはできないねえ」

一ヤ一ヤした表情でそう言つたのは、歴史学を担当しているケイン先生だった。

個人的に少し苦手な相手である。なにがどう苦手とこつわけではないのだが。

「たしかに。これで下手に彼女を研究対象にでもしようものなら、公爵家からどんな抗議があるかわかりませんしの～」

パウル老が同意する。それに頷いた学園長は新しい人物に話をふつた。

「ライラック・ゴア・ディレイド……たしかあなたのクラスでしたね、プラスト？」

「ええ、そうですよ」

「この緊急会議が始まつてから、一言も話さなかつた人物にお鉢が回る。

バッシュ・フラスト…歳はたしか35歳。元宫廷魔法士で、専門は攻撃魔法だつたはずだ。

常に飄々とした態度を崩さず、今も多くの人間に見られながら、堂々と発言をしていく。

「あなたのところは上級クラスの5年生でしたね。やはり知り合いまいた方がやりやすいでしょうし…あなたのところに任せましょうか」

「了解しました学園長」

まあ、妥当な判断だろ？

彼女は下級や中級のクラスから始めるにはもつたいないと思えるほどの実力を持っているし、上級クラスの5年なら頑張ればすぐに授業に追いつくことができるだろう。

そうして、ようやく結論の出たところで緊急会議はお開きになつた。未だ不満がある研究者たちは愚痴をこぼしていたが。

そして、自分も帰ろうと席を立つたその時、例のフラスト先生がこちらへ向かつてやってくる。

「カイルス先生」

珍しく深刻な表情をした彼は、これまた重い口調で自分の名を呼

んだ。

「な、なんだね？」

いつたい何なのだろう……無駄に緊張する。

「ひとつ、どうしてでも聞きたいことがあるのですが」

こんなに真面目な表情をした彼を見るのは初めてだ。
きっとよほど深刻な話なのだろう……」ちらりもそれなりの覚悟で
聞かなければ。

そう思い居住まいを正す。

「あ、ああ。なんだい？」

「そのアリアとこう少女は……」

その真剣な眼差しに、ぐくりと喉が鳴る。額を緊張の汗が伝つ。つい身体が前のめりになってしまふが、それすらも無意識のうちだつた。

「…………美人ですかね？」

ずつこけた。

第10話「緊急会議」（後書き）

気が付いたらパソコンの前で爆睡してました…すこまつせん…
といつあえず連続更新はここで終了です。そして第2章も終了です。

…はい、自分ウソつきました（汗）

次章にやほんとのほんとの学園編スタートです！

ただこれから少し忙しくなるので、今までよつは更新が遅くなるかもしれません…

でも時間が空いたらまた連続投稿しようと画策してますので、気長にお待ちいただければと思つております。

3章 第1話「編入生」（前書き）

* 某貴族のボンボンの視点です。
あと今回はちょっと長いかもしません（汗）

3章 第1話「編入生」

昨日と同じくまだ通い慣れていない教室のドアを開ける。その瞬間耳に飛び込んできたのは、自分が連れてきた少女の話題であつた。

「おい、聞いたか!? 例の編入生うちのクラスに来るらしいぜ! ?」

「まじかよ! ?」

「でも、上級クラスに飛び級で編入なんて……今まで聞いたことがないわ」

「そりやなんたつて古代魔法の使い手だからなあ」

「ああ、昨日先輩がそう言つてた。なんかすげー興奮してたけどな」「へえ。でも貴族ではないんでしょう?」

「らしいよ。でもすんごい美少女なんだつて」

「いやいや、そんな都合のいい話があるかよ」

「きっと先輩の妄想でしょ。初めて見る古代魔法に興奮しそうだったのよ」

教室は朝からこのクラスにやつてくる編入生の噂でいつぱいだった。

それぞれ6年生の先輩から仕入れた情報を交換して、どんな人物なのかも推測している。

その様子を見て、ドアを開けた状態のまま呟く。

「…………暇人ばつかだな」

(まあ、その気持ちもわからなくはない、か)

変化に乏しいこの上級クラスにあらわれる旋風。それもどうやら特大級の存在に、誰もが興味津津のようだ。

それにしても

(予想以上に噂になつてゐるな)

昨日学校が終わった後に、アリアから事の顛末を聞いて、多少の混乱は予想していた。

しかし……これほどとは思わなかつた。

ここに来るまでも廊下のあちこちでこの手の話を聞いたし、既に学校中に広まつているのだろうか。他人事ではあるが心配である。

自分の姿を見つけた同級生のフイリック・ダン・リンメルが机を蹴散らして駆け寄つてくる。

いつもは余裕綽々のくせに、今日に限つてなぜか落ち着きがない。

「おい、ライル！？」編入生つて昨日お前が話していた子だろ！？
ホントにかわいいのか！？」

そして大真面目に、なんともくだらんことを訊いてくる。

……落ち着きがないよく理由がわかつた。そういうえば、こいつは「ういう奴だつた。

しかも昨日した話をちゃんと覚えてやがつたようだ……この女好きのアンテナにひつかつてしまつたらしく、教えたことに多少の後悔を覚える。

「見てのお楽しみだ」

そう言つて自分の席にまでの道を進む。

そこらじゅうに大小様々なグループができるいて、ものすこく通りにくい。人と物の隙間で四苦八苦しながら、自分の言葉を思い返す。

フィリック…… フィルは一応誤魔化せたが、どうせ何分後かにはばれるだろう。アリアの容姿を見た時のこいつの顔が目に浮かぶようである……なんか嫌な気分だ。

そして、ようやく窓際の後ろから3番目の自分の席に着き、いまだ騒がしいクラス内を見回す余裕ができた。

……この上級クラス5年には昨日から入ったばかりだが、ここにいる連中はみんな顔見知りばかりだった。

なにせ一人を除いた全員が貴族であり、それゆえに学校以外の場所……パーティーやらなにやらで顔をあわせることも多い。それに中級以上は極端に人数が減つてくるため、自然と貴族同士が会う確率も高くなる、という理由もある。

(唯一の平民といえば……)

自分の2つ前の席で、灰銀色の髪をした貴族に声をかけられている少女に目を向ける。いまだ見慣れない平民の少女は、どうやらその対応に困っているようだ。

その特異体質から存在だけは知っていたが……上級クラスに来れるほど“増えた”という事実には単純に驚いた。おそらく前例のないことだろう。

……それにしても、我が従姉妹さまはどうにも人の心の機微とい

うものがわかつてないようである。相手が迷惑がつていることに全く気付いてない。

(第一あのやり方じや一生わかりあえないだろ)

灰銀色の髪をした従姉妹は、決して性根の悪い人間ではないのだが……なんというか、誤解を受けやすい性質の持ち主だった。

赤毛の髪を持つ平民の少女に同情するし、なんとかしたいとも思うが、自分は昨日来たばかりの人間である。
そしてなにより女同士のことになると下手に口をだすと、いろいろと面倒くさいのが経験上わかっている。

見た目とは裏腹に、なんとも男らしい少女のことも思い出しが……やはりあれは例外だろう。

だから、もうしばらく様子を見るに決めた。

上級クラス5年の平民が彼女一人であることからわかるように、貴族は総じて魔力が強い傾向にある。
いや強くなるように婚姻統制をしてきたと言つた方が正確か。それは魔力がある程度血筋に影響されるためであり、さらに元の魔力が強ければ強いほど顕著に表れるためもある。

ちらり、と横の席を見る。

現に隣に座つている自分の幼馴染も、数百年前の人々の影響を受けてにもかかわらず、いまだ学年一の魔力量を保持している。

(こしても、いつもどおりの仮面だな)

“氷の美貌”と呼ばれるその麗しい顔は、基本的にいつも不機嫌そうに眉を顰めている。しかし、それもどうやら教室の騒がしさに辟易しているようで、転校生自体にはあまり興味がないようだつた。古代魔法のことを見聞いても変わらない幼馴染の態度に、なぜかホッとする。

才能があると見込まれた貴族の子弟は、大抵、最低入学条件である12歳の時にこの学園に放り込まれる。基本的に生まれた時から魔力量は決まっているし、少し努力さえすれば上級クラスに入ることは確約されているからだ。

そして、今このクラスにいるのは全員が16～18歳までの、いわゆるお年頃の男女であることもその理由の一つである。

(くつだらねえよなあ)

ここにいる奴らの目的は2つ。

卒業して箱をつけることと、将来の結婚相手を探すことだ。貴族の場合、より強い魔力の持ち主と子を成すことはすなわち家の繁栄に直結する。

280年ほど前、王都の大火灾によつて多くの才ある魔法使いが死んだといわれている。

そのせいで大きな魔力量を持つ人間も一気に少なくなり、人の魔力量は世代を追うごとに少なくなつていった。

だから今は魔力の強い魔法使いはどんなところでも重宝されるのだ。貴族社会ならばなおさらである。なにせ家の子どもが宫廷魔法士にでもなれば、数世代は安泰して暮らすことができると言われているほどだ。

そんな理由もあって、幼馴染は女子の間で一番人気の結婚候補者なんだが……もっともその家格が家格なので、誰もあからさまなアプローチはしない。

それでもやはり女子たちが虎視眈々とその隣を狙っているのは、嫌がおうでもわかつてしまふのだろう……いつも不機嫌なのはそのせいだ。

いくら兄の命令といえども、無理やり狼（というより女狐？）の輪の中に放り込まれた幼馴染には、本当に同情する。本来ならこんなところに4年も通うべき存在ではないのだ。

そんな事情を知っているから、とりあえず幼馴染みたいに巨大な魔力を持たなくて良かつたとは思つていて。

……まあ、自分も家柄的には充分いいカモだろうが、今のところそういう意志はないのでなんとかして逃げ切るつもりだ。

しかし

（となるとアリアも大変だな）

なにせ古代魔法が使えるほどの魔力量を持つていて……加えてあの姿だ。ここにいる男どものいい獲物である。

これから訪れる波乱の予感に、不安拭えない。

唯一の救いはアリアが平民であることだらうか。基本貴族は貴族としか結婚しないという慣習がある。

「……それでも例外はつきもの、だよなあ」

古代魔法が使える人間は本当に少ない。『たとえ平民でも』と言
う貴族はいつぱいいるだろ。最悪家柄については、どこか適当な
貴族の養子にしてしまえば解決するのだ。

……だが、そんなことは絶対させたくない。

ここまで連れてきたのは自分の責任だし……なんというか、ほつ
とけないのだ。あの世間知らずな少女を守りたいと思つ心に偽りは
なかつた。

もちろん自分の命を救つてくれた礼もあるが、おそれくそれ以上の
の意味においても。

(…………もしかして、俺は)

「おー朝つぱらから元気だな、お前ら」

いいといひで担任の声がその思考を遮つた。

男はそのまま悠々と壇上まで歩き、おそらくいつもしているよう
に30人ほどの生徒がいる教室内を一望した。

一方生徒たちはそれぞれ席に着くと同時に、いつもとは違つ期待
の目を彼に向ける。

その中でも、さきほどアリアについて熱く語り合つていたうちの
一人が、待ち切れずに右手と声を一緒にあげた。

「せんせー！ 編入生が来るってほんとですか！？」

「なんだ、もう知つてんのか……つまらんな

本当につまらなそうな顔をしてくる。ビリヤリサプライズにした

かつたようだ。

「かわいいですか！？」

続いて、こりないフィルがまたくだらない質問をする。

……こいつは、他の女子の軽蔑したような眼差しに気付いていいのだろうか。

「それは……見てのお楽しみだ」

つまらなそうな顔から一転、なにかいだずらを思いついたような顔に変わった担任、バッシュ・フラストが楽しげに、さきほど自分が言ったのと同じように（もつとも表情だけは正反対に）答える。

この男、以前は宫廷魔法士だったらしいが、今年からこの学園の教師になった……らしい。

自分は昨日初めて会ったのだが、会っていきなり『おう、お前がディレイド家のボンボンか？ 新学年の初っ端から一週間の遅刻なんてなかなかやるじやねえか！』と言われたのには、驚きを通り越して『この人が教師でいいのか？』と心配になつたものだ。

帰りのホームルームの時は、なにやら緊急の会議とやらでいなかつたのだが……自分の第一印象としては、やはり“変人”的の一単語がしつづきた。

もししくは“喰えない男”といったところだろうか。

（てか、平民の上にこの性格で、よくいきなり上級クラスの担任を任せられたもんだと思つたけど、生徒には懐かれてるんだな）

「ふふん。まあ、お前たちの驚く顔が見れればそれでいいか」

そう言つて目を細めたフラスト……先生は、ドアの向こうにいる人物に呼びかける。

「おーい！ 入つてこい！」

教室の入り口に全員が注目する。

そして、ドアから現れたその人物に姿に、全員が息を呑んだ。

(そりや、驚くよな)

自分も最初は驚いた。危機的状況にありながら、その姿を見ただけであらゆる思考が吹っ飛んだものだ。いや、むしろ『ここ天国？』と自分の生を確かめるほどの衝撃だった、と言つべきか。

……それこそ、あの時攻撃されてたら死んでいたかもしれない。だから今のクラスの状況を見ても、ある程度納得できる。現に一昨日から見慣れている自分でさえ、いまだその姿から目が離せないのだ。

つややかな黒髪をなびかせ壇上まであがつた少女は、そこにいる全員の視線をものともせずに、堂々と前を見据えていた。

その顔を正面から見ても、いまだに気持ちが高鳴るばかりで、どこか現実感が感じられない。

極上の黒髪。それに映えるような白い肌。顔のパーツはそれぞれ完璧に配置され、その輝く瞳を引き立たせている。

アメジストのような瞳は……まるで伝説に詠われる聖女のよう、神秘的で強い意志を内包していた。

その不思議な引力を持つ瞳に、誰もが囚われている。

“神のつくりた芸術品”

そう言われば信じてしまいそうなほど、その存在は浮世離れしていたのだ。

「……」

教室は水を打つたようにシンと静まりかえっていた。

ただ一人、自分たちの担任だけは満足したように意地の悪い笑みを浮かべていたのだが……結局誰もそれに気付くことはなかつた。

夢見心地のように空気がまどろむ。

それが永遠に続くとさえ思われたその時。少女から発せられた言葉によつて、ついにその幻想が破られた。

「アリア……セレスティ、だ。属性は火と闇で、特技は魔物狩り、だ。……と、ともかくよろしく頼む」

……内容と口調は勇ましいが、その話し方と田線のさまよい具合から、どこか焦っているのがわかる。

(古風かつ男口調なのは相変わらずだけ……もしかして緊張しているのか?)

教室に入ってきた時の堂々とした姿とは打って変わって、少々表情がかたい。

そういうえばアリアは森で暮らしていたのだし、こいつった大勢の前で話すのは初めてなのかもしれない。それなら納得だ。

(でも、魔物狩りって……冗談を言つてるわけじゃないことはわかるけど……)

多分自分以外の人間には冗談にしか聞こえないだろう。

現に自分もあの勇士を見ていなかつたら、こんなか弱そうな少女が魔物を狩る姿など、とても想像できなかつた。

……だが、そういう了些細な事よりも、自分の与えた家名を名乗つてくれたことが何よりもうれしかつた。

周りの人間に自慢したくなるような……そんな優越感を感じた。自然と唇が笑みの形になるのを止められない。

そして気付けばさきほどの「冗談(?)」のせいもあつて、クラスの雰囲気はかなり和らいだものになつていた。その中でいち早く復活し、いの一一番に馬鹿な質問をしたのは……ある意味予想通りの男だった。

「しつもおおーん! 現在特定のお相手はいますか!?

ファイルのその質問にクラス中の男が喰いつく。かくいう自分もなぜかその一人だった。

(い、いや、これは別にそういう意味じゃなくて！　お、俺はアリアの保護者みたいなもんだし……他の男をよりつかせない義務があるというか！)

自分で意味不明な言い訳をしているのはわかつていたが……まあ、そんなことはどうでもいい。今はアリアのことだ。

「特定の……相手？」

しかし、どうやらその本人はいまいち質問の意味がわかつていな
いようだった。

「あーつまり、パートナーはいるか?ってことだよ」

「ヤニヤしたフラスト先生が、意外にも大人らしい柔らかい表現
を使つて説明する。

どうやらそれに納得したらしいアリアは、固唾を飲んで見守る男
たちの前に、ためらいもなく爆弾を落とした。

「ああ、そういうことか……いるぞ。それがどうかしたか？」

その言葉を聞いた瞬間、教室が阿鼻叫喚の嵐に包まれた。

男子は絶望したように頭を抱え、逆に女子は「キャー」と両手で
頬をおさえて興奮している。本当に女子はこういった話題が好きだ。
もちろんこの場合、自分たちの強力なライバルがすでに戦線を離
脱していることに対する安心もあったのだろうが。

(……いやいやいや、そんなことより一 聞いてないぞ！？)

聞いてないといつよつは、むしろ想像していなかつた。流れに乗つて他の男子と同じ行動をしてしまつたが、そもそも自分はアリアの事情を知つている。

森でずっと暮らしていたアリアに恋人ができるわけがないのだ。

(そう、唯一アリアのそばにいたのは、使い魔のキラだけのようだ
つ・・)

そこまで考えて、ある恐ろしい仮説が、頭の中に浮かんだ。

(いや、だけど、そんな馬鹿なことはあり…………えそうだ)

自分はここまで道中で、あの少女のすさまじい天然ボケぶりをいくつも見てきたのだ。

今までの会話の流れを思い返してみても……うん。パートナー＝相棒＝キラという方程式が成り立つたのは間違になさそうだ。

安堵と呆れの一いつの意味で、そつと溜息をつく。

それにしても、森で隔絶して生きてきたといつよつは、ここまで恐ろしい誤解を生むものなのか。

（今後のアリアの常識教育計画の教訓にしづつ
やう心に誓つた。今回についで……いい男よけになつたから良しとしよう。

そして、そのお騒がせな少女は「……なにやら教室のあちこちで騒いでいる生徒の様子に困惑しているようだった。

おそらく『自分は変なことでも言つたのだろうか?』とか考えているのだろう。

……まあ、間違つてはないが、今回は教えなくともいいだひつ。

苦笑しながら少女の困った顔を眺めていると、不意にその紫の双眸と目があった。自分の顔を見た瞬間、パツと顔をほこりばせたその変化に、また優越感を感じる。

(「ひいづ気持ちをなんていうんだひつ)

優越感……いや、もしかして独占欲か?

彼女の目を見ながらそんなとりとめもないことを考ふる。

だが、もう少しで答えがわかると思った瞬間、今度はアリアの顔が驚愕のものへと変わった。

そして、騒がしい教室内において、他の誰よりも大きな声で「ひづみんだのだ。

「アストエリ!?

……その視線の先を追うと、どうやら自分の横の席の人間に向けられていたようだつた。

自分の幼馴染であり学校一の魔力の持ち主でもある人物のもとへ。

この国的第一人物である、レストニア・クライス・ハインレンスのもとへ。

3章 第1話「編入生」（後書き）

ようやく第3章突入です！

ここからは学園ハートフルストーリーに… できたらいいなあ。

そんなことを言つておきながら、次回は微妙にシリアスな感じになりそうですが（汗）

なんやかんやで最近けちよつと忙しいのですが、最低でも週一のペースは維持していきたいと思つていますので、今後ともどうぞよろしくお願いします。

第2話「失われた恋」（前書き）

遅くなつてすいません！

今回もちょっと長い…かな？

第2話「失われた恋」

「アスト王子ーー？」

(どうしてここに……ーー?)

思わずその席の前まで駆け寄る。

周りがギョッとしたようだが、気にしている余裕はなかった。
そして、至近距離で顔を確認して……ようやく口の間違いに気が付いた。

「あー……」

違う。顔立ちは良く似ているが……それでも違った。
だが冷静になつて考えてみれば、当たり前のことだ。

(私は馬鹿か……この時代に生きているはずがないだひつ)

一体何を期待していたのだひつ。

愚かな自分に思わず苦笑いをこぼしながら、改めて目の前の青年を観察する。

「ここまで来てようやく気付けるほど似ている青年と、アスト王子の決定的な違いは、その瞳にあった。

アスト王子は穏やかな墨色の瞳だったが、この青年のそれは……
どこかで見覚えのある薄い紫色をしていた。

(「の色はあるで……）

その一方で薄紫の田の持ち主は、百面相をする自分をいぶかしげに見ていた。

おそらくかなり怪しい人間に思われてしまつただろう。なんとか取り繕うとした矢先、今度は青年の方から話かけてくる。

「さつきの名前……もしかしてアストレイ国王のことか？ ビリしてそんな呼び方をしているのか知らんが、間違えるな。私は - -」

そこで話が唐突に途切れる。

一体どうしたのかとその顔を見ると…先ほどいぶかしげな田とは違い、今度は何かに驚いた目をしていた。

その視線は、ちょうど机の上に置かれた自分の左手に向いている。

「……っ、おい！ 貴様ちょっと来い！ - -」

しばらく至近距離で“それ”を凝視した青年が、急に私の手を引いて立ち上がる。

「お、おい、レスト！」

隣にいたライルは、乱暴な手つきになにか言おうとしたが……そのままに真剣な表情に、結局なにも言えないようだった。

そういつしている間にも、青年は私を巻き込んでズンズン教室内を進む。掴まれた手が少し痛むが、ここには我慢するしかない。

それにしても……昨日の男性教諭といい、「の男にはろくなやつがない、気がする。

それに

(授業はいいのだろうか……?)

学校生活一日田からなんとなく面倒事に巻き込まれていて感じがしたのは……おそらく気のせいではないかった。

しかし、手をつないで(正確には一方的に掴まれて)教室を出て行く二人は知らなかつた。

その後の教室が、先ほどとは違つた意味で大騒ぎになつたことを

……

次の日には、『H子の一田ぼれ！略奪愛！？』などといった噂が広がることを……

(なんだか昨日から驚かされることばかりだな)

人気のない薄暗い廊下を、手を引かれながら進む。

どこに連れていくつもりかは知らないが、少なくとも移動中は何も話すつもりはないようだ。どうせすることもないのに、青年の背中を眺めながら昨日までのこと振り返える。

あの実技の後に受けた筆記試験は……正直ひどかつた。

道中ライルに一般常識を学んだつもりだったが、所詮は付け焼刃だ。王都のデータースポットが試験問題で出るはずがないし、現代の

魔法知識についてはなおさらである。

3代前の国王の名前やら、基礎魔法の定義やら、私が知っているわけがないだろ？……そう言って問題用紙を黒焦げにしてしまったかった。

……まあ、唯一確信を持つて解けた問題も1つだけあった。

なにせ今から300年前に、自分が関わった事件についてのものだつたのだ。

もちろん手柄は例のごとく騎士団に横取りされたため自分の名はなかつたが、問題は『王国歴148年に太陽の騎士団が魔物の大群と衝突し、勝利を収めた戦いをその地名か【　　】の戦い』といつ『　　』、といったものだつた……答えは【ニルゲントの戦い】だ。

この戦いのことはよく覚えている。

地面にでかいクレーターをつくつたのもそつだが……珍しく手こずつた戦いだつた、というのが何よりの理由だ。

相手の大将は、たしか魔王の側近の……ベリアルといつただろうか。

基本的に、魔物は本能で生きる生物だ。

魔獸の方は特にその傾向が強く、また人型をとれるようになった魔族についても、その知能はせいぜいある程度の会話ができるレベルだといわれている。

魔物は様々なモノを“喰う”おかげで全属性の魔法を使えるが、その代りに聖獣や神族ほど知能は高くない……はずだつた。

だが、あの魔族は違つた。

それまではただ突っ込んでくるだけだつた魔物が、統制された動

きを見せ、あまつさえ罠まで使ってきたのだ。

いつのまにか魔物の大群に囮まれていた時は、さすがに冷やりとした。

そのせいか、最後は力押しでなんとかなつたものの、ベリアルだけは逃してしまったのだ。今思えば負けることはなかつたが、あれは自分にとつて唯一の引き分け試合と言つていいだろ。

燃えるような赤い髪と珊瑚色の瞳を持っていたあの男は、魔族としての力は決して強くはなかつた。

だが、あれで奴自身の力がもう少し強かつたら、ある意味魔王より厄介な存在になつていたかもしちれない……正直一度と戦いたくない相手だ。

もつとも、その数週間後に魔王との決戦があつたから、奴が生きているとは考えにくいが。

多少脱線しながらも遠い過去に思いをはせる。
そうして気付けば、いつのまにか校舎の外に出ていた。

(本当にここまで行くつもりだ?)

いまだ青年に立ち止まる気配はない。仕方がないので回想を続ける。

……絶対落ちたと思ったが、その後学園長と呼ばれているこの学校一の権力者に呼び出された。

そこでライルのクラス、つまり上級クラス5年に入ることを告げられた。しかも特待生のおまけつきときた。

正直疑問がつきないが……あの笑顔で『いいですね?』と訊かれれば『はい』と答えざるえない。もとより私にひとつでもいい話であつたのは事実だ。

その日は急遽用意された部屋に泊り、次の日、つまり今日からは寮暮らし始まる。

そうしてさつきのクラスメイトとの初顔合わせという流れになつたのだが……

ライルと同じクラスなのはうれしいが、正直貴族ばかりのクラスなど、貴族嫌いの自分にとっては地獄のような場所に等しい。だが、それでも編入しようと覚悟を決めたのは、ほかでもないライルの例があつたからだ。

教室に入った直後から、多くの視線を感じた。誰かに見られることは慣れていたので問題ないが……大勢の前で話すとなると話は別だ。

初めての経験に、自分自身ひどく緊張しているのが自覚できた。そして、なんとか普通に自己紹介ができたと思った矢先にあの質問だ。

“特定の相手”というのが最初何を指すのかよくわからなかつたが……担任いわくパートナーのことらしい。それなら簡単だ。きつと現代風の使い魔の呼び方なのだろう。

しかしそうなると、相棒がいると云つただけなのに、どうしてみなれほど驚いていたのだろう?

何かおかしなことでも言つたのだろうか。現代の若者はいまいち理

解できない。

ちなみにキラは今、自由行動中だ。

キラについては、自分の魔力量が高いせいか、常に地界に顕現している使い魔として認識されたらしい。基本的に使い魔は必要な時だけ呼び出し、用が終わったら天界に還すものとされているが、キラはその例外として、学園内での自由が保障された。

今現在一緒に授業は受けられないものの、1ヶ月後ぐらいに上級クラス5年生で使い魔召喚の儀があるらしい、その後は使い魔と一緒に授業を受けることも可能になるらしい。

それまでカラオケで歌う行動してほしい。今度こそ“英語”を学んでもらいたいと想っている。

やるな！」とを勧めてこのつまらぬ仕事へ田舎の地に着いたようだ。

校舎の端に位置する閑散とした空き地…内緒話をするのに、ここほど適した場所はないだろ？

(それで、なにを言われるのやう)

まさか初日から喧嘩を売られる」とはないと思つたが。

(でももし売られたら……買つていいのか?)

これまで貴族に逆らうこともできなかつたが、今は違ひ。自分を縛るものは何もないのだ……よし、いざとなつたらやれり。

だが、そんな自分の決意が使われることはなかつた。」ちらりと振り向いた青年が言つたのは、思いもよらぬ質問だつたのだ。

「貴様に訊きたいことがある。その指輪はどうして手に入れた？」

「指輪？　どい、というか……人にもらつたものだが」

「それは誰だ？」

「誰つて……」

まさか300年前あなたそつくりの顔の人にももらつたとも言えず、言い淀んでしまつ。

「答えられんのか？」

青年の顔が険悪なものへと変わる。

「それは代々の国王が自分の一生の伴侣となる人間、つまり王妃に渡す指輪だ。それぞれの国王には固有の紋章があり、王家の秘匿技術によつて作られている。つまり同じものは二つとしてない、ということだ」

初めて聞く話だ。この指輪にそんな意味があるなんて全く知らなかつた。

(“安物”と言つていたのに)

「しかもその紋章は、かの有名なアストレイ国王のもの。どうして貴様がそれを持っている

アストレイ……国王。

そういうえば先ほども聞いた氣がするが、無事国王になれたようであ心する。彼は少し優しすぎる性格の持ち主だったから、心配していたのだ。

指輪を眺めながら、その柔軟な笑顔を思い出す。

（でも、そんな大事な指輪を私にくれたのは……）

無駄とは知りながらもつい想いをはせるのは、やはり初恋の相手だつたからだろうか。

「……だが、自分の淡い妄想は、次の一言で破られた。

「それを持つていいのは、マリア王妃だけだ」

「……え」

「」の青年は今なんと言った。

「…………マニア……おう、ひ？」

「聖女様と同じ名前のくせに、まさか知らないわけはないだろ？
聖女アリア様の妹君であり、“癒しの王妃”と呼ばれた有名な方だぞ」

聖女アリアの妹というなら間違いないく自分の中マリアのことだ。

マリア王妃……それはつまりマリアとアスト王子が結婚したとい

「ハーリー。

(マコアとアストラ王子がけつこさん?)

頭が真っ白になる。

(自分の妹と……初恋の人と……結婚?)

混乱、安堵、絶望、憧憬、嫉妬、様々な感情が錯綜する。泡のように浮かんではすぐ消えていく“それ”は、どれもが全てはまるよりであり、しかしどれも違つよつた気がした。

つまく頭が回らない。

自分がどうしてここにいるのかさえわからなつていぐ。

そんな私を現実に引き戻したのは、青年の慌てたような声だった。

「お、おこなせ泣く」

そう言われて初めて、己の頬から一筋の滴が垂れているのに気付く。

「涙? ……私は、泣いているのか?」

びつして泣いていのだからつ。

305年前のあの日から、一度も泣くことなどなかつたのに。

「お前、主人様を泣かせるな!」

少し離れたところからキラの声が聞こえた。

もしかして、心配して物陰からずっと付いてくれたのだろうか？ 好きに動けとは言ったが……本当にモノ好きな奴だ。

その存在に安心したせいもあるのだろう。徐々に意識が遠のいていく。

「！」主人様！？

慌てるキラの声を子守唄に、意識は深い闇へと呑まれていった。

第2話「失われた恋」（後書き）

約束の1週間から1日遅れての投稿になります（汗）
申し訳ないです（超汗）

えー、そんなわけでちらほらと300年前とのつながりもできました。

物語はまだまだ続きますが、「あーここにつながるのか！」と思つていただけるようにいろいろ考えながら書くつもりです。
拙い文章で非常に恐縮ですが、皆さんに楽しんで読んでいただける
ようにこれからもがんばります。

第3話「保健室」

「あー……僕…………して。ただ…………して……るー。」

「まあ……おれ……なん……らあ「

朦朧とする意識の中、よく知った声と……もう一人知らない女性の話声が聞こえた。重い瞼を開け、瞬きをして霞んだ視界を調整する。

そこは、知らない部屋だつた。

自分の身体は、白を基調とした部屋の窓際の清潔なベッドに寝かされている。

「…………は?」

無意識のうちにつぶやいた。自問自答の形にはなるが、なんとか医務室のような所だということはわかつっていた。目覚めた瞬間から、薬品のどのようなものの匂いが鼻を突いていたからだ。

(そうか、私は……)

魔力の気配で自分が起きたことを悟つたのだらつ。誰かと話していたらしいキラがこひらこひら駆けよつてくる。

「よかつたあ、田が覚めたんですね!」

「キラ!」

倒れたのだ。

……情けない。それが、最初に出た感想だった。もしここが戦場なら、とつぐに自分の命はなきものとなつていただろう。

意識を失う直前の記憶を呼び起しす。なんとも苦い記憶だつた。本当に、穴があつたら冬眠したい気分だ。

「あの後どうなつたのだろうか。

「キラ……彼は？」

「ご主人様をいじめた男なら、」ここまで案内させた後追い出しましたよ。僕のご主人様を泣かせるなんて1億年早いです！ 今度ヤキを入れてやります！！

意味はよくわからないが、なんとなく熱意と思いやりは伝わつた。彼……そういえばまだ名前すら知らないが、とりあえずあの青年には悪いことをしたと思う。無理やりあそこまで連行されたとはいえ、いきなり話し相手が倒れ、いたく驚愕したことだらう。謝罪を含めて、今度こそちゃんと自己紹介したいと思つた。

だが、今はそれ以上に目の前にいる相棒に謝りたい気分だつた。こちらは感謝の念を込めて、だ。

「キラ、心配をかけたな。すまない」

「ほ、僕……突然倒れたから、また一人になるんじゃないかつて」

涙目になつてゐるキラの言葉を聞き、反省する。かなり心配をか

けてしまったようだ。

「本当に悪かった。これからは『氣をつけ』る」

「ううん、それより大丈夫ですか？」

“何が”とは訊かないキラの優しさにも感謝した。

「……ああ、もう大丈夫だ」

半分は嘘だが、もう半分は本当だった。心を穏やかにして瞑想する。

今は、まだ多少混乱しているが、所詮300年前のことなのだ。騒いだところで何がどうなるというわけでもない。もはや、変えようのない過去の歴史だ。

ただ、この現実を受け入れるのに少し時間がかかるだけ。それだけのことだった。

（それでも、さすがに聖女の話のようにはいかない、な……）

あれには意図された策略があったし、奴らの素行を思い返せば納得もできた。

だが、今回の“それ”は全くの想定外のできことだ。てっきり魔王を封印した後、妹は城から解放されるとばかり思っていたのだが。

（……いや、『妹を任せる』と言つたのは他でもない私だろう）

アスト王子は結婚という形でその約束を守ってくれたのかもしない。

何よりあの2人の性格から考えるに“無理やり”というわけではなかつたはずだ。きっとお互いが納得した上で、そうするに至つたのだろう。

そう思つことにした。

……結局は全てが想像にしか過ぎないのだ。2人が何を思つていたのか、今となつては知るすべがない。

だから……私は、ただ祝福しよう。

(よく考えてみればめでたいことではないか)

大切な人同士が結ばれたのだ。これ以上の祝儀があらうか。

……そして、理性とは裏腹に未だ反抗を続ける自分の淡い感情を封じ込めた。

思考を断ち切り、俯けていた顔をあげてキラを見る。まだ心配げに自分を見守るキラに、何かを話そうとするが、……つましい言葉が見つからない。

「あらあら、起きたのねえ。気分はどう？」

そんな自分を助けるように、キラの後ろからひょっこり顔を出したのは、まだ若い女性だった。

短く切りそろえられた水色の髪に、深い知性を匂わせる紺色の瞳。

25歳前後といったところか。見た目は白衣がよく似合っている知的な女性だ……が、その言動がどうも容姿とすれ違いを演じている。現に今もキラの肩に両手をのせて、こちらを興味津々に眺める様子は子どものようだ。

ちなみにものすごくどうでもいいことだが、その大きな胸がキラの頭にくくこんでいる。

男（オス？） ひとつでは、いわゆる役得といつもののはずだが……キラの顔が微妙にひくついているのは、はたしてうれしいからなのか、それとも嫌がっているのか。いまいち判断がつかない。

それでも

（……何を食べたらあんなに大きくなるのだ？）

別に気にしているわけではないが、まるで爆弾でも入れているのかと疑いたくなるような大きさだ。だが、そこまで考えたうえで、ようやく初対面の相手に随分と失礼な考えを持つていてことに気付いた。

……どうやらいまだ自分の頭は混乱の最中にあるらしい。キラトンと自分を見つめる女性の質問を思い出しつゝ、慌ててそのまま返答をする。

「あ、ああ、もう平氣だ……です。お世話になりました」

慌てすぎて敬語を忘れてしまったが、相手は氣にもせずにニーナリと返してくれる。

「ええ、お世話しました。キラちゃんが血相変えてあなたを運ん

できたのよ。でも、まさかこんなに早く噂の美少女に会えるとは思ってなかつたわ。私つてラッキーねえ」

やはり怜悧な見た目とは裏腹に、全体的にボツンとした雰囲気を醸し出している。おそらく語尾を伸ばすのが癖なのだけれど。

「わ、ですか」

“噂の”ところのが気になつたが、なんだか嫌な予感がしたので、今は訊かないでおく。

「私はこの学校の保健医で、クラリス・リボンについてこのお。ようしくね」

「アリア・セレスティです。こちらよりよろしくお願ひします」

「わ、じゃあアリアちゃん。今日はもう血室で休みなさい。担任には私が言つておくわ」

「し、しかし……」

さすがにそれは、と思い反論する。だが意外と素早い動きで自分の額に指を当てられ、そのままシンッと頭を押された。

「もう一回は校ではつきのわかるけど、無理は禁物よ。めつ」

「は、はあ」

……なんだか今まで出会つたことのないタイプだ。非常に対応に困

る。

(セレ、どう攻略したものか)

はじかれた額に手を当てて考えていると、不意に保健室のドアがバンッとすごい勢いで開かれた。

「アリア！ 倒れた、って……聞い、たぞ？ も、う、大丈夫、な
のか？」

血相を変えたライルが、勢いそのまま入室してきた。しかし既に起き上がっている私の姿を見て、途中から疑問形になる。

「ここまで走ってきたのだらつか、かなり息がきれている。

「ありあ、いじとじりに王子様のお迎えねえ。ふふ、もっとも本物じゃないけどお。じゃあ、彼女をお部屋まで送つてちょーだいね、偽王子様。アリアちゃん、今日はもう絶対安静よお。キラちゃんもまたいらっしゃあい」

「偽王子って、そりゃないよ、リボン先生。……まあいつか。それでは参りましょうか姫。ついでに従者も」

ズーンと落ち込んだと思つたら、すぐにケロッとおどけるライルについ笑つてしまつ。姫呼ばわりなど今の自分には皮肉でしかないが、その悪意のない様にいつのまにか救われている。

ちなみに従者呼ばわりされたキラは『僕が先にいたんだから、僕が王子様だ!』とよくわからない対抗心を燃やしていたが、『そつか一残念だな。王子様にはもうお菓子なんて庶民的な物、恐れ多く

てやれないなー』とこう言葉に『僕、従者がいい!』と即答して
た。

……もはや毎回面倒の光景になつてゐる気がする。

第3話「保健室」（後書き）

またもやギリギリ投稿です（汗）
でも今回はきりのいいところで切つたので、明日あたりまた1話投
稿すると思います。

リボン先生は、人によつては多少イラつとするキャラかもしませ
んね。

ちなみに私も書いてちょっとイラつとしました（笑）
でもやっぱり好きなんですよねー。不思議なものです。

第4話「孫」

「リボン先生は……その、変わった女性だな」

保健室を出た後、先手を打つて、半歩先を歩くライルに話しかけた。

できれば“あの”話題には触れてほしくなかつた。

「もうなんだよ。見た目は知的美人なのに、中身はあれだろ？ でも、あのギャップがまた男子に人気でさー。いわゆる“ギャップ萌え”ってやつ?」

(“あやつふもえ”……ああいうのを現代ではそう表現するのか)

彼女の言動を思い出し、新しく増えた語彙をそれに当てはめた。なんだかひとつ賢くなつた気分だ。

そこで油断してしまつたのだろう。次の質問にはすぐに答えることができなかつた。

「……何があつたのか聞いていいか？」

ふんふん頷いている自分の顔を、心配そうな顔をしたライルが覗き込んできた。

やはりそう簡単に、物事はうまく進んでくれないようだ。

「……たいしたこと、ではなかつた」

「“たいしたこと”じゃないのに、倒れたのかよ?」

すぐに走り返してくるライルの表情は、ひどく真剣だ。

「これは正攻法では、切り抜けられそうにない。」

どちらにせよ眞実は言えるわけがないので、無理やり話を変えることにある。

「本当にたいしたことではなかつたんだ。そ、それより授業に戻らないか？ リボン先生にはああ言われたが、今日が初日なのにいきなり授業を休むのはさすがに気が咎める」

自分でも下手くそな方向転換だとは思つたが、仕方ない。これが限界だった。

一方ライルは不満げに私を見つめるが、結局それ以上追及することはなかつた。

おそらくさきほどからキラが『なにも聞くな』といつぱりライルを睨みつけているせいもあるのだろう。

「いや、むしろ今日はもう教室には戻らない方がいい。今教室は大混乱の真つただ中だし」

「大混乱？ なぜだ？」

「そりや、あの堅物で知られる男が転校生を連れ出したあげく、戻ってきたときには、『倒れたから保健室に置いてきた』なんて言つたんだからな。大混乱にもなるよ」

「置いてきたんじゃなくて、僕が追い出したの！」

キラが抗議するが、問題はそこではない気がする。

なんだかいろいろと誤解が生まれそうな要素が、あひらひらひらひら
散らばっているよくな……

それについて聞くうと口を開くが、先にライルの口から発せられた
内容は、さらなる疑問を提示するものだつた。

「やうなのか？ まあ、教室に帰ってきたレストの奴もすぐに『王
宮に行つてくる』って言つて早退したけどな」

「レスト？ それに王宮へ？」

「ああ、あいつ名乗つてすらいなかつたのか。あいつはレストシア・
クライス・ハインレンス。この国の第一王子だよ」

「ええ、あいつが！？ むう、確かにあの王子にも似て、ふがあー…

慌ててキラの口を手で押さえる。危なかつた。

授業中のせいいか人気のない廊下で、その声は思いのほか響いてい
た。

だが、キラが必要以上に騒いでくれたおかげで、逆に私自身が冷
静になれた点は良かつたと思つ。

(王子……だからあの瞳と容姿なのか)

いろいろな意味で納得する、と同時に引導を渡された気分だつた。

アスト王子とそつくりの青年……レストシア王子。

指輪のことを知っていたのも含めて、どうやらあの青年が彼と妹
の血筋を受け継いでるのは、間違いないようだつた。

人間には、魔族の赤い瞳や神族の蒼い瞳のように決まった色の傾向はない。

だが、魔力の強さと瞳の色といつのはやはり関係があるので、魔力の強い者の色はその子孫にも遺伝する、というのが魔法使いの人間の常識でもあった。

マリアは私ほどではないにしろ、巨大な魔力の持ち主だった。それこそ長い時の中で血が薄められていたとしても、数百年はそのままの魔力の遺伝が続くほどだ。

レストシア王子の滅多にない薄紫の瞳は、間違いなくマリアのそれと同じ輝きを持っていたし、今思い返せば、魔力の質も自分と似ていたかもしだれない。

(……つまり、あの青年は私と遠い親戚関係になるということ、か
?)

つい頭を抱えくなつた。

幸か不幸か両手がふさがつていたため実行はしなかつたが。

自分の子孫(?)と一緒に授業を受ける。

こんなおかしな体験をするのは、世界広いといえどもおやじく自分でだけだろう。

キラの途中で途切れた言葉にライルは首をかしげた。

「似て?……ああ、アストレイ国王の若かりし頃の顔に似ているつてやつか? それあいつのコンプレックスでさ。ほら、そこら中に肖像画があいてあるだろ?」

「いや、自分とは違ひ、アスト王子の肖像画はぱちり残っているらしい。

」の分ならおやぢくマリアのそれもたくさんあるのだろう。

身内としては、どう反應すればいいのかわからない複雑な気分になりそうだ。

それにしても、出会ったばかりの時、聖女と同じ名を名乗った私に『あんたも大変だな』と言つてきただ……その“も”については彼のことだったのか。一つ謎が解けた。

300年前の国王とそっくりな外見を持つているレストシア王子。そして聖女と同じ瞳と名を持つ私は、いや本来の順番的には私と同じ瞳と名を持つ聖女か。

ともかくお互に苦労しているところでは一緒だ。少し親近感が湧いた。

「私はまだその肖像画を見たことがないから、わからないが……彼も苦労しているのだな」

そう言つて、今一度先ほどの青年の姿を脳裏に呼び起しす。

確かに顔は似ていたが、その身にまとう空氣はずいぶん違つていた……ような気がする。アスト王子は常に柔らかく、親しみやすい雰囲気を出していたが、あの青年のそれは冷冽な刃物のようだつた。

それに髪についても……金髪は共通していたが、レストシア王子の方が若干明るい印象を受けた。

だがそのどちらも、肖像画においてはたいした違いではないのだ

うづ。

「そうそう。その上、学校一の魔力の持ち主だからなー。第一王子なのにこんな学校に通っているのもそれなりの理由があつてさ。まあ、いつも不機嫌だけど悪い奴じゃないんだよ。だから、その……」

「ああ、わかつている。私も別に彼が嫌いなわけではないんだ。ただ少し、驚くことがあつただけだ。悪いのは彼じやない」

「もつとも僕は許しませんけどね！ 今度会つたらお菓子を要求してやります！」

「…………おい、ヤキを入れるんじやなかつたのか？」

「いつのまにかやることが違くなつていて」

おそりへへ、『王子だからヤキを入れない』ではなくて、『王子だからいつぱいお菓子を請求しても大丈夫だらつ』といつ考ふなのだろ？

（……やはり私は菓子以下なのか？）

「いつか真面目に問い合わせみたいが、もし『そうですー』と言いい切られた時の衝撃を考えると……やはり怖くて聞けない」

そんな自分とキラの小声で交わされた切ないやりとりは、聞こえなかつたのか……ライルは話を続けた。

「やうなのか？ なら良かつた。あいつも結構誤解されやすい奴でさ。…………ま、何があつたかについては言いたくなつたら言つてくれ。寮に行くんだる？ 案内するよ。どうせ今の教室に戻つても質問攻めになるだけだしな」

「ああ、ありがと。……だがライルはいいのか？」

「いいの、いいの。どうせ今日はたいした授業入ってないしな」

そして手をひらひらさせて、先を歩く……と思つたら、不意にいたずらっ子のような顔をしてこちらを振り向いた。

「それにほり、サボる口実ができた」

そう言って太陽のように朗らかに笑うライルは……とてもまぶしく心強い存在だった。

第4話「子孫」（後書き）

話が進まない（涙）

次回あたりからはサクサク進めていきたいと思つています。

ちなみに今さらですけど、ライルは天然のタラシです。

そしてアリアは悪意には超敏感だけど、好意には超鈍感という損な習性をしています。

そんな2人なんで、これからもきっとこんな感じでまつたりといふことになると思います。

第5話「入寮」

そこは、想像の斜め上……から垂直降下して地面にめり込んだような場所だった。

もちろん悪い意味で。

「まさか……ここが？」

「そのまさかだ」

「へ、嘘でしょ! へー、ほんなどひに住めてこいつの?！」

慈悲のかけらもないライルの言葉にキラが抗議の悲鳴をあげる。心なしかその顔は青ざめている。私の着る黒いローブの端っこを掴んでぶるぶる震える黒髪の少年の姿は……なんだかマニアックな需要がありそうだった。

「てか俺、実際住んでるんだけど……まあ、最初は皆そういう反応するもんぞ」

そういうライルは自分たちの反応を予想していたのか、至極平静に言葉を返してくれる。

「しかし、本当に住めるのか? なんといつか……今にも崩れそうな僕さなのだが」

そう、寮と教えられた建物は、ボロかつた。それも半端ないほどに。たしかに数百人単位で人が住めるほどには大きいが、はたして上の階は住む人間の体重に耐えられるのか、という疑問が湧くほど

だ。

「その点は大丈夫。魔法で補強してあるらしい。それに案外中の方は綺麗なんだぜ？」

「」の外観でそう言われても、全く説得力はない。良きいえば風情ある、悪くいえばボロイ建物の外側は、何かの植物のツタで覆われており、その裏手には山林が広がっている。それらが一層の不気味さの演出に一役買っているのだ。

（……といふか魔法で補強するくらいなら、いつそ立て直せばいいのでは？）

なにかこだわりがあるのだろうか？

おそらく築数百年と推測されるその建物は、確かにボロイ中にもどこか莊厳な雰囲気が感じられるが。

「そ、そ、そんなこと言つたって……」主人様あ、ここ絶対なにか出ますよー？」

「……キラ、お前闇属性のくせして幽靈を怖がつてどうあるんだ？」

つい呆れてしまつ。

「そ、そんなの関係ないですよー！」

「……まあ、出るのは本当じいけどな」

ぼそつと呟いたライルの言葉に2人仲良く動きを止める。

その中でもキラは壊れた首ふり人形のように、ぎこちない動作で

ライルを振り向いた。

「え？ なにか言った？ 気のせいだよね。 ですよね、ご主人様？」

「ライル、何が出るんだ？」

キラのささやかな抵抗も空しく、魔族を相手に戦つてきた私は“それ”に対する必要以上の恐怖もない。

『襲つてきたら退治すればいい』と二つ程度の認識のもと、一氣

に核心に迫る

「そりや決まつてゐるだろ？」ゆづ「あああああー何も聞こえな
いいいいーーーーー！」

耳を押さえて絶叫したキラは、自分のロープの中に頭を突っ込んできた。“頭隠して尻隠さず”とは言つが……まさにそう形容するにふさわしい状態だ。

(いじまで怖がりだったとは……)

新たな発見といえばいいのか。

そう言えば300年前も夜は必ず私の傍で寝ていたし、今でもそうだ。もしかしたら、もともとそういう状況は苦手なのかも知れな

だとすれば、あの洞窟での日々はキラひとつ苦痛でしかなかつたはずなのに。

それでも気の遠くなるような年月を傍で過ごしてくれていたのだ。ホントに感謝してもしきれない。ロープの中にあるその頭を慈し

むように撫でる。

一方のライルは、「なんだ、キラは怖がりなのか？ そりや大変だなあ」と言つてゐるが……一ヤニヤ笑うその顔は絶対に大変だとは思つていない。

「そんなに寮に入るのが嫌なら、外に犬小屋でも作つてもらつか？」

その言葉は少年の逆鱗に触れたようだつた。ブチッと何かが切れた音がしたのは……氣のせいではないようだつた。

ガバリと私のローブから顔を出したキラはさきほどとは一転して激怒していた。

怒りのせいか顔を紅潮させ、そのまま天に向かつて吠える。

「い、犬？！ ぼ、ぼ、僕は狼だああああ！」

「うわ！ な、なんだこれ！？」

ライルの影がゆらりとその形状を変える。

生き物のようにうごめくそれは、そのまま素早く伸びて本体であるライル自身の身体を拘束した。

黒い影にぐるぐる巻きにされた彼は大きな音をたてて派手に地面に転がる。

犬呼ばわりによつぽど腹が立つたのか、どうやらライルの影に魔法をかけたようだ。

(人の影に干渉……だからあんなにタイミングがよかつたのか)

影の拘束から逃れようと、ジタバタもがいてゐるライルを観察し

て、ようやく先ほどのことに納得がいった。

「キラ、お前私の影にも細工したるの？」

そう言つた途端、それまで激情に駆られていたキラの気配が一気に静かなもの……というよりは、どこか脅えたものへと変化した。

そして一瞬びくりとした後、これも毎度お馴染のもじもじを披露したその姿を見て、ますます確信を強める。

ある意味賭けのよくな推測だったのだが、この反応を見る限り、自分の勘は外れてなかつたようだ。

「あの時も私の影に干渉して会話を聞いていたんだな？」

ずっと不思議だつた。

自分が倒れた時、近くにキラの気配は感じられなかつた。

それにも関わらず、あの登場の仕方だ。あのタイミングの良さは、魔法を使って会話を聞いていたからに違ひない。

『「主人様を泣かせるな』と言つてしたことから、おそらく視界もつなげたのだろう。

いや、むしろ“その”光景を見て駆け付けたといつといつか。

「あ、あの……『めんなさい』」

下を向いてシコント謝る、その殊勝な態度に苦笑する。

獣型だったら、きっとその耳と尻尾も同じように下向きに頃垂れていったことだろう。

「別に怒つてはいないよ。心配してくれたんだ？」

いつも感心したものだ。

他人の影に干渉する……それだけでも闇属性の魔法としては、十分玄人の域にはいる。

その上、私にかけたのは、対象の影に自分の五感…」この場合は目や耳の感覚器官をつなげる魔法である。

隠密活動などで使用されるそれは、闇の属性の中でもかなりの難易度を誇る上級者向けのものだ。

それにしても

(……こつこまにかけられたのだろうか?)

もともとその特性から相手に悟られにくいものではあるが、それでも魔法の気配に敏感な自分に気付かれずにかけるとは……称賛に値する。

今回の魔法も無詠唱で魔法を発動させたことから、その熟練度が知れた。おそらく闇属性の神族の中でもトップクラスだと考えいいはずだ。

(本当に成長したのだな)

己の主人がそんなことを考えているとはみじんも想像していない少年は、未だ心配そうに上田づかいでこちらを見ている。

あまりおおっぴらに褒めると調子にのりそうだから、とりあえずは優しい口調で注意事項を言つことにした。

「まあ、別にお前に聞かれて困る話なんてないしな。ただ、今度からはかかる前に一言いうこと。いいか?」

「はーい」

今度こそ安心したように答えたキラの声とともに、その場には和

やかな雰囲気が流れる。

しかし、次に聞こえた声にある存在を思い出すことになった。

「……和やかに話しているところ悪いんだけどさ、そろそろ解放してくんね？ この放置プレーはきついわ」

自分の影に捕まり地面に転がる、という間抜けな状態のまま放置されたライルの声は切実さに満ちていた。

(“ほうちぶれー”……ふむ、また新しい言葉を覚えた)

そこには、ようやく解放されてぐつたりしているライルと、どこか満足そうな顔をしたアリアがいた。

寮の中はライルが言っていたとおり、外観を裏切るきれいなものだった。それを自分の目で確認した相棒は、少し安心したようだ。掃除は隅々まで行き届いていて、300年前の王宮にどこか似ている気がする。

もしかしたら、この寮が建てられたのは私のいた時代に近かったのかもしれない。

ライルの案内で共有スペースを見学した後、初めて自分たちに割り当てられた部屋を訪れてみる。

「やけに広くないか？」

案内された部屋の広さに驚く。王宮にあつた自分の部屋よりも数倍広く、その内装も豪華だ。

大きなベッドが一つと、その隣に簡易ベッドが置かれている。床

には高級そうなじゅうたんが敷かれ、机や椅子、たんすに鏡といった家具は既に配置されていた。しまいには大きな窓とその先にあるバルコニーだ。

「室内でありながら走ることができるそつな所は、とても一寮生に『えられる部屋とは思えない。』

「アリアはキラと二人分だしな。それに特待生もあるから、貴族用の広い部屋が用意されたんだろ。ちなみに、この古めかしい内装で好みが分かれるところなんだけど……ビーヴー！」

「いや、むしろ君の方が落ち着くよ」

古風、とおそらく現代では言われるのだろうか。
それでも自分にとつては身近な内装があり、懐かしくも落ち着く空気がそこにはあった。

「とにかく、なんでベッドが二つなの？」

キラが不思議そうに首をかしげるが、心なしかその気配はひんやりしてくる。

「そりゃ俺が頼んだんだよ。キラ……お前いくら使い魔だからって、アリアと同じベッドは駄目だろ？ とこいつが俺は許さんぞ！」

「なんでライルの許可が必要なのぞ…？」

先ほどのことに警戒したのだろう、かみつくキラにライルはファイティングポーズをとつて身構えた。なんとも大げさな。

「ライル、私は別に一緒にまわないのでが」

どうせキラだ。さすがに寝首を搔かれる心配はしなくていい、と思つ。

「いや、ダメだ！ 本来なら性別の違う奴同士が、同じ部屋で寝るのも問題なんだぞ！ それに今までがどうか知らないけど……ここではこれが“常識”なの！」

“常識”と言われてしまえば、納得せざるを得ない。やはり常識知らずな自覚はあったので、ここには彼の言葉におとなしく従うこととした。

「むう。キラ、ここでは別々に寝るのが“常識”的だ。さうするか？」

「『主人様、切り替えが早すぎです』。」

「ふ、主人の意向に従うのが、従者の役目さ。諦めろ、キラ。あつ、ちなみに俺は2つ隣の部屋だから、何かあつたらすぐに来いよ」

「何か？ まあ、わかつた」

ちらりと隣の様子を眺めながら頷く。
おそらくライルの言葉のせいだろうが……なぜかさつきからキラが殺氣を放つている。

「ついでに向かいはレストの部屋だな。しつちは別に行かないからな！」

「いや、特に用事もないだろ？ が……王子も寮に住んでいるのか？」

「ああ、あいつ王宮が嫌いらしいってね。……なのこいきなり『王宮に行つてくる』って言ったもんだから、驚いたよ。ホント向しに行つたんだか」

「…………さあな」

なんとなく予想はできだが、やはり口に出すこととなかった。いや、その勇気がなかつた……とこうべきか。

ベッドで不貞寝を始めたキラを見ながら、アリアは自嘲てくれるのだった。

第5話「入寮」（後書き）

サクサク進んだ…のでしょうか？

なんだか相変わらず脱線ばかりな気がしますが（汗）

次は王子様視点が入りまーす。

噂の？第一王子もちらりと登場予定ですので、こいつに期待。

第6話「混乱」（前書き）

* 今回は予定どおり、レストシア視点です。
ただ予定どおりじゃないのは、王子視点がもう一話続くところと
です（汗）

第6話「混乱」

その涙は今まで見てきたどんなものより美しく、そして儂かいものだった。

王家の色であり、禁色でもある紫。自分のよりもさらに深みのあるその瞳から流れた滴は、まるで宝石のように輝きながら、触れれば壊れてしまいそうな……相反する印象をもたらした。

……だが、その涙の理由がどうしてもわからない。

（確かにさきほどは、ついきつこ口調になってしまったが……）

そんな思考の中で、自分が柄にもなく動搖しているのがわかつてしまつた。

幼いころから感情をコントロールする癖をつけてきたはずなのに、この体たらくなんだろうか。

しかし、自己嫌悪に陥る自分の前で、その涙の源泉はゆっくりと身体を傾けていく。

「お、おーーー」

草の地面に倒れこむ前に、慌ててその華奢な身体を受けとめようとすると、不意に黒い闇が視界を覆つた。

「触るな」

その冷徹な声に反応して顔を向けると、少女自身の影が伸びてその身体を支えている光景と、傍に寄り添う少年の姿が目に映つた。

底の見えない闇はある者には恐怖を、また違つ者には安らぎを与える。

この場合は言つまでもない。この影は、自分に対しでは明らかに敵対心を持っているが、その一方では少女をそっと包み込み誰にも触らせないように守護しているのがわかつた。

「お前が触つていい人じゃない」

にわかには信じがたいが、今までの流れから一連の出来事は、この辛辣な言葉を吐く少年の仕業に違いないようだ。

先ほど急に現れた紅顔の美少年は、貴族の女性に見せればそれこそ家で囲いたくなる姿勢をしていた。

だが、自分の視線に侮られていると思ったのか……その一見ひ弱そうな体躯から、今まで浴びたことのないすさまじい殺気が放たれる。

「つく」

その急激な圧迫感に、身震いすると同時に戦慄を覚えた。
これまでの人生の中で、ここまで直接的に命の危機を感じたことがあつただろうか。

（なぜ護衛が来ない？）

実際は護衛という名の監視だったが、それでもここまであからさまな殺気が放たれているのに、普通出てこないはずがない。

兄の命令でつきまとっている護衛は、いつもは煩わしいとしか思つていながら、今に限つては違つ。これは自分一人で太刀打ちすべき相手ではない。本能がそう告げている。

(こんな肝心な時に)

「ああ、周りにいた人たちなら眠つてもらつたよ。だから助けを求めても無駄」

「な……！？」

今のは真実だとすれば、いつの間にやつたかは知らないが、かなりの手練れだ。

王家の護衛を簡単に倒すほどの腕……正直勝てる気がしない。いくら魔力が強くても、まだ学生の身である自分には過ぎた相手だ。

濡れたような黒髪、蒼い瞳からは見る者を極寒へと誘う波動が放たれている。まるで死神のようなその姿に、瞬間死を覚悟する。

だがそんな自分の覚悟とは裏腹に、少年はそのまま倒れた彼女に歩み寄り、壊れ物を扱うような手つきでそつとその背中と膝に手をまわした。

そのまま小さな外見からは想像もつかないほど、軽々とその身体を持ちあげる。その顔は自分がけの宝物を手に入れた子どものようだった。

どうやら田的はその少女だけのようだ。

「……貴様は、誰だ？」

「答える義理はないよ。そんなことより医務室に案内しろ」

「まだ緊張はとれないものの、自分に危害を加える気はない様子

に多少安心したせいもあるのだろう。

こちらを振り向くと同時に戻る不機嫌な顔と有無を言わせないその眼差しに、つい苦笑いがこぼれてしまった。

王子である自分にここまで傲岸不遜な態度をとるものが、これまでいただろうか。だが、それがいつそ愉快でもあった。

眉根を寄せている少年はやはり変わらず冷徹な眼差しでこちらを睨みつけてくる。

「聞こえなかつたのか？　お前のせいでの主人様は倒れたんだから、それくらいの責任はとつてもらつ」

(ご主人様：使い魔か)

そう言えば先ほど現れた時もそう言つていた。

神族の使い魔を連れているという噂は聞いていた……が、この執着は尋常じゃない。

自分自身今まで多くの使い魔達を見てきたが、ここまで深い絆を持つ使い魔と契約者は初めてだ。

契約というのは本来もつと淡白なものなのだ。

使い魔は魔力を、契約者は使い魔の力を、それを対価交換するだけの関係。それが一般的な理解である。

王家に引き継がれている自分の使い魔はちょっと変わっているが、普通使い魔というのは、呼んだ時だけ地界に顯現し、用事が終わればすぐに天界に還るものだ。

主の命令には従うが、それ以上のことはしない。それが使い魔という存在のはずだった。

だがこの一人は……いや、この使い魔は主の命令なしに自主的にその身を守っている。

その扱いもまるで恋人に対するそれのような。

「ねえ

少年の声が1トーン下がったのを聞き、そこで思考を中断した。
これ以上怒らせると本当に命が危うい状況になりそうだ。

「……ついて来い」

先頭をきつて、そのまま歩き出す。少年も人一人抱えているとは思えないしつかりとした足取りで後を追ってきた。
お互い何も話さず、ただ靴音と少女のかすかな寝息だけがその場に響いた。

「…………? ジゃあ、あんたはもついいや。消えて」

使い魔の少年はそのまま少女と共に保健室の中に入つていった。
相変わらずの辛辣な言葉と絶対零度の視線は、自分に一切的好感がないことを示していた。

それは、もはや人を見る目でもなかつた。物だ。

……だが、それに気をもんでいていても仕方ない。

一旦教室に戻るために、踵を返す。

その背後では、容姿と性格のギャップがひどい保健医の「まあまあ、美少年に美少女じゃない」という、医者にあるまじき第一声が聞こえた。

第6話「混乱」（後書き）

てなわけで、「めんなさい！」

第一王子は次で出でてきます。

でも今「割くらいは書けてるので、おそれらく明日までにはあげれるかと思います。

あとは、キラのギャップに驚いてるかもしませんが… 一応人間嫌いという設定もあったということで（笑）

第7話「王女」（前書き）

* 6話にひき続き、王子視点になります。

第7話「王宮」

ドアを開けると同時にその場の全員の視線が突き刺さった。

その眼差しに含まれる好奇心と疑惑の感情を完全に無視し、そのまま教室の中に入れる。

同じく自分に気付いたらしく、教科書を片手に黒板に何かを書いていた深緑の髪の男は、一ひきらを振り返りながら軽い調子で訊いてくる。

「お、よつやく戻ってきたのか。うん？ 転校生はどうした？」

そういえば一限田はまちゅうじ担任フラストの攻撃魔法の授業だった。

その人を喰つたような表情は一見軽薄そうな印象をもたらすが、自分は王宮でのこの男の働きを知っている。

鬼神のとき強さから諸外国では恐れられていた……我が国の守護神といつてもいい存在だった。

だが、ある事件を契機に田らその地位を捨て、教職の道を選んだ変わり者でもある。

それでもさすがに……陽気に自分を見つめる藍の田には、どこか鋭い刃物のような視線が隠されていた。

この男もまた自分が王子だという理由で、特別扱いはしない者だが……今はそれが苦々しい。

どうせ隠しておけるものでもないので、端的にあつたことの事実だけを述べることにする。

「……倒れたから医務室に置いてきた」

その言葉を言つた時の、クラスの反応は顕著だった。教室中が一気に喧騒に包まる。

「この奴らは妄想力というか……ともかくそういうのがすさまじい。結婚相手を探すという目的もあるせいだろ。男女間の出来事にやたらと反応し、恋愛事に結びつけたがるのだ。

「ま、まさか……」

「王子だから相手も断れなかつたんじゃ」

「えー、でもあのレストシア様よ」

「いや、でも倒れるつて……」

様々な憶測が飛び交う教室を、軽蔑するように眺める……と同時に少し反省する。

いくら王子に関わることだからといつても、いきなり教室から連れ出されるのはやりすぎた。

明日からの彼女の学校生活に支障が出なければいいのだが……

女嫌いの自分がそんなことを考へることは滅多にないのだが、さすがに今田会つたばかりの人間が自分のせいであらぬ誤解を受けるのは良心が痛む。

(それに……)

だがその思考を途中で妨げたのは、自分の幼馴染だつた。

「レスト、お前何をしたんだ！？」

その男……ライルは自分の胸元を乱暴に掴みながら、至近距離で

怒鳴ってきた。

いつもは穏やかな若草色の瞳が今は、怒りに燃えている。

「何も、していない」

その姿に内心驚きながら、表面上は冷静に返す。首が締まつて苦しいのはこの際気にはしない。

幼馴染という関係で小さい頃からお互いを知っているが、ここまで真剣に怒っている顔を見るのは初めてだつた。気付けばいつの間にか教室も静かになつていて。

チラリと担任の方を見るが、どうやら止める気はないようだ。相変わらずおもしろそうな顔をして、腕を組みながら傍観を決め込んでいる。

保健医といい……本当にこの学園の教諭は、実力はあっても性格はろくな奴がない。

教師にあるまじきその姿に仕事をしようと文句も言いたくなつたが、今はその余裕もないようだ。

目の前には怒り狂う幼馴染の顔がある。

「何もつて……じゃあ、何があつたんだよ！？」

（そんなことは私が知りたい）

言葉にはならない心の声を吐きながら、未だ激昂するファイルの手を振りほどく。

どう考へてもこの状態のライルにまともな話が通じるとは思えないと、なによりまともな話を言える気もしなかつた。

そうして説明することをあっけなく放棄し、自分の机の前まで歩いてカバンを拾う。

「何もなかつた。王宮に行つてくる」

はたして“何も”しないと言えるかは自分自身よくわからないなかつたが…自分の言葉を聞いて倒れたのは確かだ。

その中のなにが原因かはわからないが、少なくとも今の自分にはできることがある。

王家の者としての責任と、少女に対するかすかな贖罪の両方が動く理由になつた。

未だ何か言いたそうなライルと、「おーい明日はちゃんと来いよ」と少しずれることを言ひ担任の声を背後に、ざわめく教室を去つた。

「誰もいない、な」

人気のない、豪華なシャンデリアに国宝級の調度品が並ぶ廊下を見ていると、それだけで帰りたい気分になつてくる。

王宮は相も変わらず胡散臭い場所だつた。悪鬼巣窟、魑魅魍魎の巣。まさにそう呼ぶにふさわしい。

城の外見は真っ白でもその中身は真っ黒だ。

己の欲しか考えない愚か者どもが跋扈する場所。

そんな場所で生まれ育つた自分の性格がひねくれるのも仕方ない。

足早に廊下を進むが……急に嫌な予感がした。

これでも貴族の古狸たちに見つかれないよう、抜け道を伝つてここまで来たのだが…違う道を通ろうと踵を返す背後から不意に聞こえた声に、その目論見が失敗したことを悟る。

「よお、レスト。お前がこゝちに戻つてくるなんて珍しいな

「…………兄上」

ギルネシア・オルス・ハインレンス。今年で20歳になる自分の兄であり、この国の王太子だった。

そして今、最も会いたくない人物でもあった。

おそらくいつも通り待ち伏せしていたのだろう。
そしていつものようにニヤニヤ顔をしている兄に、つい舌打ちしたくなる。

いつでもそうだ。自分はこの兄の手の上で転がされている。
そして次に兄から発せられた言葉は、そんな自分の惨めな現状を表すにふさわしいものだった。

「なんだ、ついに俺の嫁になる女が見つかったのか？」

「……」

その唇から放たれた絶妙な低音は、これまでどれだけの女性たちを虜にしてきたのだろうか。

端正な顔立ちにきらめく金色の髪、左目の下には泣き黒子がそれを助長している。

甘いマスクは王宮で『黄薔薇の君』の呼称を持つ。

貴族の女性から絶大な支持を集めているこの男は、自分が王宮に帰るたびに、どこからかそれを聞きつけ、うして待ち伏せしているのだ。

そんな兄と自分は、髪と全体的な顔のパーツはよく似ている……と言われる。

だが、唯一自分と似ても似つかない点は、その瞳だった。兄のそれは、エメラルドのような翠色をしている。

……あるいは普通の貴族であれば、なんと言われるでもなくただの綺麗な色として受け入れられただろう。

だが、その色は王族としては致命的でもあった。

そう兄は王族としては魔力が少ない。

一般の魔法使いには十分なれる程度だが、連綿と続く王族の系譜の中ではそれはあまりにも微力だった。

代々王族ではマリア王妃と同じ“紫の瞳”を持つか否かで、その存在価値が決まるといつても過言ではない。

いつのまにそんな暗黙の了解ができてしまったのかは知らないが、今は同順位の貴族でさえ魔力の強い者とそうでない者に位の格差が出るのだから、ある意味必然なのだろう。

“聖女の系譜”の証でもある紫の瞳は、その神聖な価値を持って、この300年王家の権威に多大な影響を与えてきた。

だが数百年の時が過ぎたことによりその血も薄まり、遺伝を受けれる者も少なくなってきた。

その事実に王家も少しずつ焦り始めていている。

だから……自分は学校に入れられた。

花嫁を探すために。それも自分のではない。兄の花嫁を、だ。

それは魔力の高い者が伴侶となれば、その子どもに聖女の瞳が発言する可能性が高くなるという理由からだった。

それだけでも馬鹿馬鹿しいが、それ以上に馬鹿馬鹿しいのは、本来第二王子である自分がそんなことをする必要はない、といつこと

だ。

王太子の花嫁ならわざわざ自分が探しに行かなくても、あちらから立候補してくれる。

現に今も兄のもとへは各国の王族・貴族から次々と縁談が舞い込んでいるはずだ。

もつとも噂ではその全てを断つているようだが。

ともかく花嫁探しなんてものはほとんど口実のよつなもので、この人をおちょくるのが好きな兄の命令で、自分は4年間も学校に通うはめになった。

13歳の春に「よお、レストお前ちょっと学校行つて来い。俺の嫁探しに」と言われた時の衝撃は忘れられない。まるで近くまでおつかいに行かせるような軽さで言われた時は、何の冗談かと思った。だが……不思議なもので、今ではむしろあの学校の寮こそが自分の帰る場所のように思つている。

クラスの人間のやかましさには辟易しているが、それ以外は王宮に比べれば随分過ごしやすい場所でもあった。

それだけは、田の前にいる兄に感謝している。

「……違います。少し調べたいことができたので」

「なんだ違うのか? 報告では強い魔力の転校生が現れたとか

(すでにそんなことまで伝わっているのか)

さすが、王太子直属の密偵といったところか。

だが、IJの様子ではまだ容姿についての報告はあがつていないのでだろう。

おそれくあの使い魔のせいだろうが。

「……平民出身のがさつな女です。兄上に見合ひよつた女ではありますよ。それでは失礼します」

嘘だつた。

平民出身なのは本当だつたが、少なくとも容姿は王室で見たどんな貴族の女性よりも勝つていた。

自分自身クラスメイトの噂話を聞いても、最初は全く興味が湧かなかつた。

もちろん事前情報から古代魔法を使えることは知つていた。

だが、いくらなんでもどこの誰ともわからない平民の女を王太子妃にできるわけがないし、なにより兄への反抗から卒業するまで絶対に花嫁など見つけるものか、といつ意地があつた。

でもあの瞬間……急にクラスが静まり返つた違和感にふと顔をあげた時。紫の瞳に囚われた時から、どうしても視線が外せなくなつた。

男のような口調は、逆に孤高な存在としての気位を感じさせた。

つやめく黒髪は高価な黒曜石のようだった。

そして何より

幼いころから寝物語で聞かされた聖女様の話。
その聖女様と同じ瞳と名前をもつ美しい少女。

そんな存在が目の前にいて、驚かないはずがなかった。

あの時の自分はきっとひどい顔をしていただろう。クラスの人間全員が少女に注目していたことから、誰にも見られないだろうことが唯一の救いだ。

ともかくあの少女は平民であることを除けば、これ以上ないほど王太子妃にふさわしい人材であった。

むしろその平民という位が最後の砦だ。

あの滅多にない紫の瞳と魔力量は、王族のみならず貴族にとっても格好の餌である。

彼女に対する罪悪感と、聖女への畏敬からあの場は「まかしたが……いつまで隠せるかはわからない。

そして、その存在を知った時の兄の対応も現時点では予想がつかなかつた。

一方で王宮の古狸たちの行動は簡単に予想できる。
きっと自分達のところに困おうとするだろう。

だが、学校は中立地帯であるし、おそらくライルの庇護もあるから、こちらもじばらくは大丈夫だらう。

それでも

「やつかいだな……」

あの稀有な少女の存在は、もしかしたら王位継承問題にまで関わってくるかもしれない。

古狸達の中に、自分を王にしようとしている派閥がいることも知っている。

王家としての権威を何よりも重要視する、権威至上主義の集まり

だ。

たしかに紫の瞳を持つことからも、魔力については自分が勝つて
いる。

その上この顔だ。

300年前の賢王にそつくりの容貌から自分も賢王になるのでは、
というよくわからない推論をする輩は大勢いる。

だが、それ以外の……王としての資質は明らかに兄の方が上だっ
た。

現にこれまで紫以外の瞳を持つた賢王は存在した。

自分を推す馬鹿どもはその点を全くわかつていない。

外面と内面、どちらを重要視するのか。

その意味で、あの少女はこの問題に一石を投じることになるかもし
れない。

……できることならこの醜い争いには、関わってほしくなかつた。
おそらく巻き込まれれば彼女も自分同様、人間性を顧みられるこ
とはなくなる。

それは何よりもつらいことだと知つてゐる。
同じ苦しみを増やしたくなかった。

(……自分はなぜここにいる)

それは物心ついたときからずつと考えてきた疑問だつた。

本当に笑えてくる。このアストレイ国王に似た忌々しい顔も魔力
も、そして地位さえも何一つ自分で望み手に入れたものではない。
むしろその全てが自分の人格を否定しているようにしか思えなか
つた。

」の王宮に自分の居場所などあるのか。

宝物庫への道を進みながら、レストは終わりのない思考のスペイナルに陥つていた。

一方去つていく弟の姿を眺めたこの国の王太子は、誰もいない空間で一人満足そうな表情をしていた。

「あれは何か隠しているな。まったく、可愛くない奴め……いや、だからこそ可愛いのか。…………なあ、そつ思わないか？」

顎に手をかけて、近くの柱の影に声をかける。

すると誰もいないと思われた空間から、すぐに質問とは違う答えが返つてくる。

「ギルネシア様……そろそろ」

「わかつている。久々の弟いじりは終いだ。政務に戻るぞ」

そう言い、一転王太子としての仮面を張り付ける。

その雰囲気も先ほど弟の相手をしていた時とは全く違つていた。鋭いまなざしと厳格な雰囲気は、この王宮で長年暮らしていくうちに身に着けざるを得なかつたものだ。

そして廊下を歩きながら、日課となつてゐる報告を受けた。

「本日の報告ですが……第一王子につけていた護衛が眠らされておりました」

「ほう……誰の仕業だ？」

「それが、誰もその姿を見ていないとか……気が付いた時には眠つていた、とのことです。かなりの実力の持ち主でしょ。ですが……御覧の通り、第一王子には何の怪我もなかつたようですね」

「ふむ、やるな……調査してみるか」

「……いい加減その過保護やめませんか？ レストシア王子もいっ歳なんですから」

それまで事務的に受け答えをしていた近衛は、ここにきてよつやく人間らしい発言をした。

それもかなり切実に。

「……だが、王族として護衛は必要だろ？」

「学園は中立地帯ですし安全ですよ。教師には上級魔法士も多いですし、なによりフラスト様がいるでしょう。あなたが担任に推薦したんじやなかつたんですか？」

「……だが」

近衛歴7年目になる男は、主である王太子の性格を熟知していた。ここで一気に勝負を仕掛ける。

「あんまりしつこくすると嫌われますよ。今回も命を狙つた犯行ではないですし、おそらく聞かれたくない会話があつたのでしょうか。どうか、これ以上ストーカーをするのはお止めください」

「……まだ不満そうな顔をする主にはこの「嫌われる」という言葉がなにより効いた。

「……最も既に嫌われていることに気付いてないのが残念なところだが。

「む……仕方ない。たしかにレストもお年頃だしな。兄には知られたくないこともでてくるだろう。しばらくは我慢しよう

「……それでも“しばらくは”なんですね」

もはやため息しかでない。

この兄弟はいろんな意味で温度差がひびくぞ。

すれ違いもここまでいくと天晴れだ。

ただ、毎日「今日のレストシア王予は」という報告をしなければならない自分達の身にもなってほしい……それは近衛部隊全員の切実な思いだった。

第7話「王室」（後書き）

そんな感じでストーカーその2、第一王子の登場でした。
個人的には近衛のにーちゃんが好きです。

しかし急いで書いたので、変な表現とかないか心配です（汗）
あつたらぜひ教えてください。

あとここまできて思ったのが「若い女の子が書きたい！」でした。
物語の進行上仕方ないとは言え、あまりにも女の子の登場が少なすぎた！
なのでその欲望を叶えるためにも次回からは若い娘を出していきます！
それではこれからもよろしくお願ひします。

第8話「不可思議な朝食」

部屋のドアを開けた瞬間、その人物と目が合った。

どうやら向かいの部屋の住人も、ちょうどドアを開けたところだつたらしく、自分と同じように取っ手に手をかけたまま固まっている。

薄紫の瞳は驚きで見開かれ、その金色の髪は朝の陽光を受けて、まるで光の精霊のような輝きを放っていた。

「……」
「……」

…なんとも気まずい沈黙が流れる。

双方一言も話さないまま見つめ合ひ姿は、傍から見たらどう映るのだろうか。

妹と同じ瞳と数秒向かいあつた後、そつと溜息をつく。

(朝から運がいいのか悪いのか)

教室で会つたら昨日のことを持ちよつと思っていたが……まさかこんなに早く遭遇するとは思っていなかつた。

なにはともあれ、この重苦しい沈黙をどうにかせねばならない。あまり心の準備はできてなかつたが、とりあえず何かを話しかけようとする。

しかし、口を開こうとした瞬間、新たな第三者に邪魔をされるこ

とになった。

「あ、お前昨日のー?」

自分の後ろからひょっこり出てきたキラが、その人物を指さす。
……これは後で人を指さしてはいけないと教えなければならぬ。
相手が王子ならなおさらだ。

指さされたレストシア王子は、キラの登場に益々驚愕したようだが、それをきっかけによつやく呪縛が解けたようだった。
彼は氣まずげに視線を逸らしながら告げてきた。

「……その、昨日は悪かった、な」

……まさか、あちらから謝罪の言葉が出るとは思つていなかつた。昨日とは一変して、王族らしくないその殊勝な対応について動搖してしまう。

「い、いや、こちらこそ。いきなり倒れて申し訳なかつた」

「ご主人様が謝る必要なんてないですよー全部こいつの、あぶ」

昨日と同じく、慌ててその口を塞ぐ。

キラは何かを言いたげに私を見上げてくるが、せつかく円滑に事が進んでいるのだ。ここでわざわざ再燃させるのは得策ではない。

一方王子は、わずかにその形のいい眉根を寄せたが、……それ以外にキラの言動には気にするそぶりを見せずに話を続けた。

「指輪のことも悪かつた。城で調べたところ、マリア王妃の指輪は

ちゃんと宝物庫に保管されていた。おそらくさ...君のはレプリカかなにかだろう。随分と精巧なレプリカだとは思うが.....その、身体はもう大丈夫か?」

呼び方が“貴様”から“君”にレベルアップしたことも含めて、どうやらいつのまにか懸けられていた“王妃の指輪盜難容疑”は晴れたようだった。

気付かない間にどんでもなく危ない橋を渡つていたことに驚愕する。

その一方で“レプリカ”的指輪についてうまく説明するため、朝から頭を働かせることになった。

「ああ、昨日は少し体調が悪くてな。心配をかけてすまない。....この指輪はある人の形見なんだ。詳しくは知らないが、王宮の関係者だったようだ。おそらくその伝手で作られたものだろう。その、やはり王宮に提出したほうがいいのか?」

「いや.....本来ならあまり褒められたことではないが、昨日の詫びもかねてその指輪については不問に処そう。もとより王家に深い関わりがある者以外は、あの指輪の存在は知らないしな」

「そうか.....ならよかつた」

「.....」
「.....」

そこで会話が途切れる。話題がなくなつたせいでもあるが.....それ以上に、この場に流れる殺伐とした雰囲気のせいでもあった。
そして、その原因は今私が口を押さえている相棒にある。

キラが先ほどから殺氣の籠つた視線で王子を睨みつけているのだ。王子はその視線を受け止め……いや、むしろ対抗するように毅然とした態度で相手を見下ろしている。

二人の間には見えない火花が散つているようで……正直非常にいたたまれない。

(一体昨日何があつたんだ?)

自分が気を失っている間に、この一人に何があつたのか……訊きたいような訊きたくないような。

まあ、キラはもともと人嫌いであるし、特に王族・貴族には厳しい方もあるのだが。

いや、そんなことを考える前に、まずはこの状況をなんとかしなければいけない。一触即発の両者を仲裁できるのは今のところ自分だけなのだ。

そうして死の静寂が場を支配する中、意を決して言葉を紡ごうとした瞬間……本日一度目となる妨害(この場合はむしろ救援?)が入った。

「……あー、そこでガン飛ばしあつていい御両人。そろそろ行かなーと朝飯食いつぱぐれるぜ?」

いつから見ていたのか。2つ隣の部屋の壁にもたれながら、ライルが呆れたようにこちらを眺めていた。

(……なぜこんなことに)

正面に座るご機嫌顔と、その隣の不機嫌顔をチラリと一瞥する。そして自分の隣は先ほどから一心不乱に菓子パンを食べる相棒の姿がある。

田の前にはおいしそうな朝食があるが……いまいち食欲が湧かないのはやはり先ほどから流れるこのなんともいえない微妙な空気のせいだらう。

そう、あの後なぜかライルも交えて4人で朝食をとることになったのだ。

寮の一階にある食堂は数百人を収容できるつくりとなっているが、やはり朝のこの時間は人で溢れかえっていた。

もつとも、なぜか自分達の周りだけ人が寄つてこないが……それでも視線だけはやけに感じるのが嫌なところだ。

人からの視線には慣れているつもりだったが、これほど多くの同年代の視線に晒されたのは初めてだ。きっと王子や公爵家の長男がいるせいだとは思うが、さつきとは違う意味で落ち着かない。

この刺すような無数の視線の針で全身に穴を開けられては、食欲がなくなるのも、口数が少なくなるのも自然な流れだろう。

「……」

「……」

「おいおい。お前ら付き合いたてのカップルでももつ少し……いや、俺は認めないけどな」

よくわからない例えを出しながらライルが言葉を発する。内容は

ともかく、その発言のおかげで張りつめていた空気が少し弛緩した気がする。

おそらく普段からこうした視線には、慣れているのだろう。特に気にする様子も見せず、普段通り話す姿はある意味尊敬に値する。

その幼馴染の言葉に触発されたのか……おそらく誰よりもこうした視線と長く付き合ってきた人物が会話をつなぐ。

「何の話だ……そういえば、自己紹介が遅れたな。私はレストシア・クライス・ハインレンスだ。レストと呼んでくれて構わない」

(王女を呼び捨てにしていいのか?)

そんな疑問を持ったが……どうせ今の自分にはなんのしがらみもないのだ。既に王家に媚びへつらう理由もなくなつたし、なにより本人がいいというのならいいのだろう。

その言葉を受け取ることにした。

「ああ、よろしくレスト。アリア・セレスティだ。私もアリアでいい

だがそう言つた途端、レストはなぜか微妙な顔をして黙つてしまつた。

「…………どうしたんだ?」

その理由がわからず率直に質問すると、正面に座るライルが顔を近づけそっと耳打ちをしてきた。

「ほら、いつか言つたろ。聖女に過度の妄想抱いてる奴がいるつて。それがこいつ。きっと『聖女様と同じ名前を呼び捨てになんて…』とか思つてんだろ」

「……ライル聞こえてるぞ」

レストが睨みつけてはくるものの、その頬はかすかに赤く染まっている。

どうやら図星のようだ。

(なんて難儀な)

まさか王家の人に、聖女として慕められる日がくるとは思わなかつた。

第一王子のこの様子では、いまや王家の人にといえども300年前の真実は知らないと考えていいのだろうか……だとすれば正直複雑な気分だ。

もし私がそうだと言つたら……聖女なんて本当は虚像に過ぎないと知つたら、一体どんな感想が飛び出るのだろうか。

現時点ではありえない未来だが、多少興味が湧いた。

「まあ、名前が嫌なら苗字で呼べばいいわ。あとこっちはキラ。アリアの使い魔だ」

思考に没頭する自分に代り、ライルが相棒のことを紹介してくれる。その先にはプリンなるデザートに夢中になつているキラがいた。

「こいつ、昨日となにか雰囲気が…………まさか、一重人格か？」

レストが呟いた言葉は、幸か不幸か他の一人には聞こえなかつた。しかし、言われた本人の優れた聴覚にはしっかりと届いたようで、ピクッと反応したキラは、プリンを咀嚼しながらさまじい殺氣を放つ。

その瞬間、食堂にいる全ての人間の動作が、ピタリと止まる。今まで感じたことのない殺氣に、本能で危機を察したのだった。

「こら、キラ！ いきなり殺氣をだすな！ 他の人が驚くだろ？」

「はーい」

軽い返事とともにキレイに殺氣を仕舞うキラと、殺氣に竦むどころか逆に叱る女主の態度に、男2人は冷や汗をかきながら密かに憧憬の念を抱いた。

ちなみに4人（正確には3人と1匹）が仲良く？食事をとつている風景を見た学生たちは、昨日出回つた『王家と公爵家の幼馴染対決、泥沼の三角関係』という噂は嘘のようだと推測した。

しかし、最後に放たれたものすごい殺気に、今度は『黒髪の美少年が参戦！？まさかの四角関係！？』という噂が流れることになる。

そのことを、この時の4人はまだ知らない。

第8話「不可思議な朝食」（後書き）

す、すいません。

若い女の子出せませんでした（泣）

じ、次回いじわは…

第9話「ともだち」

朝食の後、3人そろって教室に行くと（キラは自由行動）、既に登校していたクラスメイト達はギョシとした顔でこちらを振り向いた。

無理もないだろ？……この組み合せはどう考へてもおかしいと思う。

第一王子と公爵家の長男はまだいいとして、どうして昨日来たばかりの転校生がその隣にいるのか。自分でも正直謎だ。

「アリアの席はこい。今日からよろしくな！」

「セレスティ、わからない」とがあつたら遠慮なく訊くといい

「ああ、一人ともありがと。よろしく頼む」

レストは結局私を苗字で呼ぶことに、決めたらしい。

本当に聖女を意識しているのかと思うと、それはそれで複雑な気分だったが……この際別人のことだとでも思つて開き直るしかない。

クラスメイトの視線が突き刺さる中、指定された席に向かう。どうやら私の席は窓際の後ろから4番目、ライルのひとつ前らしい。その隣、つまり自分の斜め右後ろには、レストがいる。

すぐ外には薄紅の花を散らす巨大なユスラの木。

そして少し離れたところに学園の正門が悠々とそびえ立っている。眺めもよく、なかなかいい席みたいだ。

「やあー。」

唐突に聞こえたその声に振り返ると、自分達を遠巻きに眺めるクラスメイトの中から、ひとりの青年が両手を広げてこちらに歩み寄つてくる。

その青年は、少し垂れ田な茶色の瞳を細めながら、喜色満面な表情で軽やかに登場してきた。癖つ毛氣味な金髪は肩より少し長い程度で、後ろで一本にまとめられている。

そのまま颯爽と自分の田の前まで来ると、彼は膝をついて、左手を胸に右手をこしからに差し出す謎のポーズをとった。

「君が来るのを待つてたよ！ 僕はフイリック・ダン・リンメル！」

そのじぐわせ、じこかの三文版居のよつで……はるか昔に読んだ物語の中の王子の求愛シーンにそづくつだつた。

おそらく真面目な顔をしていればそこそこ美男といえないこともないが……その限りなく軽い雰囲気と、救いようのない言動の数々が全てを台無しにしている。

「ああ、やっぱ近づいて見ても美しいー。その瞳、伝説に詠われた聖女様のようだ！ 君の美しさの前では凡ても霞むだろー。どうかこの愚かな僕に！」

……それ以上は脳が聞くことを拒否したので、省略する。

ともかく彼のマシンガントークはどうもないと知らなかつた。

「素晴らしい花の……とか……夢の……」
「…………」

「……まだ理解の範疇を超えた美辞麗句が滝のように流れている。だが……ここまで来るところそ感心する。形容詞の語彙が豊富で、うらやましい限りだ。

惜しむらくは、周りの女子の冷たい視線に気づいていない点だろうか。

……なんだか氣の毒になってしまった。

しかも

(ここではじめもなく軽い感じ。ビルかで見覚えがあるよつた)

頭をひねる私の姿に何か勘違いしたのか、ライルが咎めるよつた青年の名を呼ぶ。

「おー、フィル！ いい加減にしろよ、アリアが困ってるだろー！」

「いやあ、だつていつの間にか王子とも仲良くなつてゐるしさあ。結局昨日の真相もわからんねえし。それに今日は新しく黒髪の美少年もライバルに加わつたつて話だぜ！ 恋人がいるのに既にこの競争率……俺も出遅れちゃいられないだろー？」

「何わけのわかんないこと言つてんだよ。しかも『僕』とか気持ち悪い一人称使いやがつて！」

「よけいなこと言つたな！ ああ、アリアちゃん勘違いしないでくれ。いつももつと優雅で品行方正なんだよ！ それにしても本当に綺麗だなあ……そうだ！ 今度君のために詩をつくってもいいかな！？」

先ほどと同じ途中までは完全に流したが、最後の一言で既々し
い記憶が蘇つた。

(……ああ、みやく思へ出した。“あれ”に似ているんだ)

よしとちがいつた。

そして意味を深く考へるまでもなく、思つたままのことを口に出
す。

「お前、変態か」

「くつこ。」

そう、彼はあの聖女の詩を作った変態伯爵にそっくりだった。
顔はそれでもないが……この無駄に軽く、無駄に馴れ馴れしい感
じは、奴の性格を継承しているようにしか思えない。
もしかしたらどこかで血でもつながっているのかもしれない。
そう考へると……なんだか今度は憐れに思えてきた。

そのままかわいそうなものでも見るよし、変態青年、ないしふ
イリックを観察すると、彼は腕を差し出した状態のまま石像のよう
にピシリと固まっていた。

おかしな反応を不審に思い、他に手をやると……ライルは机をバ
ンバン叩いて爆笑している。見ればレストも口を押さえて下を向い
たまま肩を震わせていた。

「確か、こ、間違つて、は、いな……ふは、なあ、レスト？」

息も切れ切れになりながら、ライルが同意を求めるよしと隣を振

り仰ぐ。

「くくっ……ああ、女と見れば見境なく声をかける奴だ。変態に違いない」

「変態……生まれて初めて言われた」

フィリックは両手をついて頃垂れている。なぜか放心状態に陥つているようだ。

セレーヌが「おかしなことを言つたつもつはなかつたが。

(…………#あいこか)

あまり気にしないことにした。

そういうえば『春になるとおかしな人が増えるから気をつけなさい』と、昔誰かに教わった気がする。きっとその類なのだ。

そんな周りは放つておいて、まずは念願だった自分専用の席に座る。

そして我慢しきれず机に向ひペタをくつけて、その感触を楽しむ。

真新しい匂ことひんやりとした温度がひどく気持ちよかつた。うつとりするようにそのままそつと皿を置じる。

今日から（正確には昨日からだつたが）私は学生なのだ。
まさかこんな日がやってくるとは、夢にも思わなかつた。300年前は、毎日が生きるか死ぬかの戦いで、未来はもちろん明日のことさえわからない日々が当たり前だった。

そんな日々を過ぐしてきた自分が、今日からこの学園で生徒そして過ぐしていく…なんとも数奇な運命だ。つい田を開じたまま苦笑してしまつ。

(今の私は完全におかしな人に見えるだらうな)

しかし、わかつていても止められそうにない。

数奇な運命…………今は、それも案外悪くないと思えてしまつたから。

「あ、あの」

……じの怪しい状態の自分に声をかけるとは、なかなか肝が据わつている。

今度は誰だと思いながら、閉じていた田を開けると……自分の前の席に座っている赤毛の少女が恐る恐るといった様子でこちらを見ていた。

先ほどの青年に比べると、本人には悪いが随分地味な印象がある。肩より少し長めのふわふわの赤毛。その青い瞳は、今は不安そうに揺れている。

ローブの下に着ている服もこの貴族だけのクラスにしては、質素、な気がした。

だが、その垢ぬけてない雰囲気が、むしろ私には親しみやすかつた。

「あなた、平民よね？ ミドルネームがないし」

「ああ、そうだが……？」

その途端少女はパッと顔を綻ばせた。それは野に咲く花のようこそ朴で、可憐な笑みだった。自分にはないその可愛い表情に、一瞬「つらやましい」という感情がちらつく。

「よかつた、私もなの……」のクラスには他に平民出身がいなくて……

「どうやらこの少女はこの貴族ばかりのクラスで唯一の平民らしい。」

(私と同じ異端分子か)

王城の中で過ごしてきた苦い記憶を思い出す。貴族ばかりの中では過ぐす苦しみは、誰よりも知っているつもりだ。

今私はライルという後見がついている点で恵まれている。キラとこう相棒もいるし、レストも…なんだかんだでよくしてもらつていると思つ。

でもこの少女にはそんな知り合ひはないのだろう。それが普通だ。

きっと苦笑しててきたのだ。過去の自分と重なる平民の少女に、親近感と庇護欲が湧くのも当然だった。

「そうなのか、大変だつたな。アリア・セレスティだ。平民同士これからよろしく頼む」

「ええ！ 私はニア・グレンよ。よろしくねアリアー！」

本当にうれしそうに話すその様子は、よっぽど肩身の狭い思いを

してきたに違いない。

その笑顔を見て、これからは自分が彼女を支えていこうと心に誓つた。

「ところでアリア。王子様達と仲が良いようだけど……なにかあったの？ その、昨日も倒れたって聞いたし」

「ああ、それはレストのせいじゃないんだ。昨日は、ちょっと体調が悪くてな……まあ、話してみればいいやつらだぞ。平民だからといつて差別はしない」

「そうなの？ でもやっぱり恐れ多くて。それに私アリアほど美人じゃないし……」

「美人？ ミアの方がずっとかわいいと思うが？ なんなら今度あいつらと一緒に御飯でも食べるか？」

「……もしかして無自覚？」

最後の問いかけには答えることなく一人ぶつぶつ呟くミアは、やがて何かを決心したようにこぶしを固めた。

小さい声だったが、聞き間違えでなければ、「私が守つてあげなくちゃ」とつぶやいた気がする。

(いや、守るのは私の役目では…)

そう思い一人で納得してこぶしミアに、おしゃるおしゃる話しかける。

「あの、ミア？」

「……え、ええ、そうね。今度、頑張って話しかけてみる。ふふ、でもよかつた。このクラスで初めての友達ができたわ」

「…………とも、だち?」

それまで考えていたことを全て吹き飛ばす威力が、その一言にはあつた。

その4文字をかみしめる。300年前、願うことすら叶わなかつたものだ。

それが今手に入った、のだろうか?
正直あまり実感は湧かない。

(……でも、案外そんなものかもしれないな)

さつは思いながら、さつきとは違う意味で口が弧の形になつている自覚があつた。

「おはよう諸君。よし、出席となるべー」

ちょうどよく担任のフラスト先生が入室してきたおかげで自分の変な顔…泣き笑いのような顔をミアに見られることなくよかつたと思つ。

「じゃあホームルーム始まるから」と前を向いたミアの背をじつと見つめた後、しばらく目を閉じた。

そうして心を落ち着かせて、今度は後ろの席のライルを振り返る。

「……ライル」

「ん、なんだ?」

頬杖をつきながら、満足そうな顔で「うううを見ている」ライルと田口を合わせる。

どうしても今、伝えたいことがあった。

「初めて“ともだち”ができた」

その言葉を聞いたライルは、どこか意外そうな表情をした後、ふつとややしく微笑んだ。

それは我が子が初めて何かを成し遂げた時の親のよつな、慈愛に満ちた頬笑みだった。

その笑みに後押しされるよつこ、今抱いている素直な気持ちを言葉にのせて伝える。

「その……ここに連れてきてくれて、本当にありがとうございます。ライルに会えてよかったですよ」

「…………すうい殺し文句だな」

「ん? 何か言ったか?」

「…………いんや。でもや、ひとつ言つていーか」

急に真面目な顔になつた彼が、少し前のめりになつてこちらを覗きこむ。

若草色の瞳がいつもより真剣で、少し大きつとする。

「あ、ああ」

そうしてライルは、少し拗ねたように……でもビリーが楽しそうにや
の“確認”をしてきた。

「俺は既に友達のつもりだつたんだけど?」

その言葉に一瞬ポカンとする。だがすぐにその意味を理解して……

(まいつた……私の完敗だな)

本当に人間相手の自分は弱い。

たつたこれだけの言葉でこんなにも心揺さぶられるのだから。

私の様子を見て“してやつたり”という顔をしているライルに、
“答え”を返す。

「…………そうだな。“ともだち”第一号はライルだ。」

「うむ、わかればよろしい」

偉そう胸を張るその姿に思わず笑ってしまう。

そして、そんな自分自身に驚いた。

(こんなに、心から笑える日がくるなんて……)

「この時代に目覚めてから、本当に驚きと喜びの連続だ。だが、こ
んな日常も悪くない……と思つ。

「次、朝からいちゃいちゃしているアリア・セレスティ」

生まれて初めての出席確認は、なんとも不名誉な呼ばれ方だった。

でも、今はそれさえもつれしくて仕方ない。ただこの場にいる」とが……生きていることがうれしかった。

「はーー！」

「お、随分いきのいい返事だな。……よーし、全員いるな。じゃあ、ホームルーム始めるぞー！」

その担任の声を合図に、生徒たちはいつも通りおしゃべりをやめて、話を聞く体制にうつる。

ただいつもと少し違うのは、窓際の後ろから4番目の席に 관심が向いてしまうことだ。

……だが、その少女もいずれクラスの一員としてあたりまえの存在となる。

開けた窓からコスラの花びらがそっと舞いこんでくる。

ひらりとアリアの机に着地した薄紅色の花は、まるで彼女の門出を祝福しているようだった。

第9話「ともだち」（後書き）

ようやく出せた女の子！

でもまだまだ少ないですねー。

これからもちょいちょい増やしていきたいと思つてます。

さて、なんやかんやで3章はここで終了です。

ようやく物語の導入部分が終わった感じですかね。

4章からはファンタジーらしく、魔法がバンバン？出でてくる予定です。

ここまで読んでいただいた皆様には最大級の感謝を。

そして、これからもよろしくお願ひします。

ではでは。

4章 第1話「田標」

「じゃあ、また後でね」

「ああ、昼食でな」

「…………ハインレンス王立魔法学園に入学してから2週間がたつた。

今はちょうど1限目が終わつたところで、この後は選択授業が待ち構えている。

私は精霊魔法、ニアは神聖魔法の授業を受けるためそれぞれの教室に移動しなければならない。

「アリア、あの人には気をつけてね。あと、知らない人についていつちゃダメよ」

「わかつてるよ。ほら、もう授業始まるぞ」

「あ、ほんとだー急がなくっちゃ」

そう言つて慌てて駆けていく友人の後ろ姿を、苦笑まじりに見送る。

心配してくれるのはありがたいのだが、あの幼子にするような注意はなんとかならないものだろうか…まるでキラが一人になつたようだ。

……キラといえば、数日前に引き合わせた時、ニアとキラはすぐこ意気投合していた。

よくは知らないが、どうやらお互にうまがあつたらしい。

「からを意味ありげに見ながら「2人で頑張りましょう」と、堅く手を握り合っていたのが謎だつたが……まあ、仲がいいに越したことはないので、あまり気にしてない。

そのキラも最近は何かと忙しくなりしく、昼間はあまり見かけなくなってきた。

私の期待していた通り、何か暇つぶしになるものでも見つけたのかもしねえ。

それは自体は別にいいのだが……問題は何をしているのか訊いても、はぐらかしてばかりで答えてくれないことだ。

「遊び相手が見つかったんですね」とは話してくれたものの、肝心の相手については、全く情報がない。

「世話になつていいよつだから、私も一言あこせつでもした方がいいのでは」と提案しても、やはり首を縦に振つてはくれなかつた。モジモジしながらも決して口を割らないその様子に、『もしかしたら一緒に悪いことでもしてゐるんじゃないか』と心配になり、一度はニアに相談したほどだ。

返ってきた答えは、「え、えーと、そつ……キラ君もそういうお年頃なのよ……時には主人のもとを離れて自由を満喫したいんじやないかしら?……やっぱり使い魔にだつてプライベートは必要よ……アリアもそう思つでしょ?……」といふものだつた。

勢いに押されて「あ、ああ」と頷いてしまつたが……なんだか誤魔化された気分だった。

「どうやらニアも何をしているのか知っているようだつたし、少し
だけ疎外感を感じた。

「でも、ニアの言葉も一理ある。

毎日私の世話ばかりでは、きっとキラも疲れる。
ここは主として何も聞かないでおくれのが、正しい道なのかもしれ
ない。

(…………でもやっぱり氣になる)

うらしくないとは思いながらも、（一応）保護者として心配するの
が、親心？というものの。押すべきか……それとも引くべきか。究極
の一拡を選ばなければならない。

「むう」

「……って、聞いてますのアリアさん！？」

……まったく聞いてなかつた。

思考に夢中になつていたせいか、話しかけられていたことにすら
気づいてなかつた。

顎に手を当てた状態のまま、声のした方を振り向く。

振り向いた先には、特徴的な灰銀の髪が視界いっぱいに広がつて
いる。

薄紅の瞳が想像以上に間近にあつて、かなり驚いた。

(…………厄介なのに捕まつてしまつた)

昨日の悩みの種が、そこにいた。

急いで逃げ道を探すが……やはり、それいつつかまへは見つからない。

退避は不可能。迎撃……は無理そうなので、こうなれば守備を固めるしかほかない。

「……なんだローズ」

「ですから、精靈魔法の講義と一緒に受けたて差し上げてもよろしくてよ、と先ほどから言つてるんです！ まだ慣れていないあなたのために、特別にわたくしが手ほどきしてあげますわ！」

両手を腰に当てて、貴族らしく尊大な態度で“提案”をしてきた少女の前で、気付かれないようソソッと溜息をつく。

(……やはり苦手だ)

ニアからも注意を受けていたが……ローズマリア・ランシイ・ベルドット。

最近やたらと話しかけてくる名門ベルドット公爵家の長女であり、話し方からもわかるとおり生粋のお嬢様だ。

ニアもクラスに入つてからずつとこういう風に話しかけられて、対応に困つていたらしいが。

ローズは腰辺りまで伸ばしているウーブのかかつた灰銀の髪と、薄紅色の勝気な瞳が印象的な少女だ。

なにやら自分の名前の由来にもなつたマリア王妃と同じ？ 灰銀色の髪が白樫らしいが……私から言わせれば、その髪色はむしろ魔王シヴァにそっくりだった。さすがにそれは言えなかつたが……

そのせいもあつてか……最初の自己紹介では「どうぞマリアと呼

んでくださいな」と言われたが、次の瞬間には「わかった。よろしくたのむ、ローズ」と反射的に答えていた。

たとえ別人でも妹と同じ名前で呼ぶ気にはなれなかつたのが一番の理由だったが、「あなたもですの！？」といふ反応から、他の人間もローズと呼んでいることが発覚する。

……じつやりあまりにも『癒しの王妃』といわれた人物とイメージが異なるため、皆そちらを呼ぶらしい。

ある意味うらやましい話だ。

私なんか嫌がおつにもある『聖女』と同じ名前で呼ばれるのだから。

「ああ、まいりましょー！」

返事をしてないのに勝手に歩き出すローズの背を見て、もう一度氣付かれないように溜息をいります……本当に、貴族といつのは自由気ままである。

「ふむ、全員あるかの？ では講義を始めようか」

精靈魔法を教える“爺先生”ことパウル老が、いつもどおりほのぼのしたオーラを出しながら、講義を始める。

その心地よい声を聞きながら、この数日で習つたことを頭の中で復習する。

……この学園に来てから2週間、過去とのギャップに戸惑つこと很多かつたが、おおよそ基本的な魔法の知識も手に入つた。

やはり当初想定していた通り、人の持つ魔力は随分と減少しているようだった。

歴史学の授業で習つたことだが、主な原因は280年ほど前に起きた王都の大火灾らしい。

なかなか興味深い話ではある……ただ、あの授業は担当のケイン先生がやけにちやらんぽらんで、いまいち信憑性に欠けるのが難点だ。

どこまでが歴史の真実で、どこからが彼の想像なのか……その境目がいまいちわからなかつた。

まあ、とりあえず今はこの時代に慣れることを優先しようとは思つていてるが、いつか暇ができたら自分で調べてみたい事ではある。

ともかく、そのような経緯もあつて今の時代の人々の魔力量は、300年前のそれよりかなり低くなつてている。

だが、魔力が少なくなつた代りに、人はその優秀な頭を使って、300年でまた違つた方向に魔法を発展させていた。

いくつもの実験を積み重ねた結果、手間はかかるが、少ない魔力で一定の威力を発動できる魔法を生み出したのだ。

それは魔法の分類についてもそうだが、発現方法についてもだつた。

詠唱、魔法陣、その他媒介となる道具を使つたやり方などそのバリエーションは豊富だ。

そうして、集大成としてこれら現代の魔法体系が生まれた。

【基本魔法】……六大属性を扱う属性魔法と、無属性魔法に分類される。

六大属性は光・闇・火・水・風・土のことと、生徒たちはこのうち一つないし、二つの属性を自分の専門分野として専攻する。無属性はそれ以外のもので、補助的な作用をもたらすものが多い。

ちなみにレベルは、初級（基礎）、中級、上級とあり、それぞれ学園のクラスに対応している形になる。

【神聖魔法】……神に祈ることによって奇跡を起こす魔法……らしい。ライルが愛馬を使ったのがこの魔法で、300年前には普及していなかつた魔法である。特に治癒に特化したものが多く、この国のはほとんど全ての魔法使いが使えるらしい。

……ちなみに私は全く使えなかつた。
だからこそ選択授業では、精霊魔法を取るしか道がなかつたのだが。

教科担任のグナイト教諭からは「信仰心が足りんのだ！」とお叱りを受けたが、全くもつてそのとおりだ。

自分は神などこれっぽっちも信じていないし、これからも信じるつもりはない。

だから「一生使える気がしません」と開き直つてみたのだが……どうやらその答えがお気に召さなかつたらしく。

いまだグナイト教諭には、会つたびにありがたい神のなんぢやら物語を聞かされている。正直疲れる。

その他にも使い魔契約を結ぶための召喚魔法、そして今はほとんど使い手のいない古代魔法などがある。こちらは呼び方は変わったが、その概念は昔とほとんど変わっていなかつた。

あえていうなら、やはり使い魔は一人一匹という制限ができるいたことくらいだ。

その理由は、わからないままだが。

ちなみに私が300年前使つていた魔法のほとんどは、今は古代魔法として希少な魔法となつていた。

例えば、飛行魔法はぎりぎりまだ使い手がいるらしいが、転位魔

法に関しては、使い手はあるか実際可能なのかどうか、という存在自体が危ぶまれるものになつてゐる。

下手に試すと身体の一部だけ転位してしまつ、といつ恐ろしい噂のせいで誰もやろうとする人間がいないうらし!。

「 じゃからして、精靈は常にわしらを見ているとともに

「 じゃからして、精靈は常にわしらを見ているとともに

パウル老の穏やかな声が教室に響く。

今講義を受けている【精靈魔法】も、昔とほとんど同じ認識をされていいる魔法の一つだ。

精靈魔法は自然界の魔力が凝縮して意思もつたかたち、精靈を使役する魔法…と一応教科書には書いてある。

ただ、私から言わせてもらえば、地界の精靈は話せないのでこちらからお願いするだけで、決して使役するものではないのだ。

現に傲慢に命令してくる人間に、精靈は力を貸さない。

パウル老の講義では、この点を特に重視して教えている。これは通説を改めている良い点だと思う。

ちなみに私の場合は、力を借りたらそれに見合うだけの魔力を対価として与えているのだが……一般的には意志の力一つで行使できるものとされている。

……そして、頼み方以外のもう一つの条件として、精靈魔法を使うには精靈に好かれなければならぬ、というのがあつた。

これは一種の才能のようなもので、生まれつき持つてゐる魔力の質に関係するものらしいが…それについては現代でも解明されていない。

ただ、精靈に好かれるような純粋な心も必要だ、とはよく言われている。

(だからこの娘も悪い人間ではないはずなのだが……)

「さつきから何をジロジロ見てるんですの?」

「……いや、別に」

隣に座るローズがいぶかしげな顔をしている。

気まずくなつて視線をそらすと、少し離れた席に座つているレストが、「前を見る」といつたジェスチャーをしていることに気付いた。

レストとローズは今年から精霊魔法の講義を受けることになつたらしいが、そのほかのライル、ニア、フィルは去年に引き続き神聖魔法の講義を受けている。

こればっかりは運のようなものだらう。

そして前方の教卓に顔を向けると、パウル老がにこやかにほほ笑んでいた。

穏やかでありながら、強制力を伴つた笑みだつた。

……この講義はそもそも受けれる人数が少なく、全学年でも20人程度しかいない。だからおしゃべりをすると非常に目立つのだ。

「ほおほお、ちょうどいい。では、ちよいと実践してもらおうかのぉ……ベルドット君」

「は、はい!」

急にあてられたローズは、少し驚きながらもその場でピシッと起立した。

「君は火の属性だったの。精靈に呼びかけてみなさい」

「は、い」

緊張[氣味]の彼女は、少し戸惑いながらも言葉に魔力をのせて精靈を呼ぶ。

【いらっしゃい】

しかし、確かに火の精靈が集まつて教室が少し温かくなつた気がするが……本当に微々たるものだった。

(……なにかおかしいな)

失礼かもしけないが、意外にも呼びかけの仕方に問題はなかつた。よく一方的に命令して、精靈からそっぽを向かれることがあるのだが……そういう場合の反応とは少し違う。

どう言えばいいのかわからないが、何か、“つまっている”という表現が一番近い気がする。

ただ、それ以上のこととは私にもわからなかつた。
パウル老もそれを感じたようで、釈然としない顔でローズの周りを観察していた。

だがやはり、原因はわからないようだつた。

「ふむう、いまいち集まりが悪いのよ

「す、すいません」

悔しげに唇を噛みしめるローズに、パウル老は優しく語りかける。

「なに、謝ることではない。初めての呼びかけじゃし、これから少しづつ慣れていけばよい。次は、セレスティ君。君は火と闇だったの。では、闇の精靈に呼びかけてみなさい」

「……はい」

正直あまりやりたくなかったが、指名されておきながら「できません」で終わらせる事はできない。なによりローズの手前もある。クラス中の視線が突き刺さる中、『必要最小限でいいから』と念じながら、小声で“彼ら”に呼びかける。

【……おいで】

その瞬間、教室は闇に呑まれた。いきなり真っ暗になつた教室内で、生徒たちは当然のようにパニックに陥る。

「いて！ 誰か俺の足踏んだろ！？」、「ちょ、誰よ今私のお尻触つたの！？」という苦情の数々が、あちらこちらから聞こえる。

(……やつぱりダメか。すまん)

心の中でそつと謝罪する。

なんとなくこうなるだろうとは予想していたが……不可抗力とはいえ、やはり自分にも責任はある。

最近私の周りには常に何かしらの精靈、特に火と闇の精靈がこつ

そり張り付いている。

どうやら私が目覚めたことを知つたらしい精靈たちが、呼ばれるのを今か今かと待つていて…ずっとスタンバイしているのだ。

きつとこれのせいだとは感じながら、来ててくれた精靈たちにほいつものよつに魔力を渡す。

『わーい、ありがとう!』とでも言つてよつに大はしゃぎしている精靈の姿に、喜べばいいのか、悲しめばいいのか…

「…」これはす「」のあ…しかし、ちと呼びすぎではないかの。お。これでは逆に危ないの…これ、皆落ち着きなさい」

真つ暗闇の中、パウル老のしわがれた声が教室内に響いた。

「すいません」

(また言われてしまつた)

以下の問題はこれだ。

“ やりすぎ” は、なにも精靈魔法に限つた話ではない。

現代の普通の魔法を使つても、その威力が一般的なものの数倍になつてしまつのだ。

例えば、この前など蠅燭に火をつけるつもりが、それを置いていた机ごと一瞬で蒸発させてしまった。

300年前は氣付かなかつたが、どうやら私は、細かい作業が苦手らしい。

ライルは「強いほうがかっこいいじゃん」とか言つて慰めてくれたが……つまりはコントロールができるいない証拠だつた。

それをこの2週間でまじまじと見せつけられた。

どうにも現代でいうところの古代魔法に慣れてしまつていいせいか、一発の魔法に込める魔力の量が異常に大きくなつてしまつのだ。だからたとえ発動はできても、その後の微調整ができない。

私は現代人にはない古代魔法を発動させるコントロールはあつても、発動させた後の、本当の意味でコントロールを持つていなかつた。

これは職業魔法士として生きていいくには、ある意味致命的な弱点でもある。

なぜなら魔物が少なくなつてゐる現代の依頼では、より緻密な魔法コントロールが求められることが多いからだ。

周りを気にすることなく、全力で魔法をぶつ放せばよかつたあの頃とは違つ。

現代で生きていくためにも、纖細な魔法コントロールを身につける。

これが今の私の目標だった。

(やはり、これからはコントロールの時代だな)

未だ周りが騒がしい中、アリアは一人腕を組んでうんうん頷く。

そうして、またしても思考の渦に沈んだ彼女は気付かなかつた。

「どうして、ですの……」

隣から聞こえてくる、絶望にも似たその声に。

4章 第1話「田中」（後書き）

今回サブタイトル思いつかなかつた（汗）

そんなわけで、やつと4章突入しました！

プライベートで忙しかつたのも、ようやく終わりそうなので、これからは、もうちょっと早く更新していきたいなあと思つています。

第2話「いつもの朝食」

「ローズの元気がない？」

「ああ。 というより、以前に比べて話しかけてこなくなつたといえぱいいのか……だから、その、何かあったのかと思つてな」

そつ、ここ数日あのローズマリア・ランシイ・ベルデットからの攻（口）撃がパツタリと止んでいるのだ。

今までが騒がしかつたせいか……その格差にどうにも調子がずれてしまつ。

あの毎日のように響く甲高い声に慣れてしまつと、今の静かな生活は何か物足りなく思えてしまうのだ。

どちらかといえば鬱陶しく感じていたはずなのに……人間とは不思議な生き物である。

そういう理由から今や日課となつている朝食の席で、こうして昔から彼女を知つてゐるライルに相談してみることにしたのだ。

「うーん、そう言われてみれば、確かに最近妙に物静かだよな。だけど、ローズに元気がないなんて、ハンバーグに肉が入ってないくらいの珍事だぜ……ちなみに、それつていつ頃からなんだ？」

唸るライルは本当に不思議そうに頭をひねつてゐる。どうやら幼馴染の彼にとつても非常に珍しい事態らしい。

『それハンバーグつて言わないんじゃ？』 という突つ込みはさておき、とりあえずここ最近の記憶を探つてみる。

「たしか……精靈魔法の講義を受けたあたりから、か？ うまく精靈を呼べてなかつたが。まあ、初めてだし普通だとは思うがな」

「ああ、あの時か……そのあとは、セレステイが精靈を呼びすぎて大変だつたな」

レストが一週間前の光景を思い出すよつに、しみじみと語つた。確かにあの後、暗闇が晴れると教室のあちこちがぐちゃぐちゃになつており、片付けるのが非常に大変だつた。

「うぐ、すまない」

レストは学校一の魔力保持者であると同時に、その他の分野でも常にトップを誇る秀才でもある。その彼に注意されても、反論の“は”の字も出せないのが当然だらう。

そんな自分達のやりとりを眺めながら、ライルが難しい顔のまま口を開いた。

「精靈魔法ね。もしかしたら、あいつ……」

「何か心当たりがあるのか？」

「ああ。ほり、ローズって上級クラスでは珍しく一つの属性しか使えないだろ？ それが昔からあいつの悩みでさ」

「そう言われてみればたしかにそうだが……」

確かにローズはこのクラスでは珍しく火の属性一つしか持つていない。

平民のニアでさえ土と闇の一属性を持ち、その他ではライルが風と火、レストは光と水、フィルは水と土、と見事に全員ばらついている。

しかし、それと今の話がどう繋がるのがよくわからなかつた。自分の頭の上にある疑問符に気付いたのか、ライルが話を続ける。

「まあ、とは言つても属性ばかりは自分の力じゃどうしようもないじゃん？だから、ローズはせめて火属性関連については、誰よりもうまくなろうと世から躍起になつてるんだよ」

「……ああ、なるほどな」

いかにも彼女らしいものの考え方だった。

「それにほり、この前アリアがすごい火属性魔法を使つただろ？？」

「あの机を数秒で灰に変えたやつか？」

レストがあの精靈魔法の少し前に行われた授業のことを行ひ返す。こちらも私のとつては耳の痛い話だつた。

「そう。それ以来、俄然やる氣を出してさあ。今まで火属性の魔法はローズが一番だつたからなあ。しかも、アリアは闇属性も持つているから、余計にライバル心燃やしているんだよ」

「そ、そうだったのか……だからあんなにじつじく話しかけてきたのか」

そして、あの微妙に喧嘩腰の態度もそのせいだったのか。私の苦笑

いを見たレストも、それに同意するように頷いた。

「私も彼女は少し苦手だ。他の女子ほどではないが、会うと何かとしつこい」

「レストは女全般が苦手なだけだ。まあローズは……いや、なんでもねーや」

何かをいいかけたライルは「俺が言つていいことじやないよな」と呴いて、そこで押し黙ってしまった。

そり、確かにレストはクラスの女子を避けている。

何やら結婚がどうこう言つていたが……まあ、私にはあまり関係なさそうだったため、そこは聞き流した。

ただ一つ言えるのは、貴族の世界といつのは、本当に複雑怪奇だと「いつ」といふことだ。

だがそういう事情とは無関係に、最近の彼は、私とミアといふ平民一人と話をするちょっと変わった王子になつていてる。

ちなみにミアがこの場にいないのは、彼女が自宅通いの生徒だからだ。

……ともかく、そのせいからは知らないが、私たちにはクラスの人間が話しかけてこない。

もつともこのメンバーと、ローズ、そしてフィルは例外だが。

王子が話しかけているからか、それともやはり平民だからか。理由はわからないが、一部の人たちは、なにやらそわそわしながらこちらをよく見ており、その一方で逆にびくびくしているグループもいる。

後者は主に女子が多いのだが、どうやらせよ話しかけてくる」とはない……全くもつて謎だった。

「あー、でもやっぱリアリ亞もそういう感じていたのかー」

それまで黙っていたライルが、両手を頭の後ろで組んで天井を仰ぎながらぽつりと呟いた。

「どうこの意味だ？」

聞こえたことは思わなかつたのか……少しぱつが悪そうに顔をポリポリ搔きながら、彼は言葉を続ける。

「あー、あこつか、誤解されやすいんだ。なんてゆーかな……つん、いわゆるシンドレットやつかな」

「“つん”でれ”？」

また新しい言葉だつた。

最近こういった語彙が増えるのが、楽しみの一いつもある。300年前にはなかつた言葉を使つて、自分がこの時代でできること生きている気になるのだ。

「そり、自分の気持ちをうまく表現できないんだよ」

「ふむ……」

(なるほど、ああいつのを“つん”でれ”といつのだな)

ローズの姿を思い出す。なんとなく意味もわかつたといつて、いつ

そぐ今度使ってみよつと齧かに心に決めた。

「まあ、アリアに声をかけているのは、何もライバル心からだけじゃない、ってことや」

「……よくわからなー」

では何のために話しかけてきているのか……今までこんな経験がなかつたせいか、ローズが何を考えているのか全く理解できなかつた。

「そのうち氣付くや」とライルは笑いながら言つが、ビリモ気になつて仕方なかつた。

だから、隣でさつきからアンパンに夢中になつていての第三者として、元気な意見を求めるみることにした。

「キラはまだつと思ひへ…」

「ふわにがでふくわ？」

「うーん、口に物を入れたまま話すな。ローズのことだ」

頬がパンパンになるほどアンパンを詰め込んでいたキラは、『ぐん』と喉を鳴らして、よつやくそれを呑みこんだ。

ただでさえ大きな皿に、山のように盛っていたアンパンは、私たちの会話の間にすべてキラの胃の中に収まつたらしい。

しかも、それらを完食したにもかかわらず、その皿はいままだ新たな獲物（甘いもの）を狙う狩人だった。

この小さな身体のどこにそんなに入れるのか……いや、そんなことよりも朝からこの量はどう考へても食べすぎである。

そういうえば、この前リボン先生から“糖尿病”なる恐ろしい病氣について教えてもらつたばかりだ。

神族にまで当てはまるのかは謎だが、そもそも普通の神族はいくら好物だからといつても、ここまで人間の食べ物を食べたりはないものである。

……もしかしたら、既にどこかに異常が出ているのかもかもしれない。

(やはりそろそろ食事制限をさせねばきか)

そんな私の恐ろしい思惑など知る由もないキラは、甘いものを探して目を光らせながら質問に答える。

「ああ、あの人は大丈夫ですよ。僕が保証します」

きつぱり言い切るその態度に疑問が生じるのは、当然といえば当然だった。

(そういうえば、ライルの時もこんな会話をしたな。あの時は確か…)

「……もしかして勘か?」

胡乱な目で聞いかければ、キラは不思議そうに首をかしげた。

「違いますけど」

「そりが、なら安心だ」

「なんでもー?」

それはもちろんキラの勘の場合、そのほとんどが、かなりの高確率で外れるからである。

そして、珍獸でも見るよつた田つきでキラの方を向いていたレストがその後に続いた。

「まあ、私も彼女は悪い人間ではないと思つてゐる。現に公爵家の長女として、王宮での評判はいい。それに、あの家は特に貧民層の支援に入れてゐるから、国民からの信望も厚いしな」

「うちもそこ頑張つてゐつもりだけビ?」

「ああ、そうだな。ディレイド公爵家も多額の資金提供と人出を割いてゐる。この一大公爵家を筆頭に今、わが国では貧民層の生活環境の改善や、浮浪者の削減に力を入れてゐるところだ」

「それでも、なかなかうまくはいかないもんだけどなー」

ライルは何かを思い出すように、遠いところを見つめている。
きっと私が初めて王都を訪れた時のこと。あの時の浮浪者のことを考へてゐるのだろう。

「そうだったのか……」

なんだか意外なところから、意外な話を聞いた感じだつた。

こういった話を聞くと、300年前はどうしても好きになれなかつたこの国も、少しだけ好きになれそうな気がする。

300年前の貴族といえば国民の税金を食い物にし、その全てを自らの保身と娯楽に費やしていたものだ。奴隸制度についても三度の

飯だけは保証されるが、そこに自由は一切存在しない。本当に、ただ人形のように言われたことだけをして生きているだけだ。

(そう考へると、これも皮肉な話……なのかもな)

奴隸制度を推奨した第一人者でもあり、私を地獄にたたき落としたあの極悪宰相と馬鹿王……の子孫であるライルとレストが、今度は弱者のために骨身を削つている。

時代が変われば人も変わる。わかってはいても、やはり時々違和感を感じるものだ。

唯一この気持ちを共有できる相手といえば、おそらくキラ一人だろう。

そのキラはといえば

「つ貴様！　それは私のだぞ！！」

「ふん、よそ見してるのが悪いんだよー

会話を取られた腹いせか、それともただ喰い意地が悪いだけか……リストのデザートを奪つてあっかんべーをしていた。

二人の和やかな？攻防戦を見ていると、なんだか真面目に考えていたのが馬鹿らしくなつてくる。

「ライル。これも“つんでれ”か？」

「…………ちょっと、違う…かな」

どうやら微妙に違つらしい。“つんでれ”はなかなか奥が深いよう

だ。

しかし、Jの一人、口では罵り合っているのも、なんだかんだで最近仲がいいと思える。

結局レストが「くつ……今回だけだからな」と書いてキラにデザートを譲ったのがいい例だ。

(喧嘩するほど仲がいい、ところがやつか?)

やはりキラの主としては、喜ぶべきことだろう。
その一方で少しだけ妬けたのは、Jだけの秘密だ。

「…セレスティ。使い魔のしつけはしっかりして……どうしてそんなにうれしそうな顔をしている?」

「ん? ああ。仲が良くてひらやましい、と思つてな

「違つ(います)」

「「ぴつたりじゃないか(じゃん)」」

私とライルの声も重なり、4人がお互い顔を見合わせる。
ライルが笑いだしたのを皮切りに、全員がそれぞれの笑みを見せる
…もちろん私も。

それ以降は、笑いが絶えることはなかった。

第2話「いつもの朝食」（後書き）

“おつりアウトですかね（汗）

明日にはもう1話投稿しようかと思っています。

第3話「誤解」

朝食を終え、キラと別れ、いつものように三人で教室まで行き、席に座つてカバンを開く。

ここまで、いつもと同じ朝の日課である。

だが、そこからはいつもと違つていた。

開いたカバンの中に、あるべき存在が入つてなかつたのだ。

… そういえば昨日はミアが部屋に遊びに来て、いつもやつている次の日の準備をすっかり忘れていた。

壁際に掛けられている時計に目を向ける。朝のホームルームまで、まだ時間はたつぱりあつた。

「ちょっと忘れ物をしたから、部屋まで取りに行つてくる」

「いってらー」

「時間はあるからゆっくつ行つて来ればいい」

そしてライルとレストの声を後に、部屋まで最短距離をのんびりと歩き始める。

それは数日前ライルが寝坊した際に、三人で走つたルートだ。

(あんなに走つたのは、魔王との決戦以来だつたな)

あの時の必死さを思い出して、つい一人で笑つてしまつ。今となつてはいい思い出だ。

… そして、がさがさと庭を突つ切つてゐる途中、偶然その光景を

目撃した。

【おいでなさい】

人気のない庭の隅で、唐突に凜とした声が響く。

(魔力の気配……あれは……ローズ?)

どうやら精霊魔法の練習をしているようだった。

今朝の話題の人物に早速遭遇するとは、運がいいのか悪いのか…

魔力をのせた言葉に願いを込め、ローズは目を閉じるように精霊を呼ぶ。

その横顔は真剣そのものだったが……残念ながら、結果はこの前の授業と同じだった。

(やつぱり……何かおかしい)

授業で見た時もそうだったが、精霊たちの動きが普通ではなかつた。どんな作用が働いているのかまではわからないが、ともかくあれでは精霊魔法とはいえない。

ちなみに地界の精霊たちの姿というのは、彼らと長い(私の場合は深い)付き合いをしていると自然と見えてくるものだと言われている。ただ、この学校では精霊魔法の使い手自体が少ないのもあって、彼らをぼんやりとでも視認できるのは、私やパウル老を含めて数人だ。

ローズはまだ目では見えないものの、その感触で失敗を感じたのか崩れ落ちるように地面に座り込み、そのまま草を強く握りしめた。

「どうして、できないの……私にはこれしかないのに……。」

「…………」

貴族らしい綺麗な指によつて引き抜かれた草が、パラパラと地面に散らばる。

……その姿は妙に印象的で、目に焼き付いて離れなかつた。

そのまま声をかけずに教室に戻つたものの、結局その日の授業には全然集中できなかつた。

右斜め前に座るローズの背中が、過去の自分と、何か同じものを背負つている気がしたのだ。

「さて……つまぐいくかな」

放課後、寮の敷地の片隅で、周囲に空間を遮断する結界を張り準備する。

彼女は地界に呼ぶだけでも相応の魔力を必要とする存在だ。

だから魔力が足りるかどうかが一番の問題だが……この3週間でまた少し魔力が回復している。おそらくぎりぎり呼べるはずだ。

意識を集中させ、この前の授業で勝手に拝借した魔力を底上げする魔石（効果は微々たるものだが）を片手に、ヴィシア式魔術を発動する。

【ヴィル・ミクン・ゾルギア・ギュイ・フレイランス（来たれ 灼熱の乙女 炎の祝福を 今我が手に）】

ポツと、小さな炎が空中に現れ、それを合図に地界にいる火の精霊が集まつてくる。彼らの女王を迎えるためだ。

炎は徐々にその勢いを増し、自分と同じくらいの背丈にまで成長した時点で、段々と人の姿を形作る。その周りでは火の精霊たちが情熱的に舞い踊り、心なしか周囲の温度も上昇してきた気がする。そして……宙に現れたのは炎の化身。その圧倒的な存在感に周囲の空気が震える。

見た目でいえば18、19歳くらいだろうか……気の強そうなつり上がつた臍脂色の瞳、深紅の髪は一つに結いあげられ、背中には炎の翼と、全身赤尽くしの女性だ。

外見こそ若いが、その圧倒的な美貌と古風な鎧を纏う姿は、まさしく戦女神と呼ぶにふさわしい威厳と自信に満ち溢れていた。集結した火の精霊たちは、おおよそ300年ぶりに凱旋した女王の姿に狂喜乱舞している。

そう、彼女は聖獣・神族以外の天界に住む最後の存在であり、属性の頂点に立つて天界を統べる者。

それぞれの土地を統括している6大精霊の一角、火の大精霊だった。

「遅い…… 一体何百年待たせる気！？」

「…………第一声がそれか、フレイア」

さて、何から話そつかと思案していたのに、どうやら無駄骨に終わつたようだ。

それでも……腰に手を当て上空からじゅうじゅう睨みつけるその姿は、ひどく立腹の様子である。

「あたりまえでしょ！　あなたが魔王とやり合って死んだって聞いた時は、本当にびっくりしたわ！！　どうしてあの時呼ばなかつたのよー？　私たち全員殺る気満々で準備していたのに……！」

話しているうちにヒートアップしてきたのか……背中の翼もその火力を増し、周囲の温度もつなぎ上りに上昇中だ。
なにせいつも勇猛果敢な火の精霊たちでさえ、女王の癪癩に若干距離を置き始めているほどだった。

腰が引けてしまつたのを誰が責められよつか。

しかも

(殺る気満々で準備つて……)

なんだか恐ろしい言葉を聞いてしまつた。

大精霊たちが殺る気満々で準備？……想像できてしまつのが逆に怖い。

……だが、ここで引き下がるわけにはいかなかつた。

「あれは人間と魔族の対決だ。精霊は中立の存在だろ？　いくらなんでも巻き込むことはできない」

そう、天界にも地界にも存在する精霊は、古くから中立の存在としてその地位を確立してきた。だから最後の最後で彼らの力を借りないのは、自分なりのけじめでもあつたのだ。

なにより……最後の魔王との戦いは、いくら大精霊といえどもその存在が危ぶまれるほど激しい戦いになることが予想された。
最悪死ぬのは自分一人で十分、という思いもどこかにあつたのは事実だ。

「嘘つきなさい、死にたがっていたくせに！　おかしいと思つたの

よね『今まで世話になつた』とか急に言うから！ 理由を聞こうとしたら強制的に還されるし！！ 私たちがどんな気持ちであなたの訴報を聞いたと思ってんの！？ まったく、その強情な性格どうとかしなさいよね！ それにね、はるか昔 はともかく、少なくとも魔族は300年前から精靈も喰うようになつていたわ！ つまり私たちの仇敵よ！ついでにいうと私たちだって格下の聖獣や神族に手柄を取られちゃ天界で立つ瀬がないの！！ おわかり！？

「あ、ああ……」

ものすごい勢いで捲し立てられ、つい頷いてしまう。それにしても、まさかそんなところまで知られているとは思つてもみなかつた。

“死にたがつていた”……確かにそうだ。あの時の私は早く罪の呪縛から逃げたくて、死という自由を密かに求め続けていた。大精靈に助力を求めなかつたのも、それを止められたことを危惧していたのかもしれない。

……こうして言われて、初めて氣付く。
300年前の私は、いつもやつて残される者の氣持ちなど全く考えていなかつた。

(アスト王妃…… マリア……)

あの一人は私が死んだと知つた時、少しは悲しんでくれただろうか。答えてくれる声はなくとも、確かめる術がなくとも……それでも、思わずにはいられなかつた。

「……にしても、本当に生きてるとはね。チビどもから聞いた時は、眉唾物だと思つていたけど…… 一体何があつたのよ？」

「ん？ ああ、実は……」

少しクールダウンしたフレイアに、簡単にこれまでの経緯を伝える。

「へー、そんな偶然もあるのねー。まあ、私たちにとつては好都合だからいいけど。……ああそうだ。闇以外のやつらが荒れてるわよ。あんたが火と闇以外の精霊を呼ばないし、魔法も使わないから。まあ、私は火だからそれでもかまわないんだけどね。そんなわけで天界じゃ今、大精霊同士が大ゲンカ中よ。さつきも水の奴と一緒に戦ってきたばかりなんだから」

そんな戦いが勃発しているとは知らなかつた。

……もし、大精霊の中でも最も気の短いフレイアを省いていたら、天界が大惨事になつていたかもしない。その点だけは幸運だろう。ただ、もう一人気性の荒いことで有名な風の大精霊の存在が気がかりだつた。

寡黙だが心の優しい闇の大精霊が餌食になつてないか……少し心配だ。

「ま、まあ、ほどほどにな。私の方はそういう設定だからどうしようもないんだが……そうだ、できればあまり大勢でこないでほしいと配下の精霊に言つておいてくれないか？ どうにも威力が強すぎてな……」

「それはしようがないじゃない。あんたと久しぶりに会えてチビたちも喜んでんのよ。あれでもあんたに限つては、ちゃんと順番待ちしてるのよ？ みんなあんたの魔りよ……じゃなくてあんたに会いたくて仕方ないのよ。……ていうか魔力少くない！？」

(……結局魔力目当てか?)

今度から精靈との付き合い方を見直すべきか…悩むところだ。

「……魔力は、封印の影響で少なくなっているんだ。そのうち元に戻るや」

「それは良かつたわ！ あんたの魔力本当においしいのよねー！ 一度あれをもらうと、もう他のどこにはいけないわー……ところで、その極上の魔力をもらっているあんたのどこを使い魔はまだありますに来ないのね」

獲物を狙うハンターのよつな目つきであたりを見回すフレイア… キラがこの場にいなくて正解だったかも知れない。

「あー、正式な契約を結んでないから、魔力をあげているわけではないのだがな……まあ、ちょっとした用事を頼んでいるんだ」

本当はただ大精靈に会つのが嫌らしく、毎回逃げているのだが…理由はよくわからない。

天界に帰りたがらないこととなにか関係あるのかもしけないが… とりあえずこれ以上追及されないためにも、話題を変えることにする。

「……えーと、契約といえば、今は一人につき一匹だけらしいな。いつの間にそんなルールが決まつたんだ?」

「ああ、それね。あんたが例の封印をしてからすぐよ。人間が魔族との戦いのために馬鹿みたいに呼ぶから、こっちで規制かけること

にしたの。ついでに、よく知らないけどある時期から複数の使い魔を呼べるほどの資質を持った人間が異常に少なくなつてね。なんか人間も私たちみたいに属性決まつたらしいし……まあ、自然な流れでそうなつたのよ」

「そうだったのか……じゃあ、本題なんだが

「今さら!? もう、仕方ないわね。なんなのよ?」

私自身もすっかり忘れていたが、今回フレイアを呼び出したのは彼女に起こっている不可思議な現象について訊くためだつた。

「ああ、ある少女についてなんだ……」

そして、ローズの精霊魔法について今までの状況も含めて説明する。フレイアは話を聞くにつれて、その顔をニヤニヤしたものへと変えていき、最後には握りこぶしを口の前でつくつて、意味ありげにこちらを見てきた。隠された口元は弧の形をえがいているに違いない。

「ふーーん」

「なんだその反応は?」

「いいえ、あんたもようやく他人に興味を持つようになつたと思ってね」

「…………悪いが?」

少し恥ずかしくなり、視線を逸らしながら言い返す。

「いいえ、むしろいいことよ。私たちもあんたの無頓着具合にはやきもきしてたのよ。興味を持つてことは、それだけ現世に執着を持つってこと。そして、それが生きる原動力につながるのよ」

「そうか……そうだな」

やはり随分と心配をかけていたらしい。
今まで心配をかけた分、これからは彼女たちを裏切らないように前を向いて生きていこう。

「大丈夫だ。もう自分から死に行くような真似はしないと誓おう……それで、どうなんだ？」

「例の子ね。さつき調べさせたわ。あんたほどじゃないけど、なかなかおもしろい子よ」

「“おもしろい”とは？」

「ええ、つまりその子はね…」

「火の精霊に愛されているんだ」

「……どういう意味ですか？」

翌日、昨日と同じ所で練習をしていたローズに話しかけた。

彼女は唐突に現れた私に、最初は不信感を抱いたようだが、話が精霊のことだとわかると、その表情はすぐに真剣なものへと変わった。

「ローズの魔力とその気性は火の精霊たちと相性がいい……」
「……より良すぎるんだ。だからローズが呼び掛けると、彼らは一斉に集まる。そうすると、狭い入口に精霊たちが殺到しすぎて“つまつて”いる”状態になってしまふんだ。それがうまく精霊が集まらなかつた……」
「……というより、そういう風に見えていた原因だ」

「そう、実際精霊は集まっていたのだ。ただ、一つの場所に集まりすぎて重なって見えていただけである。彼らはもともとはつきりとした形を持っているわけでもないので、気付かなくとも無理はなかつた。

どうやらローズの激しい？気性は、火の精霊のお氣に入りらしい。

「せつ、でしたの……では、どうすればよろしいのですか？」

「今まで周囲にいる精霊全てに呼びかけていただろう？それをやめて、まずはある一定方向にだけに呼びかけてみればいい。そうすれば許容量オーバーで入口がつまることもなくなる

「一定方向……」

「本当は入口を広く作って、集結した精霊を自分の周囲に均等に拡散させるのが一番なんだが……」
「これは慣れてないと難しい。まあ、普通はそれが必要になるほど精霊は集まらないものなんだ……そちらは、おいおい慣れていけばいいわ」

「……」
「そう、精霊魔法は確かに精霊の力を借りる魔法ではあるが、実はその効力は全て術者を経由して現れている。術者が魔力をのせた言葉で呼びかけ、精霊はそれを目印に集まる。その時、実際精霊がその力を発揮するには、術者が無意識に展開している魔力の通り道を経由する必要があるのだ。

実際は精霊たちが勝手に通つて行くので、ほんどの魔法使いはそれを意識する必要がない。ただし、今回のように異常な数の精霊が集まる時は、どうしてもその入り口を広げるための訓練をしなければならなくなる。教科書にはのつてない知識だ。

これは、よくよく考えれば、自分も昔一度通つた道であつた。今でこそ無意識に入り口を広げているが、最初の頃は今のローズよりひどい状態で、精霊魔法の才能がないとさえ思つていたほどだつたのだ。

その時は、実はいろんな属性の精霊が狭い入口に一斉に集まつて、つまると同時にそれぞれの効力を相殺していたらしい……それも300年前大精霊を召喚して初めて知つたことである。

ともかく、そう考へると、ローズの苦労もよくわかるものだつた。

「それと、ここまで好かれる人間は、なかなかいらないらしいぞ。入口を広げるコツさえ掴めば精霊使いとしては、かなり上位を狙えるそうだ」

なんといつても火の大精霊のお墨付きである。つまりローズは、普通魔法も含め、火属性のエキスパートになれる将来有望な魔法使いということだ。

ちなみに、「じゃあ私はどうなんだ?」とフレイアに訊いてみれば、「あなたはただでさえ、精霊に好かれてるのに、極上の魔力までくれるから、ホントいいカモ……じゃなくていい魔法使いよ。まあ、なんたつて大精霊の私たちまで呼べるんだからよっぽどよね」という、いろんな意味でショックを受ける回答をもらつた。

私の話を聞いたローズは、半信半疑のか顎に手をやりながら、「

「一定方向…入口…広げる…」など一つ一つを確かめるよつと騒ぐ。

「……とにかく、どうしてそんなことを知っているんですの？」

「あー、それは私も昔同じ状態だったからだ。今は改善してるがな」

「……でもこの前は精霊の呼びすぎで怒られていませんでした？
あれは入り口を広げすぎているのではないんですか？」

痛い所を突かれた。

「うう…そ、それはだな。入口を広げるのはできるんだが、狭める
のが苦手でな…どうにも変な所で不器用らし…」

そもそも今まで狭める必要性がなかつたという理由もある。

それに、例え狭めることができたとしても、せっかく来てくれた精
霊を玄関先で追い返すというのは、どうにも良心が痛むのだ。
さらにいえばライルを助けた時に力を借りた火の精霊たち…彼ら
にも後日きつちり魔力をあげたのだが…そこから私の目覚めと、
「おいしい魔力がもらえる」という噂が精霊たちの間に浸透してい
るらしく、現在も順番待ちをして呼ばれるのを今か今かと待つてい
るらしい。なんとも頭の痛い話だ。

じゃあ、魔力を渡すのを止めれば少しは改善されるのではないか、
という話なのだが…300年前からの習慣であり、また”借りた
ら返す”という私の信条もあって、そちらもできなかつた。

こちらはいろいろと情けなさ過ぎて、ローズにはとても話せなかつ
た事情である。

「ふつ、なんですかそれは…変な人ですわね

私の苦しい言い訳は、どうやらローズのツボに入つたらしい。あんまりにも笑うものだから、私も少しムツとして言い返す。

「そつは言つが、ローズも十分変な人間だと思つぞ。貴族のくせして平民にやたら構つし、そのくせ言つてくることは貴族らしい尊大なことばかりだしな。一体何がしたいのかさっぱりわからん」

もつなるようになれと思い、今まで思つていたこと素直にを暴露する。

だが……てっきり怒ると思つていたローズの反応は、ある意味予想外のものだった。

「そ、そういう風に思われていたのですか？！」

彼女はショックだと言わんばかりに、狼狽した表情を見せる。

「……無自覚だったのか？」

「え、ええ」

……どうやら私たちの間には何か誤解があるらしい。

(“言られて初めて気付くこともある”か……)

昨日の自分がいい例だった。

「せうだつたのか…じゃあ、正直に言わせてもらひつぞ

そこからは一人で授業をサボり、お互の心情を暴露し合つた上で、

ローズの訓練を手伝つた。

腹を割つて話さなければわからないこともある……生まれて初めてそれを知つた日だつた。

そして、もう一つ思つたことは……300年前も、もつとアスト王子やマリアと話しておけばよかつた、ということだ。

彼等との間に誤解があつたかはわからないが、きっとお互に言い残した言葉があつたはずだ。こうして死んでしまつては何も伝えることはできない。

たとえアスト王子に拒否されても、マリアに恨まれていても、それでも勇気を持つて話せば良かつた。

(……もしあの時に戻れたら)

そうして、ローズと散りゆくユスラの花を見つめ、変えることのできない過去に思いを馳せるのだった。

第3話「誤解」（後書き）

そんな感じでローズと和解しました。
個性あふれる大精霊は、これからもすよ～すよ～こと登場していく予定です。

次はミア視点が入る……かな？

第4話「和解」（前書き）

更新遅くなつてめっちゃすみません（滝汗）

実は風邪にやられまして……久しぶりにひくと悲惨ですね。

皆さんもお気をつけください。

今回は予告通りニア視点です。
ちょいと長いかもしません。

第4話「和解」

「じゃあね、ミアちゃん
「うん、バイバイ」

最近、いつもやつてクラスの子ともあいつを交わせるよつになつた。これまで、あの公爵家のお嬢様のお氣に入り?として認識されていたらしく、そのせいで声をかけづらかつた……つて聞いた。

ベルドット公爵家といえば国内でも最上位の家格。しかも、その一人娘が、かのローズマリア様。

鞆蹙を買つような真似をすれば、自分の家にどんな影響が出るかわからない……そんな理由から、彼女にからまるる?私を“かわいそな平民”と憐れみながらも遠巻きに眺めていたらしい。

そわそわしながらよくこつちを見ていたから、いつたい何だらうつて不思議だつたんだけど……まさかそんな事情があつたなんて。

貴族も案外大変なのね。

そんな彼らのそわそわが解消された理由は、もちろん件の公爵令嬢様にある。

この頃のローズマリア様は、ちょっとお変わりになられた気がする。

前は（相手が身分差に萎縮していたせいもあるけど）一方的にまくしたてる感じだつたんだけど、最近は随分と落ち着かれて、なんていうか……思慮深くなられている。

そのせいもあつてか、ある日を境に私にも前ほど話しかけてこなくなつた。

時々何かを言いたげに私の方を見てくるんだけど、結局何も言わないままその日が終わる、つていうパターンがここ数日続いてたりする。

ものすぐ気になるけど、じつちから話を振るのもなあ、と思つて私も何も言えず……時間だけが経過しているのが今の現状。

でも、そんな経緯もあって、ここ数週間はクラスに来るのも嫌じやなくなってきた。

最初の頃、アリアが転校してくる前は、本当毎日が憂鬱で仕方なかつた。

平民は一人だし、友達はできないし、公爵令嬢様はしつこいし……そんな不平不満の数々を発散する場もなくて、ただひたすらこの特異体質を恨んでいた気がする。

自分で選んだ道なのにね……これも、若氣の至りつてやつかな。

そもそも平民の私が、貴族だらけの上級クラスに進学できた最大の要因は、この特異体質にあつた。

それは成長とともに徐々に魔力が増えていく体质。

普通の人は生まれた時から魔力量が決まっているものだけど、数万人に一人の確率で私のような身体の成長に合わせて魔力量が変動する人間が現れる。原因はわかつていらないらしい。

私の場合、ここに入学した時は上級クラスにあがれるほどの魔力はなかつたけど、初級クラスを卒業して中級クラスへの進学時、この特異体質が判明した。

そして、中級クラスを卒業する時量つてみると、ぎりぎり上級クラスにあがれるまで、魔力は増えていたってわけ。

それでも最初は行くかどうか迷った。

上級クラスはいわば貴族のクラスだし、私以外で上級クラスにあがれる平民はないとも聞いていたから。

でも上級クラスを卒業すれば、職業魔法士としての道は確実に開ける。

そうやって魔法士になって得たお金があれば、弟たちにちやんとした教育をさせてあげることができ……それが決め手だつた。

私の家には、母とまだ幼い4人の弟たちがいる。

父が数年前に死んで、母はその分家事をしながらも、私たちのために毎日汗水たらして一生懸命働いている。

私自身もアルバイトはしているけど、やっぱりそれだけじゃ足りないし、日々の生活を送るだけで精一杯だ。

かわいい弟たちの将来のためにも、私は立派な就職先を手に入れなきゃいけない。

だから、2年我慢すれば……という思いで上級クラスへの進級を決めた。

でも、やっぱり現実は甘くなかった。

なんとか知らないけど、来て早々公爵令嬢様に田をつけられ、付きまとわれる日々が続いたのが、その何よりの原因。

嫌みにしか思えないどうでもいいことを報告してきたり、アリアが転校してきた日もわけのわからない自慢話（？）みたいなことを延々と聞かされた。

一体私にどんな反応を求めているのか……やっぱりだった。

でも相手はやんごとなき身分の御方だし、下手に扱おうものなら何をされるかわからぬ。母や弟たちのことを考へると、怖くて何も

言い返せなかつた。

これが下町の同年代だつたら、ズバッと糾弾できるんだけど……それができない自分が悔しくて、どうしようもなく慘めだつた。

……そんな神経のすり減つていいく毎日だつたから、アリアが来てくれた時は本当にうれしかつた。

平民が来るつて聞いてたから、ワクワクして待ちかまえていたんだけど……最初見た時は、あんまりにもきれいだつたから天使がやって来たのかと思つた。

それはもう背中から後光が見えちゃつたくらい。

真っ直ぐ伸びた黒髪はすっごく艶めいていて、紫の瞳は宝石みたいに綺麗で……顔もどこの女優さん? つていうくらい整つていた。その上、古代魔法まで使えるなんて……すごすぎてもう同じ人間とは思えない。

古風な上に男っぽい話し方も、なんでかとても似合つていて、本当にからなにまでうらやましきすぎた。

“天は一物を与えず”って言つけど、あれ絶対ウソだよね。不公平だよ神様。

しかも私と同じ年なのに恋人がいるときた。

もう、いろんな意味で完敗……ていうか不戦敗だつた。

まあ、その“恋人”を紹介された時は「シヨタコン!？」ってつい叫んじやつたんだけど。

幸か不幸か一人とも意味がわからなかつたらしく、首をかしげていた。

「ええと、年少の男の子と仲良くなれる」とよー」 ってなんとか「ま

かしたけど、今じゃその発言を、ちょっとだけ後悔してる。

だってアリアってば新しく覚えた言葉をすぐに使いたがるんだもの。変なところで使われたら……多分責任とれない。

ああ、想像するだけで恐ろしい。

今度からは気をつけよう。

もつともキラ君は、見た目があれでも神族だから年少ってことはないはずだけね。

でも誤解もあつたけど、たとえ恋人じゃなくとも一人の絆は強いと思う。

お互いをすこしく大事にしているのが、傍からでもよくわかるもの。この前部屋に遊びに行つたら、同じ部屋で寝泊まりしてゐて聞いてすごくびっくりした。

普通使い魔でも同じ部屋で寝泊まりしたりしないはず……まあ、そもそも常に地界に顕現している使い魔が珍しいんだけど。

しかも洗面台の所にアリアの字で『菓子を食べたら歯磨き15分!』って書いてあって、つい笑っちゃった。

私も使い魔とこんな関係を築けたらなあ、って密かに目標にもしてたりする。

そのアリアたちは、これまでずっと森で暮らしていたらしい。

住んでいた家が火事で焼失して、なんやかんやでライラック様と出会つて、この学校に編入することになつたらしけど……一連の話を聞いてみると、アリアがすんごい天然だつてことに気が付いた。

最初は外見が人間離れしていたから、その分人間くさい面があつてちょっと安心……とか思つていたけど、こつちはこつちで神がかつていた。

だって、特定のお相手=パートナー=使い魔つて……かなりぶつ飛んでるよ。

極端から極端にいくつていうか、誰でも知っているようなことを知らなかつたり、その一方で誰も知らないような昔の知識を持つつたりつていう、ものすごいアンバランスぶりだつた。

そのせいか彼女の隣では、常にハラハラドキドキが止まらない。初めて我が子をおつかいに出す親の気持ちって、きっとこんな感じだろうなあ。

そもそも私がこうなつたきっかけは、転校初日に勇気を出して彼女に話しかけた時にあつたと思う。アリアを“美人”って評する私に対し、「ニアの方がかわいい」と言われた時のこと……。それはよく女子がする社交辞令のような“かわいい”じゃなくて、本音でそう信じている感じだつた。

あの時は誓つた。「守つてあげなくちゃ」つてね。
美少女だけど天燃つて……うん、これ絶対男子の大好物。
これは同じ平民として……ううん、このクラスでできた初めての友達として、何としてもこの天然少女を守つてあげなきやつていう気持ちになつた。

人間守る対象ができると強くなるもので、それまでは自分のことでもんもんしていたけど、その日を境にやる気がみなぎつてきた気がする。

だから同じことを考えていたキラ君ともすぐ意気投合して、会つて数秒で『アリアを守るう同盟』を結ぶほどだつた。

もつとも私は、アリアに一般常識を教えて注意を促す程度で、キラ君ほどテンジヤラスな活動はしないんだけどね。

アリア至上主義のキラ君は「『ご』主人様をいじめる奴は、僕がいじめてやる」と頼もしい（？）宣言をしていて、実際その通りに活動している。

最近“彼女たち”がおとなしいのも、キラ君が頑張っているおかげだ。

アリアは気付いてないようだけど……このクラスには”王子様至上グループ”っていうのが存在して、レストシア様に近付く女には容赦ない制裁を加えている恐怖のいじめっ子集団を形成している。アリアは転校初日の騒動はもちろん、それ以外でもよくレストシア様と話すことが多いから、これ以上ない格好の標的になっていた。だから私も心配していたんだけど……その心配はいつの間にか杞憂に終わっていた。

私もこの前偶然目撃したんだけど、アリアの教科書を隠そうとしていた例のお嬢様達の一人に、キラ君が殺氣を滲ませながら“警告”していたのだ（もちろんアリアのいないところでね）。

魔法で影を固定して動けないようにしながら、「次やつたら、お嫁にいけない顔にするからね」と笑顔で脅していた。

口元は綺麗な弧を作っているのに、目が全く笑っていなかつた。当事者じゃなくてもビビるほどのそれ。ましてや当人は、ガタガタ震えながら、辛うじて動く首を上下にブンブン振るだけで精一杯だったようだ。

キラ君…………恐ろしい子！

純朴そうな見た目に反してなかなか黒いわ。

アリアは「遊び相手と一緒に悪いことをしてるので？」とか不安に感じているらしいけど……正解は“それぞれが悪いことをしてる

”です。

どつちにじる話せません。

プライベートが必要とかすゞく苦しい言い訳しちゃったけど、これじゃ仕方ないよね？

ちなみに最近私も王子様達と話すようになつたけど、そういうつた被害は受けていない。もしかしたらこれもキラ君のおかげかもしだい。

貴族だらうが容赦しないその手際は、既に学園で隠れた恐怖の代名詞として名を馳せている。

まあ、私はビクビクしているグループは（多分）皆一度キラ君の肅清を受けた子なんだらうなあ、とか思いながら今日も平和に学園生活を送っています。

でもそんな腹黒ツ子にも負けず、一人だけ未だ懲りてない人がいたりする。

それはとある伯爵家のお嬢様で、階級主義が服を着ているような人なんだけど……”王子様至上主義グループ”のリーダー格で、非常にプライドの高い、典型的な貴族ともいえる人だつた。この人だけは飽きもしないで、嫌がらせをしよう（もちろん王子様にはばれないように）と躍起になつてゐる。

自棄になつて変な事しなきやいんだけど……少し心配だった。

その他、アリアに盛大なポエムを送つていた伯爵家のフイリック・ダン・リンメル様については、「あれはただの馬鹿。基本無害だから、ほつといても平氣」って言つてたつけ。否定できないところがすごい。

あの公爵令嬢ローズマリア様についても「悪意がないから大丈夫」って話してた。

そうなのかなあ？でもキラ君の見る田は確かに思ひ、もしかしたらそつなかもしれない。

……ていうか、今更だけど、ビijoから見ているんだろ？・キラ君授業とか出てないよね？まあ、キラ君のことだからどんな手段を使つていてもあまり驚かないけどね。

そんなこんなで、アリアが来てから随分と私の学園生活も変わった気がする。

この国の第一王子であられるレストシア様や、ディレイド公爵家の後継ぎであるライラック様といった貴族の方々とも話すよひになつてきたのが、一番の変化だ。

正直例え同じクラスでも、生きているうちに彼らのよつ最上位の身分の方々とお話しする機会なんて絶対ないと思つていたけど……それもこれもアリアのおかげだと思つ。

ライラック様はとても陽気なお方で、「ライルって呼んでくれ」つて言われたんだけど……さすがにアリアのよつに呼び捨てにはできないから、恐れ多くも“ライル君”って呼ばせてもらつている。

レストシア様は（王子様至上主義グループのせいもあつたけど）滅多に女性と話されないから、てつわり女嫌いなのかと思つていたけど、どうやら違つらし。

昼食を一緒に取るようになつてからは、それがよくわかつた。

王子様とお話するなんて、夢のまた夢だと思つていたけど……想像していたより随分気さくな方で「学校にいる間は、同じ級友だ。身分は関係ない」つておっしゃられた。

キラ君とも仲良し（？）らしく、時々一人でじやれているのを見かける。

いつもつまらなそうにしてたレストシア様の表情が豊かになつたのも、もしかしたらアリア達のおかげなのかもしれない。

ちなみに呼び方はさすがに「レストシア様」にしてる。ちょっと嫌そうな顔をしていたけど、庶民代表としてこればかりは譲れない。

ついつい敬語も使っちゃうけど、この方たちに対しては、それも仕方ないかなと諦めている。

そんな感じで、私の貴族に対する偏見もだいぶ薄まって、今までのようには必要以上に緊張することもなくなった。

あいさつを交わすようになった子たちも、あまり貴族としての位が高くないせいもあるのか、平民である私にもフレンドリーに接してくれる。

でも、あの公爵令嬢様とだけは、いまだよくわからないギクシヤクした関係が続いていた。あの人の考えていることだけは、本当にわからない。

王子様至上グループのように、これ見よがしなイジメを仕掛けてくるわけでもなく、かといって上位貴族にありがちな平民を無視するわけでもなく……一方的に話してきて、ある程度満足したら去る、という謎の行動パターン。

あの行動の真意が全く理解できなかつた。まあ、公爵令嬢様のやることなんて、所詮庶民には理解できないものかもしれない。

でも、最近その公爵令嬢様と親友の仲がいい、というのが私の不安に拍車をかけている。

最初は私のように、付きまとわれている感じだつたから、気をつけるよう注意をしていたんだけど……この頃はアリアの方からも積極的に話しかけて、なんだか一人で楽しそうにおしゃべりしているの

だ。

この前一人が揃って学校を休んだ日があつたけど、多分その日から二人の関係に変化が生まれた気がする。そんな親友が心配といえば心配だつたし……それ以上にちょっと悔しくて、妬いていた。

(アリアの初めての友達は私なのに……)

だから今日こそは勇気を出して、その真相を訊こうと決めていたのだ。

「ねえアリア、ローズマリア様と最近仲良いよね？ 何かあつたの？ まさか無理やりとかじや……？」

我ながら『やすがにそれはないだろ』と思しながらも、一応問い合わせてみる。

案の定アリアは「まさか」と否定した上で、こう切り出してきた。

「アリア……ローズはな、“つんでれ”なんだ」

「……ツ、ツンデレ？」

「そう、自分の気持ちがうまく表現できないんだ。だから――」

どこか得意げに語っていたアリアは、不意に何かを思いついたように、ある人の元まで歩いていく。

その足の先にいたのは……件のローズマリア様だった。

一人はしばらく何かを話し、その後ローズマリア様はひどく強張つ

た（私にはそう見えた）表情でこちらを見てくる。

そして、おひのじかにひがひかへ（私は……以降）
闊歩してきたのだ。

數を突いたら、公爵令嬢が出てきた。

あの恐ろしい形相、絶対何か怒っている。

打ち首獄門を覺悟でこのままの場に居座るか、それとも今逃亡し

ノミニテモアリ

「眼鏡を求めるにはアリバを見つめても
いいばかりで全く役に立たない。」

まさかの裏切りに泣きそうになりながら、究極の一招が頭の中でケルグル回る。

(逃げる、戦う、逃げる……) ここに戰うのがやがてへ。

そんなくだらないことを考へてゐるうちに、気付けば目の前にその人物がいた。

銀灰色の長い髪に、印象的な薄紅色の瞳。

小奇麗な格好に身を包んだ彼女は、貴族らしい威厳のある佇まいを持つていて……以前の私は話しかけられるたびにひどく緊張していたものだつた。

(一
体何を言われるんだろ。.)

死刑判決を待つようにビクビクしながら彼女の顔を窺う。

目の前のローズマリア様は、何か逡巡するようなそぶりを見せた後、慎重に口を開いた。

「やの//アヤん……」

「はーー。」

「私、あなたに謝らなければいけないことがありますの」

「…………はい？」

まさかの発言に自分の耳を疑ってしまった。

(私が謝るんじゃなくて?)

思わずそつ言こやつになるのを押さえ、言葉の真意をはかりつつ必死に頭を回転させる。

だが、その後も益々頭を混乱させるよつた“謝罪”は続いた。

「あなたに不快な思いをさせてしまって、申し訳ございません。よかれと思って話しかけたのだけれど、逆にあなたにひとつは」迷惑だつたようですね。私のせいであなたと窮屈な学園生活をさせてしまつたよつで……」めんなさい」

そつ言つて頭を下げる。

これには教室に残っていたクラスメイトたちもびっくりだ。

だってあのベルドット公爵家の令嬢が平民に頭を下げたのだから。

「え、ええ……えええ?」

未だ状況を理解できない私は、意味を成さない言葉を発するのが精一杯だった。

それを察したのか、ローズマリア様は恥ずかしそうに言葉を重ねた。

「私ども人の心というものがわかつていなかつたらしくて。最初クラスで平民はあなた一人だと聞いた時、それではさぞ心細いだろうと思いましたの。

貴族と平民ということで双方に壁もあるかと思いました……

それなら、公爵家の私が率先して話しかければ、他の皆さんもそうするだらうとばかり考えて……でも、どうやらそれは間違いだつたようですね。

しかも、私は自分のことばかり話していく……その言い方にしても、貴族としての物言いに慣れていいたせいか、あなたにとつては御不快なことばかりだつたでしょう。

どうか浅はかな私を許してください。

今まで誰もそんなこと教えてはくださらなかつたから……いいえ、これでは言い訳ですね。アリアさんが言ってはださらなければ、私は一生気付かないまででした。傲慢でしたわ」

その長く重い独白に、私の頭はハンマーで殴られたような衝撃を受けた。

確かに平民である私に、最初に声をかけてくれたのは彼女だった。

わかりにくかつたかもしれないけど、よく考えれば悪意がないことくらいすぐに気付けたはずだ。

(私つてば……もしかして馬鹿?)

勝手に付きまとわれているとか被害者面して、優しさに気付けなかつた。

公爵令嬢という表面だけを見て、深い人間性まで見ようとはしていなかつた。

何もわかつていなかつた。自分のことばかり考えていたのは私の方

だ。

「ローズマリア様……どうかお顔をあげてください。その、申し訳『これこませんでした！』そのよつなお気づかいをして下さっていたとは、露とも気付かず……私の方こそ、その、『めんなさい！』

「いいえ、私がわかりにくいことをしたのがいけないのです。私もいつもこんな風に失敗していたのですね。ようやく貴族以外の友達ができる理由がわかりましたわ」

その堂々とした宣言に、つい笑ってしまいそうになる。
多分公爵家という高い身分もあって、今まで誰も彼女に正面から物言える人がいなかつたんだろう。私みたいに。

(ああ、こんなに気持ちのいい人だつたんだ)

この人なら大丈夫だと私の勘が告げていた。
キラ君のは全然当たらないそうだけど、私の勘はなかなか外れないのだ。

「あの……よろしければ私と友達なつてくださいませんか？」

「まあ、本当ですか！？ 喜んで！」

とてもうれしそうに話す彼女は、アリアに続いて2番目の平民友達ができたことに歓喜し、そのままひとつのお願いをしてきた。

「ねえ、できれば愛称のほうで呼んでください。姓付けも敬語もいらないですわ。同じクラスの仲間でしょ？」

「…やうよ。ありがとローズ」

自然とそう返せた私に、なぜか数秒沈黙した彼女は、ガクッと肩を落として小さく咳く。

「…………やっぱりあなたもですか？」

「へ？」

「い、いいえ、なんでも」「やがてませんわー」と、ともかくこれからも何か不快に思うことがあつたら、すぐにそうおっしゃつてください！私も「こりゃこりつしますの」

ブイと横を向いたその顔は赤くなつていた。

「ふ……なるほど。たしかにシンデレかもね」

なんだかおかしかつた。

貴族だからつて今まで避けてきたのは私の方だつた。

少し手を伸ばせば、わかること。こんな近くに答えはあつたんだ。

ふとアリアの方を見ると、彼女は私たちの様子に満足気な顔をしていた。

確かにアリアがけしかけてくれたおかげだけ……でも今回のことをはちよつと意地悪だよね。

（今度仕返しじよつ）

天使のようなアリアの顔を眺めながら、小悪魔のよつこいたずらを考えるミア。

……その横顔は、ひどく楽しげだつた。

第4話「和解」（後書き）

風邪をひいてたこともあるけど、今回の話は意外と難産でした。
普通の女の子つてどんなんだろう？って想像しながら書いたけど……
やっぱり難しかったです（汗）

次回からは今までの遅れを取り戻せるよう頑張ります！

第5話「空中遊泳」（前編）

今回はこつこつやるねつアコニア視点です。

あとサブタイトルは、ほぼ適切です。（笑）

第5話「空中遊泳」

「…………ない」

何度確認しても、そこにあるはずのものがなかつた。少し焦つてカバンの中身を机の上にぶちまけてみるが、筆記用具が散乱する中に目的の物は見当たらぬ。

帰りの準備をしていたローズとミアが、不思議そうに首をかしげているが、それを気にする余裕もなかつた。なにせ、自分にどつてはこれ以上ないほど緊急事態なのだ。

「どういたしましたの？」

「…………指輪がないんだ」

今日は、最後に魔法薬の実験の授業があつて、いつもしているそれを外していた。
教室に置いていたカバンの中に入れたはずなのに……それが、影も形もないのだ。

一応机の中やその周辺も探してみるが、やはつどこにもない。

「あの、いつもしてる指輪？　どこかに置き忘れたとかじやなくて？」

「いや、そんなはずは……おかしいな……【キラ】」

『はーい、なんですかー？』

少量の魔力を込めてその名を呼ぶと、すぐ逆事が返ってきた。影を使っていつでも交信できるよう、キラが魔法をかけているおかげ……なのだが、一瞬聞いたおかしなBGMがやけに気になつた。

「……今なにか変な声が聞こえなかつたか？　なにか、悲鳴のよくな？」

『あやー』めんなさい…』とこつた女の声が聞こえた気がしたのだ。

しかも、なんだか随分と切羽詰まつた声だった気がする。まるで、命の危機でも感じているかのよくな……

『そう、ですか？　空耳だと思こますけど……そ、それより何がかつたんですか？』

何かを誤魔化すようなその声色に、怪しく述べ思わないでもなかつた。

だが、よく考えれば今はそれどころではない。追及は後にして、まずは最優先の要件を述べることとする。

「ああ、指輪がなくなつてな。悪いが探しでもらえるか？」

『あれですか……うーんと、ちょっと待つてください』

「頼む」

『うひしてわざわざキラにお願いしたのに、理由がある。

既に今の自分にはほとんど魔力が残っていない、という残念な理由が。

未だ“やりすき”の癖がとれず、毎日授業でギリギリまで魔力を消費してしまうのだ。

だから今回はキラに任せることなかつた。

もつとも、あれは私がいつもつけているせい、私の“匂い”……というか、魔力の残滓のようなものが染みついている。

それを目印に探してもらえば、それほど手間のかかる作業ではないはずだつた。

そのまま数秒待つと、期待通り、優秀な相棒はすぐに探し物を見つけてくれた。

『ありましたよ。これは……屋上、ですね』

「屋上？ どうしてそんなところ…？」

『さあ？』

キラも、わけがわからぬといった風に返事を返していく。
たしかに心当たりの“こ”の字もないその不可解な場所は、謎としか言いようがない。

「……まあ、行ってみればわかるか

『あ、僕も行きますよ』

「わかった。じゃあ途中で合流しよう

そうして通信を切ると、ローズが待ち構えていたように質問して

きた。

「どうでした？」

「あー、なぜかは知らんが屋上にあるらしい。これから取りに行つてくるよ」

「私たちも行こつかー？」

ミアが心配そうに提案してきたが、さすがにそこまで付き合わせるのは気が咎めるというものだ。

「いや、大丈夫だ。キラもついてくれるしな。じゃあ行つてくれる」

「うん、気をつけてね」

「こつてらっしゃいます

そしてアリアが出つて行つた数分後、入れ替わりになるようになり、今度は外側からドアが開く。

「うーーす……あれ、アリアは？」

「あらライル。アリアさんなら、つこせつを出て行きましたわよ

「なーんだ、一緒に帰ろつと思つたのに……残念」

「多分そのうち帰つてくると思いますよー……あれ、でもレストシ
ア様とは一緒に帰られないんですか？」

ニアの素朴な疑問に答えたのは、幼馴染の彼ではなかつた。

「レスト様は、時々おひとりの時間を持たれるのですよ。きっとひ
とりになることで浮世の垢を落としておられるのですわ。の方は
……いろいろと気苦労の多い方ですから……おかわいそうに」

彼の人を思つてか、憂いの表情を見せるローズ。

その一方でライルは、変なフィルターがかかつた解釈に、かわい
そうなものを見るような視線を送る。

そして、その内心で『これは“ただぼけ”と散歩しているだけ』
と言つても絶対信じないだらうなあ……』と、そつと語つた。

……だが、幸か不幸かライルの視線に気づくことなく、女子一人の
会話は続けられる。

「へえ、そうだったんだ。確かに言われてみればそんな感じが……
……あ、でもローズ、よくそんなこと知つてるねー」

「え、それは、その……」

途端にあたふたするローズの姿に、ニアの乙女の勘が冴えわたつ
た。

羊の皮をかぶつた小悪魔は、口元に手を当てニヤリと人の悪そ
な笑みを浮かべる。

「あつれれー、ま・さ・かー？」

「ち、違います…そういう意味では…」

「まだ何も言つてないんだけどなー?」

「あ…」

笑みを深めた平民の少女と、田を泳がせる公爵令嬢。既にその勝敗は決していた。

それでも墓穴を掘った公爵令嬢は、なんとか取り繕おうと必死に言葉を探そうとする。

「だから、それは、あの……」

しかし、その哀れな姿を見た幼馴染は「やれやれ…」とため息をついて、あっけなくトドメを刺してしまった。

「諦めろよローズ、もうバレバレだから」

「…」

ビシンと相手を指さし、女王の様に毅然と命令する、名門ベルドット家の令嬢。

その声だけならば、思わず平伏してしまったほどの霸気が出ていた。

…………だが、名前のように頬に真っ赤な花を咲かせたその顔は、いまいち迫力に欠けていたとかなんとか。

「今、ローズの声が聞こえたよつな……？」

「僕にも聞こえましたよ。あの人、声大きいですねー」

その素直な感想につい苦笑する。

「確かにな……それで、この先か?」

ここは、4階からさらに階段を上った場所。もちろん来るのは初めてだつた。
田の前には立ち入り禁止の扉。つまり、ここを抜けると屋上である。

「ええ、そのはずです」

「よし、じゃあ行くか」

なんだか悪いことをしているような気分になりながら、そつと取っ手に手をかける。

予想に反して、ギシギシと音をたてながらも扉はあっけなく開き、爽やかな風が吹く屋上へは、易々と侵入を果たせた。

そして、そこにいた人物に目を丸くする……てつきり誰もいないと思つていたその場所には、既に先客がいたのだ。

(あれは……確か同じクラスの……)

一人の少女が屋上の隅で突つ立つている。

話したことこそなかつたが、その容貌には見覚えがあつた。

(確かギュ……ギュ……なんだっけ?)

あと一步のところで思いだせない。微妙に悔しい。
もじかしくて仕方ないが、今はじょつがないから“ギュなんぢや
ら”と勝手に命名することにした。

その“ギュなんぢやら”も、扉の軋む音ごこちの存在に気づいた
のか、驚いた様子で振り返つてくれる。

「ビ、ビーブルーレイガ!?

「……へえ、君か。懲りないね」

いつもより低いギラの声に、彼女は一瞬怯えるように身体を強張
らせた。

なぜだろ? 一人に面識があるとは思えないのだが……

「お、脅しても無駄よ! 私に何かしたらお父様が黙つていらないん
だから!…」

「? ……あー、悪いがあなたの父君に興味はないんだ。とりあえ
ず、その手に持つて居る指輪を返してもらえたか? 大事なものなん
だ」

よくわからない言葉の羅列を一蹴し、端的に要件だけを言つ。
どうして彼女が指輪を持っているのかは知らないが、この状況か
らじて、“落し物を拾ってくれた”という雰囲気ではなさそうだ。
不吉な予想を頭に浮かべながら、“返してくれ”といつも手
を伸ばす。

「ふ、ふん、そりでじょりね！ 毎日つけてるし、暇さえあればいつも見ていろるもの」

(……そんなに見てたか？)

無自覚とは恐ろしいものである。今度からは氣をつけようと心に誓つた。

……だが、そうして黙りこくつていたのが悪かったのか、いつの間にか“ギュなんぢゃら”は勢いを取り戻していた。彼女は指輪を見せつけるように持ち、意気揚々と語りだす。

「例の恋人からもらつたものかしら？ こんなものまでもらつておきながら、よく恥知らずな行動がとれるものよね！」

「待て……何を言つてるんだ？」

(恋人って、あの恋人だよな?)

自分とは最も縁遠い名詞の登場に、疑問符がポンポンと浮かんだ。本気で意味がわからない。

彼女が指輪の贈り主を知つていてるわけがないし、知つていたとしても、恋人でもなんでもない。私の一方的な片思いだ。

それに恥知らずな行動、といふ言葉もまた謎だった。

だから、つい珍獣を見るような目になつてしまつのも仕方がないことだらけ。

ちなみに、隣のキラの機嫌も急下降しているのが肌で感じられた。この分だと沸点までもうすぐだ。

「なによその用はー？　とぼけないでよね！　レストシア様やライラック様だけじゃなく、今度はローズマリア様までたらしこんで！」

「だからどういう意味なん　　」

「ふん、あくまでそういう態度をとるの！？　だつたらいいわ！　こうしてあげるー！」

そして、意味不明な話ばかりをする“ギュなんぢゅり”は、人の話を遮ったあげく、しまいにはとんでもない行動に乗り出した。

「あつー！」

「なつー…」

あらうことが、持っていた指輪を放り投げたのだ。
それも建物の外側へと。

(この高さから落ちたら………)

4階建ての校舎の屋上。

いくら頑丈な指輪でも、ただでは済まないだらう。
傷がつくくらいならまだしも……最悪壊れてしまつ可能性もある。

もつとも、そこまで考える前に身体は既に動きだしていた。

「『』主人様！？」

キラの驚く声を置き去りにして、人生史上最速のスタートダッシュを切つて、屋上を一直線に駆け抜ける。

(間に合ひーー)

内心で叫びながら、勢いそのままに手摺のない屋上の床を蹴り、躊躇することなく一気に宙へと躍り出る。

そして、身体を地面と水平にするよつこじで、放物線を描きながら今まさに落ちてこりつとする指輪に飛びついた。

「え、ちよつとーー。」

飛び出した後ろからそんな声が聞こえたが、うるたえた声はすぐに驚愕のものへと変わる。

「う、そ……ー?」

「はあ……間に、合ひた」

浮遊感に身をまかせながら、手の中にある指輪を確認してやつと息を吐く。

飛行魔法……呪嗟のことだつたから無詠唱で使つてしまつたが、なんとか間に合つたようでも良かつた。

(……だけど、もし間に合つてなかつたら……)

そう考えると静かな怒りがふつふつと込み上げてきた。
「くら自分でも、さすがにこれは許容できやつこない。」

振り返って、あわあわとこちらを指さす彼女を睨む。まるで幽霊でも見たかのような態度だ。まったくもつて失礼極まりない。

これはひとつ説教でもしないと気が済まなかつた。

「まったく、なんてことをするんだ“ギュなんけゅう”……！」

「つぎユ？　い、いえ、それよりもあなた、どうして浮いて……？」

そうして驚愕の声を出す彼女に、なおも言葉を重ねようとしたその時だった。

キラがいち早く“それ”に気付き、慌てて叫ぶ。

「『主人様！　早く戻つたほう』が　……！」

「へっ？」

一瞬その意味がわからなくて、馬鹿みたいに氣の抜けた返事を返してしまった。

だが、皮肉にもその返事を合図に、まるで示し合わせたようなタイミングでガクッと身体が傾く。

そうして空中でバランスを崩したところで、ようやく私も“それ”に気付いた。

「……あ」

そうだ、すっかり失念していた。

飛行魔法は常に自分を宙に浮かしているせいで、魔力消費量が高

い。

しかも難易度もそこそこあるのに、今回は無詠唱で使つてしまつた。

さりに、今日は授業でかなり魔力を消費してしまつている。

これらの要因が重なつた結果　今の私の魔力量では……もつて数秒だった。

「う、わっ！」

急激に浮力を失つた身体は、重力に引かれるまま、地面に向かつて一直線に落下を始める。

「！」主人様！――

視界の隅で、こちらに手を伸ばすキラの姿が見えた。

だが、その驚愕した顔は一瞬でフレームアウトし、すぐに視界は上空へと固定される。

それも強制的に。

(ウソだろー？)

真っ逆さまに、落ちていく己の身体。

そして、飛べるはずもないのに翼のよつて舞い上がる黒髪。

その隙間から見えた空は……いつそ憎たらしいほど綺麗だった。

第5話「空中遊泳」（後書き）

えー、おめりくすゞく続きが氣になりそつなどひれで切つちやつたんで、なるだけ早く次話更新したいなあと思つてます。

ちなみに、ギュなんぢゅらさんは結構策士でして……キラの方には囮（『きやへ、『めんなさい』の人）を使つていた、といつ裏設定があつたりします。
まあ、意味なかつたんですけど（笑）

誤字・脱字等ございましたら、是非教えてください。

第6話「着地」（前書き）

サブタイトル超適当ですいません（汗）
誰かいいサブタイトル思いついたら、是非教えてください。

第6話「着地」

その時……上級クラス5年の教室では、三人の少年少女が学生らしい話題に花を咲かさせていた。

いつの世も、恋愛話は格好の話のネタになる……特にそれが人様のものとなれば尚更。

その結果、うち一人にとっては最高な、そして残りの一人にとっては最悪な会話が繰り広げられる」とになった。

「へー、でもまさかローズがレストシア様をねえ……ねえねえ、きっかけは何なの!?

「だ、だから違いますと……!」

「そりやあ、こいつが7歳の頃の話でさ~」

「つちよ、勝手に! や、やめなさい!..」

「ほおほお、それでそれで!..」

慌てるローズをよそに、得意気に語りだすライル、そしてそれに食い付くミア。

既に教室はこういった話をする時特有の、ある種独特な雰囲気に支配されていた。

すなわち誰にも話を止められない、止めることを許さない、あの雰囲気である。

それでも、勝手に盛り上がる一人をよそに、そのおしゃべりな口

を押さえよつとローズは孤軍奮闘する。

「つ、避けるな……」

しかし、必死の健闘むなしく無駄に運動神経のいい幼馴染は、余裕を持つてその手を回避した。

「あらやだ、お嬢様言葉がくずれていますわよ。ローズさん」

そして「おほほ」と意地の悪い笑みを浮かべたライルは、満を持して、その恥ずかしい過去を暴露しようと口を開く。

「あれは王宮で開かれたパーティーで」

だが、「わやーー」とローズが令嬢にあるまじき悲鳴を上げるものの、幸いにもその先が語られる事はなかった。

不自然に言葉を切った彼が、急に立ち止まり、「あれ?」と呟いて「ガシガシ」と皿を擦つたのだ。

瞬きを繰り返し、何かを確認するような仕草をするライルに、今まさにその顔を締めようとしていたローズは、眉を蹙める。

「どういたしましたの?」

「いや、今、窓の外に何か見えたよつな……」

珍しく自信のなさそうなライルの証言に、ローズとリーナはキョトンとした表情をうかべた。

といあえず、そのまま首を180度まわし、後ろを振り返つてみ

るが……その瞳に映つたのは、コスラの木と学園の正門、その奥に見える城下の街並み。

別段変わりばえのない、いつも通りの風景だった。

「何も変わったものはありませんけど……」

「一体何が見えたんですか？」

「うーん、なんか人？　が落ちてつたような……」

物騒な話に一瞬空気が固まる中、本当に自信がなさそうなライルは、首を傾げたまま続ける。

「一瞬だつたから顔はわからなかつたけど、なんか黒髪ぽかつた気が……でも、多分見間違いだよな！？」

そうして彼は片手を頭の後ろにあて、ヒラヒラと笑つた。そのおどけた態度に、緊張していた空気が少しだけ弛緩する。

それに合わせるようにミアも『ないない』といつよい手をヒラヒラさせた。

「それはさすがに見間違いですよー。だつてこり、3階ですよー？」

「だよなー！　そんなわけないよなー！」

「「あははー」と一人のビーチカわざとりじこ、空笑いが放課後の教室内に木霊した。

ミアは何か違和感を感じながらも、後押しするよつよつ言葉を重ねる。

「そうですよー。いくらなんでも人、が　」

だが、その彼女の言葉が途中で途切れたのには、理由があった。
強張った表情のローズと目があつたという理由が。

……そこによつやく彼女も思い出す。親友が去り際に残した言葉を。
そうしてすぐに一つの可能性に思い当たり、顔からはサ　ッと血
の気が引いていく。

見ればさつきまで名前通りだつたローズの顔色も、いつの間にか、
青い伝説の花へと変わっていた。その花は色を変えないまま、茫然
とした様子で呟く。

「……アリアさん、わつき“屋上に行く”って言つてましたよね？」

「　　……」「　　」

顔を見合させた三者の脳裏では、既に同じ予測が生まれていた。
それも最悪の予測が。

だがその一方で、頭の隅に残された冷静な部分が、すぐに“それ
”を否定する。

すなわち『そんなこと起るわけがない』と。
もつとも、そこには“そうあってほしい”という願望も含まれて
いたが。

しかし、皮肉なことにも今度のトドメもまた同じ人物から刺され
ることになる。

そして、残りの一人もそれにつられるように言葉を紡ぐのだった。

「……やつこえせが、わのや一瞬だけキラの声も聞こえなかつたか？」

「……ええ、なにか叫んでいたよつた」

「うん。何か切羽詰まつた感じだつた」

「　　」

今一度顔を見合わせる二人。

だが今度の沈黙が場を支配したのは、わずか数秒だつた。

黙りこくつた三者は、やがて示し合させたように一斉に動き出し、そのまま我先に、押し合いつゝドタバタと窓際に駆け寄つた。

あまりに慌てていたためか、一つの窓から窮屈そつに仲良く横並びで顔を出すことになつたが、そんなことを仄にする者は一人もいなかつた。

そして、それぞれすゞごい形相をした彼らは、下を覗き込みながらその名を叫ぶ。

「　　アリヤ（セラ）ー？」

（空が、綺麗だな……）

こんな時なのに馬鹿なことを考へているな、とは思つ。

でもそれは、この憎たらしいほど綺麗な空が悪い。

その透き通つた美しさが、このどじょうもない絶望的な現実を忘れるのだと。

風を切つて落下していく自分の手は、慣性によつて上空へと向けられている。

それはまるで……その手の届かない遙か遠い存在に、恋い焦がれているよつだつた。

「……ひ、間に合わない！！」

悲鳴のような声が鼓膜を震わせ、意識は急速に現実へと引き戻された。

同時に、慣れ親しんだ魔力を感じる。……それは、どこか迷走してこるよつにも思えた。

その意味に気付いて、思わず口角がゆるむ。

(キラ……ありがとひ)

どうやら地上にある物体に干渉しようとしているらしい。

だが、無生物の影への干渉は、生物のそれよりも時間がかかるものだ。到底間に合わない。

私の影は移動が速すぎて捕えられないし、地上の物体への干渉も時間が足りない。

……つまり、万事休すということだ。

(死ぬ、のか?)

一瞬が永遠へと引き延ばされる中、一人胸中で呟く。

どこか冷静に事態を客観視していた己の眼前に、“死”という究極の一文字が突きつけられた気がした。

それを意識した瞬間、思わず目を閉じ手の中の指輪をギュッと握りしめる。

……だとしたら馬鹿馬鹿しい話だ。まさかこんな形で死ぬとは予想していなかつた。

(まだ……死にたく、ない)

それが本音だった。

せっかく人生が楽しく思えてきたところなのに、これはあんまりだ。

今はやりたいことだつていっぱいある。……まだ、生きていきたい。

だが、そうは思いながらも、もはやどうしようもないことを頭の片隅では理解していた

なにより、走馬灯が見え始めたのがいい証拠だ。

死ぬ時はそれまでのことが走馬灯のように浮かぶというが……どうやらそれは本当らしい。

魔王との決戦では見ることのなかつたそれが、今になつて見えてくる。

嫌いな人、憎い人、優しくしてくれた人、友達になつてくれた人、そして愛する人……300年前と現在が入り混じりながら、個性豊かな面々が泡のよつに浮かんでは消えていった。

そうして最後に浮かんだ顔は……

「つ……！」

唐突だった。

諦めたように回想に耽る己の耳朵に入ったそれは、声にならない声だ。

一瞬自分があげたものかと思ったが、次の瞬間それは間違いだと直感する。

力強い魔力の波動を真下から感じたのだ。

だが、『なんだ?』と疑問に思つたその直後には、衝撃が全身を襲つていた。

ボスンッ、ドツ、と思つた以上に気の抜けた音があたりに響く。

「……い、たい」

反射的にあげた声に、自分自身で驚く。

しかも思ったよりも地面が……温かい?

いや、これは地面ではない。何か温かくて柔らかいものが真下にあつた。

しかもその“もの”はトクン、トクンと胎動しているではないか。

(これは……命の、音)

その鼓動は随分と早かつた。

恐る恐る目を開ければ、目の前には何か布のようなものがあり、その底面は上下に運動しているのが肌で感じられた。

唚然としたまま顔を横に向ければ、背景に土ぼこりが舞う中、すぐそばに自分の手がある。

「生き、てる?」

信じられないような気持ちで、指の一本一本を確かめるように動かす。

……動く。それに指輪も無事だった。

「どうして？」

そのせいかとみな疑問に対する答えは、すぐそばまであがむことにかな元げんげんにいる。手のひらの上にさわる。

「ぐつ……」

自分の下から聞いたくづもつた声に思わずギョシッとする。

やじこいたのはな

「へ、レストー？」

第6話「着地」（後書き）

えー、多分皆さん予想通りの展開ですよね（汗）
しかも次回まで続きます（超汗）

本当は1話にまとめようとしたんですけど、
それじゃ長くなりそうで……あつー、なかなかつまらないもの
です。

次回こそ、ヘタレ＆真っ黒が活躍？する……予定です。
なるだけ早くあげよつと思ひます（汗だく）

第7話「三者三様」（前書き）

書いていくのがどんどん難くなつていへ
今日はタイトル通りな感じです。

第7話「二者二様」

「レ、レストー…？」

ガバッと身を起こせば、己の真下にはレストの身体があった。今はちょうどその胸に手を当て、腹の上に跨っている状態である。傍から見れば、まるでレストを襲っているような……ともかく、とんでもない体制だったろう。

しかし、混乱の極致にある脳内は、それさえも思考の隅へと追いやる。

実際、今現在の大半の興味と視線は、微かなオーラの残る彼の腕へと向けられていた。

(これは……魔力の残滓?)

……それを見て、なんとなくだが事態が理解できた。

おそらくレストは、腕に咄嗟に魔力を纏い、そのまま私を受け止めたのだ。

詠唱破棄に近いそれは、学園一の魔力の持ち主だからこそできた荒技である。

普段の私にとっては大したことじゃなくても、この時代の人間でこれができるのは本当に少數だらう。

(まつたく、キラ顔負けの幸運だな……)

たまたま下にいたのがレストで心底良かつたと思つ。いや、息が切れてるから走ってきてくれたのか……だとしたら本当

に感謝してもしきれない。

まだ混乱する頭の中で一気にそこまで考へると、不意に上から召前を呼ばれた。

「 「 「アリア（さん）…？」

「？ ……あ、みんな」

見上げれば三階にある教室の窓から、ライル、ニア、ローズが窮屈そうに顔をだしている。

己の無事を確かめてか、三者は揃つてホッとした顔を見せた。

その直後、今度は真下から発せられた唸り声に、急いで視線を落とす。

命の恩人のお目覚めだ。

「つセレスティ、怪我はないつ !？」

彼はしかめつ面をしながら顔をあげ、そしてすぐに絶句した。

……まあ確かに、助けた相手が我が物顔で己の腹の上に座り込んでいたら、驚いて当り前だろう。さすがにまずいと思い、慌てて腰を浮かす。

「え、ああーす、すまないレスト、そつちこそ怪我はな

「きやあああーー！」

「……はい？」

またまた上から聞こえた悲鳴に言葉が遮られる。

せつせから上下運動を繰り返す「」のそれは、まるで首ふり人形のようだ。

ただでさえ忙しいのに、次から次へと湧きあひる面倒にいゝ加減うんざりする。

(今度は何だ……?)

徐々に大きくなるそれを不吉に感じながら、混乱氣味に頭上を見上げ…………その光景になぜか苦笑いがこぼれた。

あまりの事態に脳がついていけない。

「つー、だい？」

なんど、せつせの少女が真っ逆さまに落しつけてはいるではないか。

ライル達がギヨシとして、野生のリストのよつてサッと身体を引っ込む。

おそらく反射的な行動だろう。誰も責められない。

それよりも、問題はこちらだ。

「つー？」

慌てて受け止めようとするが……魔力を使いつけてる状態では、どうしようもないことに気がつく。

レストも私の下にいるせいで、手も足も出せない。せきへ逃つ出しきなりぬ状況となほこのことだ。

恐怖に引きつった顔は、もはや田前まで迫っていた。

「お、おーーー？」

戸惑いか抗議か。そんな声が下から聞こえたが、あいにく耳を貸す余裕はない。

いくつもの修羅場をぐぐり抜けてきた頭が、『これはダメだ』と冷酷に判断した結果だ。せめてレストだけは守りつつ上から覆いかぶさるように抱きつく。

だが、そうしてふと下を見れば己の影が揺らめいていたことに気が付いた。

(これは？)

見覚えのあるそれに眉を顰めて、今一度視線を上へと戻す。

予想通り……あわやぶつかるところひるで、私の影が伸び彼女を乱暴に包み込む。

間一髪のところで地面との接吻を免れた少女は、泣き笑いのような顔で「あ、ああ」と言葉にならない呻き声を漏らした。

この悲劇のよつな茶番劇を作り出した犯人……キラもすぐに降りてきて、同じよつて影を使って器用に着地する。しかし今は余裕綽々の表情だ。

状況から鑑みて、キラが彼女を突き落としたに違いない。

……いくらなんでもやりすぎである。つい声を荒げてしまつ。

「キラ、危ないだろ？！…？」

「どうですか？こんな奴……」うなづて当然です。むしろ本当につつけてもよかつたくらいですよ

そのいつもとは違う、想像以上に冷え切った反応に愕然とする。

「キ、『フ……？』

されがさも当然かのよつこ、己が突き落とした女に侮蔑の視線を送る相棒。

今まで見たことがないその冷たい眼差しに、なぜかゾッと悪寒が走つた。

こんなに近くにいるのに、その存在を遠く感じる。
さつきまで恋い焦がれていた美しい空とは少し違う。
まるで夜空に浮かぶ孤独な月のような……そんなキラの横顔に、言
い様のない寂寥感が募る。

「それより『主人様、お怪我はないですか？』

だが、こちらを振り向いた彼は、それまでの態度が嘘の様に心配そ
うな顔を向けてきた。

一瞬の幻でも見たのかと思わせる、その急な変化に戸惑つ……が、
そこどうやく真下にいる存在を思い出した。

「あ、ああ。でもレストが
「私は大丈夫だ」

そうは言つものの、いつもの冷静沈着な彼とは少し違う気がする。
走ってきたせいかもしれないが、やけに動悸が激しい。ついでに、
もうひとつ気になつてていることもあつた。

「でも顔が赤いぞ？ それに

「レ、レストシア様！？」

またしても自分の言葉を遮ったのは、放心状態で尻もちをついていた“ギュなんぢゅら”だ。

レストの声で正気に戻ったのか、彼女は驚愕で顔を歪めている。

「ギュール伯爵令嬢？ 一体何があつたんだ？ ビツしてセレスト
イガ……？」

ギュール。そういえばそんな名前だった。
肘をつき少しだけ身を起こしたレストが、戸惑いながら質問する。
キラはまたガラリと態度を変え、苛立たしげに顎をしゃくつてその
意を示した。

「この女が原因だよ」

「…………それは本当か？」

心なしか、そう訊くレストの声も一段低くなっていた。

彼はキラのただならぬ様子も、意外と冷静に受け止めているようだ。
いつも喧嘩している二人の妙に息の合つた様子に、ビツすればいい
いかわからない。

自分がだけが取り残されているような気がして……思わず手の中の指
輪を見つめる。

そして「なるほど」という声に顔をあげれば、私を見ていたであろう薄紫色の目がスッと細められ、怒氣を帯びた顔が別の方向へと向かわれるところだった。

「どうしてそんなことを？」

「だ、だつて恋人がいるのにレストシア様に媚を売つて……卑しい平民のくせに……」

髪を振り乱して必死に釈明するその姿は……なぜか哀れみを誘つた。

それでも、なんとなく事情はわかつた。

300年前もよくあつたことだ。

もつともあの時は今よりずっと過激で、アスト王子の信者である貴族の令嬢が、毒蛇やらなんやらを送りつけてくることが日常茶飯事だった。

そうして考えてみると、この学園生活の中でも時々悪意ある視線を感じたことはあつた……気がする。

だが、平和ボケとでもいえばいいのか……命に関わらないなりうでもいいと無視していたのが今回につながったのかもしれない。

ともかく、そんな理由から媚だの卑しいだのについては、慣れているしじうでもよかつた。……が、“ある部分”に関してだけは、どうしても一言訂正を入れておきたかった。

「さつきも言つていたが恋人って……そんなもの生まれてこのかたできたことがないぞ」

「…………え？」

「…………え？」

ギュール伯爵令嬢だけでなく、レストまで驚いた表情をしてみせる。

どこでそんな誤解を受けたのかは知らないが、私は間違いない恋人
いない歴＝年齢の人間だ。残念ながら胸を張つて言えることではな
かつたが。

キラは「言わなくていいのに……」と嘆いているが、それでも経歴
詐称はよくない。

『今更？』と思われるかもしれないが、聖女の件はともかく、できる
限り嘘はつきたくないのだ。

「いや、まあいい……それよりすまなかつた、セレスティ

しばしの間茫然としたレストは、次いで片手で顔を覆い、意味のわ
からぬ謝罪を口にした。

「む？ どうしてレストが謝るんだ？」

おかしなことを言い出した友人……そのまま近くにある顔を覗き
込む。

レストは、なぜかますます顔を赤くさせて、逃げるように身を引こ
うとする。

もつとも、私が上から押さえつけている上に、元々密着しているか
ら逃げられるわけがない。

「そうです！ レストシア様が謝る必要などありません！ ていう
かあなたといい加減レストシア様の上から
「いい加減黙れブス」

叫ぶ令嬢を、キラが影を使って強制的に沈黙させる。
そのいきさか乱暴なやり方に、抗議しようとするが……さつきのこ
とを思い出してしまい、結果その声は想像以上に控えめなものとな

つた。

「キリハ、ちよつとやつ過ぎじや や」

だが今度は、若干落ち着きを取り戻したらしいレストが、そのさせやかな抗議を遮つた。

「そうだ。まずはあなたが謝るべきだらう、ギュール伯爵令嬢。この学園において身分は関係ない。確かに上級クラスは貴族が多いが、それも純粹に魔力量と実力によつて選別された結果だ。それに……もとより生まれが貴族だからといって、あなたがセレスティより尊いといつ理由になるか？ 馬鹿馬鹿しい。ともかく、“卑しい”などという言葉はこの学校、いやこの国では一度と使わないでほしい。君も知つていいだらう？ 我が国は今浮浪者を失くす政策に力を入れている。そのためにも、これから貴族はより彼らの立場に立つた支援をしなければならないのに……それがこのようでは、先が思いやられる」

吐き捨てるような辛辣な物言いに、口のきけない彼女は青ざめ必死に首を振るばかりだ。

だがこれには、さすがの私も驚いた。

ともすれば貴族制度さえ否定しかねないその発言を、まさか王子である彼から聞くことになるとは思わなかつた。

ただただ啞然として、その怜俐な面差しを見つめる。

……しかし、そうして王者の風格をえぐわせた第一王子は、最後の最後でどうしても聞き捨てならない台詞を口にするのだった。

「が、今回の件は私にも責がある。今になつてようやくわかつた。

やはり王子である私と友好を持つことで、周りに『』える影響は大きいのだろう。……不注意だったな。これからはなるべく話しかけないよう、に つ！？

「何を言つているんだ！？ 」この娘がどういふと、私たちは“ともだち”だらう！？

あまりに馬鹿なことを言つて出すレストに、ついカツとなり、興奮のままに肩を掴んで地面に押し倒す。

ドスッと音がすると同時に、まるで外界から遮断するよつて、己の黒髪がカーテンのように左右からこぼれた。

驚愕したレストは、わざの毅然とした態度はどうくいつたのやら、「いや、あの、ちよ……」と急激に真っ赤になりながら、あたふたし始める。

だが、そんなのは知つたことではない。

真上からこれ以上ないほど見開いた、その薄紫の瞳を睨みつける。

「さつき、身分は関係ない」とのたまつたのはどの口だ！？ 私はお前が王子だから“ともだち”になつたわけじやないぞ！」

第一回の程度の嫌がらせでビリにかかるほど柔い精神はしてない。300年前の方がよっぽどひどかつたくらいだ。

もとより、300年越しにやつとできた“ともだち”……それをこんな馬鹿げた理由で失うなんて冗談じやなかつた。

一方押し倒されたほうは、何か思いもよらない言葉をかけられたかのようにしばし茫然とする。

そして次いで、病氣じやないかと思つほど顔を赤く染めながら、せ

わしながら視線を彷徨わせ始めた。

「そ、それは、だが　」

なんともじれつたいその答えに、己の中の何かがブツツンと切れた。その胸倉を両手でガツと掴み、勢いよく自分の方へと引き寄せる。

「だがもへちまもあるか！　いいか、何を言われようが私はお前と“ともだち”をやめるつもりはないからな！！」

わずか数センチの距離で相対するその瞳は、やはり妹のものと一緒にだった。

そして驚愕に彩られたその顔は、昔数度だけ見たアスト王子のそれに似ていた。

そんな懐かしい一人の面影を残す王子は、パクパクと口を開閉させながら、どこか反射的に答えを返す。

「え、あ…………は、い」

「よしー！」

その返事によつやく満足し、掴んでいた両手を放す。

レストは「うわっ！」と結構勢いよくドスッと倒れこんだが、あまり気にしない。

一方、黙つてそのやりとりを見ていたキラが、ソリヒテ口を挟んでくる。

「まあ、『主人様を助けたから今回は見逃してあげるよ。そんなこ

「…………早ぐ、主人様の下から退いてくれない？」

「…………お前もなかなか無茶を言つなー。」

言いながら、ギロッと睨んでくるキツレ、レストが頭を押され、口元をヒクヒクさせながら返した。

いまだ地面に転がっている状態のレストは、例の如く私に上から押さえつけられている。

普通は上にいる自分に避けるといふといふなのだが、確かに、理不尽極まりない話だ。

(…………って、原因は私か！？)

…………至りようかべ、ともでもない体制をとつてることに気が付いた。

『一体いつまで乗つかつてるんだ私はー？』と内心シッカリながら、慌ててその身体の上から移動する。

「す、すまない！」

「…………いや、いいんだ」

やっと腹の上から重りが消えたことに、ホッとしたのだろう。レストは顔を赤らめながら、深くため息をついた。

だが起き上がった彼の仕草で、忘れていたことを思い出す。

「やつだレスト！ その腕、痛めているのではないか？」

最初に腕をかばっていた気がしたので、心配していたのだ。
案の定リストは「ああ…」と頷くが、まるでなんでもないよう付け加える。

「別に騒ぐほど怪我でもない」

「そんなのダメだ！ キラ、悪いけど治癒魔法をかけてやってくれないか？」

リストはあまり顔には出さないからわかりにくいが、もしかしたら骨にヒビが入るくらいの怪我はしているかもしれない。

なにより怪我を負わせた原因は私にある。

リストは自分でできないのは歯がゆいが、その代り今回は相棒に頼むことにする。

だが、そのキラはといえば、若干言ひこねそつにモジモジしながら呟いた。

「……僕、治癒系は使えないんです」

それは初耳だった。

確かに得意不得意はあるだろうが、キラほどの上級神族で治癒系魔法を使えないなどなかなかあることではない。

モジモジしていることといい、『まさか相手がリストだから』といふ一択の疑惑が生まれたが……少しだけ申し訳なさそうなその表情に、すぐにそれを払拭する。

「そうか……なら」「

だがそこで、玄関口の方から聞こえる、ドタバタという複数の足音

へと意識が引つ張られた。

勢いよく駆け込んできたその三人組は、自分達の田の前で砂を巻き込みながらズザと急ブレーキをかける。

「アリア大丈夫！？」

「レストも生きてるか！？」

「ギュールさんも……無事ですね。まったく、ビリしてこのようなことになつたのですか！？」

それぞれ息を切らしながら、矢継ぎ早に質問していくミア、ライル、ローズの三人になぜか安心し、そして脱力した。

「あ、それは保健室で話すよ。レストの治療も必要だし……とりあえずここを移動しよう」

さすがに、もうここで治療はさせられない。

そうして砂埃が舞う中、一気に騒がしくなつた一行を引きつれて保健室へと足を進める。

ギヤーギヤー騒ぐ三人に囲まれながら、ぐつたりと疲れたアリアは、視界の悪いそこを振りかえることもなく立ち去つた。

……だから気付かなかつた。
相棒がその後についてこなかつたことを。

砂塵の中、残されたのは気配を消した少年と、消された少女。

主の姿が完全に視界から消えたことを確認したキラは、ゆっくりと振り向く。

「…………ねえ、覚悟はできてるよね？」

動けないよう拘束していた影を解き、その口も話せるようにした彼は、代りに周囲に目くらましの魔法をかけた。

「ひぐ」

「やつさの、怖かった？　でもね、まだまだだよ。これからもっと怖いことが起きるんだから……」

一步ずつゆっくりと、だが確実に近づいてくる美少年は、既に生死をさ迷った少女にとつては十分恐怖の象徴だった。

「あ、あ、ああ……」

「正直いうとね、僕も常闇の世界は怖いんだ。でも、だからこそ

その先は聞きたくなかった。

一五〇

「いやこいつに来ないでーー！」

「アーリーさん」とになりたんだから。

少女は震える身体を叱咤しながら、悪夢のよつなこの状況を嘆いた。

お気に入りの服は、砂まみれになつていた。

昨日お手入れしたばかりの爪も、今では地面を搔くばかりで見るも無残だ。

だけど、普段なら氣にしているそれも今は全く氣にならない。否、氣にする余裕なんてなかつた。

……ちよつと生意氣な転校生を懲らしめようとしただけだ。

だつて私たちの王平様に、手を出すんだもの。痛めつけるのが当然とこゝものだ。

いつもそつやつて彼の周辺を“整理”してきた。以前は失敗したけど、あの時はここまでの恐怖なんて感じなかつたし……ともかく私は間違つていない。間違つているわけがない。

今まで、思い通りにならぬことなんてなかつた。

頼めば、お父様が「しちうがないな」と笑つて、全てビビリかしてくれた。

そう、お父様が……どうして忘れていたんだろう。自然と口角がつり上がる。

「やうよー、お父様に言つわよー、そしたらあんな平民なんて、すぐには退学なんだからーーー！」

これで形勢逆転だ。いつ言えど、いつも相手は引き下がるのだ。時に悔しそうに、時に恐ろしそうに……それを見るのが好きだった。私はあなたたちとは違う。そう愉悦に漫れた。

だが期待とは裏腹に、田の前の美少年は一瞬キヨトンとした顔を見せた後、やがてニッコリと笑い、まさかの返答をしてきた。

「大丈夫。君のお父さんも、チャーチとおじおじしあげるから。
こんな悪い子を育てるなんて、やつぱり親にも責任あるよね」

状況さえ違えば、あるいは天使のほほ笑みと称してもよかつたかもしれない。

だが底知れない狂氣を孕んだその瞳は、ぞっとするほど酷薄だった。
手を伸ばしてきた少年を田の前にして、思わずギュッと田を閉じる。
彼はどうやらそのまま口の額に手を当て、何かを探しているようだ
った。

「あーあ、ほんと君つてば、ずいぶん悪いことしてきたんだねえ。
こんなにひどいって知つてたら、最初から容赦しなかつたのに……
僕の田もくるつたかな？」

その口調に、何をされたのか悟つた。

(まさか……記憶を読まれた!?)

だがわずかに残された理性は、そのありえない事態を真つ向から否定する。

「う、嘘よ…… そんなことできるわけが……!？」

そこでようやく田を開いた少女は、生まれて初めて“それ”を知ることとなる。

己の物とは比較にならないほど、”それ”を。
その……どこまでも純粹な悪意を。

ますます笑みを深くした彼が、耳元でそつと囁く。

「おやすみ。どうかいい夢を……」

後日、ギュール伯爵令嬢は病氣療養で休学することになった。アリアが、保健室に来なかつたキラを怪しんでも「さあ?」とすりぼけるばかりだつた。
レストにしても「まあ、相手が悪かつたんだろう」と、ビロに諦めたように語るだけである。
妙に団結する二人に、アリアは首をかしげるが……結局何がどうなるわけでもなかつた。

天気は快晴。東から流れる春風が心地よいこの季節。ハイレンス王立魔法学園は……今日も平和だつた。

第7話「三者三様」（後書き）

キラ黒！！

自分で書いておきながらなんですけど、彼はホント真っ黒です。その点、王子は安心のヘタレです。んでもって、主人公は天然爆発娘ですかね。

今回は三者の奇跡の共演（すれ違ひバージョン）？というテーマで書かせてもらいました（笑）

さて、いつの間にやらお気に入りも1000人を突破いたしまして、本当にありがとうございます。

まさかこんなにたくさんの方に読んでいただけるとは思っていなかつたので、今若干ビビりながら書いてます（汗）

それでは皆様今後とも、彼らをよろしくお願ひします。

あ、誤字脱字等ありましたら、是非教えてくださいね。

5章 第1話「召喚の儀」（前書き）

更新遅くてすいません（汗）
しかも今回ちよい短いです。
明日にはもう一話あげようかなと思つてます。

5章 第1話「召喚の儀」

「いよいよね！」

「昨日は興奮して眠れなかつたわー」

昼下がりの校庭。

常にはないほどの喧噪にあふれかえつたそこで、30人ほどの生徒が興奮気味に思い思ひの言葉を紡いでいた。

召還の儀。

それは、滅多にない上級クラス6年との合同授業もあり、魔法使いが各自のパートナーと対面する儀式でもある。

少年少女たちが期待に胸膨らましながら語り合ひ微笑ましい光景に、なぜか保護者の様な感慨を覚える。

「なあにが～でつてくるかな～」

待ちきれない様子で即興の鼻歌を披露しているのは、ライルだ。彼は数日前から異常にテンションが高く、それこそ毎日理想の使い魔話に付き合わされたほど、今日という日にかける期待も大きかつた。

……まあ、その気持ちはわからないでもない。なにせこれから一生を共にする相棒に出会うのだ。

準備のために去る背中を、苦笑気味に見送る。

だが、そうしてクラスメイトたちが準備に奔走する中、己の五歩横には同じく何をするでもなく、その光景を眺めている人物がいた。

「……あれ？ レストはやらないのか」

「言つてなかつたか。私にもすでに神族の使い魔がいる。もつとも、王族に代々仕えてはいるが、忠誠心の欠片もない自由奔放なやつだがな」

さすがは王族といったところか。専属の、しかも神族の使い魔がいるとはなかなか驚きである。

だが主の方は、大いに不満があるようだ。使い魔のことを思い出しているのか、真一文字に結んだ口がその心情を語つていた。

「あー、それは大変だな」

同じく個性的な使い魔を持つ者として、その苦労も多少わかる。わかるのだが、次に己の口から出たのは、全く違う問いかけだった。

「ところで……どうしてそんなに離れるんだ？」

「……」

今度は無言の返事を返されるが、さすがに超能力者ではないので、それだけでわかるはずもない。

チャンスだと思って、ここ最近どうしても気になっていたことを訊いてみたのに……こんなことなら、いつかの装飾品屋の男に、心を読む秘儀でも教えてもらえばよかつた。

それにしても、視線すらあわせてくれないとはどうこうことだろう。これはあれか、いわゆる黙殺というやつか。

前は、さすがにここまでひどくなかった。そつ……おやじま先日の一一件以来だ。

理由はわからないが、このように微妙に距離を取られるのが不自然なのだ。

「レスト？」

未だ無言を貫く彼に近づき、多少強引にその視界の中に入りこむ。

「つー？」

するともにバツと勢いよく後ずたつた。

（そんなに勢いよく避けることないじゃないか……）

そう思わないでもなかつた。

いや、今のはいきなり近づいたから、それで驚かせたのかもしれない。

気を取り直して、今度は警戒心の強い野良猫に近付くがごとく、慎重に一步を踏み出す。

「……」

「……」

結果は同じだつた。いや、なお悪い。

まるで狂暴な魔物に遭遇したがごとく、ジリジリと近づくレスト。その表情は、ひどく強張つてゐる。

そのまま無言の攻防が数分続いたが、結局近づけば近づくほど逃げられる」とが証明されただけだった。

(なんだか……傷つくな)

明後日の方角へと固定されたその顔を、困惑氣味に見つめる。よく見るとレストのそれは、このままでタコの仲間入りを果たすんじゃないかというくらい、真っ赤だった。

もしや熱でもあるのか、それともやはり“あれ”に対する怒りか。「レスト、やはりこの前のことを怒っているのか？ 確かに、いきなり飛び降りてきて怪我までさせてしまったのだから、怒るのも当然だが」「

「い、いや、違うー」

……違ひらしい。

しかし、だとすればこの不可解な態度はどうから起因しているのだろう。

これまた無言で先を促すと、レストは不承不承といった様子で口を開いた。

「それは」

「それは？」

「…………だ、誰か来たようだぞ」

どうにも話を逸らされた気がしないでもない。

だが、いいところで邪魔をしてくれた人影は、確かにこっちを田指して歩いてきた。

「やあ、アリア・セレステイさん

「こやかにあいさつをしてきた人物は、失礼だがあまり印象に残らなそうな顔をしていた。

だからむしろ顔よりも、なぜ自分の名前を知っているのかという方が気になつた。

「……どうも。あなたは？」

「今回君のサポート役を務めさせてもらひ6年生のギャスパー・ウッド・オークだよ」

サポート役……確かにそんな話は聞いていた。

召喚の儀式には時に危険が伴う。だから一人一人に先輩をつけて、その補佐をしてもらう、という話を。

もつとも自分には関係ないことだと思って、話半分に聞いていたのだが……この先輩が来た理由がわからない。

「そう、ですか。ですが、私には既に使い魔がいるので——」

「ああ、知ってるよ。今回は見学だつてね。まあ、便宜上一緒にいるだけになるけどよろしく。これでも競争率は高かつたんだよ」

「はあ……」

そして馴れ馴れしくも肩に手を置いてきた男を、どう扱えばいいのだろう。

「なんことならキラにひいてきてもうらえればよかつた。

助けを求めてレストを見れば、いつの間にか彼の方にも化粧の濃いやうな女の先輩がついていた。ビックでもいいが胸がデカイ。

ベタベタと寄り添つてくる先輩に、レストは迷惑そうに眉を顰める。

……ビックやあちらはあちらで大変そうだ。

だから『お互に苦労するな』という意味合いで込めて視線を送ったのに……なぜか田があつた瞬間すこい形相で睨みつけられた。

(……あれは、まずい)

やはりレストは怒つている。

しかも、あの彼がこんな殺氣まがいの視線を送るなんて、これはただごとじやない。

今のところ特に身に覚えはない。ないが、王子でありながらおそらく私たちの中で一番常識人なのがレストだ。

その彼が怒る時はいつもそれなりの理由がある。

たとえばキラがお菓子を奪つたり、ライルが悪戯をしたり、フィルがむやみやたらと女子を口説いたり、などなどだ。なんだかしょうもないことばかりだが、それでも彼は律義に雷を落とし続けている。

でも、そこにはいつも“優しさ”があった。怒られる方もそれがわかっているから全くへこたれないのだ。その証拠に、ライルなんて『あいつは怒るのが趣味。まあ、愛故のお叱りってやつさー』と

▽サイン付きで語っていた。

だから、自分もいつかその愛ある怒りを受けたいなと密かに思つていたのに……

そんな彼が、殺氣混じりの憤怒を露わにしている。そこにいつも“優しさ”は感じられない。これすなわち緊急事態だ。きっと私が何か彼の逆鱗に触れることをしてしまったのだらう。このままではギュール伯爵令嬢の一の舞になる。

(早急に原因を究明すると同時に、関係改善のための策を講じないと……)

そうして誰に相談しようかと思案に耽つていると、フラスト先生のよく通る声があたりに響いた。

「よし、全員配置についたな。じゃあ、事前に教えたとおり詠唱を始めや」

「　　「　　「はー……」「　　」

ついに儀式が始まるようだ。

以下の問題はひとまず置いておいて。友人たちの晴れ舞台を見届けるためにも……

5章 第1話「召喚の儀」（後書き）

今回の突っ込みは「レストお前いくつだwww」でしょうね。うちの王子は初心にもほどがあります。

あ、ちなみにレストの使い魔設定ちょっとだけ変えました。
クール 自由奔放に。
とはいっても彼女が登場するのは、結構後になる予定だったりしますが……

明日にはもう1話あげれるよ!!、今から頑張ります!

第2話「戻」（前書き）

“お、おひやっセーフ。

第2話「対面」

召喚の儀については、昔とそれほど変わっていないらしい。

RJ還者は一人につき一つの召喚陣を用意し、特殊な詠唱と魔力を介して地界と天界をつなぐ。一方天界の聖獣・神族は「この好みの魔力を探し、それに呼応する。基本はそんな流れだ。

ある種お見合いのようなものだが、その違いとして、基本的に召還者は己の力量以上の相手は呼べないこと、そして言い方は悪いが返品不可といふことがあげられる。

【来たれ我が友】この呼び声に応え　いや僧き人の生を　我と共に歩まん】

高々とした詠唱がされ、各自の召喚陣は発光を始めると同時に、その輪郭をぼやけさせた。

生徒たちは少しの不安と、それ以上の期待を滲ませながら、緊張した面持ちで己の陣を見守る。

おそらく今天界では、それぞれの聖獣・神族たちがどこの呼び声に応えるか選定している最中だろう。

そうして、永遠にさえ感じる数秒を経て、校庭のあちこちで幻想的な光が生まれ始めた。

七色の光溢れるこの瞬間は、この世で最も美しいといわれる光景の一つだ。

そして、これは合図でもある。

待ちに待つた対面の時が、ついにやってきたのだ。

未熟な魔法使いたちは、大きな歓声とともに唯一無二の相棒を迎える。

「さやあ、かわいいー！」

その聽き覚えのある黄色い声に、意識が引っ張られた。はしゃぎながら駆け寄ってきたのは、初めての女ともだち兼親友だ。

「アリア、見て見てー！」

「クー、マスター、スキ、スキ」

大興奮のミアの肩には、小さなリスのような生き物が乗っていた。どうやらク という名前らしい。

その長い耳と尻尾を包むふさふさとした茶色の体毛は、土属性の証拠である。

言葉が片言なことから、おそらくまだそれほどの力を持つてはないようだが……召喚した主があれだけ喜んでいるのだ。聖獣冥利に尽きるというものだろう。

聖獣の方にしても、最初からあれだけ懐いてるのも珍しい。相性が良い証拠だ。

ぴょんぴょん跳ねる相棒と、さっそく戯れるミア。その幸せそうな姿に、自然と笑みがこぼれる。いいパートナーに巡り合えたようで、本当に良かった。

そのミア達の奥では、美人の先輩と一緒に、女好きの彼がパートナーを迎えていたところだった。

「わらわはサラステイ。新しい主はおぬしかえ？」

「おお、これが俺の使い魔!? なんて美しい! ! !」

諸手を挙げて歓迎しているのは、フィルだ。

その使い魔は、鱗のない魚のような外見をしていた。水の様に半透明な身体といい、おそらく属性は見たままだろう。

大きさは大型犬と同じくらいだが、その身体はふよふよと空中に浮いており、なかなか珍しいタイプであることが窺い知れる。

その透き通るような青色の身体は、太陽の光に反射することで天に輝く星のような煌めきを放っていた。綺麗なものが大好きなフィルにとっては、うれしい限りだろう。

だが、呼び出された聖獣はといえば……己を褒め称える主を一瞥した後、冷ややかにこう呟いたのだった。

「これはまた……なんともアホそうな主をひいてしまったのね」

ベースが魚ということでわかりにくいか……心なしか、うんざりした顔をしている気がする。もしかして、前の主もこんななんだつたのだろうか。既にその周りには、そこはかとない哀愁が漂っていた。

それにしても、出会つて数秒でフィルの本性を見抜くとは……なかなか賢い聖獣だ。

おそらくその声色から雌だとは思うが、早くも主を尻に敷きそろ

な様子に、不謹慎ながら安心した。なにせ、あのフィルの暴走を止めてくれる女房役が参上してくれたのだ。周りの人間にとつては、これ以上ない僥倖である。

もつとも使い魔にとつては、たまつたもんじやないだろ？が。
まあ、こういうこともある。

使い魔は主人の魔力は選べても、外見や性格までは選べない。逆もまた然りだ。涙をのんで諦めてもらうしかない。

……そういえば、他の人はどうなったのだろうか。

あたりを見回せば、少し離れたところで一際大きな光が生まれたところだった。

「すげえ！ 神族だ！！」

周りのクラスメイトから称賛をもらっているのは、二人目の女ともだちローズだ。

見れば仔馬ほどの大きさだった火蜥蜴が、ちょうど人型へと姿を変えている最中だった。

まばゆい光の中から現れた男性は、人間でいうところの30代くらいだろうか。

落ち着きはらつたその顔は、百戦錬磨の將軍のような風貌をしていた。

海の青を宿した双眸に後ろに流した深紅の髪は、その莊厳さを一層際立てており、立派な体躯と勇猛さを兼ねそろえたその姿は、非常に頼もしい存在に見えた。

さすが火の精靈に愛されているだけのことはある、といったところか。

だが、そんな誰もが憧れる神族を呼び出した本人は、上から下へとその姿を見下ろした後、一言こう呟いたのだった。

「……かわいくないですわ」

「そりやないよ、お嬢さん」

一見厳めしいその顔も、笑うと一転親しみやすいものへと変貌した。

にしても……さつそく逆の例が現れたようで、苦笑いを禁じえない。

まあ、ローズも悪気があつて言つたわけではないだらう。

神族が人型となつた時の見た目は、本当に多種多様だ。

彼らには老人から幼児まで幅広い外見が存在するが……ややこしいのが、そういう見た見た目が必ずしも中身の年齢と連動していない点にある。老人の姿をとつていても、神族としてはまだ若いなんてことはショッちゅうあるのだ。ついでに服については、それぞれの神族が、人間のそれを参考にして魔法で形成していると聞く。

どちらにせよ詳しいことはわかっていないが、通説ではその神族の精神年齢と同じ見た目をとつてているのではないか、と言われている。

そんなとりとめもないことを考えていると、肩に手を置いていた先輩（既に名前が思い出せない）が急に怯えたように後ずさつた。

不審に思つてその視線の先を追えば、ローズに一言二言何かを告げた例の神族が、こちらに近づいてくるではないか。

「あなたがアリア様ですね。私はフラウ。フレイア様から“くれぐれもよろしく”と仰せ使っております」

強面の彼はそつと立ち、容姿に似合わず優雅に腰を折ってきた。属性の頂点に立つフレイアが直々に言葉を交わすとは、思つた以上に上級の神族らしい。

いや、それよりも……あたりをきよらわしながら、慌てて頭をあげるように促す。

「あの、普通にしてくれて構わない。それと私のことは誰にも」

「そうですか……わかった。誰にも言わないから心配は無用だ」

「ありがとう」

物わかりのいい神族でよかつた。だが、安心する私をよそに、今度はその主人の方が不可解な顔をしながら歩み寄ってきた。

考えてみれば、召還したばかりの使い魔が、主以外の人間に用があるなど普通ありえない。ともすればいろいろと疑われかねないこの状況に、少しだけ焦りが募る。

「アリアさん、先ほどから何を話していくの？」

「な、なんでもない。ただのあいさつだ」

慌てて誤魔化す私を不思議に感じたのか、ローズがなおも何か言おうとした、その時……今度は大きな爆発音が校庭に轟いた。

「し、失敗だ!! 中止しろ!!」

焦燥混じりの怒声が、事態の深刻さを物語っている。

それだけで何が起こったのかを理解できた。稀にあるのだ……“逆流”が。

それは召喚の儀式が危険といわれている所以でもあり、現に過去数人が犠牲になつてゐる事故もある。天界と地界をつなぐ召還陣が逆流を起こしてしまい、召還者が天界に呑み込まれてしまうのだ。

もとより『中止しろ』なんて言われて中止できるものではない。助けるには周りの人間の助力が不可欠なのに……全くサポート役の人間は何をしているのだ。

そうして憤慨しながら音のした方に顔を向けると……目に飛び込んできたのはとんでもない光景だつた。

「つライル！？」

すこし離れたところで、汗を流しながら必死に抵抗しているのは、さつき笑顔で別れたばかりの友人だつた。

今はなんとか踏ん張つてゐる状態だが、その顔色は日に見えて悪くなつていく。

「あれは……まずいな」

あのままで最悪天界に引つ張られて、戻つてこれなくなる。

しかもライルについている先輩は、初めての経験でパニック状態になつており、役に立ちそうにない。本当に、なんのためのサポート役なのかわかつたもんじやない。

心の中で悪態をつきながら、急いであたりを見回す。

教師は……ずいぶんと距離がある。あれでは間に合わないかもし

れない。

今一度ライルのほうを見れば、既に片足が魔法陣に呑みこまれているところだ。

もはや一刻の猶予もない状態に、気付けば己の体は突き動かされるように行動を開始していた。

「ちょ、アリアさん！？」

後ろから名前を忘れた先輩の声がするが、構つていて暇などない。

“ともだち”第一号を救出するために、混乱する生徒たちの間を縫うように駆けぬける。

「ライル！」

「アリ、ア？ ……つダメだ、来んな！！」

両足を埋めた状態ながら、ライルは首を振つて突き放すようになう叫んだ。

今も、彼の身体はまるで蟻地獄にはまつたかの様に、徐々に陣へと呑みこまれている。その恐怖といつたら……きっと計り知れないものがあるだろう。

それなのに、こんな時にも関わらず他人のことを気遣う男を、心底馬鹿だと思う。だが、そんな馬鹿だからこそ、助けてやりたいのだ。

ライルには悪いが、『来るな』と言わされてその通りにするほど、私は従順な女ではない。

「いいからそこで待つてろ！ 今行く！」

「……ひ、 じんのわからずやー 馬鹿つ子ーー」

苦い顔をしたライルは、悪態をつきながら必死に身を捩じって召還陣から抜け出そうとする。

幼児みたいな悪口に一瞬力チンときたが、残念ながらその程度のことで引き返すつもりなど毛頭ない。

おそらく非常に危険な作業であることを彼も知っているのだろう。おそれく下手をすれば二人仲良くお陀仏だ。

……全くもつて、馬鹿な男である。だが、今はその馬鹿さ加減が余計だ。だから、ついついこちらも声を荒げてしまつ。

「なんとでも言え！ そつちこそ素直に助けるとは言えんのか、阿呆！ いいか、まずはこれ以上むやみに動くな！ あと、何を言われても引き下がるつもりなんてないからな！ わかつたらそこで黙つて待つてろ、馬鹿者！！」

未だかつて言つたことのない悪口に自分自身驚きながら、召還陣の前で魔力を全身に纏い準備する。

さすがのライルも己の喧嘩に一の句が告げないのか、今度はボクンとした顔で突つ立つていた。もつとも下半身はもう呑みこまれていたが……

しかし、むしろ好都合だ。これで作業がやりやすくなつた。

これからすべきことを頭の中で反芻しながら、意を決して魔力でコーティングした足を踏み出す。暴走する召還陣を踏み、慎重に両足をその中へと入れる。

その時だつた。

足元の魔法陣が、突如として発光を始めたのだ。

「え？」

そして、『なんだ』と思つた次の瞬間、己の視界をすさまじい光の奔流が埋め尽くした。

「なつーーー？」

目が焼かれそうなほど圧倒的な光の奔流が、真昼の校庭を浸食する。

私は、何もしていない。こんな事態は初めてだ。
いまだかつてない経験、そしてあまりにも唐突に起こつた珍事には、さすがに対処の仕様がなかつた。

そうして、おそらく数秒が経つた頃だらう。

舞い上がつていた砂埃が晴れた後、突如として現れた“それ”に場の空気が凍りつくのを感じた。

「なに、が……起こつたんだ？」

至近距離であまりに眩しい光を浴びたため、まだ視覚がうまく機能しない。

未だクラクラする頭を押さえながら、仰向けに倒れていた身体を無理やり起こす。まずは、状況確認が先だらう。

……あたりは、随分と騒然としているようだつた。

瞬きを繰り返しながら、残された感覚器官を働かせると、生徒たちの悲鳴のような声が耳へと入ってくる。

「あ、あ……！」

「うそ！？」

「ど、どうしてこんなのが出でてくるんだよ！？」

その声につられ、ようやく回復してきた視界とともに顔を上げる。さきほどから感じていた強い気配は、己の目の前にあった。

「……なんだ？」

大きな“何か”がそこにいる“”とはわかる。

未だぼやける視界を、今一度強く瞼を閉じることで矯正する。そうしてなんとかその焦点を結ぶことに成功し、今度こそは、と思いながら前方へ目を向ける。

……翳る光の中から姿を顯したのは、想像だにしない生物だった。

天に届くのではないかといふほどの、巨大な体躯。

エメラルドのように輝く鱗。頭頂部から生える猛々しい二本の角。鋭い爪に瞳孔の開いた瑠璃色の瞳。そして背中から生えた力強い翼……その全てが、ある一つの生物を表す特徴だった。

天界最強の生き物。

その力は並み居る聖獣・神族の頂点に君臨し、大精靈にすら匹敵するといわれている。

人並みに召喚できるはずがない、孤高の存在。

やの名は

「アリ、ゴン……？」

第2話「対面」（後書き）

ファイルの扱いがひどくてすいません（笑）
でも彼は基本こんな扱いです。

ちなみに皆さんの使い魔が好きですかね？

私は、フラウがお気に入りです。ダンディ最高！！

そして、ついにファンタジ 定番の生物を登場させることができました。

もし、”ドラゴン”ってきいて「あつー」って思った人がいたら、
すごいです。

もう裸踊りしそうなくらい、すごいです！意味不明ですいません。
この真相は次の次あたりで明かされると思います……たぶん。

第3話「正体」（前書き）

相変わらずサブタイトルはテキト です。

第3話「正体」

「に、逃げたほうがいいんじゃない……！？」

「いや、ドラゴンが本気を出したら学園」と吹き飛ばされる。ドリに逃げようが無駄だ」

冷静なフラスト先生の忠告に、既に腰の引けているファイルは絶望と同時に若干の安堵を覚えたようだ。

だが注視してみると、そう言つた先生の顔は苦々しく、額にも脂汗が滲んでいることがわかる。それは、今この状況がどれだけ危険なのかを如実に表していた。

今まで生徒が呼んだ聖獣や神族は、できたばかりの主を守るように寄り添うが、その怯えはこちらにまで波及している。ドラゴンの持つ圧倒的な威圧感は、彼らから戦う気力を根こそぎ奪っていたのだ。もはや、既にその大半が戦意喪失に近い状態にあるといつても過言ではない。

「で、ではどうすればいいのですか！？」

「は、話し合いとかはどうかなー！？」

ミアとローズは、お互いを励ますよつこがつちつと抱きしめあつている。

その前方には、さきほど一人が召還したばかりのクーとフランの両使い魔が鎮座していた。

全身の毛を逆立て威嚇するクーに、「お前さん、ちつこいのになかなか度胸があるな」とフラウが感心したように腕を組む。こちらは貴禄の併まいだったが、その瞳がこの場にいる他の誰よりも獰猛な光を宿していることに気付けた者は、はたして何人いただろうか。

その横ではレストがようやくといった具合に、腕に張り付いていた巨乳先輩を引きはがしたところだった。

……どうやら、彼女のおかげで身動きがとれなかつたらしい。よく考えれば、それでもなければ友人想いの彼が、ライルの危機を見過ごすはずがなかつた。

だが、そうして解放された彼もさすがにこの事態には手をこまねくしかないようにつだ。

「さて、話し合いができればいいがな。だが――」

その先は、言わないでも皆わかつていた。

ドラゴンは人に召喚されない。召喚できない。

誇り高い天界の王者。絶対的強者。そんな彼らが、人間の言葉に耳を貸すはずがない。

なにせ、過去には奇跡的にその召還に成功した主を殺したという逸話まであるのだ。

しかも今回は、召還が成功していないにも関わらずこの場に現れた。この時点で既に状況は絶望的だ。

(やるしかないか……)

静かに覚悟を決めていると、後方にある校舎の陰から聞き慣れた軽

い足音が聞こえた。

小さな体を疾駆し、半ば押しのけるように人波をかき分け現れたのは、もちろん相棒だった。

あいもかわらず来るのが早い。……できればもう少し遅れて来て欲しかった、というのが本音だ。

「『』主人様、さつき大きな魔力を感じ……て、ドラゴン…?」

さしものキラも天界最強の存在には、「戸惑いを隠せない」というである。だが、驚きに目を見張つたのも束の間。すぐにその目を険しいものへと変え、一步前へと踏み出した。

「『』主人様は下がつていてください」

彼の蒼い瞳には、最強の王者へ命を賭けて立ち向かおうとする気概が感じられた。

そうして一步前を行くその小さな背中に、何とも言えない安心感が募るが……『』で甘えてはいられない。

「いや、私がやります。下がつてろキラ」

そう言つて、さらにその一步前へと躍り出る。

同じ聖獣・神族なら、彼らがどれだけ強大な存在か本能でわかつているはずだ。それを押してもなお守ろうとしてくれるキラには、感謝もあるが……同時にあまりにも危うい。できればもっと自分のことを大事にしてほしい。それほど危険な相手なのだ。

だが、そつは言つたものの、正直勝てるかどうかは怪しいところだつた。

以前ならともかく、今はによりも魔力が圧倒的に足りない。節約

して使うことになるが、果たしてそんな余裕があるのかすら感じるのが現状だ。

さらには、ここにいる人間全員を守りながら戦うことを考えると、かなり厳しいものがある。

最悪大精靈の力を借りることになるだろう。この場で彼らを呼べば、追及は免れないが……それでも死ぬよりかはマシだ。

座して死を待つつもりなど、毛頭ない。

乾坤一擲。それこそ死力を尽くして、血路を開く。

それが己の使命のようにさえ感じていた。

……300年前は感じなかつたこの感情を、なんと呼べばいいのだ
う。

「全員さがれ！」

担任の鋭い声が、己の思考を遮る。

確かにおかしなことを考えている場合ではなかつた。敵はすぐ目の前にいるのだ。

その敵……ドラゴンといえば、なぜか現れてからずっとこちらを見つめていた。

瑠璃色の瞳がまるで何かを見極めるように、細められる。

もしや完全にターゲットとされたのか……己の場合はむしろ望むところだ。

どうにか人気のない所にまで誘導できれば万々歳といったところか。そうすれば、大精靈だって氣兼ねなく呼べる。

だから、挑発の意味合いも込めてあえてその一步を縮めた。

「アリア、だめよ！ 逃げて！」

「セレスティ！」

「アリアさん……」

ミア、レスト、ローズが必死に自分を呼ぶ。安心させるように視線で『大丈夫だ』と伝えるが……どうやら逆効果のようだ。それぞれ先輩に羽交い絞めにされながらも、今にもこっちに駆け寄つて来そうだった。これは早めに片をつけなければ。

ちなみに、非常にどうでもいいことだが、フィルは脱兎のごとく逃げ出していた。まあ、だからどうということでもないが……彼の使い魔サラステイが呆れたようにその背中を見送っていたのが、やけに印象的だつただけだ。

そうしてみると、不意にバサリという音が上空から聞こえた。どうやら、挑発に乗つてくれたようだ。

“それ”は膠着状態を崩すよつて、大きく羽を広げて何かの予備動作をし始めた。

その様子に、こちらもゆつくつと身構える。前方を睨んだまま静かに魔力を集束させて、来るべき時に備えた。

「キュオオオオ……！」

意外とかわいらしげな声を上げながら、天に向かつて咆哮するドラゴン。

その周囲には竜巻のように風が渦を巻き、巻き込まれた砂が己の視界を奪つた。

「ううーー。」

思わず舌打ちが零れる。ドラゴンともありつ存在が、やけに姑息な手を使つてゐる。

視界の利かない中、いつでも魔法が放てるように身構えていたりと、不意に前方に強い気配が現れた。思わず攻撃しかけるが……気配の持ち主があまりにも小さくて一瞬躊躇つてしまつた。

……それが命取りだつた。ある意味。

突如として腰辺りにドスッとした衝撃を受ける。「うぐっ」「うぐっ」という乙女にあるまじき悲鳴が出るが、誰にも聞かれなかつたようであつた。

それでも思いもよらない攻撃（？）にて、堪らず尻もちをついてしまう。

「うつ 一体なん、だ？」

出鼻を挫かれた、とでもいうべきか。

地面に手をつきながらも、苦い感情が胸中に広がるのを押さえられない。もし今攻撃を仕掛けられたら、一巻の終わりだ。

（早く体制を立て直さないと）

だが、やつして腰を上げようとして、ようやく妙な違和感に気が付いた。

なぜか、己の腰元に質量を持つた温かい感触があるのだ。

『おかしいな』と思いながら、そのまま視線を落とすと……
幼女がいた。
ギュ と自分にしがみついている。

(…………なぜこんなところに幼女が？)

この校庭は、現在ドラゴンのこる超一級の危険地帯だ。こんなにいた
いけな幼女が居ていい所では、断じてない。

(…………ああ、迷子か)

…………こやこいや、迷子がこんなところのはずがない。馬鹿な
考えをすぐに否定する。

ひどく混乱しているのは直覚しているが、それにしてもあまりにも
非現実的な思考をしている。

いつたん深呼吸をして冷静になろうとするが……その前に次なる混
乱が起こる方が早かつた。
件の幼女が、目をウルウルさせながらこちらを見上げてきたのだ。
可愛らしい桃色のワンピースを着た幼女は、感極まつたという表情
で口を開く。

「やつと会えた！ お姉さまーー！」

「…………は？」

そのまま、すりすりと頬を寄せてくれる。その身体はキラキラとして
に小さく、おそらく5歳ほどだろう。短い手足を最大限に伸ばし、
一生懸命しがみ付いてくるその姿はひどく愛嬌を誇る。ただし、こ

んな事態でなければ、だ。

少しだけ冷静になつた頭で、今一度謎の幼女の姿を観察する。エメラルドのような光沢のある髪は、足元近くまで伸びている。人間ではさすがにありえない色だ。そして、その零れ落ちそつた大きな瞳は、さきほどまで見ていたどつかの最強生物と同じ濃い瑠璃色。

ここまでくれば、自然とその正体も推察できるところのだった。

……だが、どう考へても詐欺だろ？ 声を大にしてそう主張したい。

「セレスティ、その幼女は？」

「おやべへ、わきまえのドリゴンかと……」

担任の問いかけに、こめかみを押さえながら答える。あんまりと言えば、あんまりなその見た目のギャップに、つい自信なさげに言つてしまつたが……この波動は間違いなく、ドリゴンのものと同じだった。

「マジか！？」

「まじだ」

召還陣を挟んだ向かい側でライルが、驚いたように叫んだ。彼もさつきまで田の前にいた巨大な生物が、一転幼女になったことにかなり驚愕したようだった。

お互に尻もちをついた間抜けな状態だったが、とりあえず儀式に失

敗した影響は消えたようである。いつも通りの元気そつた姿に安心した。

……だが、問題はこちらだ。田の前では、早くも幼女と少年の喧嘩が勃発していた。

「ちょ、こりー、お前、『主人様から離れろー』

「いーやあ！ お姉さまー！」

いち早く正氣を取り戻したキラは、用意していたらしい闇魔法を解いてすぐに駆け寄ってきた。その気配から、随分大規模なものを張つていたらしいことがわかるが、彼も殺気がない上に見た目が“これ”では、さすがに攻撃を躊躇つたのだらう。

それでもこの幼女がしがみついている状況がどうしても許せないらしく、今は違う手段を敢行している。

口にするのも馬鹿らしいが……幼女の足を掴んで、私からひっべきそうとしているのだ。

一方必死の抵抗を試みる幼女は、そのか弱い見た目に反して、手の力だけで私の腰にしがみ付くという力技を披露した。胴体を含む下半身は完全に浮いているにも関わらずだ。ちなみに、実はこれが結構痛かつたりする。

それにも……これまたなんとも間抜けな構図だ。いろんな意味で、さつきまでの緊迫感が台無しだった。

ギヤーギヤー騒ぐ二人を前に、眩暈と頭痛の一重苦に蝕まれながら

も、なんとか意識を保つ。

あまりにも常識の埒外というべきことが続いたせいか、すでに普通の感覚が麻痺しつつあった。

今なら魔王が復活しても、驚かない自信がある。

……だが、いつまでもそんな現実逃避を続けるわけにはいかない。まずは深いため息をついて、次に憤るキラを宥め、最後に少女を立てて目線をしつかり合わせる。そしてさつきから気になっていた最重要事項を訊く。

「なあ、どうして私が“お姉さま”なんだ？」

「だつてルナを助けてくれたもん！」

爛々と瞳を輝かせた幼女は、元気よくわけのわからないを言つてくれた。……また現実逃避したくなつてきた。

どうやらこの幼女の名はルナというらしい。それがわかつただけでもまだマシか。

“助けた”とは言つているが、やはり身に覚えがない。いくら幼女の姿とはいえ、あれほど巨大な力を持つドラゴンを忘れるはずがないだろう。

そもそもここで目覚めてからまだ1ヶ月と少ししか経つてないのだ。その間のことすら忘れてるなら、自分の脳を疑うところである。

「すまないが、記憶にない。人違ひじゃないのか？」

「そんなことない！　お姉さまの魔力は忘れたことないもん！　ずっと待つてた！」

「ずつと、つて……」

その単語がどうにも引っ掛けた。

今一度、記憶を根底から掘り返してみる。

(ずつと、昔、待つてた……)

そうして奥底に眠らされていた一つの箱に巡つていったその時、横合にから見事な邪魔が入る。

「ちよつと、さつきから聞いてればなんなのさー。『主人様は君のお姉さんじゃないんだよ…』

主人の思考を遮つて吠えるキラに、幼女……ルナはよつやくまともに視線を合わせる。

「あれ、あなた……？」

コクリと首をかしげたルナは、もはや犯罪的に可憐かつた。なにせそのあまりにも無垢な瞳には、あのキラでさえも祛むほどだつたのだ。

「……な、なに！ なんか文句でもあるの…？ い、いっとかばい主人様は僕のだからね！－！」

幻想に打ち勝つように、両手に腰を当て、胸を張つて堂々と“自分のもの”宣言をするキラ。

……正直に言おう。恥ずかしいからやめて欲しい。

それに負けじとルナも真似をして、両手に腰を当て始めた。
だが、その姿は可愛らしいの一言に過ぎないかんせん迫力に欠ける。
まあ、それはキラにしても同じだったが。

「ち、違つもん、私のだもん！　あなたより前に会つたんだからー。」

その後小声で「たぶん」と付け加えたのは、おそらくキラには届いてないだろう。

彼はまるで裏切られたかのように顔を向けてくる。
いや、そんな風に見られても……一体私にどうしろと？

しかし……まさかこいつちも“自分のもの”を主張し始めるとま、一
体どうこうことだらう。

どうにもおかしな利権争いが勃発しているが、それ以前にこいつら
私をおもちゃかなにかと勘違いしてないだらうか。もはや気分は、
勝手にやつてろ状態だった。

むしろやつした不毛な争いよりも、気になつたのがルナの最後の言
葉だ。

(キラよりも、前?)

キラよりも前と言つたら、それはつまり300年前の話に遡ること
になる。

(キラよりも前、ドラゴン……)

やつして、今度こそあと少しでわかりそう、といつ時にまたまた邪
魔して来たのは、やはりというか相棒だった。今日は「いろんなのばつ
かりだ。」

「『主人様、どういうことですか！？ 僕の前にもいたんですか！？ そんなの聞いてないですよー！ ちゃんと説明してくださいー！』

まるで煮え湯を飲まされたかのよつて、キラガ恐ろしい形相で詰め寄つてくる。

随分と興奮しているのか、普段はしないくらいの勢いで強く肩を掴まれブンブンと前後に揺すられた。

(……なんだ、この修羅場は)

何も悪いことはしていないはずなのに、この糾弾。

揺れる視界の中で一人遠い目をしていると、今度は耳に随分とくつろいだ声が入ってきた。

「まるで、浮氣現場を発見された恋人みたいじゃね？」

「ええ、私にもそう見えますわ」

「なんか和むねえ」

「まったく、人騒がせな……」

「ドラゴンが幼女……も、萌える！」

最後のは名前を忘れた先輩のものだが……なぜかいたく気持ち悪かつた。

どうやらルナのほのぼのする外見も相俟つてか、場は既に見世物と化しているようだ。

野次馬たちは呑気に見学と洒落こみ、この愛憎模様（？）入り乱れる修羅場を楽しんでいるかのようにさえ感じられる。

……なんだかさつきまで血路を開くとか、死力をつくすとか考えて

たのが、猛烈に恥ずかしくなってきた。
あの決意を返してほしい。

そして、傍観を決め込む友人たちに言いたいことは、ただ一つだつた。

「…………誰か助ける」

さつきは危険を冒してまで助けようとしてくれたのに、この変わり様はなんだ。

どうしてこう、切実に助けてほしい時に助けてくれないのか……どうにも理不尽だ。

そうして、静かに天を仰ぎ悪態をつく。

本日の天気も快晴。

視界に入ったのは……これまた憎たらしいほど綺麗な空だった。

第3話「正体」（後書き）

ちなみに「キュオオオオ……！」ってのは、人間でいうところの「よつしゃあああ……！」みたいなもんです。

そんなわけなので、ルナはちゃんとドラゴンの時も話せたりします。さて、ようやく序章で蒔いた種を芽吹かすことができやうです。ここまで来るまで、すんごい長かった……！

第4話「怪獣の攻撃」（繪書モード）

“わざわざアクトですね……すいません。
そして今回もなぜか長いです……すいません。

第4話「怪我の功名」

遠巻きに眺めている連中に期待しても、きっと無駄だらう。ここは開きなおるしかない。

もう助けを求めるのはやめた。300年前を思い出せ。いつだって一人でやつてきたじゃないか。

どんな窮地に追い込まれても、誰の力も借りずに生きてきたのだ。きっと今こそ、その経験を最大限に生かすべき時に違いない。

そう、事態は己が力を持つて打開するしかないのだ。

決意も新たに騒動の中心にいる一人へと意識を向ける。

今度こそ、このドラゴンの正体を掴んでみせる。そして、一刻も早くこの混沌と羞恥が入り混じる空間から脱出してやるのだ。

……そう、例えそこに早くも決意を翻したくなるような、脱力ものの光景が広がっていても、だ。

視線の先では、幼少コンビがまたわけのわからない自慢大会を開催しているところだつた。子どもの様に……いや、実際見た目は子どもだが、本来はそんなことをする歳でもない彼らは、周囲の母性溢れる生温かい視線に気づくことなく、一人の世界に入っていた。もちろん、そこに甘さなど欠片もないことは言ふに及ばず、だ。

「ルナは、お姉さまのためにずっとしゅぎょーしてたの！　ぜつたいあなたより強いんだから！！」

「ふん、そんなのやつてみないとわかんないだらうー。第一、僕は君が天界でまつたりしている間もず、つど主様のそばにいたんだからね！」

「ル、ルナだつてあの時弱くなかったらずつと一緒にいたもん！」

それに“かりけーやく”だつてしてるんだから！」

「でもそれは昔の話でしょ。後から押し掛けに来たくせに、僕のご主人様をとうなんて考えが甘いよ！ まあ、当の『ご主人様だつて覚えてないようだしー』

「お、お姉さまはちゃんと覚えてる！ ルナに優しくしてくれたし、頭もなでてくれたもん！」

「へーんだ、それくらいで田舎されても困るね！ 僕なんて、一緒に風呂に入つたことだってあるんだぞ！」

「！？」

言つに事欠いて、なんてことを言いだすんだこいつは。なにより、その勝ち誇った顔を今すぐやめる。イラッとくる。

ルナにしても、そこは悔しそうな顔をする場面じゃないだらつ。明らかに反応するツボを間違えている。

ともすれば、10歳の少年が5歳の幼女を言い負かしたともされるこの状況。世間的には決して褒められたことではないが、なにせこのほのぼのとした雰囲気の中だ。体裁よりも、むしろキラの爆弾発言の方に興味が引かれるのは仕方のないことかもしれない。

案の定といふか……最後の一言にギヤラリーがざわつき始めた。そして、彼らを代表するように、ライルが驚愕混じりの確認を投げかけてくる。

「マジか！？」

「まじじゃない！ 断じて違うー！」

まったく誤解も甚だしい。いくら相手がキラでも、さすがに風呂

まで一緒にいるわけがないだろ？

ただ単に、こいつが勝手に乱入してきただけだ。しかも300年前、まだ子狼だった頃に……あんなものは無効に決まっている。

……と云うか、よく考えれば、内容もいろんな意味でギリギリではないか。うつかりばれたらどうしてくれるのだ。危ういにもほどがある。

これ以上余計な事を話す前に、一人悦に入っている馬鹿の口を塞ぐ。「んー！ふーーー！」と何か喚いているが、完全に無視した。主人の心臓に多大な負担をかける使い魔に容赦など無用だ。

……ともかく、これでようやく落ち着ける。この馬鹿馬鹿しい争いに終止符を打つためにも、記憶を掘り起こす作業を再開しなければ……三度目の正直だ。

(ずっと待っていた、キラよりも前、ドラゴン……ドラゴンといえ
ば)

そうして、せつせと掘った先に発見した記憶の箱を、今度こそじ開けてみる。

苦労の末に見つけたものは……遙か昔の邂逅だった。

「もしかして……あの時のドラゴンの幼獣か？ 密猟者に追いかけられていた……？」

「さう！ やつと思い出してくれた！ お姉さまにおんがえししたくてずっと待ってたの……」

よほど嬉しいのか、ルナはピヨンと一緒に満面の笑みを浮かべ

た。

(……なるほど、ようやく合点がいった)

300年と2年ほど前だつただろうか。確かにキラとユウスケが、ドリゴンの子どもを助けたことがあった。

地界に落ちてきた典型的な“迷子”。

当時は両手で抱きあげられるほどの大きさだったのに、まさかあれほどの巨体に成長するとは、夢にも思わなかつた。気付けなかつたのも無理はないだらう。

それにルナの言つた通り、あの時天界に還すための仮契約も結んだ。おそらく、その時の契約がいまだ有効なのだ。それを通して、私が生きていることも知つていた。……というわけか。

しかし……だとすればキラに負けず劣らず、ものすこしい執念である。

なにせ私がわざと召喚陣の上に立ち天界とつながつていたのは、時間にしてわずか数秒のことだつた。ルナはその数秒で即座に私の魔力を感知し、逆流を押しのけて地界にやつってきたのだ。おそらくドリゴンでなければできない離れ業である。やはり、見た目に反して優秀であることは否定できないだらう。

「……で、セレスティ。事情はよくわからないが、このドリゴンはお前との契約を望んでいるのか？」

そんな風によつやく一息つけた所で、新たに波紋をよぶ一石を投じてきたのが担任だつた。彼は周りの生徒たちとは違い、今のルナの外見にも警戒を解いてはいない。

さすがといつべきか。いくら見た目が幼女でも、その正体は天界最強の生物だ。きちんとした契約が成されるまで油断しないその姿勢は、称賛に値する。

もつとも、私にとっては余計なひと言だつたが……嫌な予感がひしひしとするのだ。

「…………そりなのか？」

ほとんど答えは予想出来ていたが、念のため問い合わせてみる。案の定、目の前にいる幼女は、これまた元気よく肯定してくれた。

「うん！　“ほんけーやく”むすんでくれるまでかえらない！」

その言葉を聞いた瞬間、キラはジタバタ暴れて私の拘束を振りほどく。そんなに慌てて何をするのかと思えば……そのまま私の腰に後ろからしがみついてきた。……何がしたいんだこいつは。

「だ、だめだめだめ！！　ご主人様は僕の！」

一方ルナは、これまた対抗するように前から抱きついてきて……

「やだやだやだ！！　お姉さまはルナの！」

また始まつた。本人を無視した無駄な所有権争いが。

しかも今度はサンドイッチ状態ときた。前後から力強く圧迫され、非常に息が苦しい。

こいつら私が呼吸を必要とする生き物ということを完全に忘れていないだろうか……あれか、もはや人権どころか生物としての存在

すら無視なのか？

少年と幼女が低レベルな争いに、いい加減げんなりせざるを得ない。

なぜこんなにも子どもに好かれるのか……いや、問題はそこじやないか。2人とも300年以上生きているのに、この幼さはなんだ。見た目は子ども、中身は300歳オーバーという残念なギャップ……こんなマニアックな趣向に、一体誰が得をするところなのか。本当に頭が痛い。

「す、す”ijiじゃないアリアさん！ ドラゴンと契約を結べるなん

ん」

「先輩、ちょっと黙つていてください」

名前を忘れた先輩が興奮して話しかけてくるのを、八つ当たり気味に切り捨てる。悪いが、今は優しくする余裕などない。

なにせ下手をすれば、このままキラとルナの魔法合戦に発展しかねない状況だ。今はまだ口げんかで済んでいるが、いずれキラあたりが爆発するのは目に見えている。

こんな成りでも、実力だけは折り紙つきだ。もしこいつらが本気を出せば、被害は想像を絶するだろう。今の私が止めるのは、至難の業だ。

それを考えると、早めに決着をつけなければならない。

一度目を閉じ、そして固い決意と共にしっかりと開眼する……結論など最初から出していたようなものだった。

申し訳なく感じながらも、眼下のヒメラルド色をそつと撫でる。

「ルナ……すまない、私には既に手のかかる相棒がいるんだ。だからルナと契約を結ぶことはできない」

「！」主人様……！」

後ろの相棒が感動したように声を発するが、その理由はおそらくこいつが考えているよりもずっと切実だ。

……はつきりといって、面倒見切れない。

キラ一人だけでもいろいろと大変なのに、そこにルナまで加わつたらきっと私の身がもたない。

現にさっきから続く状況が、それを体現しているいい例だ。精神的にも肉体的にも無理だ。どう考えても捌き切れる自信がない。

それに、そもそも使い魔は一人につき一匹という原則なのだ。300年前ならいざ知らず、今それをやつたら悪田立ちすること確定である。

それらを思量すると、ルナには悪いが他を当たつてもう一つしかない。

「や、やだ！ やだやだやだ……！」

ルナは小さな頭をぶんぶん振りいやがり、涙目でこちらを見上げてきた。その瞳はどこまでも無垢で澄みきつており、なんとも言えない罪悪感がちくちくと良心を突いた。

だが、こじは心を鬼にしてかからねば……黙々とこねるその姿に、言い聞かせるようにゆっくりと話しかける。

「ルナ、あの時の恩ならもうこじんだ。どうか好きなように生きて

くれ……それが、私の願いだ

それは本心だった。なにも好き好んで、私の様な厄介者の使い魔になることはないのだ。

ルナのような神族なら、きっと魔法使いの間でも引く手あまたに違いない。そうでなくとも、天界で自由気ままに過ごしてくれてもいいのだ。いつまでも300年前の恩に縛られてほしくなどなかつた。

キラにしてかうだが……まったく義理堅いにもほどがあるだろう。

ルナも、納得はできないものの、おそらく私の意志が固いのを肌で感じたのだろう。……口唇を固く結び、何かを考えるように黙り込んだ。

そうして、しづらいく下を向いていた彼女は、一度ワンピースをギュッと握りしめた後、勢いよく振り返る。

「じゃあ、そのお兄ちゃんど“けーやく”結ぶ！！」

その小さな指の先にいる人物は、まさかの『指名』にポカンとしていた。

「…………へ？ 僕？」

私も全く同じ心情だった。ビックリきなりそうなるのか、意味がわからない。

「なんでワイルなんだ？」

「お兄ちゃんともつながってるからー。」

間髪なく返つて来た返事に一瞬思案し、そしてすぐに納得した。

(……ああ、なるほど)

おそらくそれは、私がライルの召喚……例えそれが失敗であつたとしても、その途中で彼の召喚陣を踏んでしまったことに起因している。

基本的に、使い魔契約というものは、その聖獣や神族を召還した本人でなければ結べないものとなつていて。理由は簡単。そうでなければ、己が力に見合つた相手とは言えないからだ。

ちなみに私はその例外となる魔法を知つていて、まあ今はどうでもいい話だ。キラ以外に使う気もないし。

ともかく先に述べたルナの執念と根性のおかげで、結果的に一人の術者による不可思議な召還が成立してしまったのだ。

だから、私が拒んでいる以上私が主になるのは不可能だが、ライルにも主になる資格があるのは確かだ。加えて、ルナはライルにまだ使い魔がないことを知つている。

そこで、ライルになつてもらおうとしている、というわけだ。失礼だが、なかなか頭が回るようである。

「でも、俺ドラゴンが満足するほど魔力持つてないんだけど……」

「いい、ルナが勝手に来るから！！」

「あ……そつ……じゃあ、いつか」

……もはやここまでくるとなんでもありだ。確かに今回も呼んでな

いのに勝手に来た。

普通使い魔は、主が相応の魔力を消費しその名を呼ばないと、地界に顕現できないものである。

だが神族になれば、自分の力で天界に還れるようになり、最上位の神族は契約を交わした主が地界にいるだけで、主が拒んでいない限りは自力で顕現することができるのだ。

それこそドラゴンの驚異的な力があつてこそだらう。

しかし、あつけなく了承を返した“ともだち第一号”に、どうにも不安を隠せない。

なんといっても相手は“天界の暴れん坊”と呼ばれるドラゴンである。しかも自意識過剰でなければ、おそらくは私目当てでライルに契約を持ちかけているように見える。それはライルもわかっているだらうに……

「その…………本当にいいのか、ライル？」

「んーまあ、いんじゅね？ 召喚には失敗しちまつたしな……それにさ、実は俺ドラゴンに乗るのがガキの頃からの夢だったんだよ！」

少年のようににはにかむ彼は、むしろこの事態を歓迎しているようさえ見えた。

普通なら一生叶うことのない壮大な夢。それが現実になりそうな予感に、ライルの目はキラキラと輝きを放っていた。

その瞳の奥には、ドラゴンという存在それ自体に対する純粋な好奇心があるだけだ。それを見て、なんだか安心した。

ちなみに、周りの「いーなー」、「ずりーー」という声も、その大半は男子のものであった。

……それにしても、数奇な契約もあるものだ。まあ、本人同士が納得しているのなら、もはや私が文句を言える問題ではない。それに、正式に主になれば、ある程度の命令には従ってくれる……はず。ただし、魔法使いの力量と、使い魔の能力差によるが……うん、多分現時点では絶対に無理だろう。

「わたしルナ……！」

「俺はライル。よろしくな」

……そんな私の懸念など知る由もないライルは、ルナと田線を合わせた上で、その柔らかそうな碧緑の髪をなでた。

……意外と慣れている。そういえば弟妹がいると言つていたからそのせいかもしない。

ルナも心なしか嬉しそうだ。どうやらライルのことを気に入つたらしい。

……………そうして改めて契約のための詠唱を終え、晴れて主従関係を結ぶに至った二人を眺める。

……………そういえば、ルナは竜巻を起こしていたことからわかるとおり風属性である。その意味でいえば、風属性を持つライルにはぴったりな使い魔かもしない。

「よろしくね、ライルお兄ちゃん！」

「お兄ちゃん、か……あー、なんだか妹がもう一人できた気分だわ」

「えへへ、じゃあ今日は疲れたからかえる！ また来るね！」

現れたのも唐突なら、去るのも唐突だった。ルナは一瞬で召還陣

をつくり出し、その中へと消えていった。

……おそらく魔力の逆探知を使い半ば無理やり地界にやってしまったせいで、かなり体力を使ったのだろう。なにはともあれ、よつやく静かになった。

散々場を引つ搔きまわしてくれた可愛らしくも強烈な台風が去ったことで、緩み切っていた空気はさらに弛緩する。

元の姿を見ていたせいか……たとえ幼女といえども、ここにいるだけでドラゴンとしてのプレッシャーを醸し出していたのは確かだ。

「アリア……」

「ん、なんだ？」

己の使い魔を見送っていたライルが、若干氣まずそつこりうを振り返つて来た。

彼は幾分逡巡した後、氣を取り直すように頬を搔きながらに笑つた。

「その……助けてくれてありがとう……正直もうダメかと思つてたから、ホント助かったわ！」

「まったくだ。今度からはもつと素直になれ」

「そうだぜライル！ 命あつての物種だからなー！」

偉そうに返す私とライルの会話に乱入してきた声は、いつの間にか戻ってきた彼のものだった。

「「あ、真っ先に逃げたファイル」」

「……よく見てたね」

私とライルの歯に衣着せぬ物言いに、フィルは若干頬をヒクヒクさせる。別に責めているわけではないのだが……

だが、脅威？が去つて上機嫌になつた少年は、それに追随するようチクリと針を刺した。

「フィルは逃げるのも早ければ、帰つてくるのも早いんだね！」

「……あのー、キラくん。笑顔で毒吐くのやめてくんない？ 傷つくから」

「事実ですもの、仕方ありませんわ」

「うん、すごい逃げっぷりだったよね」

「ローズちゃんにミアちゃんまで……！」

それぞれの使い魔を還した二人が置みかける様に言葉を重ねれば、そこにはいつも通りの光景が広がつていた。

……やはり平和が一番だ。

「はは、まさか生きてドラゴンを捕める日が来るとは思わなかつた。さつそくレポートにまとめないと……」

「クルト先生……意外と立ち直りが早いですね」

「なに、こいつ性格でなければ研究はやつていけませんよ。そういうフルスト先生こそ大丈夫ですか？」

「……何が、でしょう？」

同じことを意図した質問でないことを察したバッシュは、数瞬の

沈黙を経た後、心なしか低い声でそう問い合わせ返した。

その鋭い同僚の視線に、クルトは『地雷を踏んだかもしれない』

と思ひながらも、取り繕つよつて言葉を返す。

「い、いえ、なんだか今日は元気がなかつたような気がして……まあ、おせつかいでしたね。でも、ドラゴンが現れた時の冷静さはさすがでしたよ」

「まあ、じつ見えて宫廷魔法士をしていた時もいくつか修羅場を経験していますから。無論、ドラゴンと相対するような事態は初めてですが……」

額に流れていた汗をぬぐいながら、バッシュは一人胸中でつぶやく。

「そう、なんといつてもドラゴンだ。全ての魔法使いにとつて憧憬のまど。天界最強の生物であり、孤高の存在……それが、流れに逆らつてしまでこちらに押しかけて来たのだ。

事情はよくわからないが、それほどまでの魅力があの娘にあるといつのか。

どうにも不可解だ。そんな疑念を持ちながら、件の生徒へと視線を向ける。

「アリア・セレスティカ……」

そこから数歩離れた所で、この国の第一王子も難しい顔をして考えを巡らせていた。彼の脳裏では、既にこれから起こりそうな事態に対する予測と対応が次々とたてられていた。

……そんな彼の出した結論は一つ。

「これは、口止めが必要か……」

そして、それぞれ別の思惑を込めた二人の視線の先で、級友に囲まれた彼女もまた思い出したようにポツリと言葉を発する。

「…………あ、ルナに口止めするの忘れてた」

その言葉は妙に虚しく、快晴の空へと響いた。

第4話「魔戦の功名」（後書き）

さて、今回序章でチラシと出したダーリン語を持っていたよつて、元ひなたよつて、この物語は、時々読者の皆様が忘れたころに伏線もどきを回収する、とっても不親せ……じゃなくてミステリアス……いや、これもなにか違うな。

うーん……やう、とっても挑戦的な作品となつておつます（「まかした」）！

後から見返して『ねお、じんなところにやがつたー』とか宝探し的な感じで楽しんでいただければ、と思います。

第5話「邂逅」（前書き）

途中ほんのちょっとグロ表現が出てます。
まあ、前後のゆるいやりとりで誤魔化せる程度なんで大丈夫です。
今回は長いので、2つに分けました。

第5話「邂逅」

深遠なる闇が空を漫食し、孤高に輝く月が中天にさしかかる頃。ハインレンス王立魔法学園にある寮の一室では、とある主従がいつもより遅めの帰宅を果たしたところだった。

「はあ、なんだかどつと疲れたな」

倒れこむよつて、ベッドにダイブする。わすが王立の学園といったところか……最上級の肌触りである。ようやく一息つけたことも相俟つてか、心身に沁みわたる安らぎもひとしおだ。

なにせ今日は精神的にも、肉体的にも非常に負荷がかかった一日だった。

疲れの原因はいわずもがな、今日の“萌え幼女ドラゴン召喚事件”（ファイル命名）にある。……ネーミングセンスがないのは、もはや仕様と考えていい。

極上のふかふかに顔を埋めながら、さきほどまでの戦いを思い出す。……ルナが還った後にまた一悶着があつたのだ。

それは当然と言えば当然の流れ。そう、教師、研究者、そして生徒という各方面からひどい質問攻めを受けたのである。老若男女誰もかれもがあり余る好奇心を隠そつともせず、爛々と田を輝かせ迫つてくる光景は、ある種の恐怖だった。根掘り葉掘り、一切合切を訊き出そうとする彼らの辞書に”遠慮”という一文字は載つてなかったのだ。

それでも、矢継ぎ早に繰り出される問い合わせにまさか馬鹿正直に答えられるわけがなかつた。結果的にのらいくらいと嘘八百を並べるこ

とになるのだが、いつか言つたように元来私は嘘をつくのが苦手である。

話す」とに内容が変わってしまったのは、もはやどうしようもない失敗だ。それでも、なんとか恐怖集団の攻撃を捌き切った自分を褒めてやりたいくらいである。

そんなこんなで、つこれかほじよひやくその魔の手から解放され、今に至るというわけだ。

本音の上では、このまま心地よい柔らかさに身体を委ね眠つてしまいたかった。だが、あえてその誘惑に抗い、睡魔と必死に格闘しているのにはわけがある。

自分が寝転んでいるベッドがまた少し沈んだことで、その時が来たことを悟つた。

「『主人様！　あのルナつていつドリゴンとは、どいで知り合つたんですか？』

(やつぱりきたか)

本日最後の質問は、予想通り相棒からだつた。私のベッドの上で正座した彼は、じとりとした目線を持って、こちらを見下ろしていく。それはライルが言つたように、まれに浮氣を追及する恋人のようであった。

……キラの知らない間に出会つていた私とルナ。どうやら、彼の中ではそれがどうしても見過ごせないらしい。嫉妬深いのか、それともただ単に知りたがりなのかは知らないが、その態度は『教えてくれるまで梃子でも動きません』という決意を示していた。……面倒な。

しかし、ただただ素直に教えてやるのも、なんだかおもしろくな
い。なにせルナ召喚後の騒動の片棒を担いだのは、他でもないこ
つである。無駄に主人の心労を増やした使い魔に、ちょっと意趣返
しがしたくなるのも当然といつものだろ？。

そうして、なにか良いのはないかと思案し、思い至ったのが先日
ライルに教えてもらった話だつた。……ちゅうどいい。試してみよ
うか。

寝転んだ体制のまま肩肘をつき、自分自身意地の悪いと思える笑
みを浮かべる。そして、上田づかいで探るよつに田を細めれば、準
備は完璧だ。

そのまま焦らすよつて、用意していた台詞を吐く。

「ふーん……そんなに気になるのか？」

それは些細な反撃。いつもなら素直に教えてくれる主人が、いつ
もとは違つ態度で訊き返しただけのこと。

それでも、効果はバツグンだった。予想だにしなかつたカウンタ
ーに、キラは「え？」と驚愕をこぼし、次にしきりに田を彷徨わせ、
最終的に期待通りの答えを返してくれた。

「べ、別に……」

口ではそう否定しながらも、身体は正直だ。モジモジしている。
ものすごく気になっている。

……これはなかなか楽しいかもしれない。癖になつたらどうしよ
う。

しばらくそのいじらしい”つんでれ？”を、“ほつちぶれー”なるものを駆使して堪能する。ライル曰く、『最近巷で人気の愛情表現の一種だぜ！ まあ、つまりいくかどつかは相手によるけどな（ハサイン付き）』らしい。

……うむ、現代的な趣向もなかなかどうして悪くない。

まあ、それでも意地悪はこれくらいにしておき、さつさと本題に移ることにする。もとより別に隠すような話でもないのだ。

疲れ切った身体に鞭を入れ、むくりと起き上がる。そして、キラの真正面に同じように正座した。なぜそんなことをするのか、と訊かれても……なんとなくだ、としか答えようがないが。

「……そうだな。あれば、お前に会つ一年ほど前のことだったか

」

思い起こしますキラと出合つ約一年前……つまり今から三〇〇と二年前の秋のこと。

それは私が十五歳の時の出来事だった。

「……終わった、か

時刻は夕方。周辺から魔物の死体が散乱し、独特の血臭が鼻をつく。その時だった。

あたり一面に魔物の死体が散乱し、独特的の血臭が鼻をつく。その中には四肢が引きちぎれ、臓腑が飛び出した無残なものもあった。

だが、ほとんど原形を留めていないそれらも、己に何ひとつ感情

らしい感情を呼び起しきことはなかつた。

……この悲惨な光景をどこまでも無感動に眺める私は、きっとどこかおかしいのだろう。他人事のよつとそつ思ひ。

でも、それもしょうがない。世間一般的には異様な光景でも、ここまで見慣れてしまつては新鮮味に欠けるのだ。もとより自分のした行為の結果に驚くのもおかしな話。周囲には自分一人しかいないし、今更乙女の様に騒ぐのも滑稽……そこまで考えて、自嘲氣味に笑う。

一度麻痺した感覺は、もはやどり戻しようのない域まで達しているのか、と。

そのまま血を吸つた地面を踏みしめて、機械的に歩き出す。

よくよく考えれば、こんな生活を始めてから、早2年が経つのだ。感覺が麻痺するには十分過ぎる時かもしれない。

魔物の掃討が終わつた後は、いつものように報告に戻らなければならなかつた。あの実力の伴わない傲慢な隊長のところへ。
きっと、また嫌みたらしい文句を聞く羽目になるのだろう。そう考えると憂鬱だ。

……あれにもいつか慣れる時がくるのだろうか？　そうなれば、慣れというのも案外悪くはないと思えるのだが。

そうして落ち葉を踏みしめて数分が経つた頃、ふと何かの気配を感じて立ち止まる。

草かげからガサガサとした音が聞こえ、その感覺は確信へと変わつた。

「まだ残つていたのか……」

軽く警戒しながら、手のひらに魔力を集束させる。一応姿を見てから攻撃しようつと構えるが

「キュル？」

その、妙にかわいらしい声に拍子抜けしてしまった。そして、次いで現れたあまりにも意外な相手を見て、無意識に魔力を拡散させる。

数秒間、田を細めて眺めてみても、やはり“それ”を形容する言葉はひとつしか思い浮かばなかつた。

「これは……アリヤン……のナビも？」

「キュウ」

返事か威嚇か知らないが、蜥蜴似の生き物はまたかわいらしい鳴き声をあげた。

……それでも、やはり蜥蜴とは違つ。なにせ蜥蜴には角も羽もない。小さいながらもちゃんと存在するそれは、伝説やおどぎ話で語られるドリゴンの特徴である。

その邪気のない水色の瞳を持つた生き物は、草の影からこちらを観察していた。しかし……はつきり言って全然隠れられていない。ほぼ丸見えだ。

しかも若干怯えているのか、プルプル震えている。これでは、私が悪者のようではないか。

みたところ、まだ言葉もまともに話せないようだ。それは本当に

生後間もない証拠である。なにせ潜在能力の強い聖獣は数年程度で話せるようになる、といつのが一般的な理解なのだ。ドワーフンなら、なおさらだ。

（しかし、世の噂では“天界の暴れん坊”と呼ばれているドワーフンも、幼獣のうちにはこんなにおとなしいものなのかな？）

幼獣の時だけおとなしいのか、それとも尊血脉が当てにならないのか、多少興味を引く命題だ。

自然な動作で近づき、その場にしゃがみ込んで目線をあわせる。それでも幼獣は逃げなかつた。少しだけ気分が良くなり、そのまま話しかける。

「お前、“迷子”か？」

「キュー？」

「クリと首をかしげる姿は、ひどく愛らしい。どうやら、なんとなくこちらの言葉は理解しているようだ。それでもやはりまだ会話にはならない、か。

“迷子”とは、幼獣によくある突発的な事故のことをいつ。より厳密にいえば、天界での生活中、なにかのはずみで誤つて地界に来てしまい、そのまま戻れなくなることを指す。

原因は、よくわかつていない。一説には、天界に地界へと通じる“穴”的なものが存在しているのではないかといわれているが、真相は謎に包まれたままだ。

そうした“迷子”も、運よく優しい魔法使いに巡り会えば、仮契

約という一時的な契約を結んで天界に還してもらえたりもする。

(だが、大抵は)

「ビリ行きやがつた！？」

「そつちも探し!!!」

あい一を捕まえれば一攫千金だぞ！」

粗野な怒鳴り声が、静寂な空間を切り裂き、悠々とした森に響き渡る。

案の定としがた。

「……やはり追われていたか」

「ナニ—ナニ—！」

“迷子”は、密猟者の餌食になることが多い。なぜなら、彼らは貴族や裕福層の間で愛玩動物として、そしてひどい時には研究者の実験対象として高値で取引されるからだ。

そのごみが艶のついた力も弱いし精神も発達していなかっため捕まえるのもそれほど苦労もしない。王都など魔法使いの多数在籍する場所に迷いこむならまだしも、それ以外の所ではたいてい誰かに捕まり売り飛ばされるのが、悪しき風習となっていた。

しかも今回の獲物はドラゴン。希少価値でいえば、きっと今までのどんな獲物にも勝る伝説の生物である。喉から手が出るほど欲しいに決まっている。

……やうに、近づいていた。

「いたぞ！……つて、あん？　お前誰だ？」

「よお、ねーちゃん。悪いな、そいつは俺たちの獲物なんだ」

「そーゆーこった。まったく、こんなところまで逃げるなんて悪い子でちゅねー」

「さあ、お兄さんたちと一緒に来てもらおうか？　何、悪いようにはしないからよ」

「ああ、そうだ。ついでにこのお嬢ちゃんも一緒に売っちまわねえか？」

「そりゃいい。よく見りやえれえ別嬪さんだしな！　きっと奴隸としても高く売れるぜ！」

「ああ……でも売る前にちょっと味見してもいいよな？」

「さんせーい！」

聞き慣れた雑言だ。いちいち反応するのも馬鹿らしい。

ゲラゲラと下卑た笑いを撒き散らしているのは、いかにも山賊といった感じの男数人。私と幼獣を取り囲むように展開している彼らは、おそらく素人ではないのだろう。妙に統率がとれており、集団的行動に慣れている節がある。隙のない身のこなしといい、それこそどつかの騎士団に見習わせたいくらいだ。

だが……どうにも話が通じるような奴らではなさそうだ。
正直相手をするのも面倒だが、足にしがみついてくる“それ”を無下に扱つことも憚られた。

「まつたく、次から次へと……」

今日は一日徹夜で、私はこれでも結構疲れているのだ。

欠伸を噛み殺しながら、四散させていた魔力をまた集束させる。

本来はもう少し平和的な手段を取るべきなのだろうが、今はそれを考えるのも億劫だつた。

(せつせと片付けよ)

第5話「邂逅」（後書き）

『アリアさん』と萌えに田覓める、の巻』です。
本当にライルは碌な事を教えません（笑）
続きもすぐに投稿します。

第6話「夢と現」

勝負は、一瞬でついた。

「命だけは取らないでおいてやる。感謝しろ」

魚市場のように転がる男たちを前に、どこまでも淡々と言葉を並べる。そこに勝者の驕りはない。ただただ事実を事実として宣告して過ぎないのだ。

むしろ『森なのに、魚市場つて少しおもしろいかもしない』……『そんなどうでもいいことを考えてしまひへり、心には余裕があつた。

一方、生殺と奪を握られた男たちは、ボロボロの身体を引きずりながら必死に後ずさる。

「ば、化け物！」

「く、くそ！ 一体なんだってんだ！？」

「て、てめえあとで覚えてやがれ！」

「この借りはいつか返すからな！――」

彼らは負け惜しみの手本のように、それこそ独創性のカケラもない捨て台詞を吐きながら去つて行つた。

同じく言われ慣れた台詞に呆れながら、やれやれとため息をつく。そうしてふと視界に入つたのは、己の足元をぐるぐると回る云々の生物……の子どもだった。

「キュー キュ キュー」

心なしか興奮しているようだ。自分の魔力に当たられたのか、それとも「ロツキ」どもの撤退に喜んでいるのか。よくわからないが、まあ元気ならそれでいい。

奴らの姿が完全に見えなくなつたところで、もう一度ため息をつく。

「これでは、まだ魔物のほうがましだったな……ほら、仮契約を結んでやるから天界に還れ」

「キュル、キュルウーー！」

しかし、てっきり喜ぶと思つたそいつは、なぜか頭をぶんぶん振り、何かを訴えるように騒ぎ始めた。

わけがわからず私が頭をひねると、ついには一本足で立ち上がり、謎のジエスチャーを始めるではないか。

「キュッキュー、キュルー！」

「筋肉……が、すごい？……いや、別にそれほどでもないと思つぞ」

「キュー、キューーー！」

「いで、ちょ、待て、体当たつするなー、わ、わかつた違うんだな

「キュキュ、キュー、キューーー！」

「……ああ、食べると？でも悪いが、ドラゴンの肉を食す習慣は……つて、待て！ 齧るな！ 地味に痛い！」

そんなやりとつを続けること、およそ10分。

「…………お前、もしかして契約しろと言つてゐるのか？」

「キュキューーー！」

『ようやくわかったのか』と面おどばかりの反応。足にしがみついて離れないその様子を見て、やっと理解できた。まったく、言葉を介さない意思疎通が、これほどまでに難しいものとは思つてもみなかつた。

……だが、ようやく理解できたとはい、その内容は眉を顰めるには十分なものだった。

(契約? この私と?)

……どう考へても、無理だ。

そう結論付けるのに時間はかからなかつた。

視線を下に向ける。田下には打算も悪意もない、どこまでも純粹な瞳があつた。縮むようなその田下、ビームなく罪悪感が募る。

(……それでも、譲れない)

覚悟を決めて、もう一度その瞳と視線を合わせる。

「悪いが、私は契約相手を持つ気はないんだ。……そもそも、お前はまだ言葉も話せない幼獣だらう? 私を守ることも、ましてや自分自身を守ることすらできない。私の生活には危険が付きものなんだ。そんな私の使い魔になつても、お前にできることは何もないよ」

「キュルウー」

自分でもそれをわかっているのか……その幼獣は、田をウルウルさせて弱弱しく鳴いた。

……いずれにせよ、この幼獣が「ドリーヴン」として相応の力をつける頃には、私はこの世にいないだろう。そんな残酷な未来を教えるつもりはないが、それでもダメ押しのように付け加える。

「待っている存在がいるんだろ？ きっと親は心配しているわ」

親という単語にピクリと反応する様子に、『やはりまだ子どもなんだな』という感想を持つ。また騒ぎださないうちに素早く詠唱し、半ば押し切るようにそのまま仮契約を結ぶ。そしてすぐに召還陣を形成すれば、故郷の気配を感じたのか、急にやわそわしだした。

それに苦笑しながら、最後に頭を撫で「ほら、行け」と、背中を軽く押してやる。期待通り幼獣は、名残惜しそうにこちらを振り向きながらも陣の中へと歩いていった。

「キュウウー」

「自由に生きるよ。誰に縛られることもなく、な」

発光していた召還陣が消え、あたりはまた暗闇へと包まれる。しばらくにその場佇んでいると、鬱蒼と広がる森の中に、風がこびりつくような血の臭いを運んできた。

それが、己を現実へと引きずり戻した。

……やつ、これが私の世界だ。

私は、いずれ死ぬ。こんな生活を続けていては、とても長生きなどできないだろう。魔王の被害も近年急増していると聞くし、奴とやりあって死ぬ可能性も否定できない。妹のためにも、魔王だけは刺し違えて滅したいところだが……それもどうなるかはわからな

い。

(いや、今だつて惰性で生きているようなものか)

生きているといつよりは、死に損なつただけ、といつ表現のほう
が正しいくらいに……3年前からきつとそうだった。こうして生き
恥を晒しているのも、全てはあの子のため。私のすべては、彼女の
ためにあるのだ。

……あの幼いドランゴンを、そんな自分の人生に巻き込めるわけが
ない。まだ見ぬ己の契約相手もだ。

孤独のうちに死んでいくのが、咎人である私にはきっとお似合いだ
る。

……誰かの助けなどいらない。

神も信じない。救いなど無意味だ。
唯一己を救えるとしたら、それは

「……戻るか」

いい加減、馬鹿馬鹿しいことを考えるのはやめて、場を後にする。
私も帰らなければいけないので。あの地獄へと。

……あそこが自分の居場所なのだ。あの場所でなければ生きてい
けない。生きる理由もない。あの塔を見て、妹が生きていることを
確認することで、自分自身が生きていることを実感する。それが、
私の許された生。

落ち葉を踏みしめ、また一步足を進める。

どこまでも続く贖罪の旅路

死に場所を求めて彷徨う旅人

その末路に待ち構えるは……甘美なる死への誘い

……でも、それこそが、本懐。

「……と、いつた感じだ」

一応心情的な部分は省いて、事の顛末だけを簡単に伝えた。
そうして、お望み通りに教えてやつたというのに、真正面に正座する相手といえば……微妙な顔をしたあげく、いつのたまたま。

「……なんだか普通、ですね」

主語はないが、おそらくルナとの出会い方のことだひつ。どんな劇的な出会いを果たせば満足なのか、こいつは。

……いや、そういえばこいつとの出会いは劇的だった。それはもひ、今思い出しても青筋が浮かぶほど。

「……そりゃお前との出会いに比べたら、ルナとの出会い方なんて平凡すぎるほど平凡だうつな」

「むふふ、僕との出会いは主人様の中でも忘れられない思い出な

んですね

確かに忘れられないと言えば忘れられない出来事だつた。当時は腹立たしいことこの上なかつたが、それも今となつてはいい思い出である。

とりあえず、『つかり殺さなくてよかつた』といつのが感想か。そのうつかり殺しそうになつた相手といえば、血漫げな物言いとは裏腹に、少し物憂げな表情をしていた。あの時のことで思い出しているのか……珍しいこともあるものだ。

「……まあ、確かに印象深いものではあつたな」

「ですよね。やっぱり出会いは大切ですよー。」

「お前の場合は出会つた後も問題だつたがな。『一緒に連れてけ』と異常にしつこかつた」

なにせ風呂にまで乱入してくるストーカーぶりだ。それこそ比喩でもなく、火の中水の中、拳句の果てには魔物がひしめく戦場の真つただ中にも躊躇なく飛び込んできた真正の馬鹿、それがキラである。

それでも驚異的な幸運を持つて、そのほとんどを無傷で生還するものだから、余計始末に悪かつた。

そして、そんなキラに私もついには根負けし、ストーカーから同行者へと格上げするにいたつたのだ。ついには身を守る術も持たなかつた癖に、魔王戦まで付いてきた狼の幼獣。後先考えない馬鹿さ加減では、ルナの上をいくに違いない。

「ふふ、そんなに褒められると照れますね」

さつきの物憂げな表情はどこに置いてきたのか……本当に照れくわいに頭をかくその姿は、私の勘を刺激させるには十分だった。

「褒めてない。まあその能天気な思考は、褒めてもいいがな

「えへへー、まあそれほどでも。ともかく、浮氣しないでくださいね」

皮肉も通じないほど都合のいい頭を持つ相棒は、上目づかいで釘を刺してきた。

(まつたく、厄介な相手に目をつけられたものだ)

……でも、ルナには悪いが、今はもうこいつ以外の相棒など考えられない。

本人には絶対言わないが、何度も払い扱つても付いてきたこいつの醉狂には、少しだけ感謝しているのだ。

一年間、危険を顧みず側にいてくれた。そして、目覚めてからもキラが心の拠り所だった。

こいつがいるから、今の自分がいる。

それだけは、確かだ。

口で言わない代り、その髪をくしゃりと撫でて感謝の意を伝える。……多分、本人はわかつていない。それでもうれしそうな顔していられるから、まあいいか。

「心配しなくとも、私にはお前ひとりで手一杯だよ。……ほら、も

「うう。明日からお前も授業に参加するんだ？」

「うう、明日からは魔法を使つものに限つてだが、使い魔と共に授業を受けることが許されるのだ。」

「もちろんです！　おやすみなさい、『主人様！』

「ああ……つて、お前ここで寝るのか？」「

自分のベッドがあるだろ？」元気よく返事をしたキラは、正座の状態からそのまま匍匐前進で進み、もぞもぞと我が物顔で布団の中に入り込んできた。

「足が痺れてベッドまで歩けませ～ん」

少なくともウキウキとした声ではない。どんないいわけだ。

それでも、そのあざけないほほ笑みを見ると迫り出す氣には到底なれなかつた。

（本当に、世話が焼ける）

幸せそうな顔で布団に包まる共犯者の横顔を眺めながら、いつかのことを思い出す。

いつも同じ床に就くのは、ライルの家以来だ。

（あの時から早一ヶ月、か……）

「うう、まだたつたの一ヶ月。されど一ヶ月が経つたのだ。生まれ変わった、というのは大げさかもしれない。それでも自分

の中の“何か”が確実に変わったのを自覚している。

他人の助けを拒絶していた自分が、今では当たり前のようになに誰かを助け、そして誰かに助けられている。キラに、ライル、レスト……もちろんミニアやローズ、フィルにも、毎日のようだ。

それは夢物語のような日常。

思っていたよりも世界はずっと広く、無限の可能性に溢れていた。日々新しい発見があり、それを学ぶのが楽しかった。

この学園に来て、初めてそれを知った。

……そんな些細な日常が、明日も明後日も、そしてこれからも続いているのだ。

瞼を閉じる。

明日もきっと、快晴だ。

そんな確信があった。

第6話「夢と現」（後書き）

シリアルな話なのに、シリアルになりきれないのがJadeクオリティ。

しかもキラとの出番い話まだ考えてないのに、勝手にハードルあげるという暴挙を犯しました（笑）あとが怖いww

ドリゴン編はあと2話程度で終わる予定ですかね。

誤字・脱字等ございましたら是非教えてください。

ふつかーーつ！

あいあむふりーだーむー

第7話「緊急会議その2」

時刻は遡り、てんやわんやとなつた召喚の儀式からおよそ3時間後。

学園のある一室では、おおよそ一ヶ月ぶりの緊急会議が開かれていた。

……もつとも、飾り立てのない円卓に着席しているのは、いわば暇人と称していい十数名。彼らは一応会議という名目を借り、この場に集まつてはいる……が、会議は会議でもその実態は主婦の井戸端会議のようなものである。各自好き勝手に今日の感想をくつちやべるその会議は、およそ名門王立学園とは思えない無秩序で混沌に満ちたものだった。

「今度はドラゴンですか……なんというか、まあ……」

「本人は『昔助けたことがあって、その縁で来たらしい』とか言つていましたよね」

「しかし、人型を取つた時は幼女の姿だつたらしいが、遠目から見ただ限りあのドラゴンは明らかに数百年の時を生きているように思えましたぞ。それが、そう簡単に助けを必要とする状況に陥るものなですかの?」

「さあー? 橋の下で拾つたと聞きましたが、詳しい状況は知りませんし」

「拾つたって……橋の下に落ちていたんですか!?」

「……なかなか想像しづらい状況ですな」

「あれ? 私は川をどんぶらりこと流れてきた、と聞きましたが?」

「……幼女が? それともドラゴンが?」

「いやいや、どっちにしろおかしいでしょ?」

「なんだか支離滅裂ですし……どうにも嘘くさいですねえ」

同意するように何人かが頷く。

しかし、いくらそれについて議論を重ねたところで、結局堂々通りに過ぎないことを出席者たちは理解していた。いずれにせよ、肝心の本人がこの場にいなくては、真相などわかりようもないのだ。

……いや、むしろこの際経緯はどうでもよかつた。ハインレンス王立魔法学園の教師及び研究者は、総じて過去よりも未来を。これまでよりもこれからを重視する傾向を持つている。そんな、よく言えばポジティブ、悪く言えば考えなしの彼らの興味が、他のものへと引き寄せられるのに、さほど時間はかからなかつた。

「まあ、ここでそんなことを話しても埒が明かないでしょう。そんなことより、ドラゴンとの正式契約は確認されている範囲において人類至上初の快挙なのですよ！　ここは素直に喜びましょう！」

「確かに。契約自体はティレイド家の嫡男が結んだようですが、それもまたおもしろい。極めて特殊な契約ですし、研究しがいがありますよ」

「…………そうですね。せっかく集まつたのだから、どうせならもう少し建設的な話合いをしましようか。……そういえば、その彼女の成績はどうなんですか？　大体一ヶ月経ちましたよね」

新たな議題に対し最初に声をあげたのは、穏やかに会議を見守つていた重鎮だった。

「精靈魔法に関しては、素晴らしいの一言に尽きよつ。まだ精靈のコントロールが完璧ではないが、それさえマスターすれば、王国一の使い手も夢じやなかろうて」

貴祿たっぷりに言い放つた精靈魔法の権威パウル老は、想像以上の逸材の発掘にじ満悦の様だった。「将来が楽しみじゃ」と顔を綻ばせるその姿は、まるで孫の成長を見守るおじいちゃんのようである。生徒のみならず教師さえも虜にするそのほんわかとした言動に、場は緩い空気に包まれる。

……が、次の瞬間生ぬるい空氣を切り裂くよつこしゃがれた声が会議室に木靈した。

「神聖魔法は全然だがな！ やる氣すら感じられん！…」

パウル老とは正反対の性質を持つた、もう一人の重鎮グナайд教諭が声を荒げたのだ。

こちらは期待していただけに、その失望も大きかったようだ。“怒れる神父”の本領發揮と言わんばかりの怒声に、その場にいた若者は、自分が怒られているわけでもないのに平身低頭で「すいません」と謝りたくなった。

一方のグナайд教諭は、勢いそのまま「そもそも」一生使える気がしません』とはじつこうことじや！ 信仰心が足りんわ！ まったく、これだから近頃の若者は……！」と、老人特有の面倒くさい話を始めた。

無論、これには会議メンバーも黙つていない。なにせ、このままではグナайд教諭の“ありがたーいお説法（1時間コース）”に入することは確実である。

長くなりそうな気配を敏感に感じ取った彼らは、田だけのやりとりを通じ、即座に話を変えることを決定した。こういう時の団結力は無駄に強いのである。

「まあまあ、落ちついてください。あんまり激怒しては血管がはち切れかねませんよ。それはそうと言語学についてはいかがですか、カイルス先生？」

「え、ええ、そうですね。まあ、やはりと言いますか、我が国の言葉以外は全く話せないようです。隔絶された場所で生活していたようなので、当然といえば当然ですがね。妙に古めかしい表現を使うのもそのせいでしょ。……ただ」

カイルスがそこで言葉を切ったのには、理由があった。

それは1週間ほど前の授業のことである。彼女が教科書に載っていた超古代文字を指さし、『このヴィシシア語の訳、間違っていますよ。正確には「です」と指摘してきたのだ。

……たしかに、その部分は研究者の間でも解釈をめぐって何度か争いがあつたところである。しかも彼女の主張は、この国で最も権威ある言語学者の説と同じものだつたのだ。もちろん、一般的には普及しておらず、それこそ、その道の者でなければ到底知り得ない領域のもの。彼が驚くのも当然だつた。

しかるに、『どうしてそんなことを知っているんだい？』『』というカイルスの疑問はもつともだつたろう。しかし、彼女は急にハツとした後、『え？　あ、あー、昔チラッと勉強したんですよ』と視線を逸らしながら答えただけだった。

怪しそう。

そう感じた彼が追求の声をあげる前に、彼女は光の速さでその場を去つていた。

あとに残されたのは、手を伸ばしたまま硬直した哀れな教員一人と、どうにも煮え切らないもやもやとした感情が一つ。

そんな出来事が、彼の中で妙に印象に残っていた。……のだが、所詮はそれだけのことである。わざわざここで言つことでもないか、と思い直した彼は、結局「なんでもありません」と首を振るに留まつた。

「歴史学も似たようなものです。——最近の歴史は全く知らないようでしたよ」

「そうですか。なぜかマナーはできていましたけどね……ところがどうですけど」

なにがそんなにおかしいのか、前髪をいじりながらヘラヘラしているのは、歴史学担当のケイン。その甘いマスクが女子生徒に人気の、25歳の若手教師である。

そして、その向かいで积淀としない様子で呟いたのは、上級クラスの必須授業マナー講座担当のフイリスだ。彼女もまた24歳と若いが、その穏やかで上品な物腰は男女問わず憧れの的である。そして、男子生徒の“理想の女性”投票（結婚バージョン）において3年連続首位に君臨する彼女は、ただいま新婚ほやほやでもあった。それこそ悔し涙を飲んだ男は数知れず、とかなんとか。

上級クラスを卒業して魔法士になれば、それなりにお偉い方と面会したり、公式の場に出る機会も多くなる。そんな時のマナー講座だ。

もつとも、上級クラスの人間はそのほとんどが貴族であり、彼らにとつては教養のようなものである。そんな復習がてら受けける貴族とは違い、平民は大抵苦労するのがこの授業のどうしようもない特色でもあった。

だが、どういうわけか噂の転校生はいくつかの点で、教師さえも目を見張る完璧な淑女っぷりを披露したのだ。特に舞踏会でのダンスやマナーにおいては、古式ゆかしい正統派の作法を完全にマスターしており、それこそ文句のつけどころもなく、むしろこちらが見習いたいくらいであった、といつのがフライリスの言である。

その後も次々と噂の彼女、アリア・セレステイの評価がなされるが、ほとんどは最高と最低の極値へと二分化された。

「実技に関しては皆さん既にご存じかと思いますが、やはり他の追随を許さない傑出した才能を持っています。なにせ我々と同じように詠唱をしても、彼女の場合威力が数倍になって発動しますからね。精靈魔法と同じくこちらもコントロールが今後の課題とはなりますが、そちらの才能も鑑みれば、それこそ我が校始まって以来の逸材、といつても過言ではないかもしません」

「ええ。火と闇の属性両方において、今までほぼ固定されていた順位を塗り替えましたしね。彼女に触発されて他の生徒もやる気を出しているようですし、いい影響でしょう」

「まあ、筆記科目全般に関しても知らないことは多いみたいですが、あの様子ならすぐに追いつくでしょう。幸いそれほど頭は悪くないみたいです」

編入試験時の筆記テストにおいて、歴代最低得点を叩き出したことはまだ記憶に新しい。当初教師たちの間では『知識が足りないのか、それとも頭が足りないのか』という非常に失礼な疑惑が横行していたほどである。

だが、それも一ヶ月経った今では綺麗に払拭されていた。砂が水を吸うように、どんどん知識を吸收する彼女は、むしろ教えがいの

ある生徒として教師たちの間でも評判になっていたのだ。

「それでも、魔法具について存在すら知らなかつたことは驚きましたけどね。ひどく感心していましたよ『最近は便利なものがあるんだな』って」

「…………なんだか、おばあちゃんみたいな発言ですね」

「「「「」」」

「この場合の沈黙は、すなわち同意を示していた。

確かに、彼女はまだ年若いのに時々時代についていけない老人のような発言をする。それを不憫に感じていたのは、どうやら一人ではなかつたようだ。

「で、でも、そういう“わからな”といふも優秀な友人達からいろいろ教えてもらつていいようですし……」

「まあ“優秀”、といつよりは“有名”の方が正しいでしょうね」

「たしかに」と苦笑気味に賛同する声が、ヒカルからあがむ。

第一王子に公爵家のツートップ、特殊体質の平民に伯爵家の女好き次男坊。それに加えてどこかずれている美少女転校生とくれば、もはやこれ以上ないほど田立つメンバーだ。類は友を呼ぶとはさうとのことだらう。

「しかし、この前の飛び降り事件といい……まったく、話題に事欠かない子だ」

「あら、でもあれは事故だつたと聞きましたが?」

「本人いわく、ね。大事がなくてよかつたんですけど……まあ、基本的には真面目な子なのですから」

「だからこそ始末に負えないのかもしませんよ」

「なにせ真面目に問題起こしますからね。……ホント、びっくり箱のような子ですよ」

「なるほど、言い得て妙ですね」

「ふふ、確かに開けてみないと中身がわからないし、心臓にも悪いですわ」

「それでも憎む気にはなれないのが、不思議なところじやのよ」

そんな風に、愚痴と擁護が半々ではあるが、一様に長閑でまつたりとした会議ともいえない会議が続けられた。

だがその数分後、コンコンというノックとともに現れた新たな役者の登場により、場の空気は塗り替えられることになる。

「失礼する」

「学園長？ それに」

「 「 「 「 殿下！？」」」

慌てて立ち上がり礼をしようとする一同。

それを手で制し「いや、いい。学園では一生徒として扱ってくれ」と言つたのは、この学園内で最も高い位を抱く人間だった。

しかしながら、その立ち姿は、一生徒として扱うにはあまりにも堂々としそぎている。若いながら生粋の王族としての威厳を持つ彼を、一般生徒と同じように扱えるのは、それこそ学園長と彼の担任、後は老人組くらいである。

「そ、それで、本日はどんのようない用件でいらっしゃるへ？」

唐突に現れたこの国の第一王子レストシアに、一同を代表するようカイルスが尋ねた。

その問いに最初に答えたのは学園長だった。「アリア・セレステイについてだそうよ」と前置きをした彼女は、そのまま後方の若者を促す。それを受けたレストはひとつ頷いて、話を切り出した。

「ドライコンを畠還したこと自体は、たしかに素晴らしい実績といえるが……それでも今回は少し目立ち過ぎた。ここあたりで手を打つておかないと、他に引き抜かれる可能性も出てくるだろ。早急に対策を立てるべきだ。今日はその提案をしに来た」

「……なるほど」

カイルスの呟きを筆頭に、他の参加者もすぐにその意図を理解して、同意するように頷いた。第一王子の名に恥じない聰明さを持つと評判の彼に、感心する者も少なくない。

要するに彼女の存在なり実力なりを、隠すべきだといっているのだ。

「といつても古代魔法のことは、すでに広まっていますよ」

「ああ。だが、詳細な容姿についてはまだ知れ渡っていないだろ。特にあの田の色については」

田の色。確かにあれだけでも貴族の良い餌だ。

一般市民には、いまやそれほど意識されていないが、聖女の伝説を信じている貴族の間では、紫の瞳は今でも特別な意味を持つている。いわゆる“神の娘”云々というやつだ。

それでも、いまや上級クラスの貴族は、よほどの馬鹿でない限り、

第一王子や公爵家の嫡子と仲の良い彼女に手を出すことはないだろ
う。

だがそれ以外の者は違つ。

古代魔法の使い手がこの学園にいることは、既に“魔法士協会”も知っていることだ。つまり、事によつては他国にまで情報が出回つてゐる可能性もある。

そんな状態で、今回のドラゴン召喚や紫の瞳のことまで周知されたら、一体どうなるだろつか。答えは田に見えている。

これは確かに等閑にしていい問題ではない。

彼女は風変わりなトラブルメーカーであると同時に、この学園のかわいい生徒でもある。まして、その魔法の才は国の宝と言つていひほど稀なもの。そんな才能の塊が、貴族に取りこまれた日には、目も当てられない事態になること間違いない。

きっと子供を産むため、もしくはその家を繁栄させるためだけの道具として利用され、その才を埋没させることになるだろ。それはこの学園にとつても、そして国にとつても大きな損失になる。

……もつとも、アリアが権力に阿る人間でないことは、既に周知の事実だつた。それはこの1ヶ月、彼女の友人たちに対する態度を見ていればよくわかる。だから、きっと“そういう”打診が来ても、彼女は一刀両断するに違いない。

だが、それでも彼女は平民だ。いつ何時権力の荒波にのみこまれても不思議ではない。そして、そんな生徒を守るのも教師の役目である。

顔を見合せた面子は、ようやく会議らしく引き締まつた表情をつくつた。やる時はやるのが、彼らの長所だ。現にこうして目標を

定めた後は、湯水の「」とく次々と意見が出されていった。

「セレ、どうまで抑えられるか……」

「人の口には立てられないものですよ」

「ならば強制的にやるしかなかろう」

「学園の門に簡単な錯覚を起こす、幻惑系の魔法をかけるのはどうでしょうか？」

「……できなughtことはないわね。対象は彼女の目の色と今回のドラゴンの召喚者についてかしら？」

「うん。一度術式を彫って定期的に魔力を補充すれば、それほどの手間でもないよ」

「だが本人にはどう説明する？あの娘は魔力の気配に敏いようだし、おそらく気付くぞ」

「素直に教えてしまえばいいのでは？」

「でも、あまり素直に教えて必要以上に警戒させるのも……やつぱりのびのびと育ってほしいですし」

「つむ、確かにのお。子どもは元気が一番じゃ」

「とりあえず適当に言えば大丈夫でしょう。世間知らずな子ですから、きっとコロッコと騙されますよ。彼女を取り巻く環境については、期を見て話しましょ」

何気にひどいことを言つてはいるが、それも生徒への愛故……と彼らは勝手に解釈していた。そして術式や当番を決め、ある程度議論が煮詰まつたところで、会議はお開きとなる。

レストが、満足そうな顔で「では、よろしく頼む」と出ていくと同時に、会議の参加者もそれぞれ席を立つ。

「せういえば……どうしてわざわざ殿下がいらっしゃったのでしょうか？たしかに彼女とよく話しているのを見ますけど……」

フィリスの疑問に答えたのは、相変わらずにやけ顔を貼り付けたケインだった。

「そりゃあ、あれでしょ、青春でしょ」

「……ああ、青春ですか。いやあ、いいですね」

「というか、殿下もちゃんと青春していたんだ。なんか安心ですー」

「ふむ、若い者はいいのぉ」

去りゆく第一王子の後ろ姿を、生温かい目で見送る大人たち。
そして同じく孫を見守るように目を細めていた学園長も、「わて、
戻りますか」と咳き腰をあげようとしていた。

その時「ああ、学園長」と思い出したように声をかけたのは、上級クラス5年を受け持つバッシュ・フラストだ。それまで何か探るように会議の行く末を見守っていた彼は、実にさりげない動作で彼女に近づいていく。

「これ、今月の修理費です」

そうして彼女に手渡されたのは、薄っぺらい紙一枚。

「修理費?」と聞き覚えのない単語に眉を顰めるも、結局彼女は何の心構えもなく、不用意にその紙を覗いてしまった。

……そして、当然の如く白目をむく。

そのままふらりと倒れかかる彼女を、近くにいた教師が慌てて支える。一ナはその介助を受けながら、ふらふら覚束ない足取りでバッシュのもとまでいき、珍しく声を荒げた。

「な、なんですかこの額は!?」

紙を持つ手がぶるぶると震える。もし紙が声を持っていたら、悲鳴をあげているところだろう。

だが、今の彼女に、引きちぎられそうな紙の行く末に心を割けるほどの余裕はなかった。なんの修理費かは知らないが、どう考えてもゼロが一桁ほど多いのだ。

何度確認しても、悪夢のような数字は消えてくれない。

一方、そんな彼女の剣幕を軽く受け流したバッシュュは、いけしゃあしゃあと言い放った。

「いやあー、うちにはかわいい顔をした破壊魔がありまして」

その言葉に、退出しようとしていた教師たちが「ああ」と顔を見合させる。名前を言わなくともわかる。そう、犯人はさきほどから話題にあがつていた“彼女”だ。

毎日校舎のどこかで聞こえる爆音は、もはや口課となっている。最近では『今日はまだ聞こえないぞ』、『そろそろだろ』、『あれが聞こえないと最近落ち着かないんだよな』という、わけのわからない評判にもなっていた。

もちろん、そんな呑気な感想が出回っていたことを、驚愕に震える学園長は知らない。基本デスクワークや客人の相手が多い彼女は、爆音と結界が壊れていることは知っていたが、それ以上に物的被害が出ていたとは、思いもしなかったのだ。

“素行の良い問題児”というなんとも扱い辛い生徒。純朴な娘であり、二ナ自身もそんな彼女が決して嫌いではなかった……のだが、さすがにこの時ばかりは五寸釘を打ちたくなった。

そうして、数秒間の複雑な葛藤を経て、やがて全てに達観した彼女は、遠い目をしながら静かに呟く。

「……特別予算、王宮に頼もつかしら」

今すぐこというわけではないが、いずれにつけもつちもいかない状況になるのは覚悟しておかなければならぬ。

その時は王宮の財務担当との折衝、という名の激しいバトルが待ち受けている。憂鬱で仕方ないが、最終手段として殿下のコネを使うという方法もある。どうやら随分と彼女のことを気にかけているようだし、うまく働きかけてくれることを期待するばかりだ。

生徒を頼りにすることを情けなく思いながら、ため息まじりに空を見上げる。

夕刻を告げる薄紅色の空が、ひどく綺麗だ。

学園長二ーナ・シンク・ヒーストン。

彼女の頭の痛い日々は、まだまだ始まつたばかりだった。

第7話「緊急会議その2」（後編）

3週間もお休みして「めぐなせこ」（十下座）
でも、ようやくやることも終わって、小説書く時間もできました。
これからはもう少し早い段階で更新できると思こまーす。

第8話「真面の参観」（漫畫）

や、やつと廻新でした（汗）

「タイトル」となんですかび、中身はまるでちがうヤングです。

第8話「真昼の惨劇」

一晩経つて、翌日の学食。

いつものメンバーで朝食をとっていた時、唐突にその質問は来た。

「そーいやアリア、ルナとはどいで知り合ったんだ？」

ぎくじとする。懸念が本物になつた。

そういうえば、ライルはあの後すぐに保健室で検査を受けたから、

私が四苦八苦しながら皆に説明した内容を知らないのだ。

(さて、どうしたものか……)

喉に詰まりそうになつたパンをゆっくりと飲みこみながら考えを巡らす。

昨日使つた『橋の下で拾つた』やら『川を流れてきた』やらをここでまた言うのも憚られる。主となつたライルに、そんな程度の低い嘘がばれるのは時間の問題だ。

しかし、だからといって代りになるような嘘をすぐ用意できるわけもなく……結局、食物が喉を通過するわずかな間に考えつけたものは、お粗末な返答だけだった。

「あ……昔だ」

「(1)主人様、それじゃ逆効果ですよ」

「だが、ルナに口止めする前に適当なことを言つて、後で齟齬が出るものまことにだろう?」

昨日「うつかりルナに口止めするのを忘れてしまったツケが回つて来たのだ。しょうがない。とりあえず本人に会う前に下手な事は言えまい。

そうして、こそそキラと内緒話をしている私を不思議に思ったのだろう。ライルがさらに言及しようとしたその時、天から助けが降ってきた。

そう、ちょうどいいタイミングで“彼女”が来てくれたのだ。

「今ルナのお話したのー？」

ライルの背後、何もない虚空に突如として召喚陣が出現する。そこからピヨンという効果音が相応しい勢いで飛び出してきたのは、一連の騒ぎの主役だった。

陽気な声と共に現れた幼女は、そのまま後ろから抱きつくように小さな腕をライルの首に巻きつける。

噂をすればなんとやら。もう回復したのか……さすがはドラゴン。

一方、背後から全体重を込めて首を絞められたライルは、「ぐえ」とカエルのつぶれたような声をあげた。このままでは窒息コースまっしぐらである。

食堂でまつたりしていた生徒たちも、突然の闖入者に面食らっている。だが、ここ最近騒動に慣れた彼らはすぐに復活し、たちまち「あれが昨日の」、「召喚者なしに来たんだっけ?」と噂を囁き始めた。

「ルナ! いきなり出てくるなよ!」

「えへへー　ねえー、どんなお話してたのー？」

ぶらさがるルナをなんとか下ろし、窒息の憂き田を免れたライルは、首をさすりながら怒鳴る。まあ、当然の反応だろつ。だが、その相手の反応といえば、天真爛漫を絵に描いたような愛くるしい表情を見せ、無邪気に笑うだけだった。無論、そこに反省の色は微塵もない。

そんな悪びれのない様子に彼も諦めたのか、彼女の頭に手を置き、「しようがないな」と苦笑した。さすがは弟妹の世話をしてきただけのことはある。寛大だ。

しかし、感心したのもつかの間、ライルはルナの頭に手を置きながらこちらに振り向いた。

「今、ルナとアリアの出会いについて話してたんだよ。な、アリア？」

「え？　あ、ああ」

……まずい。このままでは非常にまずいことになる。

これでは天からの助けどころか、地獄への招待状ではないか。唯一事情を知るキラの方を見ると、こちらも顔がひきつっていた。

(なんとかしないと……)

そうして一人で目の前の小悪魔に、必死に視線で意思疎通を試みるが……いかんせん相手が悪かった。

「言うな」というアイコンタクトも全く通じず、無情にもルナは

上機嫌に語り始めたのだ。

「やうなんだー　あのねー、ルナとお姉さまの出来ことは

「「ちょ、待　ー！」」とこつ私とキラの一重奏など歯牙にもかけず、彼女はそのまま当時の興奮を再現するよつて、身振り手振りを交えて小さな体を必死に動かす。

「むかしねー変なおじさんたちがルナをドドード　ておいかけてきてー、そこでババババーンってお姉さまがきてバビューンてやつつけちやつたのー！」

「　　」

「　　そっかー。そりや、良かつたなー」

……想像の斜め上をいくなんとも残念な回答に、さしものライルもそう返すのがやつとのようだつた。

それでもエメラルドの髪をわしゃわしゃ撫でながら、大人の答えを返すあたりは偉い。いや、さすがに声は棒読みだつたが……。

しかし、危なかつた。冷や汗と共にそつと胸をなで下ろす。

思つていたよりルナの頭が弱……じやなくて、精神年齢が幼くて助かつた。若干昔よりひどくなつてゐるよつて感じるのは氣のせいだろうか？

……ともかく、このままではいろいろな意味で心臓がもたない。念には念を入れておいた方がいいだろう。

「ルナ。ちょっと来い」

「なーにー？」

ちょいちょいと手招きすると、トコトコとひな鳥の様についてきた。じうじうところは素直でいい。

そうして、ライルたちから十分に距離を取つたところで、向き直る。さて、なんと言つべきか。

「……あのな、ルナ。私との出合いや昔のことをライルや他の人に言わぬでほしいんだ」

「なーんーでー？」

首どころか体全体を傾けて、大げさに疑問を表現する幼女。本当に300年どんな環境で成長してきたのか不思議でならない。

「それはだな……あー、私とルナの大切な思い出だからだ。一人だけの秘密にしたいんだ。だから他の人には内緒だ。いいな？」

子どもにいい聞かせるにしても苦しい理由だつたが、他に思いつかなかつたのだから仕方ない。ルナの頭に入り切らせるため、簡潔かつわかりやすい言葉で表現したらこうなつたのだ。

だが意外なことにもそれが功を奏したのか、目の前の幼女は目を輝かせて何度もそのキーワードを口にした。

「ひみつ……ひみつ……うん、わかった！！」

どうやらその“ひみつ”といつ語感が気に入ったようだ。失礼だが単純で良かった。これでよしやく安心できぬ。

「ひみつーひみつー」

彼女はそのままおもむろに、調子の外れた鼻歌を口ずさみながら、食堂を探検し始めた。

地界のものが珍しいのか、あちこちキョロキョロしながら楽しそうに歩き回っている。ずいぶんと好奇心旺盛な性格らしい。

「それにしても、まさか伝説と呼ばれていたドーライアンの田で見る日が来るとはな……」

それまで黙っていたレストがぽつりとつぶやく。

そして、声に反応した私と田が合い、また慌てて視線を逸らされる。……相変わらずの反応である。

レストといえば……あの後、時間ができたからアリーナの件を相談してみたのだ。

しかし、その彼女の第一声は、『三角関係キター！？』という謎の叫びだった。心なし目が輝いていたように見えたのは、気のせいだつたのだろうか。

そして、『は！？ いかんいかんつい……そりよ、私が守るつて誓ったんだから……いや、でもレストシア様なら……うん、でもまだ確定じゃないしなあ』と、ぶつぶつぶやくこと数分。

どうにも放つておくと永遠に一人の世界に入つてそうだったので、「結局どうすればいいんだ？」と尋ねることで、現実に帰ってきてもらつた。

私の問いかけにハツとしたニアは、しばらく悩んだ後、『いいのよ、アリアはそのままで。あ、あとローズには絶対相談しちゃダメ

よー。といふか私以外はダメー!』と力説した。“絶対”的のところを特に強調していたので、そこはよほど大切な部分なのだろう。気をつけよう。

そうして、『まあ、慣れればそのうち自然になつていくから大丈夫』といふ言葉を信じ、今に至るといふわけだ。

……まあ、正直何を言つてゐるのかよくわからなかつたが、ニアが言つならまず間違いないだろ?。

どうやら一時的な症例らしいし、私ができることと言えば、早く元のレストに戻ることを祈ることだけだ。やはり“ともだち”に、いつまでも変な態度を取られるのは嫌だし、できれば早めに治つてほしいものである。

あらぬ方向へ視線を固定したレストを見ながら、そんな回想に耽つていると、ライルがこれまた違う方向を見ながら口を開いた。

「俺はむしろ最強つて言われてるドラゴンが、こんな幼女の姿をとることに驚いたよ」

彼は学生の朝食を興味津津に眺めているルナを、妹を見守る兄のよくな優しい目で追つていた。

しかし、その意見には激しく同意だ。私の個人的なイメージにおいては、ドラゴンの人性といえば筋骨隆々の大男と相場が決まっている。まさか幼女の姿をとるとは……若干夢が壊された気分だった。

その意味も込めた微妙な目でルナを眺めていると、昨日の召還の儀で一緒だった先輩（名前は忘れた）が、ちょうど彼女の正面に立ちはだかつたところだった。

唐突に現れた彼は、これまた唐突に棒付きキャンディをルナに与

えた。……どこから取り出したのだろうか、あんなもの。

しかし、一番の問題はその名前を忘れた先輩が、なぜかハアハアしながらルナを凝視している点にあるだろう。

ペロペロとおいしそうにキャンディーを舐める幼女と、それを恍惚とした表情で鼻息荒く見守っている青年。……なんだか気持ち悪い。

あんな人間を形容する言葉は、それこそひとつしか思い浮かばなかつた。

「あいつ変態だ」

「変態ですね」

「……あとでルナに言つとくよ。『一度と近づかないように』って『ついでに』知らない人から物をもひつな』とも教えておけ」

レストが、嫌なものでも見るよう顔を顰めた。

それにしても、『春になつたらおかしな人が現れる』といふ話は、やはり本当だったのだ。まさか、こんなに早くフィル以上の変態を挙げる日がこようとは……この学園、本当に大丈夫なのか。

そうして変な空気が流れる中、ふと思いついたようにライルがその話題を出した。

「あ、でもさー、実際最強つていつたらやつぱ“禁忌の子”になんのかな? も、こつちはそれこそ存在 자체怪しいけどな」

「何だそれは?」

「知らないのか、セレスティ？ 魔獣と聖獣の間に生まれた子のことだ」

「……ああ、今ではやつらの子のか

“禁忌の子”。それは現代において魔獣と聖獣の混血児を表す言葉のようだ。昔とは呼び方が変わっていて、一瞬なんのことだかわからなかつた。

だが、中身が意味するところは同じだ。

それは、数千年に一匹の確率で生まれるという非常に稀な生き物のこと。聖獣が地界で魔獣と出会い、交わり、子を成した結果。元々出生率の高くない両者が、種族を超えて新たな命を生み出しえたのだ。まさしく奇跡と呼ぶにふさわしい存在でもある。

伝承によれば、その混血児は生まれた時から神族並みの強大な力を持つていると言われている。さらに、成長すればその力はドラゴンすらも超越するという本當か嘘か怪しい言い伝えもある。どんな作用が働いて、そんな反則的な力を持つに至るのか、……研究者たちの間でも、何度も議論されてきたテーマであるが、実物がないので結局いつも結論が保留のままお蔵入りしてきた。

そんなドラゴン以上におどき話のような存在で、その生態もほとんどが謎に包まれているのが、現代でいうところの“禁忌の子”なのだ。

「禁忌の子……」

キラが、そうじにか頭をしげて頷くが、結局その先を口にする

とはなかつた。

……まあ、普通の聖獣や神族の反応はこんなものだらう。一応の中立を謳つてゐる精靈とは違い、魔族と彼らは昔から決して相いれない仇敵といわれてゐる。その相手と通じていれば、裏切り者と罵られても仕方ないのかもしれない。

(……そういえば、あの一人はどうなつたのだらう)

混血児の話で思い出した。誰にもこの話はしたことがなかつたが……私は過去に一度だけ、族種の違う男女の組合せと遭遇したことがあるのでだ。

魔物を故意に見逃したのは、後にも先にもあの一度だけだつたらよく覚えている。あの一匹の仲睦まじい様子を思い出すと、種族の違ひなんて些細な問題に過ぎないような気もする。

もし彼らの間に子供が生まれていたら、それこそ今で言つ“禁忌の子”になつてゐるはずだ。……そんな都合のいい話があるわけもないだらうが。

(じひりせよ、キラの手前安易に口にするべきでもないか)

顔を歪めるキラを視界に映しながら、そう結論付けた。

数時間後

「ルナ……！頼むからそれ以上物を壊すな……！」

「あやははー　たのしへー！」

場所は昨日と同じ校庭。天気は予想通り快晴。
使い魔と契約してから、初の魔法授業である。

太陽光が燐々と照らす中、校庭では幼女が元気いっぱいに駆け回り、それを茶髪の青年が慌てながら追うといつ、一見長閑な風景が見られた。

……もつとも、現実はそんなかわいいものではない。

本人はおいかげっこでもしているつもりなのか……運動神経のいいライルですら追いつけないほどの速さでルナは爆走している。それも、余りある魔力と元気を爆発させるといつおまけつきで。

そう、無邪気な小悪魔は、木々やベンチを次々となぎ倒しながら、校庭を縦横無尽に蹂躪しているのだ。彼女はその小さな体躯には不釣り合いなほど魔力を帯びて、今この時も瓦礫の山を量産していた。

目の前では楽しそうにはしゃぐ使い魔と、暴走幼女をなんとかしようとして汗だくになりながら奮闘する主による、終わらないおいかげっこが続いている。だが、主の涙ぐましい努力もほとんど効果を成さず、被害は広がるばかりだった。

……ライルには心底同情する。まあ、自分の意思で主になつたのだから、これからも頑張つてもううしかない。

「いいがサラステイ、俺のことはフイリック様つて呼ぶんだぞ！
まあ、その前に“星々のようにお美しい”とか“薔薇のように麗しき”という修飾語がつくとせうにいいけどな！」

「了解じゃ。“逃げ足だけは早い” フィリック

「……あれ？ なんか今幻聴が聞こえたような気がするんだけど」

「気のせいじゃ。“学園一臆病な” フィリック」

そのすげすげとした物言い中には、爪先ほどの敬意も感じられない。どうやら昨日の一件で、彼の主としての威厳は地に落ちたらしい。

ふよふよ浮くその姿さえ、どこか相手を小馬鹿にしているように見えるから不思議である。サラステイが主人に送る視線が、よくクラスの女子がしているのと同じ類であるのは、きっと氣のせいではないだろ？

毒舌を吐く己の使い魔に、フィルは若干涙目になりながら「ははは」と乾いた笑いを零した。……フィルには悪いが、なかなかいいコンビかもしれない。

「よろしこことフラウ。田指すは学園一、いえ、王国一の火の使い手ですわよ！」

少女は灰銀の髪を靡かせながら腰に手を当て、もう片方をビシッと遙か遠くにある光点へと向けた。……まるでどこかの青春活劇のようだが、なぜか様になっていたりする。

一方、彼女の背後でその様子を興味深げに観察していた大柄な男は、「くつ」「ひ」と押し殺した笑いを零した後、優雅に頭を下げた。それは忠誠を誓う騎士のようであり……これまたひどく様になっていた

た。

もつとも、それは軽い口調で言われた次の言葉で口無しこなつたが。

「はいはい、お望みのままに。我が姫」

「なな、なんですか？」

バツと後ろを振り向いたローズは、みるみるうちにその顔色を変えていく。

公爵令嬢として育てられてきた、さすがに真っ向から“お姫様”呼ばわりなどされたことはないのだろう。耳まで真っ赤になつた彼女は、「い、今なんと……」と、どもりながら聞き直した。

だが、そんな主人の慌てふためきぶりを楽しむように、フラウは飘々と返す。

「いやー久しぶりに主を持つが、なかなか愉快な姫さんのようにかつた。退屈しないで済みそうだし、これもフレイア様のおかげだな」

…………最後にてきた女の名に、狼狽していたローズの身体がピシリと固まる。やがて、ゴゴゴゴーという効果音が聞こえてきそうなほどの怒氣を纏い始め、髪の毛がその波動に反応するよつに揺らめきうねつた。

理由はよくわからないが、フラウの言葉はどうやら彼女の逆鱗に触れたようだ。

そうして完全に田の据わったローズは、地の底から這い上がるような声で問いかける。

「……“フレイア”とは、誰ですか？」

そんな彼女の迫力にも負けず……いや、むしろますます愉快そうに田を細めたフラウは、「おっといけない。口が滑った」とわざとらしく零し、その口元を押さえた。だが、手で隠したそこは歪んでいるに違いない。

……要するにからかっているのだ。フレイアの名前もわざと出したのだろう。

フラウの見た田はおっさんで、上級神族であることからおそらく実年齢もそこそこの歳のはずだ。大人の貫禄と言えば聞こえはいいが、普通はそんないい歳をしたおっさんが初心な少女を揶揄するものではない。とんだ食わせ者である。

「ちょっと答えなさい！ 私があなたのマスターですのよー……つて！？ こいら、待ちなさい！ 逃げるなーー！」

そうして出来上がったのは、颶爽と逃げる使い魔とそれを必死に追いかける主人の図だった。

スカートをはためかせて全力疾走するローズは、いつまでも追いつけないことにしひれを切らしたのか、ついには魔法まで使いだした。

だが、フラウは火属性の上級神族。無論、彼女十八番の火属性魔法が効くはずもなく、文字通り周りに火種が飛ぶだけであった。

……何が言いたいのかというと、つまりは周囲に甚大な被害をもたらすおいかけっこがまた一つ始まったのだ。

「クーちゃん、お手ー！」

「ハイ、マスター」

「さやあ、かわいいー！ よくできましたー！」

「ホメテ、ホメテーー！」

「ひらは周りの喧騒をよそに、実に和やかな触れあいをしていた。パチパチと手を叩いて、己の使い魔を褒めちぎるニア。それに答えるようヒュンヒュンヒュンヒュンとうれしそうに跳ねるク。……何かが激しく聞違っている。

「じゃあ、次は」と早くも新しい芸を教えようとする親友に、不安を抱かずにはいられない。完全にペツト扱いだ。

……まあ、お互いが満足しているならそれでいいだらう。なにより平和的なところが他と違つていい。

「ハインレンス、お前の使い魔は？」

「あれは頼んで出でくるようなかわいい性格はしていません

「…………もういえば、そつだつたな」

担任とレストの短いやりとりは、そこであっけなく終了した。おそらく担任もその使い魔のことを知っているのだろう。諦観にも似た表情を浮かべた両者は、軽くため息をついた後、また目の前に広がる惨劇を眺め始めた。

……どうやら止める気はゼロらしい。かくいう私もそうだが。

他のクラスメイトもまだ支配が未熟なせいか、その使い魔たちがえて表現するなら、放し飼い……いや、ほとんど野生化に近い状態であった。ともかくそれが手のつけられないほど自由奔放に暴

れまわり、未熟な主たちはそれに振り回されて、てんてこ舞いになつてゐる。

……そんな光景を見ての感想は、ひとつしか出でこなかつた。視線を前に向けたまま、隣で同じく傍観に徹している相棒に話を振る。

「なあ、キラ」

「なんですか?」

「お前が相棒で良かつたよ」

「…………僕もそう思います」

そう、しみじみと語る一人の前で、またひとつ巨木が景氣よく吹っ飛んでいった。周囲では火事も発生しており、まさに今、校庭では阿鼻叫喚の地獄絵図が広がつていた。

だが、それを尻目に、昨日のお返しとばかりに傍観に徹するのは黒髪の主従…………と、その他被害を免れた数名。

彼らが協力すれば、あるいはこの騒ぎもすぐに收拾されていたのかもしれない。だが残念なことに、そのメンバーの中に己が身を粉にしてでもこの現状をどうにかしたい、という正義感溢れる人間はいなかつた。『別に命の危機じやないし、巻き込まれたくない』というのが彼らの本音である。

……結局その日の魔法の授業は、惨憺たる有様だつた。毎年恒例といえば恒例の事態ではあつたが、今年は特に某ドラゴンによる壊滅的な被害が目立つた。彼女は最強生物としての能力を遺憾なく發

揮し、結果“天界の暴れん坊”の名は伊達じやなかつたことが、この日証明された。

もつとも災厄ともいえる被害を受けた当人たちにとっては、嬉しくともなんともないことだつたが……破壊の限りを尽くした幼女は、また学園の予算をも食い尽くしていたのだ。

例年にも増して莫大な修理費は、ただでさえ心痛重い学園長をより一層悩ませることとなる。

第8話「真昼の惨劇」（後書き）

今日はもう一つ一話くらい更新できる……気がします（汗）

次回はちょっとシリアスも入る、かな？

*人物紹介（前書き）

多少ネタバレあります。

*人物紹介

・アリア・セレスティ（17歳）

ハインレンス王立魔法学園 上級クラス5年 聖女（？）

白銀の髪（今は魔法で黒髪にしている）に紫の瞳 属性：全属性（
学園では火と闇属性ということにしている）

ただ一人の家族である妹を救うために、自らの命を犠牲にして魔王シヴアを封印する。しかし、300年後の世界でなぜか唐突に目覚め、困惑しながらも新たな人生を歩み始めることに。現代では魔王を封印した聖女として人々の崇拜を集めているが、本人はそう呼ばれるのをひどく嫌がっており周囲にも正体を隠す。

見た目こそ美少女だが、性格・話し方ともに漢らしい。基本的に天然で、悪意には敏感、好意には鈍感という残念な感性を持つ。また莫大な魔力の持ち主でもあるが、封印の影響で当初はよくガス欠気味に。もつとも、魔力 자체は徐々に回復しており、段々と本来の力を取り戻しつつある。

300年の時差（？）から現代の常識を知らなかつたり、逆に誰も知らないことを知つてたりと周りには不思議がられる。ただいまなんとか現代の生活に馴染もうと奮闘中。が、あまり成功していない。

・キラ（300歳くらい。見た目は10歳ほど）

黒髪に蒼色の瞳 アリアの使い魔 神族 獣型：狼 属性：闇

300年間眠り続けるアリアを守つていた（？）忠狼。外見は紅顔の美少年だが、中身は真っ黒。ご主人様至上主義で、アリアのために暗躍することしばしば。その実力もかなりのもので、基本アリア以外彼を止められる人間はない。

闇属性なのに暗いところが苦手。好物はお菓子。お菓子のためならなんでもする。

・マリア（300年前の時点で15歳）

白銀の髪に薄紫の瞳 アリアの妹 第16代ハインレンス王国王妃
300年前アリアの“生きる理由”であつた少女。後にアスト王子と結婚して『癒しの王妃』と呼ばれる。アリアほどではないが強大な魔力を持ち、その魔力は瞳の色と共に後世へと受け継がれていく。

・アストレイ・ワイン・ハインレンス（300年前の時点で19歳）

金髪に碧眼 アリアの初恋の人 第16代ハインレンス王国国王
300年前のハインレンス王国第一王子で、アリアに王妃の指輪を贈った人物。後にマリアと結婚するが、その真意は不明。

・ライラック・ニア・ディレイド（17歳）

茶髪に若草色の瞳 アリアの同級生 ディレイド公爵家の長男 属性：風・火

愛称はライル。魔物に襲われていたところをアリアたちに救われ、彼女を学園に招待した。アリアたちが一文無しだと聞き、助けてくれたお礼と称して当面の生活費を無利子で（ほほ無理やり）貸す。

300年前アリアが毛嫌いしていた極悪宰相の子孫。陽気な性格でどんな人ともすぐ打ち解けることができる。イタズラ好きである意味貴族らしくない。

・ルナ（302歳。見た目は5歳）

エメラルド色の髪に瑠璃色の瞳 ライルの使い魔 神族 獣型：ドラゴン 属性：風

300年前、まだ幼獣の時に地界に迷いこみ、密猟者に狙われていたところをアリアに救われた。その時の恩を返そつと、召還の儀で無理矢理押し掛けてくる。そして、なんやかんやでライルと契約。幼女の見た目通り、性格は天真爛漫。人の話をあまり聞かず、強大

なドラゴンの力も相俟つて、周囲への被害は甚大。特にライルの心労は計り知れない。

- ・レストシア・クライス・ハイレンス（17歳）
金髪に薄紫の瞳 アリアの同級生 ハインレンス王国第二王子 属性：光・水

愛称はレスト。ライルとは幼馴染。学園では生徒一の魔力の持ち主といわれている（ただし、本来はアリアの魔力のほうが上）。魔法の才がある＆王家の密命（次期国王の嫁探し）のために嫌々ながら学園に入学。基本無愛想で、クラスメイトからはその身分の高さからも敬遠されがち。

律儀かつ生真面目な性格で、ライルやフィルにはよく雷を落としている。王子だが、一番の常識人で苦労人。ちなみに聖女マニアで幼いころから聖女を崇拜している。

薄紫の瞳と強大な魔力は、マリアの血を受け継いでいるせい。外見はアスト王子そっくりだが、そう言われることを嫌う。

- ・ミア・グレン（17歳）

赤髪に茶色の瞳 アリアの同級生 平民 属性：土・闇

アリアにとつては、初めての女ともだち。上級クラスで唯一の平民で、成長につれて魔力が増える特異体質の持ち主。本来なら初級クラスで卒業するはずだったが、魔法士になって大金を稼げば幼い弟たちの生活費や学費も貯え、母親にも樂をさせられると思い、上級クラスへの進学を決意する。

アリアとは同じ平民として仲間意識が芽生え、すぐに親友になる。意外と小悪魔的な性格の持ち主。

- ・クー（8歳くらい）

茶色の体毛に水色の瞳 ミアの使い魔 聖獣 獣型・リス 属性：土
言葉が片言なこともあります、聖獣としての力はそれほど強くない。

しかし、召喚された当初からミアに懐いており、その相性はいい。ミアにはほぼペット扱いされているが、気にしていない。

・フィリック・ダン・リンメル（17歳）

薄金色の髪に橙色の瞳 アリアの同級生 リンメル伯爵家の次男

属性：水・風

愛称はフィル。お調子者なうえに大の女好きで、女とみれば誰でも口説く変態。女性には優しい一方で、野郎にはかなり厳しい。授業中は大体寝ているか、女の子観察をしてるかのどちらかだが、なぜか成績はいい。意外と手先が器用で、魔法具をつくるのが得意。最近の悩みは使い魔が冷たいこと。

・サラステイ（70歳くらい）

透明な青色の体に薄い藍色の瞳 フィルの使い魔 聖獣 獣型：魚

に似ている 属性：水

「～じや」という独特の話し方をする毒舌家で、その言動からメスだと予測される。主であるフィルには敬意の欠片も抱いていない。魚の姿をとっているがその表情は豊かで、フィルにはよく呆れた顔をしている。

・ローズマリア・ランシイ・ベルドット（17歳）

灰銀の髪に薄紅色の瞳 アリアの同級生 ベルドット公爵家の一人

娘 属性：火

愛称はローズ。ライルとは従兄弟同士。クラスで孤立するミアと仲良くしようとしたが、生粋のお嬢様として育ったため庶民の話ができず、内容は貴族の自慢話のようなものになっていた。しかし、アリアを通じてようやくミアにもわかりにくい気遣いが伝わり、それを契機に一人と仲良くなる。

基本どんな相手に対しても公平で、言いたいことはズバズバ言う性格。実は上級クラスにおいてただひとり1属性しか使えないこと

が密かなコンプレックス。レストにホノ字。

・フラウ（？）

深紅の髪に海色の瞳 ローズの使い魔 神族 獣型：蜥蜴 属性：火
火属性の上級神族で、火の大精霊フレイアとも面識を持つことからその地位も高いと思われる。主をからかうのが趣味で、よくローズの怒りを買っている。

・バッシュ・フラスト（35歳）

深緑の髪に常盤色の瞳 アリアたちの担任 元宫廷魔法士 属性：
土・火

常に飄々とした態度を崩さず、アリアからは“食えない男”と認識されている。そのいい加減な性格にも関わらず、意外にも生徒からの人気は高い。アリアの出自を疑っている。

・ニーナ・シンク・ヒーストン（72歳）

白髪に茶色の瞳 ハインレンス王立魔法学園の学園長 属性：水・光
一番の苦労人。最近はもっぱら破壊魔による学園の財政危機に頭を悩ませている。

・ギルネシア・オルス・ハインレンス（20歳）

金髪に翠色の瞳 レストの兄 ハインレンス王国第一王子 属性：光

“薔薇の君”と称されるほど端正な顔立ちをしており、貴族の娘たちからは絶大な支持を受けている。王族にしては魔力量が少なく、それが原因でレストとの間に密かに後継者争いが生じている。弟大好きのブラコンだが、その本人に嫌われていることに気づいていない、ある意味かわいそうな人。

6章 第1話「訪問者」（前書き）

* 今回はアリアの担任バッシュの視点です。
いつもよりはちょっと短い、かも？

6章 第1話「訪問者」

その日、俺は珍しく呼び出しを受け、この学園で最も豪勢なつくりの部屋へと赴くことになった。

重厚な木造のドアを2回ノックすると、すぐに「どうぞ」「どうぞ」という声が返って来る。その声を合図に、微妙に立て付けの悪いドアをギシギシと音を鳴らしながら開けた。

(これ、直さないのか?)

と考えたところで、そういえば今学園は極貧状態だったということを思い出す。……この部屋の住人に多少同情せざるをえない。1ヶ月前の魔法授業の時、少しくらい被害を抑える努力をすればよかつたか、とらしくもなく反省した。まあ、終わつたことはしようがないが。

そうして、趣味のいい調度品に囲まれた室内へと足を踏み出す。その部屋の中央では、立派な革張りのソファーアーに、一人の人間が向かい合わせに座っていた。

「お呼びでしょうか、学園長」

「よく来ましたね、バッシュ。今日はちょっと相談がありまして」

その時だつた。学園長の話を遮るように、対面に座つてゐる青年がバツと勢いよく立ち上がつた。

「あなたが古代魔法を使える人ですか!? あれ、でも女人だつ

て聞いて……？」

困惑氣味に俺を見つめる青年は、まだ若かった。おそらく二十代前半だらう。

だが生憎、野郎に見つめられて喜ぶ趣味はない。学園長に訝しげな視線を送ると、彼女は『わかつています』といつ風に俺に視線を返し、正面の青年に向き直った。

「彼はその人の担任ですよ」

「そう、ですか」

若干ショボンとしながらソファに腰を戻す青年は、ひどく落ち着かない様子だつた。

……嫌な予感がする。厄介事の予感だ。自慢じゃないが、こういう時の予感は外れたことがない。

一応無表情を装つたつもりだったが、学園長にはその嫌そうなオーラを見破られていたのだろう。軽くため息をつかれ、着席を促された。……さすがというべきか、年の功には敵わない。

「まずは、彼の話を聞いてください」

青年の名はエリック・モルディ。両親は既に他界し、今は唯一の肉親である妹を救うために、大陸中を旅しているらしい。この学園に来訪したのもその目的のため、とのことだ。……彼の妹は滅多にない、とある症例にかかっていた。

彼、エリックの話した経緯はこうだ。最初は医者に行つたのだが、『これは医者の領域じゃない、魔法士に診せるべきだ』と診断された。言われたとおり魔法士に診せると、今度は、『これは普通の魔

法士には無理だ。現代魔法ではなく、古代魔法にならまだ治せる可能性がある』と判断された。そして、その後は魔法士の言葉を信じて大陸にいる古代魔法の使い手を巡った……が、やはり『それ』を治せる人間はいなかつた。

そうして『もうだめか』と諦めていた時に、新たな古代魔法の使い手の噂を聞いて、わざわざここまでやって来た、とのことだ。

たらい回しのようにあちこち駆けずりまわったエリックとその妹には同情するが……正直、これは厄介事以外の何物でもない。

なにせ症状を聞く限り、既に進行はかなり進んでいるし、そもそも“それ”は一度かかつたら、かけた相手を殺さない限りは治す方法がないと言われているものなのだ。きっと一回目に診せた魔法士は、この青年の必死な形相に苦し紛れの返答をしてしまったのだろう。

気持ちはわからないでもないが……それこそ何百年前の魔法使いならいざ知らず、現代の古代魔法の使い手が、“それ”を治したという話は聞いたことがない。

(だが、この場でそれを教えたら死に兼ねないな)

正面に座るやつれた顔を見ながら、どうするべきかと思案する。なにせこの青年が望む古代魔法の使い手といえば

「お願いします！ その人に会わせて下さい！」

「はあ。と、言つても彼女は 」

言葉を濁す自分に旗色の悪さを感じ取ったのか、エリックは地に額を擦りつける勢いで頼みこんできた。……なんて断りづらいことを。

「お願いです、会ってくれるだけでもいいんです！　あいつの言った余命まで時間がない！　もう、ここしか希望がないんです！」

「“あいつ”？」

何気なく訊き返してみると、彼は憎くて仕方がないという口調でそいつのこと語りだした。
その口から出た奴の特徴は……忘れもしない仇のものと一致していた。

約一時間後

「次……は、セレスティか。おーい、お前ら下がれー」

そう注意を促せば生徒たちも心得たもので、蜘蛛の子を散らすようわらわらと一緒に“退避”を始めた。一旦散に建物の陰に隠れる生徒もいれば、中には防御魔法まで使いだす生徒もいる。
……だが、いい心がけだ。むしろそれくらい盤石の備えをするべきなのだ、彼女には。

視線の先で一人。ポツリと残された少女は、鉄壁の守りを敷く同級生の様子に、多少ムスッとしたながら「今度こでは……」と呟き詠唱を始めた。

【我願いしは焰 猛き破壊の炎となりて 今こそ我が敵を滅さん】

詠唱が進むとともに、これまた馬鹿みたいに純度の高い魔力が一点へと集束される。それでもなお、溢れ出る魔力が彼女の周囲で渦巻いているのだから、末恐ろしいものである。

そして、案の定というべきか、爆音を伴つて打ち出された“それ”は、的はもちろんのこと結界までいともたやすく突き破り、いくつかの木々を巻き込んだ拳句、最終的には外壁まで粉碎した。ちなみに最近なぜか無駄に威力も上がってきて、古代魔法ではないにも関わらず、当たり前のように結界を破壊するようになつた。

「おー、こりゃまた派手にやつたな」

砂でできていたのではないかといふくらい木つ端微塵になつた外壁を眺め、相変わらずの威力に舌を巻く。どうやら破壊魔による破壊活動は、本日も絶好調らしい。

まあ、これが名物になつていていたりもするのだから、この学園も十分おかしいが。

(これでまた今月の修理費が嵩むことになる、か)

他人事のように思つた。学園長の心痛もまた増えることになるが、自分の懐が痛まないなら基本どうでもいいのが俺という人間だ。まあそんな自分がすることといえば、せめてもの情けで結界を補強するくらいである。

さつきの学長室のドアを見て反省した件も、既に頭の中からは消えていた。……所詮はこいついう人間なのだ。

(それでも、全く得難い才能だな)

個人的な意見ではあるが、卒業後は是非宫廷魔法士に推薦したいところだ。もっとも学園内では、既に研究者や教師がそれぞれ彼女の進路についての熾烈な争いを繰り広げているが……そんな周囲の期待などおそらく彼女は知らない。

それでも、とりあえず課題である魔法のコントロールと知識さえ身につければ、どこに出しても恥ずかしくはない魔法士になるだろう。卒業まではまだたっぷりあるし、ゆっくりやっていけばいい。

そんなことを考えていると、ズーンと沈んだ少女の背後、防御魔法を張つていた一団から賑やかな声が聞こえてきた。セレスティと親しい友人のグループだ。

てっきり、落ち込む彼女を元気づけようとするのか……と思いまや、その内容はさうに追い打ちをかけるものだった。

「よつしゃ壁ぶつ壊した！ 賭けは俺の勝ちー！ 約束通り昼飯おごれよフィル！」

「ちえ、木だけで止まると思つたのになあー」

「ライル、フィル！ お前たちまた賭け」とをやつていたのか！？

「ねーねー、”かけ”つてなーにい？」

「今度ルナにも教えてやるよ。てか真面目な顔で防御魔法張つたレストランに言われるのもなあ…………って、あれ？ アリア、まさか落ち込んでる？」

「あ、でも、すごく格好良かったよ、アリアちゃん！ なあサラスティー！」

「うむ、なかなか見事じゃった」

「そうよアリア！ 前回よりさらに威力が増してゐるつてすごいわ！ なかなかないよね！？ ね、クーちゃん！？」

「スゴイ！ アリア、スゴイ！」

「そ、そそう、私感動してしまいましたわ！ ほら、フラウも…」

「ああ、さすがはフレイア様の……つと、いけない」

「ちょっと、氣をつけてよね！ と、ともかく元気を出して下さいご主人様！ 僕も勝つたから、今日の暁にはんはタダですよ！ タダ！」

とつてつけたような慰めは、むしろ真逆の効果をあげていた。ここまで裏目に出来るのも珍しいが……」ついには悪意がないからこそ、厄介である。

もちろん言われた本人の身体には、グサグサと不可視の矢が突き刺さっている。友人たちはもちろんのこと、果ては己の使い魔にまで裏切られたせいで、心は重傷を負っているようだ。

いつそ気の毒になつてきた。友に恵まれているのかいなかよくわからない。

あまり顔には出さない彼女の感情の機微も、実は意外にわかりやすくかつたりする。

オーラとでも言えばいいのか、なんとなく全身からその時の喜怒哀楽が伝わってくるのだ。彼女の友人達もそれは既に会得済みなのだろうが……いや、なにも考えまい。

(今はそれよりも)

顔が苦くなるのを抑えながら、その哀愁漂つ後ろ姿に声をかける。

学園長と一人で出した決断だ。仕方ない。

「セレスティ、後で話がある」

「うう……はい」

辛氣臭い顔で地面を見ていた彼女は、俺の言葉に一瞬ビクリと肩を揺らした後、観念したようにまたガックリと頃垂れた。

6章 第1話「訪問者」（後書き）

学園長が憐れ過ぎますね（涙）
でも、あいつのつちいしいこともあるわ。

次回も引き続きバッシュュ視点になる予定です。

第2話「奇跡」（繪書き）

お、遅くなりました（十一座）

第2話「奇跡」

この上級クラス5年を受け持つて、早2カ月になる。さっかけはギルネシア殿下のブラコンだつたが、まさか自分が教職に就こうとは夢にも思つていなかつた。

まあ、そんな感じで始まりこそ半強制的だつたが、今はそれなりに楽しくやつてゐるつもりだ。教師も存外悪くない、最近はそう思えてきた。

……もつとも、今回の様に厄介なことにならなければの話だが。
俯く生徒を前にして、軽く嘆息する。

しかし、この編入生はよく問題を起こしこそすれ、そのどれもが悪気あつての行為ではない。

ましてや今回の件は、決して彼女のせいではないのだ。愚痴るのはお門違いというものだろう。

(さて、どうしたものか……)

顔は美少女、中身はひどい世間知らず。森で育ってきたという異色の経験を持つ少女は、現に今も怒られるとでも思つてゐるのか。どことなくシュンとして、上目づかいにこちらを見上げてくる。

その小動物の様な姿が、どれだけ男心を操るものか自覚していない。さすがに、生徒ということで俺の守備範囲からも外れているが……友人たちは、そこらへんのことをちゃんと教えているのだろうか？

まあ、最近はクラスの奴らともうまくやれてるようだし、あまり心配はしていない。

最初の頃はいろいろあつたようだが、それらも俺が何かするまでもなく自分達で解決してしまつた。いや、自分達で、というよりは彼女の使い魔が、か。

キラとこう名の使い魔は、一時期ひどく“やんちゃ”をしていたようだが、どうせ貴族のお嬢にはいい薬になるだろ？と放つておいた。いわゆる放任主義、という名の面倒臭がり屋のいいわけである。

それでも、さすがに伯爵令嬢に“オイタ”をした件についてはきちんと注意をしたのだ。だといつて、あのクソ生意氣な使い魔とくれば、反省した様子など欠片もなく、あげくの果てには『持て余していくせに。むしろ感謝してほしいくらいだよ』とのたまいやがつた。

微妙に事実なのも、妙に腹立たしい。教師だつていのう大変なんだよ、といふ痴りたくなるのも当然だろ？

もし、あれが部下だつたら問答無用で“再教育”をしていくるところだが、貴族の坊ちゃん嬢ちゃんには、さすがにそこまでできない。

……まあ、必要な時はやるが。

いざれにしても、まつたくもつて生意氣な使い魔だ。俺の使い魔に比べたら……いや、やめておこう。

（あれからまだ1年しか経っていないのか……）

今も胸底に残るのは、忘れられない懐かしい面差だつた。

そんな鄉愁に浸つていると、いつまでも話を切り出さない俺に焦れたのか、教え子は恐る恐るとく風に口を開いた。

「あの、先生……？」

そうだった。今はこの問題を解決する方が先だ。

「ああ、悪い。実はお前に頼みたいことがあってな　」

もつとも、あえてその詳細は話さなかつた。
余計なプレッシャーをかけるべきではない、といつのが一番の理由だ。

学園長とも話したが、他の高名な古代魔法の使い手でさえもじを投げたのだ。いくら類まれなる才能を持つ彼女でも、今回の件は荷が重すぎると。

それを踏まえた上で、最大限譲歩した結果がこれだ。セレステイには、『ちょっと具合の悪い娘がいて、その子を診てほしい』とか言つていない。そつ、まるでなんでもないことのようだ。

正直、俺自身会わせるかどうかは随分悩んだが……本人達も必死の思いでここまでやつてきたのだ。そのまま帰らせるのはあまりにも酷だらう、といつ結論に至つた。

「ええ、いいですよ」

そんな苦渋の決断など知る由もなく、てっきり怒られると思つていたらしい彼女は、ホッとした顔を見せた後、なんの質問もせずにそう一つ返事で快諾してしまつた。

自分で持ちかけておいてなんだが、普通はもつと怪しみるべきだろう。また、らしくもなく迷つ。

やつして重い足取りのまま、例の子どもがいる場所へと足を向けることになった。

背後についてくる気配を感じながら、ふと思いだしたのが1ヵ月前の会議のことだ。

(……今度は関係者以外立ち入り禁止にする必要があるかもな)

「おひ、邪魔するぜ」

「失礼します」

「フラスト先生、アリアちゃん。いらっしゃい」

「ここにちはリボン先生。わたくしが、その例の子は？」

「ええ、じつちよお」

保健医、クラリス・リボン。

彼女のことは、その兄を通じて昔から知っている。だから、その微妙な変化にも気づくことができた。

その独特的のユルイ話し方こそ変わらないが、いつもは柔軟な笑みをたたえている面持ちは、さすがに今は沈痛なものとなっていた。

……彼女も既に例の娘を診てわかっているのだろう。もはや手の施しようがないことを。

案内された保健室のベッドには、まだ幼い少女とその横に寄り添

うように佇むエリックがいた。

彼らは突然現れた美少女の姿に、ひどく仰天しているようだ。

「初めまして、アリア・セレスティです」

「あ、あなたが古代魔法の……！？」

エリックは彼女の全身をまじまじと眺めながら、確認するようにこちらを振り仰いできた。俺が黙つて頷いても、まだ信じられないような顔をするのだから困ったものだ。

彼にも妹を診せる条件として、セレスティに過度に期待しないこと、そしてその病状、特にその余命について伝えないことを約束させている。

もちろん、そこにはまだ若い彼女に救えなかつた時の重荷を背負つて欲しくない、というこちら側の思惑があるのだが……そんな条件をエリックがちゃんと覚えているのかは怪しい。なにせ狐につままれたような顔で、目の前の美少女を凝視しているのだ。

彼はセレスティの若さと、その一度見たら忘れられそうにない顔のせいで完全に意識が飛んでいるようだつた。

一方、そんな兄の様子を知つてか知らずか、ベッドに寝かされた少女はか細い声で彼女に話しかけた。

「お姉ちゃん、天使様？ コーナのこと迎えに来てくれたの？」

おそらくまだ10歳ほどだろう。コーナといふ名前の少女は、ハツと意識を取り戻した兄の手を借り、なんとか上体だけ起き上がつた。

だが、少しだけ嬉しそうにはにかむ姿は、その内容と相俟つてひ

どく痛々しい。

痩せこけた頬に、生氣を感じさせない瞳。その奥には死にゆく者特有の、諦めにも似た感情が隠されていた。こんな幼い少女が宿しているものじゃない。

「滅多な事を言つな。ほら、ちょっと診せてみる」

子どもに対しては、いつもどおりといふか。このどこかぶつかりぼつとした物言いに今は救われた氣分だった。

キッパリと不吉な問いを否定したセレスティは、さっそくその白魚のような手を伸ばして、幼い少女の容体を確認し始める。

そして、普通の娘なら失神するんじやないかというくらい惨たらしい患部を、ひどく冷静に観察した彼女は、その形の良い眉を顰めてこちらを振り返った。

「これは呪いですか？ それも上級魔族からの」

「……どうしてそれを！？」

エリックが発した驚愕の声に、腐敗した腕を一警しながら「やつぱり」と頷くセレスティ。

まさか、見ただけでこの珍しい症例の原因を言つ当てるとは……正直驚いた。

「まあ、何度か見たことがありますし……もしかして、『これ』全身に回ります？」

彼女は、大の大人でさえ目を逸らしたくなるようなそれを横目に、実際に淡々と尋ねてきた。その目に、怯えや焦りといった色は見えな

い。

(“何度か”?)

その単語に、じじ最近膨らんでいた彼女に対する疑惑が再燃する。おかしい。どう考へてもおかしい。

森で暮らしていた彼女に、この世にも珍しい症状を見る機会があつたとは到底思えない。それも複数回も。

「う……あの、それは……」

困惑した声に一寸思考を中断すれば、『言つていいのか』と許可を求めるようにエリックがじちらを見つめていた。

(じじまでばれてしまつては仕方ないか)

覚悟を決めて、その残酷な真実を告げる。

「……その通りだ。既に全身の組織が呪いに浸食されている。顔以外はどこも似たような状態だ」

じじまで言えば、おそらく彼女もわかるだろう。

そう、ほとんど末期に近い状態なのだ。それこそ助かる見込みなど万に一つもない、と言つていいほど。

実際よくここまで来れたものだと思う。まだ幼い少女には地獄の苦しみだったはずだ。きっとエリックも、藁にもすがる思いでじじまで連れてきたに違いない。

だが……それでも、今回ばかりはどうしようもない。もはや人でできることは何も残されていないのだ。

あとは、安らかに逝けることを切に願うだけである。

(それでも、できることなら隠しておきたかった、な)

視線の先で難しい顔をしている彼女は、まだ若い。本来ならまだ人の生死に関わらせるべきではないのだ。それもこんな形では……下手をすれば一生のトラウマにもなりかねない。

「そうですか。そこまで進行が進んでいると……」

頸に手を置き、俯きがちにセレスティは呟いた。

「あ、あの……それで、どうなんでしょうか?」

重苦しい沈黙に耐えかねたエリックが、ついにその質問をしてしまった。

不安そうな顔を見せる彼は、それでも最後の希望を捨てきれないようだった。気持ちはわからないでもない。だが彼女にそれを言わせるのは……

「実は私、治癒系の魔法が少々苦手でして……」

言いにくそうに口を開いた教え子。

その後に続く言葉がわかつてしまつたのだろう。エリックは、ヒュッと息を吐いて、なんとか呼吸を整えた。

「…………そう、ですか」

絶望に打ち震えた声が、静謐な室内に空しく響き渡る。

彼もきっと心のどこかでわかつていただはずだ。もはやどうしようもないことを。そして、これが最後通告であることも。

如何ともしがたい空気が、室内に重くのし掛かる。

とりあえず、今ここで取り乱されるのはいろいろと具合が悪い。ひとまず退出を促そうと、静かに手を伸ばす…………が、次に彼女の口から出た信じられない言葉のせいで、中途半端な格好のまま固まってしまった。

「だから、完治させるまで3日ほどお時間いただきますが、よろしいですか？」

「…………え？」

示し合わせたように大人3人分の声が重なる。

その顔といつたらさぞや見物だったろう。全員が全員、まるで何を言われたのか理解できないとばかりに、惚けた顔を披露したのだから。

そしてバカ面を見せる俺たちには頓着せず、彼女は申し訳なさそうな顔で話を続けた。

「すいません。もつと早いほうがいいでしょうけど、なにぶん魔力が……あ、いや、やっぱりなんでもないです」

「ほ、本当ですか！？」

「はい？」

ガシッと肩を掴んできたエリックに、今度はセレスティが気の抜けた返事を返した。

……にしても、全くといっていいほど会話がかみ合っていない。いや、無理もないだろうが。

驚いて声も出せないリボン先生の代りに、俺が確認する。

「セレスティ、本当に治せるのか？」

自然探るような目つきになってしまったのは仕方のないことだらう。彼女が質の悪い嘘をつく人間でないことは、十分知っているつもりだ。

だがここで下手に希望を持たせるのは、双方のためにならない。はっきりさせる必要がある。

「はい、時間はちょっとかかりますが。解呪に2日、皮膚組織の治癒に1日といったところでしょうか。まあ、その後の経過を見るためにもあと数日必要ですが」

彼女はコーナの方を見ながら、より具体的な数字を提示してきた。できるできないの話ではない。まるでそうあるのが当然かのような口振りだった。

これには、さすがの俺も絶句する。高名な魔法士が1年かかってもできないものを、たったの3日でやろうというのだ。

こんな事態でなければホラ吹きと言われてもおかしくない早さである。

同じような感想を持ったのか、リボン先生が「うそお」と小さく
こぼす。

一方で興奮したエリックは、全身を震えさせながらもう一度セレ
スティに詰め寄つた。

「ほ、本当に！？ 本当ですか！？」

「え、ええ」

その勢いに押されるように、彼女は少し困惑しながらも今度は力
強く頷いてみせた。

それを見たエリックは、「治る、本当に、治る……」とまるで自
分に言い聞かせるように何度も声に出して確認した。
握りしめた拳がブルブルと震えているように見えるのは、きっと
錯覚ではないだろう。

「ねえ、お兄ちゃんどうしたの？」

自分の裾を引っ張る妹の手を、包み込むように握り返した兄は早
口でまくし立てた。

「ユーナ、もう大丈夫だぞ！」この人があ前の病気を治してくれる
んだ！！」

「本当？ もう痛いの我慢しなくていいの？」

そしてユーナの邪氣のない視線を受けたセレステイは、軽く笑い
ながらその頭にポンと優しく手を置いた。

「ああ、今までよく頑張ったな。まずは、痛いのとおむすびをする魔法をかけるぞ」

そして【麻痺 痛覚】と呟いた彼女の手から、高密度に圧縮された魔力が流れ出る。

「これで治るまでの3田間は痛みを感じないはずだ」

どうやら麻酔効果のある魔法を使用したらしく。

だが、一見易々と行使されたこれも、俺たちの常識から見ればほとんどない奇跡といえるだらう。

なにせ今まで麻酔効果は薬によつてしか得られないとされてきたのだ。しかもその薬自体が高価な上に、持続時間もせいぜい数時間が限度である。

しかも、効果が表れるまで時間がかかるところであるのだが……

「わあ、痛くない！ お兄ちゃん、痛くないよ……」

(……早い、いや早すぎる)

奇跡のような行為があまりにも淡々と行われたため、まるで自分の中の常識が間違っていたのではないかという錯覚に陥ってしまう。これは本当に現実なのだろうか。

「あ、ありがとうございます！」

Hリックの声が、保健室にはふさわしくないほど大きく響きわたる。彼も口ではああ言っていたものの、さすがにすぐには信じられ

なかつたのだろつ。

だが、実際の魔法を見て確信したのか、その瞳はいまや爛々と輝いていた。これは、希望を見つけた人間の目だ。

(もしあの時……いや、馬鹿か俺は)

ヒリックの歓喜に引きずられたよつこ、不意に己の中にひとかけらの羨望が生まれてしまった。

もし、あの時この娘がいてくれたら……そんな愚かでビリしきつもない願望を持つとは、俺もよほど気が動転してくるようだ。

「フラン先生」

そんな状態だったから、いきなり本人から声をかけられて驚くのも無理はないだろう。むしろ動搖を飲み込んで、普段通りに言葉を返した自分を誉めてやりたいくらいだ。

「……なんだ？」

「……うわけなので、3日ほど学校を休みます。いいですか？」

何を鼻にかける」ともなく、ビリまでもまつすぐな瞳で彼女は問い合わせてきた。

この娘は、自分がどれだけ常識から逸脱したことやつてのけたのか全く理解していないようだ。

「……ああ、もちろんんだ。立派な人命救助だしな」

「ありがとうございます。よし、じゃあさっそく解呪にとりかかるぞ」

「つよ、よろびくお願ひします……」

「ます……」

「元気よく返事する兄妹の姿に、セレスティは目を細めて「大げさだな」と苦笑した。

確かにボロボロと涙をこぼすエリックは、男泣きを通り越してすじじことになつていて、

だが……これまでの道のりを考えれば、この反応も決して大げさとはいえない。

献身を捧げた最後の家族。その妹が痛みに苦しむのを、これまでずっと手をこまねいて見ているしかなかつたのだ。

その呪縛から、今やつと解放される。その感動は、きっと言葉では言い尽くせないものがあるに違いない。

(だが、問題は……)

「リボン先生」

「なんでしょうかあ、フラスト先生？」

小声で名を呼んだ俺に、セレスティの魔法を見ていたリボン先生は、その視線を外さないまま返事を返してきた。

よほど興味があるので、彼女はその一拳一動をも見逃さまいと、食い入るように観察している。

「あの魔法、どう思います?」

視線の先には、迷いのない手つきで、見たことのない魔法を使いこなす生徒がいる。

一瞬一ぱたりと視線をよこしたリボン先生は、少し間を置いた後、言葉を選ぶように語り始めた。

「うーん、正直信じられないです。さっきの麻酔効果のあるものにしても、私は聞いたことないですしぃ。上級魔族の呪いを解けることについても同じですよ。なにより皮膚組織の治癒つていいましたけど、コーナちゃんのあれは組織が壊死しているに近い状態ですから、ほとんど再生なんですよねえ」

「……そりですか」

リボン先生はその言動とは裏腹に、魔法と一般的な医学の両方に精通している非常に優秀な医師だ。

その証拠に、最初こそ思わぬ事態に混乱していた彼女は、今やこの状況を誰よりも冷静に分析していた。深海のように濃い紺の瞳は、研究者としての鋭い知性を湛えている。

その彼女にして、「ありえない」という評価が下されたセレステイの魔法。いや、この場合は彼女の存在自体もその対象に含まれていると考えるべきだ。

「どうなっている……」

胸に去来したのは、途方もない存在に対するどこか複雑な感情だった。

恐怖や不気味とは少し違う。だが特別といつよりは、異端。そろ称すべきだと本能が告げていた。

(アーティストの件っこ、少し探る必要があるかもしね)

第2話「奇跡」（後書き）

バイト 風邪 バイト 風邪の無限ループ（涙）

次は人物紹介をあげたい、ですね。

あと次話はアリア視点に戻ります。

誤字・脱字等ありましたら、是非教えてください。

第3話「思索」

あたたかな春の日差しが降りそそぐ中、正門の前を横切り校舎の中へと足を進める。

正門といえば……学園の門に変な魔法がかけられてから、早1ヶ月が過ぎたことになる。微かな魔力を匂わせながらも、自分以外の生徒はその存在にすら気づいていない魔法。かくいう私も何の魔法がかけられているのかまではわからなかつたのだが、結局害はなさそうだと思い放つておいた。

それでも、つい先日だつただろつか……興味本位で担任に訊いてみれば、彼はいつも飄々とした口調でこう言つた。

『新しい魔法の実験をしている』

だ、そうだ。

しかし、生徒を実験台に使うとは、なかなか強かな研究者もいたものである。もつとも、それを許す学園側も相当なものだが……

そんなどいつもいこことをつらつらと考へていると、この間にやら本日の目的地に到着していった。

いつもの教室とは違う真っ白なドア。その扉を開けば独特な薬品の匂いと共に、いつもどおりの元氣な挨拶が迎えてくれた。

「おはようね姉ちゃん！」

「おはようございますアリアさん、今日もよろしくお願ひしますー。」

「ああ、おはよー！」

人懐っこい。「……どこか自分の妹に似ているユーナ。そして、そんな妹想いのエリック。同じように妹を持つ……いや、持っていた人間として、手を貸すのもやぶさかではない。

「お姉ちゃん、明日はもつお外で遊んでもいい！？」

「随分と気が早いな。残念だがあと2、3日は安静にしてないとダメだ」

「えー……」

「……」「ユーナ。あまりアリアさんを困らせるなよ。どうせあと数日で外出られるんだからいいじゃないか」

「むー、じゃあお兄ちゃん、その時は新しいお洋服買ってね！」

「えっ」と口元を引きつらせたエリックに、過去の自分を重ねて苦笑する。弟妹の我儘に振り回されるのも、先に生まれた者の務めだ。

魔族の呪いにかかりっていたユーナは、この2日間で随分と回復した。もともとおでんばな性格だつたらしく、最初の頃に比べると今のようすに笑顔も口数も随分と増えた。なにせ、最近は『元気になつたらすること』リストを書き、その膨大な量にエリックが頭を悩ませるほどである。

もつとも、彼にしても困った顔をしながら口元は常に緩やかな弧を描いており、その心情は簡単に推し測ることができた。

「よかつたなユーナ。じゃあ、今日の治療を始めるか

「うんー。」

「お願ひします」

昨日までで呪いの解呪は完了したから、後は今日1日かけて皮膚組織を治癒すれば元通りの健康体だ。数日経過を見て大丈夫そうなら、彼女が望んだ通り外で遊べるようになるだろう。

（本当はもう少し早く治してやりたかったけど……）

その理由のひとつ、『治癒魔法が苦手』というのもあながち嘘ではない。なにせ自分自身に使用できない治癒魔法は、これまで私にはほとんど縁のない魔法だったのだから。

だが、今回のケースに限っては魔力量の方が問題だった。

魔力量の方も順調に回復してはいるのだ。それこそ、最初はあまりにいちまちま回復するので、一体全快まで何年かかるのかとやきもきしていたが、ここ最近はどうやら体が慣れてきたようでその回復量も増え続けている。

……まあ、そのかわり魔法の威力も相対的に上がってしまい、コントロールの上達進度とのイタチごっこが続いていたりもする。先日の外壁破壊然り。

ともかく、そんな経緯もあってかさすがに授業で魔力を使いきることはなくなってきた。この分だと長く見積もつても、一年あれば元の魔力量に戻ることだろう。

だから現代レベルの呪いであれば、魔力が問題になることはまずなかつたのだ。

言い換えれば、今回その呪い 자체がなかなかじうして厄介な代物だった、ということになる。

蜘蛛の糸のように複雑に絡み合つた術式は、術者の陰険を具合がよく現れている。その上、下手に手を出せば、一発で天に召されるような仕掛けになっていたのが非常に勘に障つた。以前の魔力量なら強引にやっても良かつたが、今はそれもできないのが口惜しい。

ちなみに、先日様子を見に来たキラも同意見だつたらしく、『いつもらつたの?』とコーナに問いかけた彼は、5ヶ月前という答えに『ふーん』とぼやけた返事を返しながらも、始終不機嫌な顔をしていた。

おそらく魔族の残り香がプンプンする呪いの近くにはいたくなかったのだろう。足早に去ろうとしたキラは、去り際にふと立ち止まって『あ、一応忠告くらいいはしておじつかな』と呟き、エリックに何か耳打ちしていった。

そして、なぜか顔面蒼白で、もげるんじゃないかといいくらいガクガクと首を揺らすエリックの姿に、満足気に頷いていつも通り遊びに出掛けた。

それ以来だらうか。エリックは会話じや普通にするが、常にどこかビクビクしており、決して一定の距離から私に近づこうとしない。まるで一時期のレストのような状態である。

……いつたい何を言つたんだ、あいつは。
どうもしつけ方、もとい育て方を間違えた気がしてならない。私が封印中の300年でいろいろあつたのかもしれないが、なにやら変な方向にたくましくなつてゐる氣をえする。なにせ最近怪しい行動が多すぎるのだ。

(今からでも矯正は可能なのだろうか)

そうして、遠い田をしながりこじにいなし相棒の教育にて頭を悩ませてこると、田下からかわいらしげに寝息が聞こえてきた。

「あ、シリコーナ……」

「ああ、起こさなくていい。眠つたままでもできるわ」

視線を落とすと、やつままでの賑やかせびへこつたのか、今度はあどけない寝顔を披露するコーナがいた。

かわいいものだ。きっと昨夜はいろいろと楽しみで眠れなかつたのだろう。

兄もそれがわかっているのか、慈愛に満ちた田で苦笑気味に謝罪してきた。

「そういうえば……今まで訊いてなかつたが、どうしてこんな呪いをかけられたんだ?」

「ちょうどいい機会だと思い、この厄介な呪いをかけた持ち主のことを見ねてみる。今までコーナの手前少々訊きづらかったのだ。

途端に顔を曇らせるエリックに、口に出すべくではなかつたかと一瞬後悔したが、それでも彼は重い口調で”その時”的ことを語つてくれた。

「僕はその日ちゅうど用事で出かけていて、帰宅した時にすべてが終わつた後でした。だから、これは妹から聞いた話になるんですけど

「

そう前置きした彼は、視線を足下に固定したまま俯きがちに話を続ける。

「その魔族は最初、旅人のように振る舞つていたそうです。うちは山村にありましたから、時々そういう人が立ち寄ることもあって、その時もいつものように歓迎したと聞きました。……だけど、それが間違いでした。それまで歓談していた奴は、ユーナを見て唐突に本性を現したんです。抵抗する間もなく村人はユーナを見て唐突に殺され、両親も妹の前で……最後に妹に呪いをかけた奴は、笑いながら『お前の命はあと半年だ。精々それまで足搔くとい』と言つたそうです。あいつは、本当に悪魔のような奴で……僕たちが何をしたつていうんだ！」

そして、震える手で己の膝頭を叩いたエリックは、最後に「僕がその時ついていたら……」と悔しげに呟いた。

客観的にみれば、その時不在だった彼は幸運だ。きっと武器を持ったこともない彼がそこにいたところで、あっけなく殺されるのが関の山だろう。それは本人もわかっているはず。

だが……それでも心は自分を許せない。もしその時その場にいたら、何かが変わっていたかもしれない。

そんな過ぎ去つた可能性をいつまでも追い続けてしまうのは、自分が難を逃れ、生き延びてしまつたという負い目があるからだろう。

う。

終わらない懺悔と後悔に苛まれるその姿は、まるで鏡に映る私のようだつた。

「……エリック、それでもお前がこうやって生きていることでユー

ナは一人じやなかつた。コーナにとつて、それは救いだつたんだ。
現にお前が諦めずにここまで連れてきたおかげで、彼女は笑顔を見
せてくれるようになつた。未来のことも語るようになつた。……過
去を忘れろとは言わないが、おまえたちはまだ若い。少しずつでも
いいから、前を向くべきだ」

口をついてでたのは、まるで自分自身に言い聞かせるような安っぽ
い言葉だつた。正直これでエリックが立ち直るとは思つていない。
何せ私自身未だ抜け出せていないのだから。

……結局、最後は自分自身でケリをつけるしかないのだ。

コーナにしても普段は明るく振る舞つているが、ここに来る以前は、
よくその時のことと思い出して、一人震えていたらしい。それも兄
に心配をかけまいと、声を押し殺して泣くのだ。

目の前で両親が殺されたショックを一人で抱え込む彼女も、その胸
に巣くう闇は深い。本当の意味で立ち直るには、まだまだ時間が必
要だらう。

だが……この一人ならきっと乗り越えられる。お互いを支えあって、
共に未来への一歩を踏み出すだらう。

そんな、根拠のない確信があつた。

(そう、私たちとは違つんだ……)

思考が陰鬱な方向へと流れそうになるのを、なんとか寸前で阻止
する。私の悪い癖だ。300年前のことについて想いを馳せようと、
今更どうじょうもないのに。

ひとつため息をついて、気持ちを切り替える。今はそれよりも、例の魔族のことだ。

旅人に化けていたというのは、おそらく魔族お得意の変身魔法のことだろう。相手を油断させ効率よく”狩り”をするために、よく奴らが使う魔法だ。

その正体は、素人目にはまず見破ることはできない。なにせ上級魔族にもなると、熟練の魔法使いでさえ欺くのだ。一般人が気付けるはずもない。

しかも

「快樂的に人を殺す魔族、か」

そう称したのには、いくつか理由がある。

確かに魔族にとつての一一番の獲物は人間だと言つてもいい。他の動物より魔力量は多いし、武器や魔法を用いなければ個体としての強さはそれほどでもない。それこそ上級魔族ともなれば、赤子の手を捻るが如く易々と一般人を殺し、喰うこともできるだろ。

そう……だからコーナを生かし、あまつさえ呪いなんて面倒なものをかける必要性など、どこにもないのだ。

本来魔族のかける呪いは、力量の高い相手を弱らせて喰うための下準備のようなものである。

もつとも、そこに力量差があり過ぎると取り込んだ力に呑みこまれて自我を保てなくなってしまう。だから魔族も喰う相手を選ぶのだが……コーナの場合は明らかにそれと違う。確かに魔力はそこそこあるようだし、おそらくその村では一番の保持量だったのだろう。だが、まだ幼い彼女はその使い方を知らない。ただの無力な子供だ。わざわざこの呪いをかけなくとも、上級魔族ならその場でコーナを

殺すことも喰つじともできたはずだ。

なのに奴はそれをしなかった。

この不可解な行動と、エリックの話から推測できる」とはひとつ。

(完全に、命を弄んでいる)

なにせ村人にもただ殺されただけで、喰つてはいのだ。彼らの微々たる魔力には興味がなかつたのかもしないが、ならばわざわざ殺す必要もなかつたはず。

おそらくユーナが生き残つたのは、奴の遊びなのだろう。

まったくもつて性質が悪い。

それこそ……生かしてはおけないほどに。

そうして若干日の据わつた私とは裏腹に、少し落ち着いたらしくエリックはその後の経緯を語り始めていた。

「その後は家を売つて、両親の残してくれた全財産を持つて各地を回りました。アリアさんと同じ古代魔法の使い手にも何人も会つてきましたが、どなたも『これは自分の手に負えない』とおっしゃられて……でも、最後の最後でアリアさんのようなすこい使い手に会えて、本当に幸運でしたよ」

「そ、そつか

他の古代魔法の使い手でもダメだつたのか……いや、下手に手を出さないだけの觀察眼があつただけまとい。彼らががむしやらに魔法を使つていたら、きっとユーナはこの場にはいなかつただろう。

それを踏まえると、今回知らなかつたとはいあまりにも自然に呪いを解いてしまつたのは失敗だつたのかもしれない。

……まあ、しょうがないか。

今日は事が事だし、出し惜しみする余裕もなかつたのだから。

だが……やはり280年前の大火事の影響で、現代の魔法は魔力量はもちろん、呪いをはじめとする知識の面でも大幅に後退してしまつたようだ。

(一体、280年前になにがあつたんだ？)

大火事の詳細について調べようにも、学園にある資料では限界があつた。キラに訊いても『僕はずつとご主人様のそばにいたからよくわかんないです。あの洞窟から王都の方が赤くなつていたのは見ましたけど……』と答えるばかりだ。

やはり、これはどこか他で調べる必要があるかもしれない。

そうして思案に耽つていると、『あのー、アリアさん？』という声と共に心配げなエリックの顔が視界に広がつた。

「え？ ああ……そ、そういうえば私はまだ自分以外の古代魔法の使い手に会つたことがないんだ。どんな人たちなんだ？」

取り繕うように慌てて適当な話をふれば、彼はキヨトンとした顔を見せながら、その記憶を掘り起こしてくれた。

「えーと、『存じか』と思いますが、皆さんとても有名な方ですよ。

例えば“蒼き雷帝”ラジアート様とか“雪原の妖花”ジュリアンヌ

様とか

「…………それは、すごいな」

いや、すごいといふか……恥ずかしい。誰がつけたのか知らないが、もう少しなんとかならなかつたのだろうか？
もつとも、私の…………といふか聖女の一つ名もなかなか恥ずかしいからあまり強くは言えないが。

(いや、そもそも)いふのは自分で決めるわけではないからな)
きっと彼らも被害者に違いない。そう考へると妙な仲間意識が芽生えてきた。

そうして一人勝手に納得していると、微妙な顔をしたエリックが言葉を選ぶように慎重に口を開いた。

「皆さんなんといふか……個性的な方でした。ああ、ここ近くで
言えば、隣国ガルバニアは第三王子が有名ですね。こちらはさすがにお会いすることはできなかつたんですけど……たしか”闇夜の支
配者”でしたっけ？」

個性的発言の前の沈黙が若干気になつたが、ここはあえて聞かなかつたふりをしよう。

「ああ、ガルバニアか」

ガルバニアといえば、昔からある神聖国家だ。私の住んでいたテルニア村が、その国との国境沿いにあつたからよく覚えている。

名前通りといふといふのか……小耳に挟んだ話では、現代でいう神

聖魔法が発達した国になつてゐるらしい。その国の第三王子が古代魔法の使い手。一つ名から察するに、おそらくは闇属性の持ち主だらう。かわいそうな一つ名をつけられた仲間同士、なんだか親近感が湧いてきた。

「そのうちアリアさんにも一つ名がつけられることになるんでしょうね。ふふ、今から楽しみです」

「できれば一生つかないほうがいいけどな。そうだ、完治後なんだが……どこかに行く予定とかはあるのか？」

「え、いいえ。しばらくはハイレンスにてよつと黙つていまますけど……？」

「せうか。なら、しばらくはこの街に留まつてしまひ。それと後で渡したい物があるんだ」

「あ、はい」と、どこか渋然としない返事を返すエリックだが、とりあえずは了承してもらえたようであつた。

そう……この件にはまだ懸念が残つている。

可能性がないわけではない。備えあれば憂いなしともいふ。念のために準備だけはしておいたほうがいいだらう。

いくつかの方法も考えたが、その途中不意に思いだしたのは、先月の魔法具の授業だった。

(……うん、現代のやり方に慣れる意味でもちょいこいこいし、ここはひとつフィルにも協力してもらうか)

とにかくにも、このレベルの呪いをかける魔族を仕留めるのは、

おそらく現代人にはかなり荷が重いはずだ。

その意味でいえば、モルティ兄妹は運が悪かったといえるだろう。だが、例の魔族にしても、この時代において私と縁を持つとうとは相当運が悪いに違いない。

いざにせよ、キラの前に矯正が必要な相手だ。

授業の代金は、せいぜい命で払つてもらうことになつ。

第3話「思案」（後書き）

どうも、お久しぶりです。いろいろあって投稿が遅れてしまませんでした（汗）

あと、この終わり方だと次話で戦闘とか期待されちゃうかもしれませんのですけど、そう思われている方にはおそらく拍子抜けの展開になつてしましますんで、あらかじめご了承ください。

あ、ちなみに二つの名は全然思いつかなかつたので、「中一的」二つの名めーかーなるものを使用させていただきました（笑）

いろいろ組合せてみたんですけど……いやはや面白かったです。

第4話「仇敵」（前書き）

けっこー長いかもです。
ちなみに前半は三人称で、後半はアリアの一人称になります。読み
づらかつたらすいません。

第4話「仇敵」

モルディ兄弟がハイインレンス王立魔法学園を訪れてからおよそ2週間後。

その日は、昨夜の雨に続いて薄暗い曇天が空を支配していた。

「 そうして、神のお告げを聞いた聖女アリア様は、世の平和のためにひとり立ち上がりました。自らの犠牲を顧みることなく、戦場に颶爽と現れ当時の王国騎士団“太陽の矛”とともに魔物を討伐していく彼女は、清廉で慈悲深く、まさしく聖女と呼ぶにふさわしい精神の持ち主だったといわれています」

そしてまた、この上級クラス5年の教室では、昼休憩あけの歴史学担当ケインの講義が開かれていた。

ちやらんぱらんな授業で定評のある彼が珍しくまともに授業をしているのは、第一王子が目を光らせていることに起因している。なにせ第一王子レストシアの“聖女様”への陶酔ぶりといえば、この学園で知らぬ者がいなほど有名な話だった。

下手な講義などしてみよるものなら、件の王子様から苦情が来ることは間違いない。いくら普段おちゃらけたケインでも、それは勘弁願いたいところだった。

その一方で、本日の講義の主役である噂の“聖女様”といえば、最初の頃こそその純度100%の嘘っぱち伝承にいろいろ物申したいことはあったのだが、ここ最近はいつのことなにもかも諦めて開き直る、という特技を編み出していた。

むしろ、今の彼女にとつてはそんな些事よりも昼食後の生徒を襲うこの甘い誘惑にどう打ち勝つかが問題だったのだ。

だが、まどろみの中で必死に戦うも、退屈かつ嘘だらけな内容の授業に、徐々に抵抗の意思は奪われていく。

あるいは降参の白旗をあげるのも、時間の問題だったのだろう。こつくりこつくりと首がリズムを刻み始める頃には、緩やかな敗北に身を任せ夢の国へと旅立とうとしていた。

……のだが、とある感覚が彼女を一瞬にして現実へと引き戻すことになる。

それは、あまりにも唐突だった。彼女はバツと飛び起き、そのままの勢いで立ち上がったのだ。

椅子が盛大に倒れる音とともに、透き通るような声が畳下がりの静かな教室に木霊する。

「かかった！…」

「つむ！…？」

「セ、セレスティ、どうしたんだ突然？」

後ろで同じく舟を漕いでいたらしいライルはビクンと肩を跳ねらせ、真面目に授業を受けていたレストも突然の珍事に目を丸めさせられる。

しかし、そんな彼らの疑問などどこ吹く風。さつきまで寝ぼけていたとは思えない俊敏な動きで、彼女は窓に手をかけながら教室の方を振り返った。

「ケイン先生！ フラスト先生に『例の魔族が現れた』と伝えてく

ださい」

「え、あ、はい……でもセレステイさん、窓を開けて何を？」

勢いに押されてか、今まさにチョークを持つて黒板に文字を書くところだった彼は、そのままきこちなく頷いた。からうじて付け加えられた疑問は、あるいは本能的な警鐘だったのかもしれない。

『この娘、何かする気だぞ』といつ。

当の本人といえば、戸惑うような視線と湿った風をその身に受けながら、鷹揚にいつのたまたた。

「（）心配なさりす。ちょっと魔物を狩つてくるだけです」

「いやいやいや、何言つてゐるのアリア」

「寝ぼけているのですか？」

突然わけのわからないことを言ひ出した級友に、ニアとローズが不信な顔で問い合わせる。だが、それすらも意に返さず、どこか急いでいる風の彼女は「じゃ、行ってくる」と手を振り……周囲が度肝を抜くような行動に躍り出た。

窓枠に足をかけ、ためらいもせずにその身を宙へと投げ出したのだ。

「え、嘘！？」

「いや……」

考へてもみてほしい。はたから見れば飛び降り自殺である。このまさかの事態に、彼女の友人が甲高い悲鳴をあげたのを誰が責められようか。

だが次の瞬間、そんな彼女たちを宥めるように、落ち着いた声とともに濃密な魔力の気配が届いてきた。

【飛行】

階下から今一度ゆっくりと姿を現したその姿に、窓際にいた生徒はかすかな安堵と、その数倍の衝撃を受けることになる。

「…………マジ?」

目を見開いて、眼下をのぞき込むライル。その声に反応してクラスメイトの大半が窓枠まで駆け寄つてくる。

そして次々と驚きの声をあがつた教室は、もはや授業どころの騒ぎではなかつた。

しかし、教師であるケイルもそれを止めようとはしない。なにせ普段は余裕たっぷりの彼ですが、今や生徒には到底見せられないようなアホ面を披露していたのだから。

一方クラスメイトの興味を一身に受けた彼女は、睨むようにある一方向を見ながら数秒空中に佇んだ。無論、その下に彼女の身体を支えるものはなにもない。

そして、我に返つた彼らが声をかける暇もなく、そのまま矢のよくな勢いで飛んでいってしまう。

「あれは……飛行、魔法?」

呆然としたケインの声が教室に響く。

ここに来ておよそ2ヶ月の編入生。最初は突然の奇行に、次は生まれて初めてみる希少な魔法に彼の思考は完全にパニックになつた。

「セレスティ、飛べたのか……」

そんなケインより幾分落ち着き、しかしどこか腑に落ちない様子で咳いたのはレストだ。以前屋上近くで数秒だけ浮遊していたように見えたのは、やはり錯覚ではなかつたのだ。

しかし……だとすればあの時と今の光景に違和感を覚えてしまつ。彼はその違和感のもどが掴めずにいた。

そうじうしてじるうちにものすゞい速度で飛ぶ彼女の影は街の方へと消えていく。

心配げにその後ろ姿を見送ったのは二人の少女 振り返ったニアとローズはお互い怪訝な顔をつきあわせながら疑問を投げかける。

「ねえ、どうしていきなりあんなことしたのかな?」

「ずいぶんと急いでいたようですが……先ほど何かおかしなことでもありましたか?」

「おかしなこと……あー、そーいや、ペンドントが光つてた気がするな」

思い出したよつて語るワイルの単語に、ピクリと反応する人間がひ

とりました。その彼 完全に居眠りをしていたファイルは田を擦りながら窓際に近寄る。

「そのペンダントって、もしかしてこの前俺が作ったやつかなあ？」

「ぐ、あれお前が作ったの？ …… つてことは魔法具なんだな？」

「そりゃな。でも実は全部で三つ作ってさ。防御魔法を施したのが一つ。アリアちゃんが魔力を込めたからすぐ强度に仕上がる。あれなら古代魔法だって防げるぜ。あとは、それが発動したら反応するよう細工したものが一つ。それがアリアちゃんがしてたやつってわけ……ぐふふ、初めての共同作業ってわけだよ」

よくぞ訊いてくれた、といわんばかりに白慢げに語るファイルは、寝起きでテンションがおかしいのも相まって、始終気持ち悪いうら笑いを浮かべていた。

しかし、彼のこういった言動にも慣れているライルは、最後の変態的な発言も軽くスルーし、感心したように呟く。

「あー、お前あーゆー魔法具作るのだけは得意だもんな」

「だけ、は余計だ。まあ、この天才フィリック様にかかるば朝飯前よ。女の子からのお願いされればどんなものでもつくってやるぞ」

歯を二ヶとさせて決めポーズをつくる彼は、しかしながら周囲の空気を全く読めていなかつた。クラスメイトも若干引き気味である。だが周りと同じように呆れた顔をつくりたローズは、このままでは埒があかないと話の軌道を修正する。

「まあ、そんな話はどうでもいいですけど……つまり、アリアさん

のペンドントが光つたことは、防御魔法が発動したということですか？」

「半分あたりかな。対象に一定以上の攻撃が加わった時、もしくは魔物が一定範囲内に近づいた時が防御魔法の発動条件になっているんだ。しかもその時学園の敷地外にいてもアリアちゃんのペンドントに反応するように設定して欲しいって言われてやー。あれには苦労したぜ」

「へー、本当に器用ね。……って、あれ？ それって、つまりさつきの魔物狩りの話も……？」

しばしの沈黙を経て、彼女たちの中で過程と結果が結びつく。それを見てふんぞり返っていたフィルも、ようやく事の重大性を理解するに至った。

「…………あれ？ やばくな？」

そうして、ダラダラと汗を流し始める魔法具の作成者と女子二人。その中で一番最初に沸点を迎えたのはミアだつた。拳を震わせながら般若のような形相で不満を爆発させる。

「もーあの子はー！ 一人で突っ走つて怪我でもしたりどつするのよー！」

「とにかく、早くフラスト先生に伝えませんとー！」

「後で説教よ！」「本當ですわ！ まつたく何回空から落ちれば氣が済むんですのー？」「と愚痴りながら駆け出す女子一人を、「お、俺も！」と躊躇ながら追いかけるフィル。

そんな風に三人がバタバタと慌ただしく出ていった後、混乱を収める者のいない教室は、まるで朝市のような雑然とした喧騒に包まれた。

誰もかれもが好き勝手にしゃべり始め、そのあまりの騒がしさにレストも一端思考を止めざるを得ない。

そして、そんな彼が眉を寄せながらふと横を向くと、そこには彼女のいなくなつた方角をジッと見つめるライルの姿があつた。

……なんとなく面白くない。自分でもよくわからない感情にとらわれながら、ここ最近でようやく彼女とも普通に接することができるよになつたレストは、傍らに立つ幼馴染に声をかける。

「……あまり心配そうではないな、ライル」

「ん？ まあ、アリアの強さは知ってるしなー。なんたって、特技が魔物狩りだし。てか、そーゆーレストこそずいぶん余裕じゃねえ？」

「別に……キラがついていれば、大事には至らないだろ？」

顔はどこか不満げだが、断言するその声に迷いはなかつた。レストとキラ……この二人は仲が悪いなりにお互いのことを認めてるんだろうな、とライルは内心で呟いた。もつともそれを口にすればまたツンデレ的発言が飛び出すに違いないので、今はやめておいたが。

「キラがー、そういうや最近見なかつたな」

「おそらくこの件で動いていたのだろう。でなければ主人至上主義のあいつがこんな長期間彼女の側を離れるわけがない」

「確かに……でも、ま、そういうことなら心配はいらないか」

「…………ふん」

その後、彼らは何を言つてもなく彼女の消えた方向を眺め続けた。幸先の悪い天氣の中でも、その瞳に宿る自信が揺らぐことはついになかつた。

「【キラ】、状況は！？」

『今、交戦中です！ 市街地から引きはがしてます』

「わかった、すぐ向かう」

来るかどうかは五分五分だつたが、念のためにキラを近くに張り付かせておいてよかつた。いや、より厳密に言えばキラが自分から立候補してくれたのだが。

てっきり呪いに近づかなかつたから、例の魔族と関わるのが嫌なのだとばかり思つていたが……さも当然のように『ご主人様は学校があるから、僕が代りにあの一人の護衛をしますよ』と言つた時は、驚くと同時に感動してしまつた。

あの他人に無関心な（しかもエリックには脅し？までかけた）キラがそこまでしてくれるとは……やはり矯正なんて必要ないのかもしない。

そのキラが今追跡している相手……私の懸念通り、例の呪いをかけ

た魔族は、コーナが死ぬ直前、苦しみ貫かせた上で喰おうとしていた。本当にいい性格をしている。

(ますます生かしてはおけない……)

そいつをこりやつて追いつめることができたのは、キラとの首から下げる魔法具のおかげだ。フィルとの合作である赤いペンダントの形をした魔法具は、なかなか便利な代物だつた。ハイレンス王立魔法学園には学園長特製の結界が張つてある。内からも外からも学園を守るその結界は、生徒と校舎の安全を保つ一方で、実はとある弊害を持つている。おそらく弊害だと思つてるのは私ぐらいだが……結界があることによつて魔力の断層ができるしまい、敷地外の魔力が察知しづらくなるのだ。

これはキラとの連絡用に使つてゐる魔法にも支障をきたすようだ、学園で授業を受ける私とその敷地外で活動するモルティ兄妹&キラでは連絡が取りづらくなってしまうわけである。

ちなみに、これはある日キラとの連絡が取れなかつたことから判明したのだが、その時あいつは街で新作お菓子の食べ歩きをしていたらしい。……その金がどこから出ているのかは謎だ。

……話しがずれたが、フィルには無理を言つてその点を改善してもらつた。ついでにどうせ作つてもらうなら、ただ連絡用の魔法具をつくつてもううより、より安全な防御魔法を施したものをつけってくれとお願いしたのだ。これなら万が一キラが彼等とはぐれた時も安心である。

だが、やはり結構な無理難題をふっかけたようで、彼は『うん、学園長の結界と波長を合わせて……いや、でもそうするとあっちがなあ』と小難しいことをブツブツ一人で呟いていた。正直、私はその内容の10分の1も理解できなかつた。彼は感覚的に魔法を

使う私とは正反対のタイプなのかもしれない。

最後の『やべ、閃いた！！ 僕天才じゃね！？ アリアちゃんもそう思うよね！？』というあの発言さえなければ素直に尊敬できたのだが……なにはともあれその器用さと文明の利器に感謝だ。

(……にしても速いな)

回想を止めて現実に集中する。なにが、というとキラと魔族の移動スピードがだ。

本来は転移を使いたいところだが、二人（一匹？）ともものすごい速さで移動しているせいで座標が特定できない。おそらくこの状態でやつても失敗するし、実は魔力量的にも結構厳しかったりする。だからこうして地道に飛行魔法で彼らを追っているのだが……なかなか追いつけない。

だが、『これは何か別の策を講じないとダメか』と考え始めたところで、キラの気配がある一点で止まった。

(しめた)

そうして、できる限りのスピードで向かつた先は、街外れの人気のない空き地だつた。派手に倒された木々や抉れた地面を見る限り場所はここで間違いない。おそらくキラが誘導したのだろう。

多少の不安を滲ませながら、急いであたりを見回せば、森の方を向いてぬかるんだ地面に一人ぽつんと立つ相棒を見つけた。

「キラ！」

「『主人様……すいません、取り逃がしました』

振り向いたキラは、申し訳なさそうに肩を落とした。見る限り、どうやら怪我はしていないようだ。よかつた。

その彼の周囲にはまだ生々しい戦闘の跡が残っていた。氷漬けにされた岩や炭になつた木々。全属性を使う魔物の特徴をこれでもかといつほどアピールしている。

「そうか、逃げたのか……」

少し集中して気配を探つてみても、例の魔族らしき魔力はどこにも感じられなかつた。おそらくまだ去つて間もないはずだが……どうやらよほど気配を絶つのに長けた奴らしい。これは誤算だった。

「すいません。僕がもつとしつかりしていれば……」

「いいよ。私の読みが甘かつた。それよりも怪我はないか?」

キラでさえ取り逃がすということは、相当の力を持つ奴だということだ。これは魔物の力を舐めていた私の落ち度だろつ。

「はい、大丈夫です」

「ならいい。……なあ、また来ると思つか?」

「いいえ、多分ユーナのところにはもう来ないと想います。いいとこまで追いつめだし、手傷も負わせましたから。命の危険を冒してまで人間を喰うような奴には見えませんでした」

なら上出来だろつ。当初の目的はあくまでユーナの身の安全の確保だ。街に被害も出さずに追つ払えたなら、最低限の目的は達成できただといつていい。

まあ、万が一次また来ても、今度は私が相手をすればいいだけだ。

それでもキラは不機嫌な顔を隠そうとしない。彼にとつては、自分一人で仕留められなかつたことが屈辱だつたようだ。なにせ未だ魔族が逃げたと思われる森から視線を動かそうとしないのだ。

どうにもプライドの高い相棒に苦笑しながら、その小さな頭に手をのせる。

「なに、お前はよくやつたよ。偉いぞ」

そつしてぐりぐり頭を撫でてやると、キラは複雑そうな顔をしながらもよつやくこちらを見てくれた。一瞬私と田が合つとバツが悪そつにもう一度下を向き、でも身体だけは寄りかかるよつに傾けてくる。

「……はい」

「よし、じゃあ帰るか。そうだ、帰りがてら菓子でも買つていくか？ 今日は頑張ったから3つまで買つていいぞ」

途端にピクリと反応する相棒に今度こそ本氣で笑いそうになる。

「…………本当ですか？」

「ああ本當だ。なんだ、それともこのまま学校までもつすぐ帰るか？ 勝手に授業を抜け出してきたから多分一人して説教されるぞ」

「いや、是非寄り道していくましょー。その方が絶対いいです！」

ブンブンと頭を振つて力説するキラは、もはや菓子のことしか頭にないのだろう。

まったく、扱いやすくて困る。スキップしながら『主人様、はやくー！』と急かすキラの背をゆっくりと追いかける……最後に一度だけ魔族の消えた方向を振り返りながら。

（次は必ず仕留める）

そうして、新たな決意と共にその場を後にした。

……と、そこまではよかつたのだ。

問題はその後。例の如く菓子屋の前でキラがあーでもないこーでもないと唸つている時だった。

まさか、そこで駆け付けた担任に拳骨をくらつことにならうとは、夢にも思わなかつた。

生まれて初めての経験だつたこともあり、頭に走つた分も含めて、いろんな意味で衝撃的だつた。

聞けば、フラスト先生も密かに王宮の魔法士を護衛につけていたらしい。それを突然現れたキラが魔族とともに姿を消したせいで、てんやわんやの大混乱になり、当初考えていた計画が台無しになつたそうだ。

……そういうことは早く言つてほしかつた。
いや、独断で動いたのは自分も同じだが、まさか菓子屋の前で小一時間説教されるとは……いい晒しものだ。穴があつたら入りたいとはあることである。

その説教を止めてくれたのは、王宮の魔法士に保護されたモルディ兄妹だつた。その時は彼らが天使に見えたのだから、私も相当参つていたのだろう。

「助かつた……危つく菓子屋の前で干からびるところだつた」

「え～お姉ちゃん、おおげわだよ～」

「こや、あのおりさん、あのままだと絶対夜まで続けてたね。にしても僕とお菓子の甘ごひと時を奪うなんて……許せない」

「……あの、キラさんがなんか怖いんですけど」

田の据わつたキラが放つ殺氣に、エリックがぶるりと震えた。どうやらお菓子の恨みは恐いようだ。彼はきっといつかフラスト先生に復讐するに違いない。

もつとも、私もその時は止めはしないだらう。なにせそれくらい恥ずかしかつたのだ。

「こつものじとだ、気にするな。だが怪我がなによかつたよ

「ええ、アリアさんがくれたこのペンダントのおかげですね」

「そうか……でもそれももう用済みだな。おれらへ今後お前たちのところにあの魔族は来ることはない」

「モーグー」と。とりあえず安心してこよ

私とキラの報告を聞いたエリックは、一瞬驚きに田を見張り……その後静かに瞳を閉じた。そして今一度瞼を開いた時には、何かを決

意した強い瞳がその存在を主張していた。

「やつですか……本当に何から何までありがといひやこます」

「別にたいしたことではない。ああ、もしよかつたらフイリックつて奴にも礼を言つておいてくれ。そのペンドントを作ってくれた友達なんだ」

「是非やつします。それと……ひとつ報告があるんです。僕たちハインレンスに住むことにしました」

「ん、そつなのか？」

「ええ、父の知り合いが住んでいて、そこで働くことと思つてこます詳しく話を聞いてみると、なにやら「最近はもっぱら就職先を探していらっしゃ」。

もう働くことを考えていたとは……若いながらに立派である。私も見習わなければ。

そうして感心するように見つめていると、ヒリックは照れたようにはにかみながら、右手で妹の頭を撫でた。

「それに、なによりコーナの強い希望がありますしね

妹を映すその瞳は、ひどく優しいものだつた。それに気が付いているのかは知らないが……コーナはそのまま元気いっぱいに、ある“宣言”をする。

「あのね、コーナね、おねえちゃんみたいなすつこー、まほつつか

い”になるの……」

その意外な内容にそつと息を飲む。未来に希望を持てなかつた彼女が最初に掲げた目標がこの私とは……。

「やうか。なら今度魔法でも教えようか?」

途端に皿をパツと輝かせるユーナの姿に、ついキラとともに笑ってしまう。

まさかそう来るのは思わなかつたが……存外悪くない気分だつた。

第4話「仇敵」（後書き）

さて、今回出でてきた（正確には出でていないけど）魔族さんは、これからもちょこちょこと出没する予定です。多分某探偵漫画の黒の組織ぐらいの頻度で登場する……かも。わかりにくいたとえでいいません（汗）

実は結構キーパーソンならぬキー魔族さんだったりするんですけどね。

あと感想なんですが、ここ最近パソコンに触る機会自体が減つてしまして、お返事を書くのがとても遅くなっています。本当にすいません（土下座）

でも、もし「ショーゲナーから待ってやんよ」とこづ心の広い方がいらっしゃいたら、是非ご感想ください。

誤字・脱字のほうも引き続きよろしくお願ひします。

第5話「アルバイト」（前書き）

お久しぶりです。皆様ご無事でしょうか？
私もなんとか生きてます。絶賛避難民ですが超元気ですよー。

第5話「アルバイト」

「アルバイト?」

スプーンを片手に持ったニアが、意外そうな顔で問い合わせてくる。

「そうだ。学園の生活にも慣れてきたし、そろそろ学費を稼げりうと思つてな」

「へー、でもなんかいきなりねえ」

たしかにいきなりといえばいきなりかもしれない。だが、きっかけこそモルディ兄弟にあつたが、これには私なりのきちんとした理由もあるのだ。

「まあなんだ、いつまでもライルに借りをつくるのはよくないだろう? 入学費用もだが、それ以外の生活費も今立て替えてもらつている状態なんだ。ライルは気にしなくていいと言つてたが、やはりいつまでも甘えるわけにはいかないしな。そんなわけでライルには内緒だぞ」

「わかりましたわ。ちなみにどのよろんなアルバイトがよろしいんですの?」

「できれば魔法関係の仕事がいいんだが……血魔じやないが、それ以外のことほやつぱりできん。あ、ちなみに一番得意なのは魔物の殲滅で」

「ふーん。まあ、得意なのはこの前の一件でなんとなくわかつたけ

「ど

ギロリと睨んでくるミアの視線が怖い。正直魔物よりも怖い。自然と持っていたフォークを置いて、背筋をピンと伸ばす。もはや条件反射だった。

(まだ許してくれないのか……)

その後、学園に戻った私たちを待っていたのは、さらなる恐怖だつた。校門で出迎えてくれたミアとローズは、私たちに怪我がないことを確認すると同時に、それはそれは恐ろしい鬼女と化したのだ。いやにきれいな笑顔で『ちょっとお部屋まで行きましょうか』と誘われた時も、なんとなく不穏な気配は感じていたが……まさか、そのまま説教2時間コースに入るとほどである。

あの苦行といつたら……キラともども正座しながら『この2人は一度と怒らせまい』と堅く誓つたほどである。

その時の足の痺れを思い出し、若干怖じ気付きながらミアを見返す。すると彼女は『仕方ないわね』という風に苦笑しながら息を吐いた。
「そもそもそんな危険なアルバイトないと思うわよ。あと、私が働いてる飲食店もこの前兄妹でアルバイトを雇つたばかりだから、ちょっと難しいわ。』めんね』

「兄妹……？ もしかしてモルティ兄妹のことか？」

まさかと思いながら一応訊いてみる。この時期に兄妹で働く者などなかなかいないはずだ。

案の定、ミアは寝耳に水といわんばかりに茶色の瞳を瞬かせた。

「え、なんで知ってるの…？」

「IJの前助けた兄妹が彼らなんだ」

意外なつながりにお互いしばし沈黙する。すると、黙々と食事をしていたレストやファイルもすかさず話に加わって来た。
おそらく今まで静かだったのは、ニアの勘気に巻き込まれるのを避けるためだったのだろう。さすが空気を読むのが上手い。

「あの例の兄妹か？」

「すげー、世間つて狭いなあ」

「そりだつたの……あの2人働き者だし、助かってるわ。これもある意味アリアのおかげなのね」

表情の柔らかくなつたニアに、ほんの少し安堵する。あの2人の現状もわかつたし一石二鳥だ。今度また会いに来てくれると言つていだし、その時はニアも混ぜてわいわいやりたいものだ。

「ああ、元氣でやつてるようで良かつたよ。ローズたちはどうだ? なにかいいアルバイトとか知らないか?」

「私はちょっと思いつきませんわ

「うーん、俺もー……あ、メイドならいけるよ、俺専属のー。」

「それは『めんこい』だわ」

一拍もしないでしつづけ切り捨てる。あまりにも危険だ……主にファイル

が。もちろんキラになにかされるという意味で。

現に今も一瞬、菓子パンに夢中になつていたはずのキラの目が妖しげな光を帯びた。

……まつたく、ここいつの過保護にも困つたものだ。

ちなみに今はちょうど毎休憩の時間で、いつも通り皆で学食に屯しているところである。

その中にライルが含まれていないのは、彼が今学園長に呼び出されているからだ。内容はルナがこの前遊んでいて壊した納屋について、だそうだ。まつたくドラゴンの主といつのも大変である。

まあ、学園長は優しいから説教も30分程度で終わるだろ?。私もこの前の件で呼び出されたが、その時はむしろ飛行魔法について詳しく訊かれて焦つたものだつた。『一子相伝の魔法だから』とかなんとか始めから終りまで適当に誤魔化したが、どうやら現代では皆発動時のコントロールで躊躇らしく、消費魔力について言及されなかつたのは幸いだつた。

そんなことを思い出していると、何か考え込んでいたリストが躊躇しながらも口を開いた。

「……どうしてもといつのなら、王宮で一つ斡旋できないこともない。というより魔法士団の研究所になるか。研究者で一人覚えのあらぬがいてな」

「もつとも、あまりお勧めはしないが」と付け加えた彼は、匕首やら現在進行形で迷つてているらしい。珍しいこともあるものだ。

「王宮、か……」

正直あまりいい思い出はない……が、すでに300年前のことだ。いつまでも引きずつても仕方ないし、そろそろ割り切らないといけない時期だろう。

どうせ今の自分には関係ないとこるだし、逆に心機一転を図る意味でこの話に乗つてみるのもいいかもしない。

「ちなみにどんなアルバイトなんだ？」

「ああ、古代魔法を研究している者でちょうど被検体……じゃなくて研究の協力者を探しているらしい」

「……それ大丈夫なの？」

キラが胡乱な田つきになるのも無理はない。さつきからどうにも怪しい単語がちらほら出るし、返すレストの言葉も歯切れが悪いからなおさらだ。

まあ、私としては研究の協力程度ならやつても構わないんじゃなーと思う。要は力の使いすぎに気をつければいいだけの話だし。仕事としては楽なほうだろう。

「ちょっと変わったやつだが……書はない、気がする。だが、それよりも問題はその瞳の色だな。せつかく隠しているのに……」

「瞳？」

「いや、なんだ。王宮でその田の色はいろいろと不便なんだ。紫は神聖な色として信仰の対象にもなつていて……その、つまり利用しようとする人間も多い。だが、まさかずっと田を隠していくわけにもいかないしな」

ローズやフィルはなんとなく事情を察しているのか、『ああ』といつた顔で頷いている。

神聖な色……そういえば、300年前もそんな話をどこかで聞いたことがあるような、ないような。そこらへんの記憶がおぼろげではつきりしない。そもそもそんな扱いを受けてこなかつたらから仕方ないのかもしぬないが。

「まあ、それなら問題ないよ。田の色を変えればいいだけだろ?」

「できるのですか? そんな魔法聞いたこともありませんわよ」

「どうやらこの魔法も現代では廃れているらしい。」

かくいう私も封印から目覚めたばかりの頃は、魔力量の関係でできなかつたが……おそらく今なら余裕で行使できるはずだ。

「『』主人様は天才ですから、そんなの片手でちよちよいのちよいですよ!」

「へー飛行魔法といい、本当に規格外だねーアリアちゃん」

自慢げに語るキラに、フィルがポテトをつつつきながら軽く応える。飛行魔法の件もあり、最近は皆慣れてきたのか珍しい魔法を使ってもあまり驚かなくなつた。

キラは若干不満そつだが、私にとつては好都合だ。

「あー、天才かどうかは知らんが、森で暮らしていった時にいろいろ身に付けただけだ。時間だけはあつたからな」

この手のでっちあげも最近はお手の物になってきた。いや、多分あまりいいことではないのだが、私の場合は事情が事情なので許して

ほしい。

一連のやりとりを受けてか、レストはそれまでの迷いを消して了承の意を伝えてくれる。

「さうか……なら大丈夫だな。明日連絡を入れてみよう」

そしておよそ1週間後。

多少の手間をかけてキラとお揃いの蒼い瞳を宿し、王宮へと赴く。普段は厳重な警備もレストの顔パスでらくらくと通過することができた。

そうして門をくぐった私たちを出迎えてくれたのは、威厳を誇示するように展示された一級品ぞろいの調度品だ。

今まさに目の前には、庶民では一生お目にかかるないような、きらびやかな世界が広がっていた。清掃の行き届いた室内には豪奢な絵画や数々の芸術品がまるで見本市のように置かれている。このひとつひとつが、きっと庶民の年収の何倍もの価値を持つのだろう。

だが、この世の粋を集めた耽美な空間も、ひとたびそのメリッキを剥がせば人間の欲と陰謀が渦巻く舞台となる。

ここがどんな場所かは、骨身に沁みて理解しているつもりだ。

「300年経つても、相変わらずか」

その証拠に、こうして人気のない廊下を歩いている途中でも、その独特的な雰囲気を肌で感じ取ることができた。時折すれ違う人々もレストと共にいる私たちを值踏みするように観察してくれる。

どちら豪華絢爛を極めた内装も、見え隠れする欲を隠すことではないようだ。外觀こそ真っ白になつたが、そういう意味で中身はあまり変わっていない。

「Jの先が研究所だ」

レストに案内された先　　その廊下の両サイドには歴代の王族の肖像画が飾られていた。わざわざこんなところを通らなくてもと思わないでもなかつたが、口には出せない。

……どうやらここ何代かは、金髪に紫の瞳が多いようだ。レストがこの瞳を隠せと言つたのもなんとなく頷ける。

だが、特に興味もなく足早に通り過ぎようとしたその矢先、見覚えのある顔を見つけてしまつた。

(アスト王子とマコア……！？)

一人の肖像画だった。おそらく20代前半だろうか？

結婚式の時に描かれたのだろう。純白の衣装をまとい微笑む姿は、既に何度か見てきたその肖像画の中でも、自分の一番よく知つてゐる彼らに近かつた。

そして何より……今まで見た中で一番幸せそうな笑顔だった。

不意打ち気味にくらつた衝撃に、胸が軋む。史実では、この後娘と息子一人ずつに恵まれたらしい。その仲も睦まじかつたらしく、今

では理想の夫婦の形としてもその名を残している。

だが、額縁の中で微笑む彼らを前に、己の胸中では判然としない感情が再燃してしまつ。

(……何が割り切る、だ)

我ながら女らしいとは思う。もはや触れることさえ叶わない彼らにこんなつまらない想いを抱くなんて。

だが乗り越えたはずのそれは、いまだ容赦なくその存在を主張し続けた。まるでそれが私への罰であるかのように……。

「……この肖像画を見るたびに、私は己の存在に疑問を持つよ。どうしてこんな顔に生まれてしまったのか。自分は一体何者なのか、とな」

気づけばすぐ隣にいたレストが、ぽつりとその心境を漏らしていた。立ち止まつた私を見て彼も自然とそつせざるを得なかつたのだろう。そのアスト王太子そっくりの顔に浮かぶ表情は、しかしながら絵の中の人物とは正反対のものだつた。

名君アストレイ国王と同じ面差しを持つレスト。きっと本人にしかわからない苦悩があるのだろう。

でも、それを見た私といえば……つい苦笑いをこぼしてしまつた。

私たちは悩む理由も生まれた年代も全く違つのに、こうじて絵画の中の同じ人物に囚われてしまつてゐる。

それは、はたから見ればあまりにも滑稽だ。そのことに気づいてしまつた。なんとなくさつきまで沈んでいた自分が馬鹿らしくまで思

えてくるのだから不思議である。

それを教えてくれた礼というわけではないが、未だ複雑な顔をしている友人に、自信を持つて断言する。

「レストとこのお方は全くの別人だよ。私が保証する」

確かにその造形こそ似通つているかもしだれないが、本人を知つてゐる私からすれば、二人はまるで別人である。この絵ではわかりにくいため、細かいパーツは意外と違つてたりするのだ。近くで見てきた私がいうのだから間違いない。

「セレスティ……」

レストが驚きと感謝を織り交ぜて見返してくるが、むしろ礼を言いたいのはこちらのほうだ。

その顔を眺め、今度こそはつきりと認識する。彼らは、アスト王子とマリアは既に過去の人間だ。

なにせその子孫が今こうして目の前にいるのだから……いい加減前を見なくては。

気づけば重くのし掛かっていた暗い感情は、どこかへと霧散していった。どうしようもなく眩しかった彼らも今は目を細めながら直視することができる。

そうして改めて、今度は素直な気持ちで絵を見ると、不意にうれしそうなマリアの笑顔が幼いころのそれと重なった。

(……やあれば小さい頃マリアは『将来は王子様と結婚する』と話していたな)

壮大すぎるほど壮大な夢にその時は馬鹿にしていたものだが……まさか本当に叶うとは。子供の夢も案外馬鹿にできない。

「よかつたな、マリア」

小さな咳きはすぐに大氣へと溶けていったが、この想いが消えることはない。私はあの子の姉なのだ。私が祝福しないでどうする。なんだかいろいろと吹っ切れた気分だった。ここにレストがいてくれて本当によかつた。

「何か言つたか？」

「いや、なんでも。それより先を急ぐ。キラも……ってキラ?」

返事をしない相棒に疑問符を投げかけるが、やはり答えは返つてこない。

訝しげに振り向くと、キラはアスト王子とマリアの隣にある肖像画をジッと見つめていた。その横顔は、まさに心ここにあらずといった感じだ。

おかしい、いつものことじつじゃない。

その視線の先には豪華な衣装に身を包んだまだ若い少女が、花が綻ぶような満面の笑みを浮かべ佇んでいた。その表情はあまり王族の肖像画にはふさわしくないが、なぜかその少女には似合っている気がする。薔薇色のドレスは彼女のために作られたのではないかとうほどよく似合つており、そのつり田気味の瞳とあいまつて活発そうな印象を受けた。

「……なあ、レスト。キラが見てるのは誰だ?」

小声で訊いてみると、レストも若干驚いた顔をしながら返してくれた。

「あれはアストレイ国王とマリア王妃の娘、コリア姫の肖像画だな
なるほど。確かに髪は金色だが、その瞳に宿る色は紫だ。彼らの娘
といつのも頷ける。だが、どうしてキラがその彼女に釘付けなのか
がまったくわからない。」

（まさか……恋か？　いや、だが、しかし絵画の中の人間だぞ）

後になつて考えると、どうしてそんな突飛な考えに至つたのか自分
でも不思議だつたが……ともかくその時の私は本氣でキラの叶わぬ
恋について悩んでいた。もつとも悩んだ末に出した結論が保留な
で、あまり意味はなかつたのだが。

ともかく内心かなり動搖しながら、できるだけ普段どおりに接しよ
うと一度深呼吸をし、意を決してキラに声をかけようとする。
……しかし、その前にどこかあきれた表情のレストが「おー」とそ
の小さな肩に手をかけてしまつた。私の努力が……。

一方のキラの反応は、予想以上に顕著だつた。彼はビクリと体全体
を揺らし、次にそれを誤魔化すようにレストを睨んだ。

「い、いきなり驚かすなよ、つんけん王子！　そ、それより早く案
内しろよな！」

若干慌てたように指をさす様子は、やはつどいかおかしい。だが…
…さすがに言こすぎだらう。

案の定、キラ曰く”つんけん王子”は眉間にピクピクさせながら、田を据わらせた。

「ほお、やはり貴様には一度礼儀といつもの叩き込みねばならなりな」

「なんだよ、お前が学園でご主人様につきまとうから僕の仕事が増えて大変なんだぞ！　ぱいしょーとしてお菓子を請求する！」

話を変えようとしているのはわかるが、やはりいつものことからしきないお粗末な方向転換である。よっぽど動搖しているようだ。しかし、最後の一言は私心丸出しだったが……さて、仕事とは一体なんの話だろうか？

まあ、考へてもわからないし、いずれにせよいつなつてはもはや売り言葉に買い言葉だ。

「な、いつ私がつきました！？」

「つきまとつてるじやんか！　他のメスとは全然話さないくせに！」

「メツ！？　あ、あれは……」

二人ともヒートアップしてきたのか、声のボリュームとともに魔力が霞みの様にあたりに充满してきた。

キラなんて既に影が揺らめいて、今にもレストに襲いかかりそうになっている。もちろん本気でやううとは思っていないだろうが、さすがにマズイだろう。

自分のせい……かは知らないが、ともかくきっかけを作った責任もある。

「まあ、二人ともそろそろ」

そうして制止の声を発した直後だつた。突然、横合いから大きな魔力の波動を感じたのだ。それも一直線にこちらに近づいてきている。

「なつ！？」

無意識に感知したその威力は、現代の基準で言えばかなり強い。それこそ無防備に受け止めれば生死に関わるレベルのものだった。

レストはともかく、いつもなら絶対に気づいているはずのキラでさえ、今はまだ口論に夢中で気付いていない。私自身もまさかこんなところで攻撃を受けるとは想像もしていなかつたせいか対応が遅れてしまつている。

気付けばすぐ目の前まで差し迫つた氷槍は、目標めがけて肉薄していた。

その鋭利な刃先にいるのは……

「キラ！？」

第5話「アルバイト」（後書き）

今は実家で小説書いてるんですけど、急いであんまりトーク持ち出せませんでした。あと4話分くらいのプロットはあるんですけど……いつ帰れるかなあ（汗）

まあ、それはさておき『この世界に』“アルバイト”って言葉あんの？』というツッコミがあるかもしませんが……どうか気にしないでやってください。そういう人はテキトーです（笑）

第6話「襲撃者」（前書き）

2話連続投稿です。そしてアクの強い新キャラ登場です（笑）
近いうちに次もあげたいなあと思つてます。

第6話「襲撃者」

「キラ……」

無慈悲な氷の刃は、一直線に相棒の体へと吸い寄せられていく。

すぐに魔法を発動させるが、油断していたせいで間に合ひかどは微妙なタイミングになってしまった。

一方、私の声にハツとしたキラも、すぐ目の前に迫りくる刃に体を捻らせようとしたが……何かに気づいて、その場に踏みとどまってしまう

う。

「馬鹿、避ける……」

驚き声をあげるが、もう遅い。どんな熟練者でも魔法を発動するまでには、若干のタイムラグが存在する。キラが今魔法を使おうとしても

間に合わないし、回避も今はや不可能だ。

嫌でも刃に貫かれるキラの姿が脳裏に浮かんでしまう。見慣れているはずの光景だが、相手が違うとこりまで焦るものなのか。

だが……幸運にもその最悪な未来図が実現することはなかつた。

ガゴッガゴッという音が連続して響きわたり、小さな体を貫くはずだった刃は不可視の壁に阻まれた。間一髪で私の張った防御魔法が

発動

したのだ。冷や汗が流れる。なんとか間に合った。

しかし、咄嗟に発動したせいで強度が不十分、かつ想像以上に相手の魔法が強力だった、という二つの要因が重なったせいでその勢いを完全に殺すことはできなかつた。

相殺しきれなかつた分によりキラは勢いよく後方へと飛ばされ、その小さな体躯を壁に叩きつけられて蹲つた。「かはっ」と息を吐き小さく呻く相棒を視界に映し、一瞬にして激情が湧きあがる。

(……誰だ、やつたのは)

もはや頭にあるのはその一点のみだ。普通なら怪我人の救護が先なのかもしれないが、命に別状がなさそな以上、戦場で育つた己の本能は敵の排除を最優先事項としていた。

そして獲物を探す私の目に映つたのは、倒れたキラとレストの間に割り込むように入ってきた一人の男。

「殿下！ 無事ですか！？」

突然乱入してきた大柄な男は、レストを守るように立ちはだかつた。制服を着ていることから、おそらく王宮の関係者だと推測できる。

……もっともそんなこと今は関係ないが。

「待て、この者たちは

」

「この王宮で殿下に刃を向けるとは、なんたる狼藉！ 下郎め、成敗してくれる！ 【彼のものに神の裁きを】」

水色の髪を振りながら偉そうな口上を述べた男は、レストの制止にも聞く耳を持たず、あまつさえ低い声で死の言葉を紡いでいった。

「つーじーつー

まだ体制の整っていないキラに追い打ちをかけるように放たれるそれは、到底看過できるものではない。

火山の様に湧きあがる激情に逆らうことなく、一片の躊躇いもなく反撃する。

慣れた動作で滑るように魔力を凝縮させ、先に詠唱を始めた男と同時に魔法を発動させた。

詠唱の続きを聞いた限り、男はどうやらやつと同じく氷系の魔法を使うようだ。芸がない。

キラには先ほどよりも強度を数段上げた火系の防御魔法を形成し、それと同時に男には影を送つて電光石火の速さでその身体を拘束する。

「なつ！？ がつ！？」

狙い通り、相棒に向かつて放たれた氷の刃は、灼熱の壁に阻まれて一瞬で蒸発した。もちろん周りに火の粉を撒き散らすような柔な制御は

していない。この2ヶ月ちょっとで、古代魔法を連発できるほど魔力は回復したし、多少のコントロールも身についてきたのだ。

だが、今はそんなことどうでもいい。なにせ一人の肖像画がなければあたりを火の海にしても構わないほど、私の内心は燃え盛っていた。

カツカツと靴を鳴らしながら、無造作に獲物へと近づく。

「さて 確か”下郎”だつたか?」

影でぐるぐる巻きにして地面に引き倒した男を、射殺すように上から見下す。レストが息を呑む声が聞こえたが、容赦をしただけだまだい

い方だと思つてほしい。なけなしの理性を総動員していなければ、そのまま切り裂いてしまつところだつた。

……だつて手を出してはいけないものに、手を出したのだ。許せるわけがない。

「お前こそ分をわきまえる。その程度で刃向かうなど片腹痛いわ」

我ながら、自分のものとは思えない低く冷徹な声が発せられた。殺氣にあてられたように一瞬男は肩を跳ねらせるが、すぐに戦意を取り戻

しきりからを睨みつけてくる。

「まだやる気か……いい度胸だ」

男の期待に応え、影を使いそのまま締めにかかる。

(とりあえず 気でも失つてもらおうか)

いたわか過剰防衛が過ぎるとも思つたが、自制心が働いていたにこいつを沈黙させる方がお互いのためになる気がした。本当は手加減

などドブに捨ててしまいたいくらいなのだ。氣絶させくらゐ寛大な処置のひびだらう。

だがそう一人納得して合図を送りうとしたその矢先、半ば予想通りの邪魔が入つてしまう。

「ま、待て、セレスティ！ クロード、この者たちは敵ではない！」

「むつ……レスト」

「は？ し、しかし殿下、さきせどは……？」

不満そうに口を尖らせん私とは対称に、無様に引き倒されたままの男は間の抜けた返事を返した。

双方の反応を見たレストは、眉間に揉みながら深く、そして重いため息をついた。……いくらなんでもその反応はあんまりじゃないだろ？

か。まあ、彼もある意味とばっちりを受けているのだから仕方ないが。

レストは、まずクロードと呼んだ男の疑問に答えることとしたようだ。地面に転がされた男を呆れたように見返す。

「少しじゃれていただけだ。全く、お前は昔から卑とちりしすゞめるのが欠点だな」

「そ、それは……」

いまだ混乱気味の男の目は、私とレストとキラの三人を忙しなく行き来し、そしてもう一度縋るようレストの方を向いた。若干暑苦しそ

うにそれを受け取ったレストは、その紺色の瞳を見据えながらトドメの一言を放つ。

「彼らは私の友人だ」

それを聞いた男はまるで信じられないといわんばかりに口をパクパクさせ、次にぶつぶつと何かを呟き始めた。耳を澄ませてよく聞いてみ

ると、どうやら「ゆうじん……殿下の……いや、まさか……友人？」
と言っているようだ。

……なかなか失礼な反応である。これを聞く限りレストにはよほど友人がいないように思えるが。

どうやら横目に観察した本人にも、それはばっちり聞こえていたらしい。それでもさすがレストというべきか、眉間にさりにピクピク

むせ

ながらも口調だけは冷静に語り始めた。
まあ、それもあくまで口調”だけ”は、だが。全身から怒氣を迸ら

せる今の彼には、私でさえあまり近づきたくない。

「お前とは後でじつへつ話をしないといけないようだな。それより、他に向か言つべき」とがあるのでないか？」

その言葉を受けた芋虫男は、手のひらを返すように半身低頭……とは言つても最初から地面にへばりついてこるのだからあまり変わらない

が、それでもあくせくしながら身を起こし、勢いよく頭を上げた。

「も、申し訳ござりませんでした……」

その一連の動作の中で、よつやくまともに男の顔を見ることがなった。おそらく歳は二十代中頃。水色の髪は短く刈りこんであり、その落

ち着いた紺色の瞳と精悍な顔つきはいかにも仕事ができる男、といった感じなのだが……この体ならくでは台無しである。

「もういいだろ、セレスティ。離してやつてはくれないか？」

「…………やうだな」

なんだかやる気がそがれてしまった。溜飲が下がったわけではないが、ここはおとなしく拘束を解く。レストの頬みだし、キラにも誤解さ

れるよくな落ち度があつたのは確かだからだ。

腕を一振りして影の拘束を解き、キラにかけてあつた防御魔法も消滅させた。するとそれをジツと見ていたレストが、困惑したように

問い合わせ

かけてくる。

「セレスティ……やつを無詠唱で魔法を行使しなかつたか？ それも別属性の並行魔法で」

……やつてしまつた。無詠唱もそうだが、現代では違う属性の魔法を並行して使うのは難しいことだつた。田の前の相手に集中になるあま

り、レストの田があることを失念するとは、まだまだ私も修行が足りない。

ともかく、じつにいつ時ほどぼけて話題を変えるに限る。

「やうか？ そんなことよつ……キラ、大丈夫か？」

「はい。ちょっと油断しました」

不服そうな顔をしているものの、むくりと起き上がったキラに怪我はないようだ。しつかりとした足取りでじゅうに歩いてくる姿に安心す

る。これでもし大怪我でもしていたものなら、芋虫男を地獄にたたき落としていたところだ。

……案外私もキラの過保護を馬鹿にはできないのかも知れない。

「まったく、お前ときたら。どうして避けなかつたんだ？」

「うう、それは……」

そのままバツが悪そうに背後へと向けられた視線を追い、ようやくその意図が理解できた。

ユリア姫の肖像画だ。これを守るためにあの場に留まつたのだ。

だが、このある意味感動的なエピソードを前にして、私の頭はひどく冷め切つていた。私もアスト王子女とマリアの肖像画にはそれなりの愛

着があるが、それでもここまで馬鹿な真似はしない。絵画の中の人を守つて死ぬなど、悲劇どころか喜劇にもならないではないか。

「お前はアホか！ 守つたところで、どうせしきるお前の血で汚れて、絵など見れなくなるに決まつてゐるだらう。あの氷槍で貫かれても大して変わらんわ！」

「あのお、」主人様。その言い方はちょっと傷つくんですけど

「本当に怪我するよりマシだらう。この際だからはつきり言つぜ。いいが、あれはもうこの世にはいない人間なんだ。だから――」

そうして数分前の自分のことを棚にあげ、キラに絶対に叶わない恋をする」との空しさを説いてみると、遠くから男女の一人

組みが疾走してきた。

さっきのこともあり、今度はキラと一人で警戒しながら相手の動向を探る。

だが、そんな私たちの予想に反し、新たにやつてきた二人は着くなり息を切らしながら子犬のようにキヤンキヤン騒ぎ始めた。今度はいつたいなんだ？

「ちょっと、リボン！！ さっきの魔力は何！？ あなた一体何をしたの！？」

「そうですよ、リボンたいちょー！ あれ？ その人たちもしかして今日招く客人さんじやないですか！？」

「……クロードと呼べ」

二人のテンショーンとは真逆に、芋虫男、もといクロードは撫然とした表情で至極どつでもいいことを訂正した。だがそれは火に油を注いだ

ようなものだつた。後からやつて来た男女はレストがそこにいるにも関わらず、さらにでかい声で反論する。

「そこじゃないでしょ！ てかこの氷の残骸ってあなたの魔法でしょ！？ 全くいきなり走り出したと思ったら、こんな場所で魔法までぶ

「放して！ この馬鹿リボン！」

「そうですよーリボンたいちょー！ リボンの方がなんかかわいいつて王宮の侍女たちにも評判つすよー！」

「つ、だからクロード隊長と呼べと書つてゐるだらうが……」

「これまたひどくどうでもこことだが、段々論点がずれてきている。クロードといふ男も、さつきまでのしおりしたはぢへ行ったのか……

……アクの強そうな一人に彼の大聲も加わつて、どんどん場は騒がしくなるばかりだ。

もはやこいつを完全無視した三人の怒鳴りあいには、割り込む氣も失せる。気が済むまでやらせておけ。

「それにしても姦しい三人だな。そもそもリボンのどこが嫌なん……ん？ リボン？」

どこかで聞いたことのある家名に頭を捻らせると、これまた重いため息をついたレストが申し訳なさそうにその驚愕の真実を語つた。

「そう、あいつはクロード・リボン。あのクラリス・リボン……わが校の保険医の兄だ」

それを聞いた私とキラは、信じられない気持ちで今一度子供のような口喧嘩を繰り広げる男に目をやる。

あのポワンポワンとしたリボン先生と、この血圧の高そうな芋虫男が兄妹？ 本当に血がつながっているのかはなはだ疑問だ。

共通点といえば水色の髪と紺色の瞳、そして見た目と中身のギャップだらうか……あげてみると意外に多い。

だが、それ以外の点においては全く

「似てないな

「似てないですね。しかも、こつが隊長つて……」の王面そんなに人材不足なの?」

まさしく私とまったく同じことを考えていたキラが、その思いのままに疑問を吐き出す。ちょっとストレート過ぎるかもしれないが、この

有様を見ては遠まわしに訊くのも馬鹿らしく思える。
それにこの答えには私も興味があるのだ。

だが、真剣に答えを待つ私たちの前で、苦つきつた顔をしたレスト
が返したのは、ただ一言だった。

「…………それ以上は言ってくれるな

とどつつまり、彼も同じ気持ちといづわけだ。

第6話「襲撃者」（後書き）

そんなわけで新キャラたちの登場でーす。
またおしゃべりな奴らが増えてしまった（笑）

……それなり無口キャラを出したい今日この頃。

第7話「実”戦”訓練」

「先ほどは失礼いたしました。私はクロード・リボン。ハイレンス王国魔法士団の隊長を務めています」

三人の中でも一際背が高く、そして最も神妙な面持ちをした男が恭しく頭を下げる。

その原因是明白だ。数分前、あまりにも長引くドタバタトリオの漫才に、ついにレストの堪忍袋の緒が切れたのだ。

空気を震わせる怒声は、学園の教師も裸足で逃げ出すような威圧感を伴っていた。

ギヤーギヤー騒いでいた三人も、これにはさすがにまいったらしい。
……まあ、正直私もビクついたのだから無理もない。ここだけの話だが、キラも同じだ。本人は否定するだろうが、間違いない。

とにかくにも後からやつて来た一人はそこにしてようやくレストの存在に気付いたらしく、一人は「でででで殿下！？」と慌てて、もう一人は「あら殿下、いらしたのですか？」と失礼な反応をみせながらも臣下の礼をとった。

そして「貴様等にも後で話がある」というレストのありがたい死刑宣告があつた後、ひとまず自己紹介をしようという話になり、今の状況に至るというわけだ。

三人並んだ中で、こちらからみて左にいる男。学園の保健医クラリス・リボンの兄にして、つい先ほどまで交戦していた人物は、今は別人のように丁寧な物腰になっている。

確かに平民でここまで地位にのし上がったのなら、それ相応の実力と礼節を持つても不思議ではないが……さっきの芋虫ぶりを見たせいか、どうにもしつくりこない。

「同じく副隊長のティック・ヴィ・フルツ

納得のいかない顔で奴を眺めていると、今度は真ん中の少し背の低い青年が口を開いた。

クロード・リボンと同じ制服を着た彼は、一二三四と人なつっこい笑みを浮かべて敬礼している。

さつきまでこの世の終わりかというくらい慌てふためいていたのが……どうやら立ち直りは早いようだ。

焦げ茶色の髪にそれとお揃いの瞳。そばかすと独特な語尾が印象的なこいつも、副隊長にしては随分と若い。

もともとこちらは貴族のようだし、コネなりなんなり使えば、この歳でこの地位を得ることもそれほど珍しいことではないだろう。……

というのは少しひねくれているか。

「あたしは、王宮つきの天才研究者ジル・マイア・ハートネスよ。ジルって呼んでね」

最後に残つたのは小柄な女性だ。見た感じ三人の中では一番年長だろ。づ。

短めに切りそろえた黒髪に、真っ赤なメガネとルージュがよく映えている。黒曜石を連想させる瞳は、まるで見る者を誘惑するように妖しげに輝き、彼女の魅力を引き立てていた。

加えてその服装も……一応白衣を纏つてはいるが、その下の露出が激しすぎる。正直研究者にはとても見えない出で立ちだった。

だが、一番の問題はその奇天烈な自己紹介にこそあるだろ？。“天才”と聞いて真っ先に思い出したのは、同じクラスにいる“自称天才”的彼だ。

……300年前も含めて、私の経験上、自分で天才という奴にはろくな奴がない。

天才と何かは紙一重といつが、彼女もその類なのだろうか？

並ぶ三人をそれぞれ注意深く観察する。

一癖も二癖もありそうな彼らをまともに相手にするのは、きっと骨が折れることだろう。

なんとかならないものかと考えながら、一応こちらも簡単な自己紹介を済ませておくことにした。

「私はアリア・セレスティ。」うちは使い魔のキラだ」

「さつきはジーも。リボンたいちょーさん」

キラが腕を組んで嫌みまじりに視線を送ると、名指しされた相手は生真面目な反応を返してくる。

「うへ、す、すまなかつた」

「私からも謝罪しよう。悪かつたな」

レストが本当に申し訳なさそうに鼻を鳴らした。

「本当だよ。まったく、部下のしつけられないやんとしてみね」

「もつとも、キラにも悪いことはあったが……まあ、次は気をつけろ」

だが、『容赦しないから』と付け加えようとした矢先、こちりを向いた彼が興奮したようにまくし立ててきた。

「それにしても、やきほどの平行魔法は素晴らしい……よければ今度我が隊の演習の見学、いや参加を」

「クロード、彼女は研究の協力者としてここへ来てもうつたんだぞ。そんな危険なことをさせられるわけがないだろ?」

レストが呆れたように話を遮るが……なんというかこの男、まったく懲りてない。

加えて、これはさつきから自覚していることなのだが、どうにでも口の腹の虫が治まらないのだ。これは結構まずい気がする。

こんなに執念深い性格だつたのつか?

自問自答しても、すぐに黒い思考に押しつぶされてしまつ。理性で押しどごめようにも、思考はどんどん好戦的になつていつた。

(いかんいかん。とりあえず話を変えよう)

「……とにかく、わざと魔法士団と言つていたか?」

300年前は”騎士団”だつたはずだ。確かに時代が変われば名称や役割も変わっていくだろうが、この魔法が衰退している中あえて”魔法師団”に拘る理由があるのであるのだろうか。

そんな私の質問は随分と意外なものだつたらしく、彼らは二三者二様のリアクションで驚きを表現した。

「ほへ？ “月夜の盾” を知らないんすか？ 今時珍しい子っすね」

「 ”月夜の、盾” ？ いつできたんだ？」

「本当に知らないの？ 300年前、聖女と魔王の戦いで当時最強だつた“太陽の矛”が壊滅して、その後進として生まれたのが“月夜の盾”。それがハインレンスの伝統として今も続いている、というわけよ。名前の由来は聖女が倒れたその夜がそれはもう見事な満月だつた、つて話からきててね。まあ、それも今となつてはおどぎ話のようなものなんだけど」

青色の制服に月の紋様が入つた彼らの制服を指しながら、ジルが教師のようにつらつらと説明する。

残りの一人は『こいつ一体どこで育つたんだ？』といわんばかりに胡乱な目でこちらを見てきた。失礼な。

もつとも、この時私の脳裏の大半を占めていたのは蛇足のように付け加えられた言葉の方だ。

(違ひ。“おどぎ話”なんかじゃない)

確かにあの夜最後に見た光景は、それはそれは見事な満月だつた。死を受け入れ、静かに瞼を閉じようとしたあの時の、かつてなく美しい黄金の輝きは、今でも覚えている。

(……いや、あとひとつ“何か”を見たような)

見た、とこう記憶はある。だが、それがなにか思いだせない。もう少しこうとこうのこ、その一步がひどく遠く感じる。もじかしくて仕方ない。

……なんだかまたイライラが溜まつてきた。これでは話題を変えた意味がないではないか。

どんどん仮面になつていく私をレストが心配そうに眺めてくる。だが、それがわかっていても今はどうしようもなかつた。

そんなピコピコとした空氣を察したのか、副隊長ことフルがやけに明るい声色で隣に話を振る。もっともその笑顔は完全にひきつっていたが。

「こゝ、これでもリボンたいちょーは史上最年少で隊長職についたんつすよー！」

「クロードだ。まあ、フラスト元隊長の推薦があつてこそだがな」

いちいち名前を訂正するこの男は、よほど自分の姓が気に入らないらしい。

(ここの呼び名は決定だな)

言わざもがな”リ”から始まるものだ。

それにもしても、思わぬところで担任フラストの前歴が発覚したものだ。ただ者ではないと思っていたが、まさか富仕えをしていたとは驚きである。

「はいはい、男の自慢話ほどひつやいものはないわー。そんなことより！ あなたが古代魔法を使える尊のスーパー・ルーキーちゃんでいいのよね！？」

「……尊になつていてるのか？」

「そーよ、なんたつて世界に数人しかいない古代魔法の使い手ですからからかうね！ もう魔法士たちの間じや、ハインレンス王立魔法学園のアリアといつたら超有名人よ。ただその容姿だけは、謎に包まれていたのだけど……ホント食べちゃいたいくらい美少女ね」

そう言い唇を舐めて猫のように舌を細めた彼女は、まさしく妖艶と呼ぶに相応しいオーラを醸し出していた。

が、その表情と言葉の組み合わせを考えこらへんとして、ただただ背筋に悪寒が走るばかりだ。

とかく優秀な研究者というのは、頭脳は明晰だが、人間としてマズイという共通点があることを私は知っている。正直これ以上お近づきになりたくない。

「ほんとうすよ！ 僕同僚と尊が本当か賭けてたんだけど……ボロ勝ちさせてもうひつやいました！ ありがとうございますー！」

「あら、いーこと聞いたわ。今日の夕飯はあなたの驕りね」

「ああ、本当にいい」と聞いたわ。今日の夕飯はあなたの驕りね

「ジル姐さんもリボンたいぢょーもひでえつすー！」

「でもラッキーよね。てっきり学園の研究者に取られると思つてい

たのに、いっちに来てもらえるなんて。本当に殿下には感謝しますわ！　あ、でもお殿下もよければ今度

」

「それ以上近づくな変態。約束通り一連の研究は人目につかない所で行い、外部にはもらさないこと。守秘義務は厳守しり」

猫撫で声ですり寄つて来たジルを、辛辣な言葉と視線を持つて切り捨てたのはいわずもがなレストだ。

普段女性に対しても常に紳士的に接してきた彼のひどく冷たい態度には、ただただ目を丸くするばかりである。

しかし、レストの様子を見るに、このジルという女性とはそれなりに親しい間柄と考えていいのだろうか？

もしくはただ単にジルがよほどぶつ飛んだ人間性の持ち主なだけかといふところだ。

……いや、そもそもレスト、その変態に私を引き渡そうとこうのか？

これだけでも給金が良くなれば考え方の労働環境だ。まあ、いざとなつたら逃亡すればいいだけだし、多少のことには耐えられる自信がある。

後は腹を括るだけだし、さっさと本題に入ろう。

「ふーん、まあいい。で、私は何をすればいいんだ？」

「ふふ、とりあえず古代魔法の威力と詠唱を記録させてもらつわ。あ・と・はお楽しみ」

「……よつするに普通に使えばいいのだな？」

魔力量の測定などしようものなら全力で誤魔化すつもりだったが、今のところその可能性は低いよつで安心した。おそらく学園で測定した数値を把握しているからわざわざ測り直す必要性を感じなかつたのだろう。もしくは早く古代魔法を見たくて仕方ないのも理由のひとつかもしない。

しかし、正直妙齢の女性からねつとりからみつくような視線を送られても全く嬉しくはない。しかもリボンとフールも期待に満ちた田でこちらを見てくるのだから、鬱陶しいことこの上ない。

いい加減このテンションの高さにはついていけん。

これがジェネレーションギャップなるものか。最近の若者?・というのはまったくもつて不可思議な生き物である。

「やうだ。どうせなら実践形式で私たちと訓練るのはどうだらうか?」

名案とばかりに提案してきたのはリボンだ。

若干の呆れとともにその秀麗な顔を見返す。本当に懲りていない。

(研究者の性が“未知への探求”にあるとすれば、戦士のそれは“強さの追求”といったところか)

戦士として常に高みを目指そうとするその姿勢は本来なら褒められるべきものだ。

だが……今回に限つていえば、それも裏目に出る。

なにせこちらからしてみれば、まさに鴨が葱を持つてやつてきたと形容するに相応しい状況なのだ。

この分野なら例え現代の若者であれど負ける気はしない。

場所も場所だし、ついでに300年前の憂さ晴らしもしようつか。太陽の矛みたいに弱かつたら、軽くヤキを入れるくらい許されるだろう。

ちょうどよくストレス発散の機会が巡って来てくれたことで、私の口元には自然と笑みが作られた。

「まだいづか。だから彼女は」

「いや、いいよレスト。私も最近ちょっと鍛錬が足りないと思つていたところだ」

「おお、では？」

「ああ、実“戦”形式でやつてみよ！」

語意の微妙な差異に気付かないまま、リボンは私の答えに満足気に頷いた。

先ほどの不満もまだ残つていたし、何よりこのまま火種を燃らせて帰るのは具合が悪い。責任もつて爆発させてもらわなければ。それに、そろそろ自分の腕が錆びてないか心配になつてきただ。いい機会だし、実験台になつてもうつ。

そうして既に”殺る気”満々の私がさてどう料理しようかと思案していると、すぐ隣のキラから不自然なほど間延びした声が発せられた。

「『』主人様、僕も参加していいですかー？」

声色だけなら普段通りといつてさしつかえない。

ただ、私にはわかつた。その田に宿るあり余る闘士に。瞳の奥では先ほどのリベンジに燃えていることを。

反対する理由なんてあるわけがない。相棒の期待に応えるべく一度目の前の男に問いかける。

「いいか？」

「ああ、もちろんだ。フールも一緒に参加させて、2対2にしよう。では、演習場に案内する」

「噂の美少女と勝負かー。これは他の隊員に面白がりますね！…

お遊び程度の演習。そう、彼等は完全に舐めきっていた。フールはもちろること、一度痛い目を見たリボンでさえも。

温い空気を纏わせながら魔法士団の2人は、軽い足取りで彼女たちを目的地へと先導する。

それが地獄への招待状とも知らずに。

後に付いてくる一人が『期待に応えて、それなりの“おもてなし”をしないとな』という物騒な思考を巡らせていくことにも気がつかず』。

そして、なんだかんだで似た者同士の主と使い魔も、何食わぬ顔で

悠々と歩き出した。

だが、彼女たちが凶悪な笑みを浮かべたその一瞬を、レストは見逃さなかつた。彼の背筋にえも知れぬ寒気が走る。野獣のように獰猛な、ギラ・ギラとした危うい光を宿した瞳は、彼の本能に警鐘を鳴らした。

「……嫌な、予感がする」

はたしてレストの勘は当たることになる。

この後、諸国最強と呼ばれる“円夜の盾”の隊長、副隊長は生き地獄を見ることになった。

「がつ……ちょ、ま……ぶ」ひ……

「待・た・な・い　ねえー、どうせなりもつと楽しそうに踊つてよー。リ・ボ・ンた・い・ちょー」

その日、王城の一角にある魔法士たちの演習場では、大の男が立ち上がりかけては派手にすつ転ぶという珍妙な光景が繰り返されていた。

傍から見れば『何のギャグ?』といふくらい見事に転倒しているが、もしこの場に事情を知らない観客がいたところで、男のあまりにも必死な様子に笑うに笑えなかつたかもしれない。

そしてまた、それは見る者が見れば戦慄を覚えるほど恐ろしい光景でもあつた。

なにせ立ち上がりとするリボンの足元では、魔力を帯びた黒い影

が高速で動き、遠慮もなしに思い切り足を引っ掛けているのだ。

相手に詠唱をさせる隙を一切与えず、影で完全に身体を操りながら、
毬のように転がす。それはまさしく”手玉にとる”という表現がふ
さわしい光景だった。

自分の手足の様に器用に影を操り、しかも無詠唱でそれをやられて
は並みの魔法使いでは手も足も出ないだらう。

一方、その陰険な魔法行使する術者は、新しいおもちゃを手に入
れた子どものようにころころと笑っていた。

もちろん、その正体は先ほど男に屈辱的な（本人にとって）痛手を
くらったキラである。

子どものように純真な笑顔を見せながら、時折愉悦に歪む彼の表情
は、本当に楽しくてしかたがないといった感じである。

他方、そんな悪魔のような所業が行われているすぐお隣でも、これ
また情けなくも悲痛な叫びがあがつていた。

「うぎゃあ————！ もう無理っす————！ ほんと無理っす
————！」

「ふん、情けない！ お前それでも宫廷魔法士の端くれかー？」

練習場をとこり狭しと走り回る男フールと、その場から一步も動く
ことなく男を叱咤している少女アリアである。
こちらはこちらで、あまりの歯ごたえのなさに立腹のようだ。

だが、彼女のやり方は、ある意味キラのそれより性質が悪かった。

”始め”の合図が出ると同時に古代魔法の、詠唱ともいえない極限まで短縮された単語を呴いて容赦なくフールを攻撃したのだ。フールにしても、まさか実戦経験もないような娘が、初っ端から躊躇なく攻撃魔法を繰り出すとは想像もしていなかつたのだろう。慌ててその火球を避けたものの、恐る恐る着弾点の様子を確認した彼の顔は、みるみるうちに蒼白になつていった。

それでも普段はふざけている男とて、その地位は名譽あるハイインレンス王立魔法士団の副隊長である。

このままではいろんな意味でまずいと考えた彼も、最初のうちは食いつ下がっていたのだ。

だが、ぜえぜえ走りながらもなんとか張った防御は、まるで薄っぺらい紙のようにことじことく突き抜けられた。逆にこちらから攻撃を仕掛けてみても、少女を守る障壁の前では、彼の魔法は城壁に突撃する蟻んこのようなものだった。

どう考えても勝てない。

だが、早々に戦意を喪失し降参を告げたフールを彼女が許すことなかつた。

いわく「馬鹿者！ 戦場で魔物相手に降参などない！ 死にたいのか！？」 だそうだ。

「いや、今まであなたに殺されかけてるんすけど……」 という彼の控えめな主張は完全にスル され、アリアは生ぬること言わんばかりにどんどん危険な魔法を打ち出した。

そういう経緯で、もはや恥も外聞もなく全力疾走で逃げる副隊長と、許しを請われても全く追撃の手を緩める気のない少女との、命をかけた実”戦”訓練が行われているわけである。

レストは田の前に広がる光景を冷や汗を垂らし見ながら、ただただこう思った。

鬼だ、鬼がいる、と。

きっかけは、おそらくさきほどキラが襲撃された件にある。確かにあれは一いちらがほぼ全面的に悪いし、彼女たちが怒るのも当然だろう。

……だが、なにかの鬱憤を晴らすようにやりたい放題の一人を見ると、もしかしてそれ以上の”何か”があるのでないのかと勘織ってしまう。

なにせ彼らに一体なんの恨みがあるのか、と思わせるほど苛烈で容赦がない。

いや、一応手加減はしてくれているのだろうが、彼女の性格を鑑みてもさすがに初対面の人間をここまでじりくことに違和感があるた。

だが、そうして思考の闇に沈んでいる間も、事態は刻一刻と進んでいた。さすがにそろそろ止めないとまずいだろう。
残された勇気を振り絞り、レストは恐る恐るその凜とした後ろ姿に声をかける。

「セ、セレスティ……その、そろそろ許してやつてはくれないか？」

「甘い！ ここの程度で諸国最強など笑止千万もいいところだ！」

超然と言い放つ彼女に、レストはついに頭を抱えた。いくらなんでも魔法師団が相手ならば、滅多なことにはなるまいと高をくくつていたのだ。

だがその期待は軽々と裏切られ、いまや想像を絶するまことに事態へと発展している。

レストは、彼女をここに連れてきたことを後悔していた。

そもそも彼がアリアをアルバイトという名目で王城に連れてきた理由は、先日目撃した飛行魔法にあった。

小さい頃から城の書庫で本を読みあさっていた彼だからこそ、その違和感に気づいた。

行使できる者は世界に数人もないとされている飛行魔法。あまり知られている事ではないが、それはまた魔力消費量の非常に高い魔法でもあったのだ。

実際今まで報告されている行使者も、いざ使うとなるともつてせいぜい数十秒がいいところだそうだ。

だといふのに、アリアのそれは明らかに……いや、もはや飛行魔法のことだけではない。彼女は何もかもが規格外だ。

だが、慣れとは恐ろしいもので、彼女と日常的に接していると段々おかしいことが当たり前となっていくのだ。既存の魔法常識を覆し

ても”アリア・セレスティだから”といつ一言で片づけられてしまう。

レストはそれが嫌だつた。いや、正確には彼の探求心と為政者としての理性が、事態に飲み込まれてしまつ前に真実を掘めと警告していた。

それが今回のアルバイトという名の、魔法調査を提案した理由である。

ある意味友を裏切る行為であつたのは覚悟の上だつた。だが、うしろめたさを感じながらも、彼女のためになると己に言い訳をしてここまで来たのだ。

……そして、この惨劇である。

罰があたつたのかもしれない。

レストは冷や汗を垂らしながら、食物連鎖のように見事な力関係を見せる4人を眺めた。

思えば、彼女が演習場に田くらましの魔法や遮断の結界を張つた時点での事態を予測すべきであった。

まさかここまで容赦がな……いや、戦いに慣れているとは。

前任のバッシュ・フラストに比べればまだまでも、二人とも隊の中では卓越した技能で知られている。だからこそ実力主義の魔法士団の隊長副隊長に選ばれたのだ。

だといふのに、それをまるで赤子の手をひねるように易々とあしら

うとけ。

事前に田くらましの魔法をかけていなかつたら魔法師団の面田丸潰れもいいところである。

そんなことを考えているうちに、いつのまにか演習場を騒がす悲鳴は消えていた。

嫌な予感に急いであたりを見回せば、そこには叫び声の代わりに虫の息を吐く魔法師団の双璧^{ツイン}がいた。

「セ、セレスティ！　だめだ、それ以上やつたら使い物にならなくなる！」

レストの言葉は真に迫っていた。ひどい言い方ではあるが、実際比喩でも何でもない。

物理的な意味でも、精神的な意味でも、魔法師団壊滅の危機である。だが、彼の必死の懇願は、隣からあがつた場違いにもほどがある声援のせいで台無しにされる。

「ああ、いいわ……そう、そこー もつと……もつと激しくやつて！　ああん、もう最高！」

恍惚とした表情で、顔を赤らめながらいろいろな意味でギリギリな発言をする女性は、自称“天才研究者”ジルである。

同僚のいじめに嬉々として声援を送る彼女は、アリアが危惧した通り人間として非常にマズイ性格をしていた。

こんな変態が富仕えの研究者だと知られては、王家の沽券に関わる。そう常日頃から危機感を抱いていたレストにしてみれば、田くらましの魔法は唯一の僥倖であった。

もつとも、だからといって事態がよくなるわけではないのだが。

そして、ようやくレストの願いが通じたころには、名譽あるハインレンス魔法士団の2人は、人間と表現するのが憚れるようなボロ雑巾と化していた。

プライドを含めたいいろいろなものを完膚なきまで破壊されると、人はこうなるのだという良い見本である。

しかし、そんな哀れな彼らの姿を見ても、鬼軍曹と化した少女の口からは「もう終わりか。つまらん」という非情の一言のみ。

「『主人様』、この人たち弱過ぎて相手にならないですー」

そして、彼らの部下が聞いたら憤然ものの台詞をこともなしに言い放つた使い魔の少年も、確かにそれに相応しい実力を持っていた。

「全くだ、軟弱にもほどがあるー。お前らそんなへっぴり腰で魔物相手に戦えると本気で思っているのかー？怠慢の先にあるのは滅びのみ！ 鍛え直しだー！」

今はほとんど魔物の被害なんて起じていない……とは誰も言えなかつた。

一体どんな危険地帯で生きてくれば、そんな思考に至るのか。歴戦の武人のような貫禄と威圧感は、この王宮においても右に出る者はいなかつた。

結局、誰ひとりとしてこの場の支配者には物言えず、恐るべき未来が決定した男2人は地面に倒れながら深い絶望を味わうことになつた。

まさしく泣きつ面に蜂である。

そんな悪夢のような光景を見ていた人間が、実はもう一人いる。

「強い、な。……いや、強すぎる」

アリアたちのクラス担任、バッシュ・フラスト。
柱の陰で気配を消しながら彼らを見るその目は、教師にはいたせか
不似合いな陥呑さを宿していた。

彼がこの場にいる理由はレストのそれと似たようなものだ。
異なっているのは、今やレスト以上の警戒心が彼の中で芽生えてい
ることにある。

「『ドーラゴン』に飛行魔法、そしてこの強さ、か。『じりや』”変わってい
る”の一言じやすませらんねえな」

そうして眉間に深い皺を寄せた彼が今後について思案していくと、
背後から聞き慣れた声がかけられた。

「おっ、バッシュではないか」

いくら王宮内だからといって、ここまで接近されて気付かなかつた
のは失態である。

自戒しながら彼が振りむくと、そこには数か月前までは毎日のよつ
に顔を合わせていた人物がいた。

「ギル様？」

その相手、ハイインレンス王国第一王子ギルネシアも、思わぬ人間との再会に首を傾げる。

「どうしてお前がここにいるんだ？ 学園はどうした？」

「休みですよ。今日は元隊長として部下の成長具合を見学に来ました」

すぐに気を取り直して、いけしゃあしゃあと返すあたりは、たすが年の功というべきか。しかも嘘は言つていない。

もつともその内容は、さきほどの”部下”のボロボロ具合を考えると、皮肉以外の何物でもなかつたが。

「ああ、そうか。王宮にいるとどうもそのあたりの感覚がずれるな。だがバッショ、そう言つわりには部下の一人もいないが？」

田くらましの魔法を張つてゐるせいで、今のギルネシアにあの惨劇は見えていなかつた。バッショにとつては好都合である。

「ちょっと考へ」とをしていただけです。あなた様こやどうしてここに？」

半ば答えを予想しながら、話を逸らす田的でそう振る。

案の定、あたりを念入りに見回しながら、ギルネシアは答えた。

「よくぞ訊いてくれた。レストが王宮に來てゐるらしくてな。このあたりで田撃情報が途絶えたのだが、お前見てないか？」

「……ストーカーはおやめになられたと報告を受けていたのですが

「何を言つて、兄がかわいい弟を追いかけるのはストーカーではない！ 愛情表現の一種だ！」

「……そうですか」

人はそれをストーカーといつ。

だが、何を言つても無駄と悟つたバッシュュは、賢明にもその一言を飲みこんだ。

ようやくブラコンに回復の兆しが見えたと思ったたらこれだ。

「で、結局見たのか、見なかつたのか？」

「誰も見ておりませんよ。おそらくもう帰られたのでしょうか。そして、ギル様もいい加減公務に戻りましょうか」

慣れた仕草で執務室へと強制連行する。バッシュュはこのブラコンに十数年付き合わされてきたのだ。むしろ慣れない方がおかしい。

「ま、待て、おい、引っ張るな、バッシュュ！」

王子を王子とも思わぬ扱いにギルネシアは抗議するが、彼の護衛たちは『さすがフラスト様』と尊敬の眼差しを送るだけだった。

最後に一度後ろを振り返ったバッシュュは、穴だらけになつた演習場を魔法で直す彼女に鋭い視線を投げる。

いろいろと思うところはあつたが、今はまだ情報がたりない。

結局『まだ報告する段階ではない』と判断した彼は、駄々をこねる王太子を引きずりながらその場を後にするのだった。

その数十分後

諸国最強の魔法士団の隊長と副隊長が全身ボロボロの出で立ちで田撃されることになる。

世にも珍しいその光景に、好奇心旺盛な部下たちは一体どんな強敵とやり合ったのかと質問責めするのだが、隊長はもちろんのこと、普段はおしゃべりな副隊長さえもその理由を話すことは決してなかった。

その後も週に一回行われる実験といつもイジメは、アリア達にとってはストレス発散に、リボン達にとってはまさに命をかけた実“戦”訓練となつた。

むつとも、そのおかげで彼らは歴代最強の魔法士団隊長・副隊長への道を突っ走ることになるのだが……それはまた別の話。

第7話「実”戦”訓練」（後書き）

皆様お久しぶりです。

といつが、久しぶりすぎで、めんなさい（汗）

忙しくて、かなりスローペースになりますが、またちょこちょこ書いていきたいと思います。

よろしくお願いします（ペコ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5718m/>

ツクラレタ聖女

2011年8月14日02時43分発行